

赤原の守護者と禁忌教 典

石橋航

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最も濃い数週間を、嘗ての風景と共に乗り越えた英霊エミヤ。

その果てに答えを見つけた彼だったが、何の因果か今度は異世界へと降り立ってしまった。

そこから十数年後。因果を捜す旅路の途中で、旧友であるセリカ・アルフォネアから突然、アルザーノ帝国魔術学院の教師をやってくれないかと言われてしまう。

しかし、当然エミヤには普遍的な魔術の素養は無くて――。

これは、たった一人のイレギュラーが降り立ったことから始まる、愚者が駆ける物語とは似て非なる物語。

目次

第1巻

始まりの会談	1
学院長リック	14
推薦の理由	29
準備段階	59
授業	73
戦闘	84
契約終了	99
第2巻	
魔術競技祭	117
開幕	131
精神防御	145

第3巻

休憩時間	157
王室親衛隊	175
嘗ての同僚	189
死神と双紫電	203
禁忌教典	220
突然の編入生	251
日常の一步	265
リエル・レイフオードの真価	277
動き出す非日常	298
成長への道程	316
ビーチバレー大会	336

友達

355

システイーナの婚約者

519

Project: Revive

Li

不穏な空気は対立から

536

fe

367

第4巻

普遍的にして特異なコンビ

385

狂人の執着心

402

巨大蟹の襲来

420

広がるは魔獣の群れ

434

欠陥品と完成品

446

記憶の糸口

463

対極を往く者たち

478

遠征学修、閉幕

498

第5巻

第1卷

始まりの会談

——それは、赤原を駆ける守護者。

数多の壊滅回避を為してきた、奇跡の具現。

人理に蔓延る病巣を速やかに摘出する、形而上の存在が雇いし掃除屋。

機械の如く速やかに。

危機を引き起こす癌を穿ち。

何事もなかったかのように去ってゆく——。

全てが終わったその果てで、我々人類はまた、連綿と歴史を紡ぐのだろう。

その発展を陰から見守る奇跡の具現は、果たして何を思うのか。

安堵か、絶望か。

そんなことは人の器で収まっている常人には理解できない。

理解できるとすれば、それは——。

『——答えは得た』

荒野を目指す錬鉄の足跡。

収斂した剣の丘が刻む果て。

天に眠る歯車が示す意図は、この身に刻まれし呪い。

永劫に続く絶望の淵で、為せない己を憎み幾星霜。

流れ星の如く刹那で輝く人生も、色褪せた絶望を穿つ理想の道も。

きつと――、

『それでも、オレは間違えてなどいなかった――』

それは、とある街角の喫茶店。

静寂な空気が周囲を支配し、レトロな音楽が静謐に耳朵を打つ。

この店のオーナーと思しい眼鏡をかけた老人は、いつのまにやら店の裏へと姿を消していた。

まるで時間の流れに置いていかれたかのような空間で、不釣り合いな女性が鷹揚にカッパを傾けている。

派手な金髪を垂れ流し、肩を開けた豪華な漆黒のドレスを纏う姿は、清楚とはまた違う魅力を感じられるだろう。

時折窓の先へ視線を流し、空の果てを覗く姿は空虚に感じられる。

時計の針が指し示すのはお昼時。

また、何度目か分からないカップの液体を喉に注ぐ。

「――すまない。待たせただろうか」

「いや、全然。むしろ指定時間の五分前だ。上出来だよ」

金髪の女性が座っているテーブルに、一人のガタイの良い男性が話しかけた。

豪華な見た目をしている女性とは裏腹に、その男は謙虚な佇まいだった。

色の抜けた白髪に、飾り気のない無地のコートを纏っている。

「そももいかないさ。指定された時間を遵守しようと、君を待たせた事実は変わらないだろう？」

「ハハハツ!! そこまで私を悪女にしたのか、お前。つい数日前まで辺境の地に赴いてたんだろ? 目的は知らないが、何かを探してるって意味じゃお前と私は似た者同士だからな。配慮はするさ」

「……そう言ってもらえると、こちらも助かる」

「さあさあ。今日はお前に重要な話をしたいと思つたんだ。いいから座れ」

女は男に座るように指示をする。

確かに男の格好は、普段着というよりかは旅の格好だ。

辺境の地、と呼ばれるところにまで飛んでいたのだから、その指示には彼女なりの優しさも含まれているのだろう。

「では、前を失礼する」

男はそこへ厚意に、素直に甘える事にする。

まあ、片方が立ち、もう片方が座ったまま話すというのも変な話だと思ったからでもあるのだが。

「それで、私に何の話かな？ 君とは知らない関係ではないが、わざわざ手紙を寄こしてまでの周到なお誘いだ。よつぼどの理由があると思うが？」

「勿論。ただ単にお前と話すだけだったら、手紙なんて書かないさ。息子の旅じゃあるまいし」

「息子……：…そういえば、グレンは元気か？」

「……：…そんなの、私が知りたいぐらいさ。あの子、最近は仕事が忙しい様で、碌に連絡も寄こさないし」

陰鬱に微笑む女。

金髪を静かに揺らしながら遠くを見る。

「それは残念だ。私としても、グレンの様子は気になっていたらからな」

「師匠として、か？ 全く。ここしばらく姿を見ないと思つたら、帝国から出ているなんてな。グレンも心配してたぜ？ あの子、お前の前じゃ強がつてると思うけど、誰よりもお前の事を尊敬しているからさ」

「——そうか」

残光の如く儂い笑みを見せる男。

表情には複雑な思考が絡み合っており、表情筋が縛られる。

自分に憧れている。その一言に込められた意味を、他でもない本人だからこそ男は分かる。

——正義の味方。

グレンと言われる青年は、男の背中にその理想を見たのだろう。

だからこそその背を追うし、誰よりも負けたくない目標、指標として立ちはだかる。

……まあ。青年が感情を発露させるのが得意ではない、という線もあるか。

「すまない。話を脱線させてしまったな。改めて聞こう、セリカⅡアルフォニア。君の依頼と言うものは、どういうものかな？」

男は女——セリカⅡアルフォニアに向かって問い直す。

「……何。お前が今まで乗り越えてきた命令に比べれば造作も無いことさ。だから肩の

力を抜け、帝国宮廷魔導士団特務分室所属、執行官ナンバー13 《死神》のシロウエミヤ。別に人を殺してほしいみたいな、お前が嫌う仕事じゃない」

セリカは男——シロウエミヤの目を見ながら、そう答えた。

彼女はエミヤが緊張感を見せているのに気づいていたのだろう。

なにせ、わざわざ手紙を寄こし、早急に帰還せよという旨が一言書かれただけの紙を手、久方ぶりに帝国に戻ってきた背景がある。

ただならぬ気配、というのをエミヤはこの会談に感じていたのだろう。

故に、セリカは先に、お前が嫌う仕事じゃないと断っておく。

「……一つ訂正を。私は既に特務分室に入室していない。既に処分を下された身なのでね」

「無期限の停職処分だろ？ 未だに席は残ってるじゃないか」

「そんなもの、事実上の解雇に決まっているだろう？ 伊達に命令違反を繰り返してはいいいからな」

「……なるほど、そういう事。お前がいつまでも軍に戻らない理由がようやく分かった。お前、自分が解雇を喰らったと思ってたのか」

頭を抱え、大仰に背を反らせるセリカ。

その姿にエミヤは鼻を鳴らす。

「何が言いたいんだ、セリカ。君は私を軍に戻したいと思つてここに呼んだのか？ ならば、この話は無かつたことにしてくれ」

「ふーん。お前、特務分室の仕事は嫌いか？」

「……好まれる内容ではないが、その意義には理解できる。特務分室という集団が無ければ、既にこの街はこの世から姿を消している、と言つても過言ではないだろうからな」
「中々な高評価、なんだよな……？ お前、遠回りに言う癖があるからいまいち分からな
いんだよな」

不機嫌な顔になつたエミヤに、頬を掻き苦笑いを浮かべるセリカ。

その姿はまるで、エミヤの機嫌取りをしているみたいだ。

「今私が戻つたところで、事態が回復する訳でもない。むしろ後退するだろう。軍の上層部には酷く嫌われてしまつたからな。故に、直近に控える出来事が過ぎ去り、安静の日々が戻つたら考え直すさ。どうやら、私は未だに特務分室の末端にしがみついているらしいからな」

不機嫌そうに、しかし国家が迎える喫緊の課題を思慮しての判断だった。

その答えにセリカは感心したかのように首肯した。

「じゃあ、暫くは暇つて訳か」

「暇という訳では無い。一週間帝国に滞在してから、再び旅に出るつもりだ」

「……旅に出るって、随分と急ぎ足だな。もう少し自分の体を労わっても良いんじゃないかなにかと思うけどな？」

「自分の体を労わって、一週間の休みを挟んでいるだろう？ 君らしくないミスだな」
「数ヶ月の旅から帰ってきて、休みが一週間という方に疑問を持つとうな？ 特務分室時代からそうだが、お前はタフ過ぎる。そのお陰でグレンも……はあ……」
深くため息をつく。

セリカは息子であるグレンの名前を出しながら、エミヤに苦言を呈した。

「じゃあ何だ？ 君はどれだけ私がどれ程休んだら、休んだという計算に入ると思うのかね？」

「そうだな……ああ、一ヶ月。それだけ休めば、私も心配ない」

「……一ヶ月、だど？ 話にならないな。……だが、君の助言は心に留めておこう。では、私への用件を聞こうか。それをこなした後、休み期間を考える事にする」

エミヤは後ろの背もたれに、深く重力を落とす。

二度目の質問だ。

数分前に捻じ曲げられた話の展開を、再びスタートラインに引き戻す。

「別に今までの話が私の要件に関係ないとは言っていないだろ？ シロウエミヤ。お前には、一ヶ月間、アルザーノ帝国魔術学院の教師をやってもらいたいと思うんだ」

「……それが、私への要求か？」

「？ 何か変な事言ったか、私？」

心底呆れたように問うエミヤに、どうしてそんな顔をされるか分からないという風に聞き返すセリカ。

彼女が話した、アルザーノ帝国魔術学院の教師になるという話。

それが、どれほどエミヤに適正の無い職業なのか。少しでも彼のことを知っている人間ならば理解できるだろうに。

「何を言っているのか、分かっているのか？ アルザーノ帝国魔術学院の教師、だと？」

碌に魔術も使えない私に、帝国内最優の魔術学院の教師が務まるとでも？」

「まあまあ。そんなに怒るなよ。何だ、金か？ それなら安心しろ。特別に私の配慮で正規雇用の教師共と同額にしてやるからさ」

「そこではない。私には、生徒を導く資格が無いと言っているんだ」

そう言い、悲痛な表情を見せるエミヤ。

その表情には彼の過酷な人生を物語る皺が、深々と刻まれている。

セリカはその表情を見て――、

「――何言ってるんだよ、お前。私としちゃ、グレンの信念に一本筋金を通したお前以上に教師が向いていると思つた奴は居ない。……まあ、親だからこそそう思うのかもしれない

ないけどさ」

真正面からの言葉に、エミヤは思わず拍子抜けした。

セリカ「アルフォネア。彼女からそんな言葉を聞くとは思わなかったからだ。

——しかし、それでもエミヤは自分が魔術講師に向いているとは思わない。

「その言葉は有難い。だが、私はこの世界で普遍的な『黒魔術』を、何一つ使えないという体たらくだぞ？ そんな人間が教師で、アルザーノ帝国魔術学院の生徒達が納得する訳ないだろう」

「まあ、確かにな。お前が他の教師共と同じような授業をするのであれば、お前には魔術講師だなんて職業は無理だろうな。だがな、私はそんな授業をしてほしくて、お前を勧誘したわけじゃないぜ？」

据えた瞳で、エミヤを正面から覗き込む。

セリカが求めるのは、エミヤが思っているような普遍的な代物では無いらしい。

では、何だ。彼女はこの身に何を求めている？

真剣さを高めるエミヤを見たセリカは、一度考え直すような仕事をして。

「……まあ、それに関しては自分で見つけられるさ。解析はお前の得意分野だろう？」

「それとこれとは、また話が違う気がするのだが……」

気が抜けた表情で返答するエミヤ。

確かに解析は数少ない得意分野ではあるが、その解析とはベクトルが似て非なる代物だろう。

と、話をずらすわけにはいかない。

アルザーノ帝国魔術学院の教師をする、という話だったな。

……正直な話、到底自分に務まる職業であるとは思えない。

確かに以前に魔術の手ほどきをしたことは幾度かある。だが、それは全て実践に通ずるものであり、学問としての魔術には触れたことが無いのだ。

そう。普通であれば、断るべき依頼だ。承諾するメリットがどこにも感じられない。

だが。目の前で儂い微笑みを見せるセリカに、それを真正面から突きつける勇氣は、エミヤには無かった。

「……一ヶ月、と言ったな。悪いが、それは少々長すぎる。——三週間だ。その間に後任をしっかりと見つけるというのであれば、その仕事を引き受けよう。あくまで繋ぎの、短期契約だ」

「……仕方ない。それで承諾しよう。じゃあ、赴任は一週間後な。学院長には話を通しておくから、一週間後の朝に学院長室で赴任するクラス等の詳しい話をする」

「承知した。では、私はこれで失礼する」

案外あっさりと話が決まった。

すると、要件は終わったばかりに、エミヤは席を立ちあがった。

その姿に、セリカは声をかける。

「ん？ もう少し、ゆっくりしていけばいいじゃないか」

「帝国に滞在する期間が延びてしまったからな。今から住む物件を探さなければいけなくなつたんだ」

エミヤは呆れたようにため息をつく。

だが、その表情に陰は射し込んでいなかった。

巻き込まれつつも、どこかそれを楽しんでいるような感じがして――。

「――ん。そうか。じゃあ、今度何処にしたか教えてくれよ？」

「考えておこう」

そう言つて背中を向けたエミヤは、普段と変わらぬ足取りで扉の向こうへと消えていった。

セリカは背中に対して何も話すことはなく、これからの学院に思いを馳せる。

「――さて。頑固な正義の味方様は、うちの学院にどんな風を巻き起こしてくれるんだか」

既に液体の入っていないカップをテーブルに置く。

セリカは指をパチンツと鳴らすと、店の奥に消えていたオーナーが姿を見せる。

人払いの結界。その効力を片手一つで消滅させた。

「面白い結果になれば、良いんだがな」

悪戯を思い浮かべる子供のような顔を見せる。

だが、彼女の願いは間違いいではない。

魔術が全てを支配する学院で、魔術の素養を持たない人間が教鞭をとる。

前代未聞の事態だ。軽くパニックが起こってもおかしくはないのではないだろうか。

だが、その不合理さが巻き起こすであろう展開が、どうか面白いものであり、自分を
取り巻く環境を一変させてくれることを、世界最高の魔術師は心から願っていた。

——これより、退廃の学院に赤原の風が舞い降りる。

今生最高峰の魔術師であるセリカⅡアルフォネアが仕掛けた悪戯。

それは、この世界をも揺るがる事態に巻き込まれる、ほんの序章であることを、今は

まだ、誰も知らない——。

学院長リック

一つ、昔話をしよう。

この身がこの世界に降り立ったのは、今から十数年前にまで遡る。

睡眠から起き上がるようにして体を覚醒させたのは、このアルザーノ帝国と呼ばれる大都市の辺境の地であった。

「——ここは、一体……？」

夢く散った記憶を探る。

見たことも、聞いたことも無い、科学と魔術の共存様式を為せたこの世界を、衛宮士郎が知っているはずが無かった。

しかしこの身が、抑止力から派遣され、霊長の守護者としての肉体が結ばれたのであれば、為すべき事象は一つのみ。

奇跡の具現とも呼ばれし高尚な一幕だろうと、その瞳に眠るのは機械の如く惨殺を為す機構のみ。

——故に、こうして知性を以て顕現すること自体が異常であり。

前例のなき非現実が、これまで積み上げてきた経験を伴って酷く警鐘を鳴らしてい

た。

「何がどうなっている？ 私は、何の為にこの世界に呼ばれた——？」

過ごしやすい気候だったのは覚えている。

季節にすれば、春だろうか。

温かく天上を照らす日光が、この身に浸る泥ごと癒してくれるのではないかと錯覚してしまふ程に。

「……とにかく、動き出さねば始まらない、か。私が呼ばれた以上、この世界に危機が迫っているのは、覆しようのない事実だ——」

その光を振り払うように、衛宮士郎は具現化した両足で動き出す。

この身が現世に呼ばれる理由としては、大きく分かれて二つある。

一つは、嘗ての風景と共に乗り越えた濃い数週間。

聖杯からの知識と、隣で歩むマスターと共に戦場を駆ける。魔術師同士の殺し合い、聖杯戦争。

だが、これは違う。

元より聖杯からの知識は感じられないし、何より体を構成する魔力の先がこの世界であることは使者である衛宮士郎自身が一番良く理解していた。

「故に、私が具現化された理由はもう一つ。守護者としての、仕事のみ」

踏み込む足に力が入る。

鷹の顔は鋭く輝き、両手は既に双剣を握るが如く閉じていた。

質素なマントを首にかけ、体を包む漆黒の軽鎧。

千里眼が覗く果ては、世界が認めた病巣へと向けられる。

「前提情報も皆無。人理破壊の寸毫前と言う訳でもない。この景色は、至つて普通だな……」

だが、この日常が数刻先には紅く染め上がると思うと、酷く心が押しつぶされる。

根源へと到達か。

地球規模での大量虐殺か。

神霊クラスの顕現は、この身では対処できないので除外とする。

理由は分からないが、その最悪がこの地を支配する前に、癌を取り除かねばならない。

——深呼吸。

既に答えは得た。錬鉄の足跡は、既に揺るがず。

「では、始めようか——」

辺境の地で為された、ただ一つの奇跡。

誰も知らない幕開けが、静かに為されたというのに、役者は悠々と日常に吞まれたま

ま。

緊張感を纏うのは衛宮士郎ただ一人。

誰も知らなくて良い。関係の無い一般人にとって、知らず知らずのうちに終わっている刹那の殺戮。

歩みだした両足が止まる事は無く、永久に荒野を指すであろう――。

だが、こんな結末を一体誰が望んだのだろうか。

守護者としての任を受けて、派遣されたのは十数年前。

情報を集める為にこの世界に溶け込み、何の因果かとある戦争の英雄に見込まれて幾星霜。

帝国宮廷魔導士団特務分室という、魔術専門の執行部隊に組み込まれてしまい、後戻りの出来ない陥穽に陥つたのに気づいて幾ばくか。

最後の切り札として、悪行が為される寸毫前に投入されるはずの存在なはずなのに。既にこの身を包むのは非日常の血みどろの空気ではなく、穏やかな日常の香りとなつていて――。

「そして今や、魔術学院の非常勤講師になっているとはな……。全く、十数年前の自分に聞いたら、なんと言うんだらうな」

思考を戻す。

セリカとの約束から一週間後、エミヤはアルザーノ帝国魔術学院の門の前に立っていた。

今日から三週間、世話になる仕事場だ。

内容が魔術学院の教師と言うのは納得していないが、引き受けてしまったのだからやることはやらなければならない、か。

エミヤは己の脳裏に笑みをこぼす。

「随分と考えが甘くなったな、オレも」

衛宮士郎がシロウⅡエミヤとなったのは、どれほど前の出来事だったか。

それすらも克明に覚えていない程度には、この地の空気に慣れてしまっていたようだ。

「おお、待っていたよ。君が、シロウⅡエミヤ君……だね？」

エミヤが案内された学院長室の扉をノックし、中に入った瞬間、大きな机に座る初老の男性がいた。

彼は人のよさそうな笑みを浮かべている。

「はい。私が、シロウⅡエミヤです。短い期間ですがよろしくお願いします」

エミヤは簡単に挨拶をすると、頭を下げた。

ここが学院長室で、その中央の執務机に腰を掛けている姿からその役職は容易に想像できる。

セリカが事前に作成したというエミヤのプロフィールであろう紙と、本人を見比べながら朗らかに微笑む彼こそ、アルザーノ帝国魔術学院学院長リックⅡウォーケン。

三週間と言う間だが、エミヤの上官となる男だ。

「む？　短い期間……とな？」

「？　何か間違ったことを？」

「……ああ。そういうこと。んや、何でもないわい。君はただ仕事を全うしてくれればそれで良い。して、すまないが期間をもう一度君の口から教えて欲しいんじやが？」

「三週間、ですが」

「おお。そうじゃった、そうじゃった」

年はとりたくないわい、と苦笑いを浮かべるリック。

既に永久の時を駆けたエミヤには想像もできない悩みだが、終わりがあるというのは案外苦しくないものだ。

不老不死という理想を人間は抱くと聞くが、永遠に終わらない地獄を見せつけられてきたエミヤにとつては理解できない理想だった。

しかし、今は違う。この身には明確な答えがある。

その輝きが色褪せなければ、この足はきつとまだ走つていけるはずだ。

「……ふむ。で、一つ質問をしても良いかな？」

「なんででしょうか」

「実はのう……セリカ君から君の事を、少々態度の悪い男、と聞いていたんじやがな……。もしや、無理をしてるんじゃないかの？　そうであれば、別に気にせんでも良いぞ。なにせ、セリカ君が直々に推薦する男だ。普段通りにしていればお互いに話しやすいじやろう」

「……なるほど。では、普段通りの口調で問題ないかな？」

ニヒルに口を歪ませる。

仮にも日本人としての教養を披露したエミヤだったが、本人がそう申し出るのであれば、こちらもそれで構わない。

それに、年功序列の考え方で言うのであれば、エミヤはリックよりも遙か彼方の存在

である。

外見からは想像もできないだろうが。

「おお……結構な変わりようじゃな」

「嫌であれば、先ほどの口調に戻しても構わないが？」

「いや、構わん。口調一つで機嫌を害するような器は持つておらんからのう」

そう大仰に笑いながら、リックはエミヤの瞳を鋭く穿つ。

彼は彼なりのやり方でシロウⅡエミヤという男を測ろうとしているのだろう。

無論、その程度やつてもらわないと、アルザーノ帝国魔術学院という巨大な組織を司る職務は全うできないだろう。

「して、エミヤ君。君の経歴を見させてもらったんじゃが……」

満足したのか、エミヤから視線を落とすと、リックは手に持っていた紙を見つめる。

透けている裏面から分かるように、その一枚の紙はエミヤの履歴書みたいなものだ。

出身地や生年月日から、学歴や経歴が事細かに書かれている。

セリカが事前の用意したものらしいが、本人であるエミヤもその内容は知らない。

しかし、しょうがないだろう。

この場所で、私は軍人ですと言う訳にも行かない。

故にこの学院でそれなりの地位を築いているセリカに偽装をお願いしたのだ。

懸念点としては、内容をエミヤも知らないという事であり、質問されたら流れに合わせ返答するしかないという事だ。

まあ、最悪カンニングも出来るが。

「魔術学院を卒業した、というわけではないんじゃないかな」

いきなり痛い質問だ。

だが、そこらへんはセリカなりに配慮したのだろうか。

これで魔術学院の卒業生と言ってしまうえば、それだけエミヤへの期待値も高まつてしまう。

……そんな子供みたいなことを言っている場合ではないか。

ここはアルザーノ帝国魔術学院。帝国最高峰の魔術学院だ。

仮にもその講師になろうとする男が、魔術学院卒業でなければ色々問題はあろう。

「……それに関しては、私も懸念材料になるであろうとは思っている。私は、セリカに半ば強引に組み込まれたようなものだ。問題があるのであれば、すぐさまこの学院から立ち去る用意は出来ている」

「む？ それに関しては心配いらんぞ。セリカ君の推薦があれば、非常勤という形式になつてしまうが、如何な経歴の持ち主だろうと魔術講師になることは可能じゃ」

確かに問題は無いだろうが、色々反乱がおきるのでないだろうか。

今更ながらに、面倒事に巻き込まれたという自覚を得る。

「ふむふむ。特に問題は、無さそうじゃな」

紙に目を通していたリックは頷きながら一通り流し目で、文字の羅列を読んでいく。

「よし、大丈夫じゃな。では、シロウⅡエミヤ君。君を新たなアルザーノ帝国魔術学院の講師として、歓迎しよう」

「……期待に応えられるように最大限の努力はしよう。だが、過剰な期待は止してくれ。セリカの推薦とはいえ、私は底辺の魔術師だ。やれることはやらせていただくが、面白い結果にはならんと思うがな」

「そうかのう……? 確かセリカ君は、アイツほど面白い教師になれる人間もいない、と笑いながら言っておったんじゃがな」

「教師に面白いも面白くないも無いと思うが……と、失礼。実用的な話をしよう。私が赴任するクラスと、受け持つ授業内容を教えて欲しい」

逸れそうな話を再び軌道へ。

確かセリカの話であれば、エミヤにはクラスが振り分けられるはずだ。

そのクラスの子たちとうまくやりつつ、可でも不可でもない授業をすれば大丈夫だろ

う。

あくまでエミヤは繋ぎだ。本命は後任の方なので、遅れた分はそちらに一任すること
にしよう。

「君が赴任するクラスは二年次生二組じゃ」

「ふむ。二年生、か。中堅学年とは、中々に難しいクラスじゃないか。それで、私が受け
持つ授業内容は何だろうか？ できれば、黒魔術関連は避けてくれると嬉しいのだが」

「む？ 君は二組の担任じゃからな。必修科目は全て、君がやるんじゃないよ？」

瞬間、両者の間に絶望的なクレパスが出現した。

エミヤは泰然とした風貌を保ちつつ、額に汗を浮かべている。

無論それを認識できない学院長ではないが、面白いのでちよつと黙っていた。

「……少し待て。必修科目を全て、私が受け持つだと……？ 何を言っている。そんな
こと、私が出来る訳なからう。良いか、もう一度聞くぞ……本気で？」

「本気で」

どこからともなく冷徹な風が吹く。

少しはこれからの生活に思いを馳せていたエミヤではあったが、その一言でこれから
為すべき行動が決まった。

必修科目を三週間、それも普遍的な魔術も使えないような三流以下に教えられる生徒

の身にもなつてみてほしい。

それに加えて、彼等生徒はアルザーノ帝国魔術学院に入学するような秀才。つまりは、並み以上実力を有する者達だ。

学生の身でありながら魔術師としての格はエミヤ以上、というのが常識となるであろうその世界で、必修科目を全て受け持つのは酷な話だろう。

エミヤは学院長の前だから、と下に置いていたリュックを再び肩にかけると、後ろを振り向く。

「すまない、リック。どうやら私には荷が重すぎる話だったようだ。忘れて欲しい」

「コラコラコラ。勝手に帰っちゃ駄目じゃろう？」

「セリカには悪いが、君から説明をしてくれると助かる。もう一度旅に出るから、探さなidekudasaiと私が言っていたといつて欲しい」

余裕そうな口調だが、心象の硝子は粉々に砕けている。

こう見えて実は一週間、ちゃんと魔術学の予習をしていたのだ。

どうすれば学生に伝えられるか、原理を言葉で表すには如何なる方法で伝えればよいのか。

存外に真面目に取り組んできたエミヤだからこそ、その話の非現実感は刹那で感じられたのだ。

だが、リックは食い下がる。

「こちらとしてもセリカ君に嫌われたくないんじゃないよ。頼む、どうかあの子たちの担任の先生になってくれないか」

リックは頭を下げる。

それは、エミヤには印象的な光景だった。

嘗て帝国宮廷魔導士団特務分室、という組織に在籍していたから分かるのだ。

高尚な魔術師という存在は、悉くが一定のプライドを有している。

前代未聞の下級魔術師としてこの世界を生きてきたエミヤだからこそ、その事実は克明に映った。

なのにも拘らず、彼は遙か下の存在であるエミヤに対して頭を下げたのだ。

その理由は何か。もちろん、生徒の為だろう。

前任の先生が忽然と姿を消し、唐突に後任の存在が必要になった現状において、一番あつてはならないのが、生徒達の学習意欲の低下だ。

魔術を学問として学ぼうとしている彼らにとって、魔術講師の存在は自分達を導いてくれる存在であり、無くなつてはならない存在なのだ。

「——頭をあげて欲しい。学院長が私程度の人間に頭を下げるべきではないだろう」
鷹揚に頭をあげるリック。

恐る恐る、という感じでエミヤを見る彼の姿は、この瞳には無視できなかった。

「私程度の魔術師で良いのであれば、是非やらせてほしい」

「おお……っ！ やってくれるんじゃないっ!!」

するとリックは椅子を飛ばして立ち上がると、エミヤの前まで歩み寄る。

そしてその武骨な両手を、大切そうに両手で握りしめた。

「ありがとう……っ。君がいなければ、あの子たちにまた、悲しい顔をさせなければならなかったんじゃないっ」

学院長として、一人の指導者として。

満足に教育を施すことが出来ないという事実が、どれほどの苦痛になるのか。

未だ正式な教職に就いたことが無いエミヤからすれば、分からないことだ。

それでも、嬉しそうに微笑むこの顔を、護りたかったのだ。

「よろしく頼むぞ、エミヤ君……!」

「手を尽くせる限りは尽くそう。期待に応えられる自信は無いが、この職務を全うすること約束する」

包み込むように握られていた手は、今では握手に変わっていた。

互いを理解し、信頼する。

一見普通の握手のように見えるが、その両手に込められていた願いは当人同士にしか

感じることは出来ないのだろう。

「では。君はこれから、エミヤ先生じやな」

リックの弾けるような笑みに対して。

エミヤは全力を尽くすことを、その握手を通じて約束した。

推薦の理由

「……さて。思わず引き受けてしまったが、どうしたものか」

エミヤは学院長室から自分の受け持つというクラスへ向かう間、静かに思考を張り巡らせていた。

必修科目を全て自分が受け持つ、というのは流石に初耳だ。

全力を尽くすとは言ったが、はたしてどこまで小細工が通用するか。

「そして渡されたのは受け持つ授業の教科書と、魔術講師としての正装か」

軽く流し見て、ある程度の内容を理解することは出来たが、教えるのは難しいだろう。

魔術講師としてのローブに腕を通し、渡された教科書をリュックに全て仕舞う。

非常勤とはいえ、生徒にその話は関係ない。

非常勤だろうがなからうが、彼等が先生を測る指標は授業内容が大部分であり、余計なものそこにはない。

人のよさそうな先生だろうが、下手な授業であれば好かれない。

つまり、完全実力主義の職業なのだ。特務分室という穿った実力主義の世界に在籍はしていたが、教職とはまたベクトルが異なる。

「仕方あるまい。授業開始まで、残り三十分。一度余計な教科書を家に置きに戻るとするか」

余計な贅肉を削ぎ落すように。

エミヤは学院の校門から敷地外へと出ると、周囲に誰もいない事を確認する。

彼が言う家とは、常人の足であれば片道一時間は余裕で経過するような場所にあったりするのだが。

踏み出した足。

深々と刻まれた足跡。

風すらも置き忘れたその疾駆は、当然人間の領域などとうの昔に凌駕していた――
|。

その後、十分で学院に戻ってきたエミヤ。

ローブを靡かせて駆けていながら、その息は乱れていない。

何も無かったかのようには彼は今後のカリキュラムを確認しつつ、ため息をつく。

「いきなり黒魔術の授業と来たか……」

そう。何度も言った通り、エミヤは黒魔術に関しての適性が皆無だ。

無論考えられる要因は幾つか把握できてはいるが、その悉くがエミヤではどうしようもない不条理な問題だ。

流れに身を任せようが、流れに逆らおうが関係ない。

帰結は不動なのだから意味が無い。

「さて。ついてしまったな」

エミヤは一つの扉の前に立つ。

扉の上隣りには『二年次生二組』と刻まれた長方形の板が、存在を以て位置を記す。シロウⅡエミヤが担当をする、クラスだ。

授業開始数分前。今までに感じたことの無い、乱動する鼓動を深呼吸で押さえる。

この果てに、新しい仕事場が待っている。

「——。大丈夫だ」

己に訴えかけるように言葉を漏らす。

もう一度深呼吸をすると、エミヤはその扉を突破した。

「すまない、少々遅れたな」

遅れてはいない。

だが、新任の先生が授業開始数分前に現れるという現状への謝罪を一つ。

突然開かれた扉に注目が集まったが、エミヤは視線を待らせながら中央の教卓の前へ。

「いえ、遅れてはいませんが……？」

前方に座っている、銀髪の少女がエミヤの疑問に答える。

良かった。コミュニケーションに関しては心配いらないうだ。

「いや、そももいかない。まずは自己紹介をしないといけないからな」

突然現れた白髪の、大柄の男。

魔術講師であることは外見から分かるだろうが、互いの身分を明らかにしないで授業を始める訳にも行かないだろう。

生徒達を一望すれば、頭に疑問符を浮かべている人間も少なくない。

コソコソ話を傍聴すれば、見たことの無い人間への疑問がそこから聞こえてくる。

「突然ではあるが、このクラスの担任を任せられた、シロウⅡエミヤだ。よろしく頼む」

「……あつ！ 貴方がエミヤ先生ですか。よろしくお願いします」

銀髪の少女は飛び跳ねるように立ち上がると、エミヤに対して頭を下げる。

それを見た他の生徒も立ち上がる。

「えっと、私達も名前は紹介した方が良いでしょう。私は——」

「システイーナ・フィーベル、だろう？　大丈夫だ。君たちの名前は全て記憶した。間違える事は無いだろう」

名乗り上げようとした銀髪の少女——システイーナを制止すると、エミヤは名前を答えてみせる。

学院長室で渡された写真付きの名簿だが、道中で全て記憶してしまったので家に置いてきた。

教卓の前から一望できる全員の顔と名前は、完全に一致する。

なお、システイーナの姿がかつての同僚と瓜二つ、という余計な情報は外界に放り込まない。

「そ、そうですね……いえ、何でもありません。それならば良かったです」
苦笑いを浮かべるシステイーナ。

その表情の真意は理解できなかったが、システイーナは席に着いた。
この辺の切り替えは流石と言うべきか。

その姿を見た他の生徒も一礼をして席に着いていく。

だが、ただ一人、システイーナの隣にいた少女だけは立ったままだった。

「貴方は——」

臆気にもそう聞こえた彼女の独り言。

もしかしたら、寝ぼけているのだろうか。

年頃の女性は大変と聞く。もしそうであれば、無理はするなと伝えるべきだろう。

何か惚けるような表情でエミヤを見つめる金髪の少女に、エミヤは声をかける。

「大丈夫か、ルミア―ティンジェル？ 体調が悪いのであれば、無理をする必要は無いかな」

「……え？ あつ、ごめんなさい……！」

金髪の少女――ルミアはそそくさと席に着く。

本人が大丈夫と言うのであれば大丈夫だろうが、心配だ。

一応気を付けておくべきだろう。

「つと。少々開始時刻を過ぎてしまったな。すまない、すぐに始めよう」

エミヤの一声に呼応するように、生徒達も教科書を開く。

紙の摩擦音が響く中、リックから伝えられている中断場所を全員が寸毫違わず示した。

それを確認し、エミヤは己の教科書を開く。

「では、黒魔術の授業を始める。挨拶は省略だ」

返答は無いが、全員からの首肯の視線を受け取る。

「中断場所の少し前、教科書二十四ページから始めるとしよう」

もしかしたら必要は無いのかもしれないが。

エミヤは復習の念も込めつつ、指示を飛ばす。

全員が中断箇所から始めると思っただろう。ページを戻す音が聞こえる。

「基本構造からおさらいだ——」

そうして、シロウⅡエミヤの授業が始まった。

「——では。ここままで質問はあるだろうか？」

授業終盤。

う。
淡々と進めていた授業、特に質問も無かったのでスルーしていたが休憩は必要だろ

う。
黒板に白線を刻むチョークを置き、エミヤは振り返った。

「えっと……一つ、良いですか？」

「何かな、システイーナ」

おずおずと手をあげたシステイーナ。

何か不思議そうな顔をしているが、何か説明でもミスがあったか？

いや、大丈夫なはずだ。

何せ、エミヤはしっかりと教科書通りに授業をしているのだから。

「先生。さつきからずつと教科書を読んでいるだけですけど……それだけですか？」

「それだけとは何かな？ 私としては不備のある授業をしたつもりはないが」

「それは、そうですけど……」

不備のある授業はしていない。

教科書の指示に従って授業を進めているのだから、それは当然だ。

聞けば彼女はこのクラスで一番の優秀な成績を残している生徒と聞く。

もしかしたら、何か思う事があったのかもしれない。

しっかりと話を聞くべきだろう。

「……はあ。しっかりと言えば良いじゃないか、システイーナ。先生の授業は意味が無

いってさ」

「む。君は」

突然後方から割り込む声が聞こえた。

立ち上がった少年——ギイブルウイズダンは、眼鏡をクイツと持ち上げるとエミヤに対して苦言を呈する。

「先生の授業、はつきり言つて僕たちにとつては意味が無い時間でした。教科書の内容を復唱し、重要事項を板書するだけの授業なんて、僕達は求めていません」

「ちよつと、ギイブル——」

「事実だ。私を庇う必要は無い、システイーナ。……それに関しては私もすまないと思つている。何せ、黒魔術は専門外の術式でね」

「黒魔術が専門外？　ますます話になりません。確かにその道に通じている先生とは差があるでしょう。ですが、普遍的な内容の一つでもあるはずです。それを、専門外とはいえこの体たらくですか？」

「ははは。全く、耳が痛い話だな」

苦笑いを浮かべるエミヤと裏腹に、ギイブルは侮蔑の込めた視線で穿つ。

確かにそれがこのクラスの総意だろう。

多少言葉の端々に皮肉があつたが、授業に対しての意見としては真つ当だ。

しかし、彼らが想像している専門外という言葉に対しては少々勘違いを正しておく必要があるか。

「耳が痛い、ですか。馬鹿にされている覚悟はあるんですよね？」

「無論あるとも。流石に私もそこまで鈍感ではないさ」

侮蔑の言葉が柳に風。

生憎と魔術に対するプライドという余計な贅肉は元よりない身だ。

そこを突かれたところで、エミヤに対するダメージは皆無に等しい。

「しかしな。こればかりは私自身でもどうしようもない不条理だね。何の因果か、私は『黒魔術』を一つも行使できない体なんだ」

——途端に、空気が変わったのを感じた。

「『黒魔術』を行使できない、ですって？ 馬鹿馬鹿しい。言い訳もそこまで行くと、呆れを通り越しますよ」

「事実なのだから仕方が無いだろう。例えば——」

言うとうエミヤは魔力を循環させる。

伸ばした手、その果てに魔力を注ぎ込む。

「・雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ・——」

黒魔【シヨック・ボルト】。

最も基本的な黒魔術の一つであり、アルザーノ帝国魔術学院においては行使できるのが普通と言う次元の魔術。

魔力を循環、集中。

指先より迸る雷鳴、微量の紫電が駆けるイメージは完璧だ。

されど、その幻想が現実として織り結ばれる事は無く――。

「うそ、だろ……？」

その言葉を吐いたのは、一体何処の誰なのか。

それを知る必要は無いし、知ろうとも思わない。

ただ、こうして彩られる現実は、眼窩を通じて脳裏へとこびりつく。

「さて。理解していただいたかね？ 聡明な君達だ。魔力感知程度は出来ると確信しているが」

返答は無かった。

黒魔術、その基本の一角を担う黒魔〔シヨック・ボルト〕。

ここに通う学生ならば当然のように習得しているその魔術を、行使できない先生。

そんな有り得ない現実を突きつけられた生徒達は、処理が追い付かずに続く言葉が出てこない。

冷めた熱の如く静寂が包み込むこの雰囲気の中、シロウⅡエミヤ最初の授業は最悪の形で幕を下ろしたのだった――。

「最悪だったな。オレも人のことを言えないな。感情のコントロールも出来ないとは……」

廊下を鳴らす足跡。

エミヤは重く感じられるロープを纏いながら、一人の人間を捜していた。

セリカⅡアルフォネア。

エミヤをこの学院に連れてきた張本人であり、斯様な事態に陥った諸悪の根源だ。

「いや。生徒達を絶望させたのは、私だろう……い……他人のせいにするなど言語道断だ」

つい数分前のことながら、未だに眼窩から剥がれない光景。

写真の如く明瞭に、冴え渡った生徒達の絶望したような表情を、エミヤはきつと永久に後悔するだろう。

「やはり、向かない職業だったな。……まあ、投げ出すわけにはいかないな。とはいえ、必修科目全てを受け持つのはどうかできないだろうか」

教職に就くのは良い。だが、膨大な量の科目を受け持つのは抗議したい。

判定は覆らないだろうが、まあ、意志表明は大切だろう。

もしかしたら、何かアドバイスを頂けるかもしれない。彼らは未来ある、この国の希望だ。

学生でいられる時間は年老いた将来に於いても、煌びやかに輝く記憶となる。

だが、たった一人の先生のせいで彼らの宝物を汚すのは申し訳が無い。

「失礼。一つ尋ねたいことがあるのだが——」

エミヤは道中ですれ違う、見知らぬ同僚達に話しかけ、セリカの居場所を問う。

悉く胡乱な瞳を向けられたが、羽織るコートと身分証明を為せば途端に謝ってくる。

続く魔術師としての位の質問に対しては真実を伝え、一変する瞳の色。

魔術を全てと勘違いし、崇高な代物と刷り込まれた素人。

指標から間違っているにもかかわらず、その間違いを誰も指摘しないこの現状。

薄々、勘づいてはいたが——。

——ああ、認めよう。

どうもこの空気は、下級者を蔑むこの不文律は、とても心地が悪い。

「失礼する。セリカはここに居るだろうか？」

教えられた学院長室の扉を、今日二度目のノックで迎える。

『シロウ君じゃな。丁度良い、入ってきなさい』

丁度良い、という言葉に引つかかりを覚えるも、エミヤは素直に扉を開く。その先に待っていたのは、数時間前と変わらず執務机に座っているリック。

その前に二人、金髪の髪を揺らすセリカと——もう一人の男は誰だ？
扉から入ってきたエミヤに注目が集まる。

すると、知らない男が声をかけてきた。

「貴様が、三流魔術師のシロウⅡエミヤだな？」

「如何にも、そうだが」

エミヤの質問に男は不愉快そうに鼻を鳴らすと、睨みつけてくる。

「……なんだ、その言葉遣いは？ 貴様、先輩に対する礼儀も知らないのか？」

「生憎と。知らない男にまで気を遣う程、私はお人好しではないのでね」

その言葉に口を押えて笑いを堪えるセリカ。

彼女には少々言いたいことがあるが、まずは目の前の男が先だろう。

「良いだろう。私は、二年次生一組の担当講師、ハーレイⅡアストレイだ」

「私の自己紹介は……不要そうだな」

「無論だ。貴様のような下賤と同じ空気を吸っているというだけでも浅ましいというのに、余計な話まで持ってこないでもらいたい」

「随分な嫌われようだな。まあ良い。セリカ、君に一つ話をしに来たんだが」

まるで獣を見るかのような瞳を向けるハーレイから視線を外し、セリカに向き直る。

最初は笑っていたセリカだったが、突然話を向けられ咳払いをした。

「悪い悪い。で、どうした？ お前が私を頼るなんて珍しいからな。この私が聞いてやろうじゃないか」

「……まあ、要件と言うのは一つだけだ。せっかく推薦してもらって心苦しいが、やはりこの職業は私には向いていないようだ。辞退したいとは言わないが、せめて科目を減らすのは出来ないだろうか？ 無理であれば、構わないが」

胸元を拳で叩いたセリカに対して、エミヤは直球勝負と行くことにした。

下手に遠回りな話をしても効果は無い。

ここは単刀直入に、話を斬り込むべきだろう。

「ほう。三流は三流らしく、己の限界を悟るか。セリカⅡアルフォネア、本人もこう言っている。どうせなら、辞めさせてやるのが本当の優しさじゃないか？」

「どうやらハーレイは、エミヤに対しての直訴をしにきたらしい。それも当然だろう。」

魔術の指標が絶対となるこの空間で、学生以下の地位に甘んずる事になるエミヤを、プライドの塊である他の講師陣が許すはずも無い。

「一つ聞きたい。それは、本当にお前の本心なのか?」

「本心に決まっているだろう、セリカ。アルフォニア。蛙には蛙の、魔術師には魔術師の生きる世界がある。黒魔術も使えない三流以下が、末端だろうとしがみついて良い世界ではない。そもそも——」

「——ほう?」

静謐に問うセリカに水を差す、ハーレイの一声。

彼はそこまでしてエミヤを辞めさせたいのだろう。

「ここぞとばかりに言葉を矢継ぎ早に紡ごうとするも、嫌悪感を孕ませたセリカの視線に畏怖してしまう。」

「止める必要は無い。ハーレイ、君の意見が一番正しい。私のような三流以下に務まる職業ではない」

「……言葉遣いには言いたいことがあるが、その通りだ三流。貴様も一度経験し、荷が重すぎる聖職ということを悟ったようだな」

エミヤと言う援軍を得たが故か、皮肉に口を歪ませるハーレイ。

中央で鎮座しているリックは困ったように頭をなでるが、ここは退けない。

何故か退職の所にまで話が広がっているが、そう命じられたのならすぐにここを出ていく覚悟はある。

自分をここまで連れてきてくれたセリカ、自分を先生と認めてくれたリックには感謝している。

だが、ハーレイの意見が、一般的な、魔術師という立場から客観視したこの問題に対する答えだ。

セリカの続く言葉を待っていると、彼女はエミヤではなくハーレイに向き直った。

「そうか。じゃあ、ハーレイ。そんな高尚なお前に一つだけ意見を貰いたいことがある。どうも私じゃ発想力が足りないらしくてな。いまいちその魔術構造を理解できないんだ」

「……それは、今この状況でするべき質問なのか？」

「勿論。実はその魔術を行使する人間が、ここに居てな」

疑問符を浮かべるハーレイを尻目に、セリカはエミヤに視線を送る。

その視線に流されるままにハーレイもエミヤを見る。

「エミヤ。お前の特技をもう一度だけ見せてくれないか？ 勿論、お前が容易に展開す

ることを嫌っているのは知ってるが」

「何……？　この三流が、だど？」

特技と聞いて一瞬ピンと来なかったが、その後にく言葉を聞いて理解した。

セリカは今ここで、エミヤにこの世界では固有魔術オリジナルと呼ばれる代物を展開しろと要求してきたのだ。

確かにそれを見せば、ハーレイからの評価は逆転するかもしれない。この逆境を乗り越えられる一手となり得るかもしれない。

だが、ここでエミヤがセリカの肩を持つ理由は存在しないだろう。

「……私に、それを使うメリットは無い気がするがな？」

「後生だ、エミヤ。お前は絶対に理論を教えてくださいからな。こうして若いもんならば発想力も豊かだろうし、私には見えない答えに至るかもしれないだろ？」

「君に理解できなかったんだ。誰がやろうと同じ結果になると思うがな」

この世界最高峰の魔術師であるセリカ＝アルフォニア。

彼女に理解できなかった魔術が、他の誰かに解き明かされるとも思わない。

そもそも、これはこの輪廻から外れた論理から成る魔術だ。

前提条件を崩さなければ答えに辿り着けないが、前提条件が成り立たねば魔術ではない。

単純ながら複雑な構造に守られた固有魔術だ。

ハーレイという男は見るからに優秀な魔術師だというのは理解できるが、魔術師であれば魔術師であるほど前提条件を崩すなんて愚行は犯さない。

故にその果てには何も無いと思うが。

「……良いだろう。セリカⅡアルフォネア、貴様がそこまで言うんだ。私自らが解析して見せよう。だが、三流の曲芸だったら承知しないからな」

「まあ見てろって、今に驚く結果になると思うけどな?」

「……君達だけで話を進めないでもらえるか? 私はまだ一度もやるとは言っていないだろう?」

「えー良いじゃんか。私もあの魔術の構造を知りたいんだよ。そのヒントになるかもしれないと思えばさ」

軽く懇願を続けるセリカ。

だが、彼女とは対照的に、ハーレイの眼は据わっていた。

「貴様。本当にセリカⅡアルフォネアが解析できない魔術を行使できるのだな?」

「……彼女には一度で看破されなかつたという事実は認める」

瞬間、ハーレイの眼の色が一変する。

「……貴様がセリカⅡアルフォネアに解き明かせない、何らかの固有魔術オリジナルを担えるとい

う点は認めてやろう。そして、それを今まで誰一人として解き明かさなかったこともな」

見ればハーレイはエミヤに両肩に手を乗せた。

正面から写される瞳には、ギラギラとした渴望が宿っていた。

「今まで屈辱の日々を過^ごしていたが、これで終わりだ。私はここで、この魔女を超える

——！ さあ、早く見せろ!!」

……そう言う事か。

確かにこのハーレイという男が、プライドの塊であることは今までの言動から容易に想像できる。

恐らく、自分が一番でなければ我慢ならない、そんな心理を抱えているのだろう。

だが、常人にとって世界最高峰の魔術師であるセリカⅡアルフォネアへの道は果てなく険しい。

そんなところに、セリカが解けなかった謎が出現した。

つまるところ、自分がそれを解き明かせば、疑似的にもセリカに勝利したという事になる。

ハーレイがやる気になっている理由は、恐らくこれだろう。

「……もう一度言うが、私はセリカが解けなかった魔術を見せびらかすつもりはない。

盛り上がるのは別に構わないが、私は何一つ干渉しないからな」

「な……!! き、貴様っ! 逃げるのか……!？」

「逃げるも何も、私には何一つメリツトの無い話だ。逆にそれを為すと私的には望んでいない展開になるときた。ハーレイ、君の期待を裏切るように悪いが、ここは譲れないラインでね」

淡々と拒絶の念を伝える。

それを聞いたハーレイは膝から崩れ落ちた。

その姿には哀愁を感じられる。それに同情したのか、リックが口を開く。

「……エミヤ君。部外者である人間から言うのも申し訳ないが、どうじやろう? ハーレイ君もここまで見たがっているんじゃない。簡単に構わないから、見せてやってくれないかの? 正直に言えば、ちよつと見てみたいという願望もあるんじゃないかな……」

「学院長……!!」

それを聞いたハーレイは四つん這いの状態のまま、リックに向かって顔をあげた。セリカも腕を組みながら首肯している。

リックは柔らかい表情をしながら、エミヤに答えに耳を傾けている。

どうも、断るに断れない状況に陥ってしまったようだ。

エミヤは深いため息をつく。

「……仕方ない。一度だけだ。それ以上の要求は呑まないからな」

瞬間に雰囲気心が心地の良いものへと変化したのを肌で感じた。

リックとセリカは静かに喜び、ハーレイもまた姿勢を整えて解析の構えを取っていた。

仕方あるまい。エミヤは己が心に問いかける。

錬鉄の丘。

収斂する無限の剣。

墓標の如く冷徹に輝くその丘で、輝く一振りをここで展開する。

「トレース・オン
投影、開始」

たった一節の詠唱。

だが、この身と世界とを繋げる鍵としては最適の詠唱だった。

握られる陰陽の双剣。

手形が刻まれているのではないかと錯覚してしまう程の、懐かしい感触。

二対一刀。

生涯をかけて磨き上げた双剣が、現世に結ばれた。

それを見た三人は瞠目し、吸い込まれるかのようにエミヤが握る双剣に近づいてきた。

だが、三人が近くで双剣を観察しようとする前に、その存在を現実から消滅させる。

「これで終わりだ。納得していただいたかね？」

「……ああ。やつぱり、分からないな。ハーレイはどうだ？」

「……馬鹿な。今のが、本当に魔術なのか……？　しかし……有り得ん。その道理が通じてしまえば、魔術全体を敵に回すことになりかねんぞ……！」

セリカは早くから白旗をあげる。

彼女としてはそれが目的ではないだろうし、当然の結果だ。

だが、ハーレイは一目で真相に大きく近づいたらしい。

これに関しては素直に驚きだ。

しかし、本人はそれを誇る訳ではない。

ハーレイは、セリカもそこまで至っているだろう、ということも薄々感じているのだろう。

つまりは、同じく二人共、正当な魔術師として当然にして最大の壁にぶち当たったという訳だ。

「ハーレイ。今の一瞬で分かったか？　どうも私は、とある魔術法則が引つかかって前に進めないんだが」

「……同じだ。故にそれがありえないのは重々承知だが……。それ以外の小細工の形跡

は、無い様子だな……」

セリカは同じく挑戦者であるハーレイに問いかける。

彼らは目的が一致している存在だ。互いに情報交換を為そうとしているのだろうが、結末は変わらない。

「私も、まだまだ勉強不足ということだな。どうだ？ 今度、今の現象についての討論会でもやらないか？」

「……良いだろう。私も、このままにしておくのは気が引ける」

すると、ハーレイは扉へと歩みを進めた。

右手を顎に沿えながら、幾重にも重なる魔術理論の検証を為しているらしい。

「ハーレイ。お前、どうした？」

「……少々先に片づけねばならない問題が見つかった。ついでに、その三流——シロウエミヤにも用が出来た。再検討の要求は引き下げる」

ハーレイは淡々と言葉を紡ぐと、そのまま扉の向こうへと消えていった。

どうやら、彼を本気にさせてしまう程、この固有魔術オリジナルは強力な代物らしい。

確かに彼らの言っていた魔術理論『等価交換』に真つ向から対立するものだからな、これは。

「ふむ。若き秀才でも駄目だったか……。まあ、アイツと一対一で話すのも面白そうだ

し、これはこれで良いとしよう」

セリカは一瞬だけ考えるような仕草としたが、すぐにエミヤを視界に映した。

「これは君が仕組んだ状況だな？」

「まあな。ハーレイは真面目な人間だ。自分の手に負えない難問だろうと、アイツは真つ直ぐに答えを目指す。そう言う人間だからな。私としてはその側面は嫌いじゃないんだが、今回は悪い事をしたな」

人として羨望されるべき信念を利用することになってしまったこと。

セリカはその点に関しては悪いと感じていたようだ。

それを聞けただけでも十分。

「そうか。まあ、私としても君とはもう一度、一対一で話したかったところだ。好都合と
考えよう」

「エミヤ……」

「間違ったことは言っていないだろう。それに、時間は有限だ。悠長にしている暇もない」

「ふむ。では、こちらは傍観者に徹するとするかの。君達二人で存分に話なさい」

リックはセリカの言葉を呑んで、自分は退くことを決める。

だが、エミヤとしてもセリカとは、今の状況を知った状態で話したくて捜していたの

だから問題ない。

睨みあうような状態が一瞬だけ過ぎ去り、先に動き出したのはセリカだった。

「じゃあ、その言葉に甘えるでしょう。エミヤ、お前にもう一度質問だ。教師を辞めたいというのは、本当にお前の本心か？」

「本心ではないが、生徒達の困る顔は見たくないな。というか、そこまで話を広げたくもりはないのだがね？」

「残念だが、エミヤ。科目を減らすなんてことは出来ないんだ。担任は自分のクラスの必修科目を受け持つ。これは既に決まっていることだからな」

「……そうか。では、私は教師を辞めることを望んでいるのかもしれないな」

真剣な表情で伝えるエミヤに、セリカは儂い笑みをこぼす。

「そっか。お前には、向いている職業だと思っただけだな」

「すまないな——なんて、冗談だ。契約通り、三週間はしつかりとやり遂げて見せるや」

やってみて分かる真実もある。

人間、夢を追う時が一番輝いていると言われるが、まさしくそれだろう。

一度裏切られ、絶望してしまった過去を持つ存在として、同じ間違いは繰り返さない。セリカは自嘲気に微笑むエミヤを見て、一つの疑問を投げかけてきた。

「最後に一つだけ良いか？ お前は教科書を手に授業をやったと思うんだが……その内容、どう思った？」

「教科書の内容？ そんなものを聞いて、一体何になる？」

「良いから良いから。ほら、今後に繋がるかもしれないだろう？」

最後だから、と必死に手を合わせるセリカ。

エミヤとしても意図は掴み取れないが、話せない理由がある訳でもない。

もう一度教科書の内容を思い出して、素直に思ったことを吐露する。

「——まず、質の良い教科書であるのは間違いないだろう。少々齧ったばかりの知識しか持たぬ身で評するのも上から目線のように気が引けるが、内容に関しては言う事は無い。抑えるべきポイントを明確に記し、発動までの流れは事細かに凝縮されている」
だが、と言つてエミヤは続けた。

「それはあくまで表側の情報だ。確かに発動までの流れを読者に刻み込めば、流れに沿っただけで読者は魔術を発動できるようになるだろう。しかし、私はその行動に対しては疑問を抱く。ブラックボックスのような状態で、本当に魔術を掌握したというのであれば、それは完全な勘違いだ」

「ほう——」

「そもそも、あの教科書は魔術を発動させることに特化しすぎだ。本当に伝えるべきも

のをあえて無視し、ベールに覆われた偽りの理想を見せているだけに過ぎない」

「——じゃあ質問だ。お前は、魔術をこれから学ぶ者に教えるべきことは何だと思う？」

静かに問うセリカに、エミヤは答えを現実的に記す。

「——魔術を担う者としての責任だ。発動するだけで終わりではない。魔術と言う、一歩間違えれば人さえも殺害できてしまう危険な力に吞まれないように。私は、その責任感こそ魔術師たる象徴だと思っているからな」

それが答え。

大志を胸に抱く少女少女らにとって、一番の懸念はその力に吞まれる事。

この世界において剣や銃よりも人の命脈を断ってきた、その強大な力に対する責任感。

本当の意味で、魔術を扱える人間を育てることこそ、魔術教育に必要な事象では無いのだろうか？

「それが、お前の答えか？」

「そうだ」

短く答える。

伝えるべきことは伝えた。

その意志表明を受け取ったのか、セリカは静かに息を漏らすと――。

「それだよ、シロウエミヤ。私がお前を推薦したのは、それをあの子たちに教えて欲しかったからだよ――」

そう言つて笑うセリカの顔は、短くない時間で積み上げた記憶を一瞬で凌駕してしまつていた。

心の底からの笑顔。

自分の眼は間違つていなかったという、誇らしさ。

己の力でそこに辿り着いたことへの、安心感。

万感の思いを込めての顔は、かつて魔女と呼ばれた女が他人であるエミヤに見せた見せた唯一の笑顔だった。

「ああ、そうか。そうだった、のか――」

声にならない息を吐く。

歯車が噛み合つたような、答えを得たような。

そんな安堵感に包まれる。

無論、これで全てを得られたわけではない。

未だスタートラインに、ようやく立つたばかりだ。

しかし、この一步は、エミヤにとっては計り知れない程大きな一步だったのは言うま

でもないだろう。

準備段階

「すまないが、一つだけ聞いてもらいたい話がある」

教室に戻ったエミヤ。

セリカとの会話で大切な事を手に入れることが出来た。

それを実行するために、まずはクラス全員との会話が必要だ。

「結論から言おう。これから一週間、私に時間をくれないか？」

「……一週間？ 先生が何をやるうとしてしているかは分かりませんが、その時間僕達が待つて、一体何になると言うんですか？」

「無論、君達に認められる先生となる為に、だ」

ギイブルの質問に、エミヤは答える。

「僕達に認められる、ですか。それは厳しいと思いますけどね？」

「中々に厳しい意見だ。だが、そうだな。黒魔術を一つも使えない、私のような三流以下の魔術師が君達に認められるには険しい道のりだろう」

エミヤはクラス全体を見渡す。

半円状のテーブルが視界全てを包み込み、そこに不安げな生徒達の顔がある。

彼ら一人一人に伝えるように、言葉が続ける。

「故に信じろとは言わない。ただ、待つていて欲しい。それまでなら、醜くとも足掻いて見せるさ。」

「……分かりました。そこまで先生が言うのであれば、私達は待ちます」

「——ありがとう、システイーナ。君達の時間を無駄にしないよう、私も精々全力を尽くすとしよう」

一瞬、子供みたいな笑みを浮かべた姿にシステイーナは硬直する。

「しかし、ただでさえ君達の授業進行度は遅れている現状だ。一週間、自習をして待つていろとも言えない身だろう？」

するとエミヤは教卓に置いてあつた紙を配り始める。

「全員に回つたか？ ……よし。それが君達にこなしてもらおう、これから一週間のみの臨時の時間割だ。本当は正式な形と同じにしたかったのだがね。代理で入ってもらおう先生方の都合もあり、このような形式となつた」

紙を見る生徒の表情に、驚愕へと変わっていく。

それを見ることが出来れば、エミヤの努力も多少は報われるというもの。

代理を務めてもらう条件として金銭面や肉体労働を要求されたりしているのだが、これも必要な経費だ。

「何か質問がある者は居るか？　どんなものでも良い。私に答えられるものであれば、この場で答えよう」

「……先生」

「何かな、ギイブル」

エミヤに指名されたギイブルはその場に立ち上がる。

「遅れを取り戻すという意味での、臨時の時間割と言うのは分かりませんが……普通の時間通りに進むんですね。てっきり急ピッチで進めるのかと思いましたが……」

「流石にそこまではお願ひできないからな。残りの遅れは、私自らが取り返す」

「……はつきりと言い切るんですね。現行のまま他のクラスと同じように授業をしたところで、教科書の進行度の差は詰められないと思えますけど？」

「誰が教科書通りの授業をすと言った？　確かに多少遵守するポイントもあるだろうが、構造を叩き込み、魔術を行使するだけの授業をするつもりはないので、そのつもりで。つと、すまない。そろそろ時間だな」

時計を見ると、既に約束である時間の数分前。

「悪いが、ギイブル以外に質問がある者は後ほど。これからハーレイの授業を受けに行かねばならないのでね」

「ハーレイ先生の授業を受けに行くんですか？」

「そうだ、ルミア。君達に教えるには、少々私の実力不足が顕著だね。他の先生方に許可を得て、授業を受けに行くことになったんだ」

言葉通り時間が無いのだろう、急ぎ気味で答えるエミヤ。

「そう言う訳だ。突然の話で悪いが、そのように」

一言残して扉の向こうへと消えていく。

残された生徒は当然、啞然とした様子で背中を見送るのだった。

そこから数日。

教師でありながら黒魔術が使えず、生徒と同じように授業を受けるエミヤの姿はたちまち学院内で評判となった。

最初こそ懐疑心の強かった印象だったものの、真摯に授業に向き合う姿勢や、同じく授業を受けているという立場での生徒からの質問にも事細かに答えていく姿。

本当に黒魔術が使えないのか、と思わず思ってしまう程の卓越したスピードに生徒は

おろか先生ですら驚愕してしまう程。

そして、約束の日前日。

エミヤは放課後の校舎を、一人で歩いていた。

窓から零れる夕焼けを浴び、一つの部屋を通り過ぎようとしたところで、知っている顔を見た。

「あれは、ルミアか……？」

そこは魔術実験室。

その中でルミアが一人、水銀で描かれた五芒星の前に教科書を見ながら困った表情を浮かべていた。

「あれは確か、流転の五芒星……だったか。方陣上を流れる魔力を視覚的に認知するための、方陣構築術の基礎」

およそ困っている理由は、方陣が発動しないからだろう。

「……仕方あるまい。少々手を貸すか」

エミヤは扉を開ける。

室内の中央にいるルミアは、突然の音に弾かれたようにそちらを見た。

「え、エミヤ先生……？ どうして、ここに……？」

「見逃せないな、ルミア。生徒個人で魔術実験室を使用することは禁止されていたはず

だが？」

「そ、それは……ごめんなさい……」

「わかれば良い。だが、ここには危ない実験器具もある。次からは無いようにな」

小さく謝るルミアを見て、エミヤは苦笑いをする。

それは確かに大切だが、ここに来た要件はそれではない。

「さて。では続きといこうか、ルミア」

「え……？ 良いんですか……？」

「不当な理由であれば一蹴していた所だが、どうやら正当な理由みたいだからな。それに、やりっぱなしというのも気持ちが悪くないだろう？」

その言葉に、ルミアは目を見開く。

「では基本的な復習だ。君が今直面している、方陣が起動しない理由には幾つかの理由がある。一つは、詠唱が間違っている。二つは、術者本人の魔力が枯渇している。三つは、そもそも方陣が完成していない」

三本の指を立てたエミヤの言葉に従うように、ルミアは教科書に目を落とす。

文字の羅列に瞳が踊らされ、潜む答えを零さないように汲み取っていく。

「あ……これ、水銀が足りないんだ……」

「正解だ。では、もう一度やってみると良い」

「はいっ」

元気に頷いたルミアは、教科書と見比べながら要所を丁寧に修復していく。時折、出来を伺うような視線にエミヤは何も言わずに首肯した。

そして、方陣が完成し、ルミアはもう一度その前に立つ。

「廻れ・廻れ・原初の命よ・理の円環にて・路を為せ」

詠うように唱えられた詠唱に呼応するように、方陣から光が飛び出す。

刹那の残光を瞳に残し、その果てに広がる風景は、七つの光と輝く銀が織り成す幻想光景。

「わあ……綺麗……」

「そうだな。話には聞いていたが、これはまた」

「……ありがとうございます。エミヤ先生。先生が居なかつたら、きっと出来ませんでした」

「なに、私は助言をしたに過ぎない。この方陣を最初から最後まで構築させたのは君だ」
その光景に満足したエミヤは、ルミアから離れていく。

「あつ、エミヤ先生。もしかしてこれから帰られるんですか？」

「? そうだが？」

「じゃあ——、一緒に帰りませんか? 勿論、迷惑だつたら無理には言いませんけど」

……」

最初は断ろうとした提案だったが、最後に向かうにつれて悲しそうな表情をするルミアを前に、断ることは出来なかった。

「大丈夫だ。この後は時に予定も無いし、既に少々遅い時間だ。君一人で帰らせる訳のも心配だしな」

「あ……ありがとうございますっ！　じゃあ、ちよつともつたいないけど、急いで片づけちゃいますね！」

満面の笑みを浮かべたルミア。

その姿にやれやれと肩を竦めながら、彼女に近づく。

「手伝おう。水銀を急いで片づけるのは、危ないからな」

こうして二人、初めての共同作業として片付けを行ったのだった。

夕刻の鴉が残響を残しながら飛翔する。

視線の対角線上にある夕陽の光を浴びながら、エミヤとルミアは二人で帰路についていた。

「凄く久しぶりに感じますね。先生とこうして話すのって」

「そうだろうな。たつた一週間とは言え、それでも君達との関係をほとんど断っていたんだ。でもまあ、これも今日までで終わりだな」

「ふふつ。先生の授業、楽しみにしていますね？」

「そう言ってもらえるのは嬉しいが、皆が皆そう言う訳にもいかないだろう。私としても、君達とは友好的な関係を築けたとは思っていないし、君達もそうだろうか？」

エミヤの問いに、ルミアは微笑みながら首を横に振った。

「それでもありませんよ。確かに皆、最初は戸惑っていましたけど。先生の話は、しっかりと皆の耳に届いているんですよ？」

「私の話……？」

「はい。エミヤ先生が他の先生の授業で、どんな風に過ごしているのか、とか」
「……なるほど。それは少々、恥ずかしい所を見せてしまったかな」

「そんなことはありません。戸惑っていた皆の中にも、それを聞いて先生の評価を改めた人もいます。勿論、全員がそう言う訳ではないんですけどね……」

静かに俯くルミア。

「君がそんな顔をする必要は無いだろう。その評価は正当だ。故に、その評価をこれから挽回すれば良い。このままでは、私を推薦したセリカにも顔向けが出来ないだろうしな」

決意を言葉にするエミヤの前に、ルミアは眩しいものでも見るように目を細めた。

「……先生。一つ、昔話をして良いですか？」

「む？ ああ、別に構わないが……？」

するとルミアは懐かしむように遠くを見る。

「あれは、今から三年くらい前の話です。私が家の都合で追放されて、システイ……ああっ！ システイナの事なんですけど。彼女の家に居候を始めた頃、私、悪い魔術師に捕まって殺されそうになったことがあるんです」

「……それは、厳しい人生を送ってきたのだな。しかし、家の都合で追放され、システイナの家に居候か。何か庶民の私では理解できないような理由でもあったのだろうか？」

暗にルミアは高貴な家の生まれだったのかと問うエミヤ。

その言葉を聞いて両手をブンブンと動かし、ルミアは否定した。

「そんなことはありません！ 本当、私は貧しい家の出ですっ！ 家を出ていったのもそれが原因で……！」

「分かった。分かったから、そこまで否定する必要は無いだろう。それで、君は悪い魔術師に襲われて、無事だったのか？」

動揺するルミアを宥める。

その行動が余計に怪しいが、彼女の出身は今の所関係ないので次に流そう。

「……その時の私は、直前に家を追放されたこともあつて不安定で……どうして私だけがこんなに不幸になるんだろう？　なんで幸せに暮らせないんだろう、つて、ずっとそんなに風に思っていて。結局、最後には諦めてしまいました。もう生きている意味も無いんじゃないかって思つて……」

悲し気に俯いていたルミアだったが、途端に顔を上げる。

「でも、悪い魔術師にあとちよつとで追いつかれる、という所で、別の魔術師が助けてくれたんですよ？」

「……少し待て、君は——」

何かを思い出したように瞠目するエミヤを、ルミアは期待の込めた瞳で見上げる。

「……いや、何でもない。それで、君はその魔術師に助けられたんだな？　間一髪、という場面で」

続きを催促するエミヤに、ルミアは残念そうな顔をするが、続きを話す。

「はい。その人は突然私の前に現れて、何が起きているのか分からなくて戸惑っている

私を尻目に、双剣を握って悪い魔術師を倒していききました。最初はその姿が、とても怖かったんですけど。悪い魔術師も殺さないように気絶させていく姿と、大丈夫、絶対に守るからと約束してくれたその背中に、私は安心と不安がごちゃ混ぜになってしまつて……。結局、お礼をいう事も出来ませんでした」

「……双剣で敵を圧倒する魔術師か。前後の言葉で意味に差異があるように感じられるな」

「あはは……簡単な治癒魔術は使っていたので、恐らく魔術師だと思つたんですけど……」

「それにしても、効率的では無い男だな。剣など、魔術文明が発達したこの世界では既に見られない代物と思つていたのだがね」

その言葉を聞いたルミアは、クスクスと笑い出す。

「む？ 何かな？ 変な事を言つたつもりはないが？」

「そういえば。私は助けてくれた人が男の人だなんて言つてなかつたな、と思ひまして」

「……失言だ。忘れてくれ」

「いえ。絶対に、忘れません」

足跡は消え、空は動き出す。
エミヤとルミアは二人、肩を並べて話している。

それは他愛ない話だ。でも、途切れては繋ぎ、途切れては繋ぎを繰り返す。

この時間を失いたくないようにと、必死に引き留めているようにも思える。

エミヤも、この心地良い空間が嫌いではなかった。

「あつ、先生。私、こっちはです」

「良いさ。最後まで送っていくよ」

「そんな、悪いですよ。先生もこれから明日への準備とかあると思いますし」

「いや、それに関してはそこまで心配しなくても大丈夫なのだが……本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですよ？ このまま行けばすぐに着きます」

毅然に言うルミアの顔を見て、考えを改めた。

まあ確かに、これ以上の心配は不要か。

「そうか。では気を付けてな」

「はいっ！ 先生も明日、頑張ってくださいね！」

そのまま二人は分かれ道で別れる。

見えなくなるまで手を振るルミアに手を振り返して、エミヤはもう一方の道を行く。

「まさか。あんなに大きくなっていたとはな……」

風に吹かれる独り言。

表情筋を柔らかくしながら、エミヤは一人感慨深い気持ちに浸っていた。

とある者から涙ながらに依頼された過去を思い出し、薄幸を命じられた少女が笑って
いられる現状に安堵の息を吐く。

そして途端に引き締めると、思考を次へと移行する。

「さて。ではいよいよ明日からか」

約束の時は来た。

後はただ、この一週間で含蓄した知識を以て伝えるのみ。

不安はある。緊張もある。

だがそれ以上に、教師という職業への眩しさも、内に秘めていたのだった。

授業

「久しいな、皆。この一週間は充実した日々を送れただろうか？」

授業開始時間よりも前に到着したエミヤはクラス全体に問いかける。

こちらが勝手に組んだ臨時の時間割をこなしてもらったわけだが、その成果はどうだったのだろうか。

「科目ごとに先生が変わる、というのは新しい感覚でしたが、全員楽しく出来ました」

「それは良かった。時には日常から逸脱した行動というのも悪くは無いだろう？」

「はい。ですが先生。今日からは先生の授業なんですよね？」

「そうだな。まあ、私は私なりのやり方でやり遂げて見せるさ」

ルミアと簡単にやり取りを交わす。

そうしているとすぐに時間はやっつけてくる。

「よし、時間だな。では授業を始めようか」

開始の挨拶を聞き、雰囲気は授業へと一変する。

先ほどまで談笑していた声も、今や静寂の前に掻き消えた。

「まずは君達に聞きたい事がある。それは、『汎用魔術』と『固有魔術』オリジナルには優劣がある

のだろうか？」

「それはやつぱり、固有魔術オリジナルの方が凄いのでは？」

簡単なエミヤの問いに、答えたのはルミアだった。

他の生徒はエミヤを測るようにして視線を鋭くさせている。

「では全員、ルミアの意見という事で良いのだろうか？」

見渡す景色に反論は無い。

「だとしたら、大きな間違いだ。今日はこの二つの大きな特徴と共に、君達が普段使っている汎用魔術が如何に完成された代物であるか、について話していきたいと思う」

「待ってください。通説を考えれば、汎用魔術よりも魔術師個々のオンリーワンである固有魔術オリジナルの方が優れたものであるように感じられますが？」

口を挟んだのはシステイーナ。

エミヤはその問いに、ニヒルに笑う。

「その通説が間違っているからこそ、私はこう言っている。固有魔術オリジナルの方が優れている訳が無い」

「何を言うかと思えば。汎用魔術など誰でも使える魔術ですよ？ それが、固有魔術オリジナルに勝てる訳がないじゃないですか。まあ、先生はその例外ですけど」

「中々に饒舌なようで安心したよギイブル。君が突つかかってくるんだ、それなりに興

味を持ってもらつたと見て良いのだな？」

皮肉を込めた言葉に、真正面から言い返す。

ギイブルは苦虫を噛み潰したような顔をしていたが、その視線を背けはしない。

「とまあ。今のギイブルの言葉が君達の汎用魔術への評価であり、システイーナの言っていた通説だ。誰でも使えるからこそ、価値が無い。今の魔術師としての指標である、より高度な魔術を行使出来た者こそ優秀という秤を考慮すれば、その結論に至るのも理解できない事ではない」

一拍、置く。

「フツ。誰でも使えるからこそ、価値が無い、だと？ 笑わせないでくれ。そもそもその前提条件から有り得ないことだと、どうして思わない？」

「前提条件が有り得ない……？」

「そうとも。君達は普段、教科書に書かれている魔術式を暗記し、詠唱を紡ぎ、一つの魔術を行使できる段階へと至る訳だ。では問おう。どうして魔術式を暗記すれば魔術が行使できるようになる？」

「それは、術式が世界の法則に干渉して……」

「では世界の法則とは何だ？ そもそも、文字で表せる術式を唱えるだけで形而上の存在に干渉できる原理は何だ？」

「……そ、それは……」

とまあ、こういう訳だ。

異世界から降り立ったエミヤが至った、最初の疑問。

魔術式を暗記し、詠唱を唱えるだけという、実にインスタントな形で行使できる魔術と云うもの。

それに対する疑問が尽きなかった当初だが、システイナの言葉と同様なのを何度聞いた事か。

魔術式とは世界に影響を与えるのではなく、人に影響を与えるのだ。

人の真相意識を改革させ、それに対応する世界法則に結果として介入するというものだ。

これについてはまた後ほど、対応する授業の際に話すとしよう。

「君達は普段、魔術の種類を増やす授業を受けていたはずだ。それを間違っているとは言わない。だが、君達には別の視点見るこの大切さに気が付いてもらいたい」

エミヤは黒板に黒魔【シヨック・ボルト】の魔術式を書いてゆく。

「これを暗記し、特定の呪文を詠唱するだけで、指先から微弱な紫電が放出される。君達も知つての通り、黒魔術の基本である【シヨック・ボルト】だ。だが、普通に考えればおかしくないか？」

その問いに答えられる者は誰もいない。

「ここで一度、最初の疑問に戻ろう。『汎用魔術』と『固有魔術』に優劣はあるのか。個人の意見を言わせてもらえば、自然界の理と人間を結び付けてしまった汎用魔術の方も十分偉大に見えるが？」

「……ですが、固有魔術オリジナルも偉大だと思います。各々の魔術師が担う魔術特性パーソナリテイを魔術という形で落とし込み、現実として形を成すのですから」

「無論。故に聞いただろうか？ 『汎用魔術』と『固有魔術』に優劣はあるのか、とな。その答えは、優劣などない。君達が固有魔術オリジナルを重んじるように、汎用魔術もまた重んじるべき代物だ」

その答えを聞いた瞬間、生徒達の眼が見開かれる。

「私みたいな三流以下の魔術師からすれば、君達の間を疑ってしまふな。指先から紫電を発しておいて、それを容易だと断じる。思わず異世界にでも来てしまったのかと思つたよ」

最後は茶化すように言うエミヤだが、生徒達は誰も笑っていない。

見開かれた視線は下へ落ち、必死にメモを取る姿が散見される。

「では話題を変えよう。次は固有魔術オリジナルについて話そうか」

流れを断つようにエミヤは黒板の魔術式を消す。

「システイーナが答えてくれたように、固有魔術オリジナルには魔術特性パワナリテイが必要不可欠だ。それを基に構築するのだから、当たり前か。担い手に多大な影響を齎す魔術特性パワナリテイだが、時にそれは弊害となることを君達は知っているだろうか？」

「弊害になる……何か、汎用魔術とそぐわない特性を持つてしまった、とか……？」

「正解だ。私も黒魔術とは共存できない特性だったのですね」
やれやれと肩を竦め、ため息をつく。

「とはいえ、逆に魔術との共存が見込まれるものであれば話は別だ。特性は担い手を手助けする追い風となるだろう。簡単にではあるがこれが魔術特性パワナリテイについての解説だ。知っている者もいるだろうし、特に質問が無ければ次へ行くが？」

「じゃあ、先生の特性ってなんですか？」

「そこはあまり関係無いだろう、カッシュ。……まあ、簡単に言えば、自然干渉を否定する代物だね。お陰で、運動とエネルギーを扱う黒魔術が使えないという訳だ」

本当は違うが、黒魔術が使えないという汚点を説明する上ではこれ以上ないものだろう。

剣というワードを出す訳にも行かないしな。

「つまるるところ、固有魔術オリジナルを創造するには想像以上の時間を浪費する結果となる。特性を理解し、現実として織り成す代物を一人で構築しなければいけないのだから。それ

に対し、汎用魔術は「シヨック・ボルト」であろうとも、偉大な先人達が何百年もかけて改善・改良された代物だからな。やはり、完成度の違いは火を見るよりも明らかだ。とはいえ今度、固有魔術を創り出す実技も授業に入れよう。それで汎用魔術の素晴らしさが身に染みて分かるだろう」

静かに締めくくったエミヤは、一度手をパチンと叩く。

「では、終了の時間だ。今回は君達の普段使っている汎用魔術が如何にすごいか、という事について触れたが、普段の授業とは逸脱した内容をしてしまったからな」

時間を確認し、予定通りであることを把握する。

「整理の時間も必要だろう。とはいえ、早めにな。今の内容が終わってから、今度は帝国の歴史と結び付けて、魔術の恐ろしさについて知ってもらう。今学んだ汎用魔術が戦争にどんな影響を与えてきたのかという、魔術への神聖観を打ち砕く内容だ。それなりに覚悟を決めてもらいたいからな」

そう言い残すと、エミヤは足早に教室から立ち去っていった。

「各々は今の内容を整理するようにメモを見返したり、思考を張り巡らせたりしている。そこに談笑という余裕は存在しなかった。

異例の授業を行う、シロウⅡエミヤ。

その評判は瞬く間に学院中に広まり、様々な評価を得た。

別の視点、眼に見えないものにこそ注意せよ、という教えは今までのやり方に正面から反対するものだった。

魔術を神聖なものと思っていた学生・教師に注意を促す内容や、実体験を交えた魔術との関わり方。

あえて醜い部分があるということを理解させたうえで、魔術師としての責任感を自覚させるその授業。

無論反感もあり、ロクでもない授業だと批判されたことも一度や二度ではない。

それでも、自分のやり方を貫いたエミヤ。

反感はある、全てを理解されたわけではない。

でも、自分が受け持つ生徒達には理解されたことは、良かったと一息つけるだろう。

「まさか、君からのご誘いがあるとはね」

呼び出されて向かう、屋上。

夕焼けの日照りを金髪のベールで流しながら、セリカⅡアルフォネアはそこにいた。

「聞いたぞ？　色々と頑張っているんだって？」

「まあな。とはいえ、私のやり方に共感できない勢力があるのもまた事実だ。これに関しては、私の力不足だな」

「それは仕方ないだろ。今までの常識を打ち破るやり方だ。一般的な流れに甘い汁を吸っていた人間からすれば、良い顔は出来ないだろうしな」

「それでもないさ。その人間の考えを改めて、初めて人を導くことが出来るだろう。そこに至れないのは、私自身に失態があるからに他ならない」

ため息をついてしまうのは、それなりにこの職業に浸ってしまったからだだろう。

人を導く立場として、再び不甲斐ない点ばかりが視線を覆う。

「お前は自分に厳しすぎると思うけどな？」

「正当な自己評価だ」

「その性根までは変わらないか。まあ、それでもお前が楽しそうで良かったよ」

「……そう考えれば両者に得のある話だったのか。君は私に責任感について教えてもらいたく、私は未来ある子供たちに大切な事を教えたい」

その言葉を聞いたセリカは、満足そうに息を吐く。

「やっぱ、お前に頼んで正解だった。特務分室でもグレンを導いてくれたし、センスがあるのは知ってたけど」

「センスなんてないさ。私はただ、自分に出来る事をやっているだけだよ」

感傷に濡れる心を、夕焼けの光が照らしてくれる。

「さて。君はこれから、明日の魔術学会の準備があるのだろうか？」

「そうだ。私を含めた学会参加者は今夜、学院内にある転移陣から帝都まで向かう」

帝都オerland。

帝国北部地方にある一大都市で、ここからの距離は馬車を使っても四日はかかるだろう。

「明日はお前のクラスだけ、特別にあるんだったか？」

「そうだ。残念な事に、生徒からはブーイングを浴びたがね」

エミヤはセリカに背を向け歩き出す。

これからの準備があることを考慮して、無理矢理に話を切った。

およそ彼女がエミヤをここに呼び出したのは、こうした世間話が主な理由だと思ったからだ。

「……一つ、お前に話してなかった事がある」

足を止める。

セリカの真剣な声音に、耳を傾ける。

「お前の前任であるヒューイは、知ってるか？」

「ああ。確か、一身上の都合で退職したんだったな」

「それな。実は表側の理由だ。本当は、突然失踪したんだ」

「何？」

思わず振り返る。

橙色の光がセリカを照らし、双眸が陰に隠れる。

「そうでもなきや、フリーのお前を繋ぎとして呼びはしない。とはいえ、こういう推理はお前の専門だろ？ 多少は事情を掴んでいたんじゃないのか？」

「……確かに、異常に遅れた進行度に対して疑問を思ったことはあるが……まさか、失踪していたなんてな」

「そう言う訳だ。お前に気を付けろ、なんて言葉は不要だろうが、一応報告だ」

「報告感謝する。正直な話、話が悪い方向に進まなければ良いのだがな」

夕刻の話し合い。

遠い空を仰ぎ見るエミヤの声は、鴉の鳴き声と共に風に流れていった。

戦闘

「で、どうすんだよ？ 案外大物が組み込まれたようだけど？」

「ここは、フエジテ某所。」

薄暗い空間に響き渡る醜悪な声音。

蠢動する虫の如く、気色の悪い笑みを浮かべた軽い男が問うのは、これからのこと。

「知っている。故に作戦の見直しを検討している。少なくとも単騎行動は禁止だ」

「全く。セリカⅡアルフォニアはそんな人脈もあつたのですか。まあ、かつては共に仕事をしていた仲でしたね」

慇懃無礼な男は肩を竦める。

「それで、『死神』は如何様にして退けるのですか？ 我ら三人では厳しい相手と思うのですが？」

「かと言つて作戦中止は許されぬ。我らは如何なる手段を用いてもあの男を倒し、計画を成功に導かねばならないのだからな」

「だからその方法を聞いてんすよ？ 『死神』シロウⅡエミヤ相手に正面突破は不可能に等しいつてのは全員分かつてるんすから」

「ああ。正面突破は不可能だ。奴は以前、第三団^{ヘヴンス・オーダー}〈天位〉を殺した経歴を持つている。幾ら我らが運を引き寄せられたところで、正攻法では牙城に触れることすら叶わない」
冷徹な男は他の二人を射抜くように目を向ける。

任務の重要さを問う鋭い視線に、二人は静かに頷く。

「故に、奴の弱点を突く他はない。幸運な事に決行日は奴以外の教師共は居ないのだからな」

「ヒュ〜。つまり、生徒を巻き込む攻撃をしろってことね。流石兄貴、考える事がえげつねえ〜」

気軽に口笛を吹きながら残酷な言葉を言う。

歪んだ表情は昂り、己が手が血に濡れる光景を想像し欲情する。

「そう言う事だ。貴様らは、鍊金改〔酸毒刺雨〕にて奴の立ち位置を後手に回し、黒魔〔ライトニング・ピアス〕の連射と『疾風脚』^{シユトロム}で相手の殲滅を狙え。私は貴様ら二人の防衛だ。奴の前で攻守の二つを行うなんて贅沢は許されないからな」

「なるほど。確かにそれは効果的な陣形となりそうですね」

「でもよ、レイクの兄貴。確かにその包囲陣も効果的とは思うけどよ、それでも突破されたとすんの?」

「その場合は、この身に刻まれた呪いを解放する。出し惜しみは無しだ。貴様らも全力

で事に臨め」

漆黒の足跡が日常に近づくと音がする。

イレギュラーが介入したお陰で、有り得ない協力を為した外道魔術師共。

その陣容は、虎視眈々と日常を踏みつける為に動き始めた。

「俺達だけが授業って、マジかよ……」

時は進んで、アルザーノ帝国魔術学院。

一つの教室の中で、エミヤは前で楽な姿勢をとっていた。

時計聞こえる不公平への不満を流しつつ、時計を見る。

「なあ、先生。もう始めちゃおうぜ」

「その分終了時刻も早くしろ、というのが君の要望だろうか？」

バレたか、と頭を掻くカツシユ。

だが、その意見はそれなりに支持があるらしく、エミヤが一蹴した瞬間空気がネガ

タイプなものへと変わっていった。

確かに正当な理由があるとはいへ、休日学校へ赴くというのはそれなりに苦痛ではあるか。

「仕方あるまい。五分先に始め、五分早く終わりにするとしよう」

「さつすが先生、話が分かるぜ！」

一部生徒からの拍手を受け、授業を始めようと姿勢を整えた。いつもと変わらぬ日常が幕を開け、陳腐な平和が彩る世界。

——それを穿つ、不気味な殺気が体に這い寄る。

警鐘が鳴り響く。日常の狭間に介入してきた、唐突なる非日常の香りに顔を顰める。

思考は後回しだ。まずは生徒の命を守らなくてはいけない。

「全員、頭を抱えて机の下に隠れる!!」

鋭い声音と真剣な表情のエミヤに、ただならぬ気配を感じた生徒達。

全員が言われた通り、焦ったように机の下に隠れた。

その隙に投影した双剣を懐に隠し、代わりに潜ませていた拳銃を手に持つ。

突然放たれた紫電一閃。

扉を突き破って飛来する一光が残像を穿ち、エミヤはこれが殺意の込められた攻撃で

あることを悟る。

「チツ、今のは【ライトニング・ピアス】か」

銃口を向けつつ発した現状確認。

それに答えるように隙間から投げ込まれたスモークグレネード。

煙幕が視界を遮り、何が起きているのか分からない生徒達の緊張感が堰を切る。

この状況でパニックになられたら相手に思う壺である。

エミヤはどさくさに紛れてルミアを連れていく人影を確認するも、ここに生徒を置いて行く訳には行かない。

生徒を落ち着けさせるためにエミヤは煙に紛れて投影したナイフを投擲、全弾ガラスを突き破る。

「窓に向かって【ゲイル・ブロウ】を放て！」

反応を示した数人の生徒が机から突風を巻き起こす。

煙幕は風と共に去り、澄み渡る視界が戻ってくる。

「え……せ、先生っ!! ルミアが……」

「ああ、どうやら煙幕に気を取られていたばかりに連れ去られてしまったようだな」

「だったら早く連れ帰さないと——」

「待て。前を見ろ、敵がいるぞ」

焦る様子のシステイーナを一度落ち着かせ、エミヤは扉の向こうへ意識を向ける。

「貴様ら、何者だ？ そのまま隠れているのも別に構わないが、同じような手が二度も通じるとは思わない事だ」

「対応が早い事で。とはいえ、確かにこのまま壁一枚隔てるつてのもめんどいからなあ」
妙に軽い言葉を口にする男が扉を突き破つて登場する。

その背中に続くように、寡黙な男とくせつ毛が特徴的な二人組が現れる。

「そのコート、天の智慧研究会だな。貴様らの「ライトニング・ピアス」で疑似的に私をこの場に留め、煙幕と共に生徒を連れていくという手法は見事だ。余程の手練れと見えるが？」

「あちやく。そこまでバレちゃうのかよ、流星は高名なシロウⅡエミヤセンセイ。日常で鈍つたとは思えない思考速度だ」

両手をあげながら降参のポーズをとる軽い男。

「その姿は、白旗をあげたとみて良いのかね？」

「ンなわけないでしょ？ 第一陣で有利に立ったのはオレ達だぜ？」

ルミアを人質として確保し、その命脈を握る。

この場で英霊としての身体能力を全開放し、助けに向かっても構わないのだが、相手に凄腕の「ライトニング・ピアス」使いが居る事を考えると下手な動きは生徒達の命を

削る行為に等しい。

「そうだな。見事に私は君達の奸計に嵌ったという訳だ」

「良いねえ良いねえ。その、ちつとも焦つてない達観した様子。オレも感情が高ぶつてきたぜ?」

「抑えろ。言つたはずだ? 感情を発露させるな。心理戦に土俵を変えろな。現状の有りを下らない一時の煽りで譲るなんて真似は止せ」

「……分かつてるつすよ、レイクの兄貴」

あの三人の中で一番厄介なのはあの寡黙な男だ。

制止させられ不機嫌になっている軽い男を尻目に、エミヤは寡黙な男——レイクを重点的にマークする。

「てかさ、もういいつすよね、レイクの兄貴? あの野郎と話してると調子狂うつてか、情報戦は仕掛けないんすよね?」

「そうだ、速攻で決める。キャレル、用意は出来ているな?」

レイクは今まで黙っていたくせつ毛の男——キャレルに問いかけた。
撃鉄が降りる。

思考回路は逆転し、時を刻む度にこの身が精悍になる。

「ええ、勿論です。《穢れよ・爛れよ——》」

読唇術で解析。

詠唱の意味を瞬時に読み取り、その性質を看破する。

「広範囲攻撃か、厄介な——」

エミヤは動き出すと、術者の妨害を試みて——失敗。

レイクが周辺をマークし、軽い男は生徒に向かつて指を向ける。

その行動から「ライトニング・ピアス」の担い手は後者であることを仮定。

行動を即座に切り替える。

「——」

空気の振動にも乗らない声音で詠唱を唄う。

充溢する魔力を循環し、脳裏に浮かぶイメージを読み取る。

「——朽ち果てよ」

レイクの防衛網を突破するのは——奴が万全な状態である、という条件であれば——

数秒では不可能。

後方に浮遊する五つの剣。うち三本は剣に眠る意識を基に動く自動剣、残りは奴本人の意思で動く自動剣。

それなりの担い手であることは瞳を通じれば分かる。そんな男が防衛に全戦力傾ければ、寸毫の狭間にて突破するのは命を賭したものとなるだろう。

無論、それは生徒のもの。故に不用意な攻撃は選択肢から除外。

エミヤは生徒の隠れる机の前に立つ。

キャレルの魔術は、酸と毒の複合魔術だ。命綱が机一つでは頼りない。

手を天井へ。まるで雨の如く舞い降りる死の妖精を、七つの花卉が受け止める。

「ハッ、がら空きだったの!!」

指を向けていたのはやはり囷。

エミヤをここへ引きつける為の行動だという事は既に理解している。

その上でそのレールに乗ったのだから、覚悟は出来ている。

「———テメエ……!」

残る一方の手に握った剣で、紫電を受け止める。

事前に強化を施した、煙幕中に仕込んでおいた双剣の片割れ。

ここまでの流れは予想通り。

「道筋は完璧だが、道程が少し御座なりだな。速攻で決めるのであれば、カードが不足しているぞ?」

「一々癪に障る野郎だぜ……! 良いぜ、そこまで言うなら見せてやるつての。『死神』

だかなんだか知らねえが、このジンIIガニス様が過去の栄光を消し炭にしてやるぜ……

!!」

姿勢を低くし、跳躍。

両足に纏うベクトルの定められた風を操り、教室の中を縦横無尽に駆け抜ける。

あれは、『疾風脚』シュトルム。

軍用魔術である黒魔【ラピッド・ストリーム】を連続で起動し、高速下での三次元行動が可能となる高等技術。

先の【ライトニング・ピアス】の連射といい、並外れた才能を有するのは間違いない。「オラ、背中ががら空きだぜ——！」

幸運な事が一つあるとすれば、奴の心理面は未熟ということか。

エミヤを狙う紫電は、悉く失墜する。

片手に握った剣が、まるで最初から軌道を知っているかのように防ぐからである。

「何をやっている、ジン。シロウエミヤを狙う必要は無い。テーブルの下に隠れている生徒を狙うのが貴様の役割だ！」

レイクが雰囲気に似合わず声をあげる。

その的確な指示に舌打ちをしたのは無論、エミヤだ。

並外れた才能を有するが故に煽り慣れていないであろうジンを疑似的に操作し、その照準をこちらに向けるのであれば、状況はこちらのものだ。

だが、その標的が生徒に向けられればエミヤの不利は揺るがない。

「……ンな、分かってるっての！」

軌道修正。

ジンは狙いを正しき道へと戻し、その引き金に手をかける。

「……すまない。君達の軌道を、狙っていたものでね」

だが、その寸毫前。

テーブルの前に陣取っていたエミヤの姿が光へと霧散し、レイクの横を通り過ぎた。

狙いはキャレル。まずは制空権を取り返すとしよう。

「……馬鹿な。今の刹那で私の包囲陣を突破した、だと……？」

レイクが瞠目したまま振り返る。

先ほどまで仲間として協力していたキャレルの、胸から生えた白黒の双剣。

天を覆う花卉は存在意義を失い、舞い降りる死が凝縮された霞と共に消え去っていった。

「デメエ、何をした……？　今の今まで、そこに居ただろ……？」

剣に付着した鮮血を払う。

動揺している二人の襲撃者を尻目に、酷く冷徹な心を宿す。

「……魔力痕跡は、無い」

「そうだ。そもそも、この程度の動きに強化を施す必要も無い」

「——ッ！ ジン、手を抜くな！ 貴様の連射で私を巻き込んででもこの男を殺せ！」
「素早い対応だ。だが、それには少々遅すぎたな」

侮蔑の声音を灯すエミヤ。

命を捨ててでもという乾坤一擲の判断を下したレイクだったが、隣で悠々と刀身が螺旋状になっている剣を弓に番えるエミヤを見て、悟る。

——次元が違いすぎる、と。

「——カ
ラ
ド
ホ
ル
グ
II 偽・螺旋剣」

唯々諾々と命令通りの行動を為そうとするジンを包み込む、螺旋の波状。

途端に両足に纏う魔術を起動して逃げようとするが、スタートダッシュに失敗した走者を捕らえるなど造作も無い。

天井を突き破る一矢。

彗星の如く、その一光は空の果てへと消えてゆく。

「さて、後は貴様だけだな」

視界の端で震える生徒を確認し、後で説明をしないといけないな、と思うエミヤ。

緊張感を発露し、レイクの存在全てを包み込むプレッシャー。

思わずレイクは頭を俯いてしまう。

無論、不条理なまでに開かれた間隙によつて殺された仲間に対する慈悲は無い。

現状に対する不安も、最初から覚悟は決めてあったのでそこまでは無い。

ただ、シナリオ通りに進みすぎる現在に笑みがこぼれただけだった。

「投降すれば命までとはとらん」

「いや、下らない慈悲は不要だ『死神』シロウⅡエミヤ。既に、覚悟は決めてあった——」

髪分け目から見せた瞳は、獰猛類のように不気味な光を纏っていた。

それに嫌な予感を感じ取る。

駆けながら双剣を投影するエミヤ。

不敵に笑みを浮かべるレイク。

両者の精神的優位は、この一瞬のみ逆転した。

——ザグツ。

肉を断つ、切断音。

エミヤの剣が、レイクの体に届いた。

「……貴様、何のつもりだ？ 覚悟は決めてあった？」

「そうだ、シロウⅡエミヤ。残念ながら今の私では貴様を凌駕することは叶わない。故に——この続きは、次の私に託すでしょう」

「次の私に託す、だと……？ 貴様、いや貴様ら天の智慧研究会は、どんな下劣な手法を

為そうとしている？」

「なに、貴様もいずれ到達する話だ。もしかしたら、既に到達しているのかもしれないがな……」

咯血するレイク。

既に自力で立つ余力すら残っていないのか、近くに佇むエミヤの肩に全身を乗せる。

「では、またの再会を期待する。その時には、貴様の最奥を展開し私の命脈を狙え。私も、己が全てを以て貴様を殺す」

肩から落ち、腕を伝って地面へと落ちるレイク。

その息からは温かさは消え失せており、既に人としての機能を失った存在へと失墜した。

「——やはり、私と呼ばれたのは貴様らが原因なのか？」

地に伏せるレイクへと告げる。

その声が届くことが無いとは分かっている。

「……エミヤ先生」

「……すまない。君達を怖がらせてしまったな」

事の終息を悟った生徒達がテーブルから姿を見せる。

声を発したシステイーナはまだいい方だろうが、それ以外には怖さで全身を震わせる

生徒もいる。

無理も無い。

普段から醜悪な魔術の裏側を語っているとはいえ、百聞は一見に如かず。

聞くと見るとでは、本人に与えられる影響の格差が大きすぎる。

「あの……先生は一体、何者なんですか……？」

「……少々腕には自信があつてね。以前は傭兵紛いの仕事を請け負っていた事もある」

「そ、そうなんですか……」

「簡単には納得できないだろうが、今はこれで納得してくれ。それと、これからルミアを連れ戻しに行かないとな」

毅然と振舞っているシステイーナだが、その声音には震えが見える。

だが、ケアをしている時間は無い。

それは全てが終わった後に、為すべき行動だ。

「何かあったら魔術を放つんだ。すぐに駆け付ける」

緊急時の対応を話す。

その声に反応した生徒は数人だけだったが、聞こえているのであれば無理に反応を問う真似はしない。

扉の残骸を踏破し、エミヤは惨劇の教室を後にした。

契約終了

道中、不自然にゴーレムが跋扈する街道を踏破し、現在転送塔内部を駆け上がる。螺旋階段故に常人であれば額に汗を浮かばせるのだろうが、エミヤは息一つ切らすことなく登り切った。

「無事か、ルミア!」

「……せ、先生……? その声は、エミヤ先生ですか!」

「良かった。無事みたいだな」

塔の最上階、薄暗い内部からルミアの声が聞こえた。

「……驚いた。随分と早いご到着なんですな?」

「貴様が今回の黒幕か?」

その薄暗い中から登場したのは、柔らかい金髪を靡かせ、人の良さそうな顔をしている男だった。

第一印象ではあるが、到底斯様な事件を起こすような人柄には感じられない。

だが、纏うコートが天の智慧研究会所属であることを示す以上、その印象は無意味だ。エミヤの誰何に男は答えた。

「ええ、はい」

「そうか。では、早々にルミアを引き渡してもらおう」

「それは出来ない相談です。なにせ、貴方が幾ら高尚な実績を残していた所で、この結末は不動なのですから。ええ、『黒魔術』が使えない貴方ではね」

「——なるほど。黒魔術が使えない、つまりは解呪術式が行使できないが故にという訳か」

エミヤはルミアを見る。

ルミアの下には何らかの魔術が敷かれており、その先には男も繋がっていた。

「白魔儀【サクリファイス】——換魂の儀式だな」

「流石は歴戦の戦場を踏破した貴方ですね。一目で看破されてしまうとは」

「……貴様、その術式が起動したらどうなるのか、理解しているのか？」

エミヤは鋭い視線で問う。

ルミアと男の間に敷設されているのは、白魔儀【サクリファイス】。

前者にのみ仕込まれたのは、特定の時間が経過したら魔法陣上の存在を指定された座標に送ることが出来る術式だ。法陣を巡るルーンの数が制限時間を記している。

だが、後者に仕込まれたのはとても人道的とは思えない術式であった。

「はい。ルミアさんを組織へ送り、それを切欠として、僕の魂と直結したこの法陣も効力

を發揮し、僕の魂を食いつぶして莫大な魔力を得ることになるでしょう。——そして、この学院を爆破するに足る力を得ることになる」

「理解できないな。それを為して、貴様は何を得ることが出来る？」

「それが僕の存在意義なので。その果てを望む権利はなく、ただ為す事のみを命じられた傀儡なんですよ」

「……それが、貴様にとつての幸福なのか？」

「幸福……だったと思うんですけどね。どうしてか、僕はアルザーノ帝国魔術学院の教師として、人の温かさに触れすぎてしまったのかもかもしれませんね」

自嘲気味に微笑む男。

その姿は、どこか痛々しく感じられた。

「もう止めてください、ヒューイ先生!!」

悲痛に叫ぶルミアに目を向ける。

「どうして、こんなことをするんですか……!?! 貴方は、こんなことをするような先生じゃなかったのに……!」

「……すみません、ルミアさん。僕は元々、こういう事を生業とする人間だったんですよ……」

目を伏せるヒューイ。

「王族、もしくは政府要人の身内。そんな方がこの学院に入学された時、その人物を自爆テロで殺害するために、十年以上も前からこの学院に在籍させられていた、人間爆弾。それが僕なんです」

「いずれ起こるか分からない事象の為に、貴様はこの学院に組み込まれたのか？」

「ええ。とはいえ、とても得難い日々でした。願わくば、この日々が永遠に続けばいいのに、と。そう思っていたんですが」

目を上げたヒューイは、眩しいものを見るかのような目でルミアを見る。

「ルミアさんがいなければ、僕は今まで通り平和な日常を過ごすことが出来たんですけどね」

「なるほど。つまりは、ルミアは何らかの賓客であり、それを感じ取った貴様らは突然失踪という形で姿を晦ましたわけだな」

「そして凶らずも、僕の後任として貴方が来てしまった」

疲れたような表情をするヒューイ。

まるで白旗を振り、この場から逃げ出したいと願う兵士のようなだった。

己の意志と関係なしに、この場に立たされている運命を呪っている。

「シロウエミヤ。貴方ほどの戦力が介入するのであれば、もう少し戦力を投入すべきだったのですが。生憎とルミアさんを殺害する訳にはいかなくなり、直前で作戦が

変更されたわけです。全く、上層部であれば貴方の危険性も理解しているはずなのに「なるほど。そちらの裏側も何となく掴めた」

エミヤは申し訳なさそうに顔を伏せるルミアに視線を向ける。

「あの……エミヤ先生……」

「別に話そうとしなくて良い。今の会話で大体の事情は掴めたからな」

安心させるように声をかけ、再びヒューイと対峙する。

「さて、決着といこうか、ヒューイ＝ルイセン。そのような腫瘍があるのであれば、すぐに摘出しなければならぬからな」

「……何をするつもりですか？ 貴方は、黒魔術が使えない三流以下の魔術師であるはず」

胡乱な瞳をするヒューイを尻目に、エミヤはいつの間にか握られていた、刀身が歪な形をしているナイフを手にルミアの元へ歩む。

「構造から察するに、ルミアの転移術式を解呪すれば君の爆弾も効果を發揮出来なくなるのだろうか？」

「ええ、そうですが——」

近くに来たエミヤを心配そうに見つめるルミア。

彼女として黒魔術が使えない事は知っている。

解呪術式全般がそのカテゴリーに在籍している以上、シロウエミヤには行使できない術式のはずだが。

「心配しなくても良い。すぐに終わらせる」

そう言うと、エミヤは握っていたナイフを一直線に振り下ろす。

剣先は魔法陣の一端を掴み、その効力を発揮する。

曰く——対魔術宝具、破戒^ルすべき全^レての符^カ。

あらゆる魔術効果の無効化を可能とする、奇跡の一振り。

「え……？」

「馬鹿な……」

寸毫の先に、崩れ落ちる術式。

ヒューイに科せられた偽りの存在意義は、その刹那で砕け散った。

「別に驚く事ではない。私のかつての同僚には、一定領域内の魔術起動を封殺とする代物を担う者が居たのでね。対象範囲は狭いが、斯様な裏技を担っていても不思議ではない」

「……ははは。やはり底知れない何かがありますね、貴方には」

その場に崩れるヒューイ。

何か肩の荷が下りたかのように、突然軽くなった体はバランスを崩す。

「……それは、任務を遂行できなかった事への悔いか？」

「いえ。どうやら僕は、生徒が無事で安心して見たいです」

空虚な笑み。

口から零れたのは、そんな感情だった。

「僕は、どうすれば良かったんでしょうか？」

「さあな。生憎と、他人の人生にとやかく言う資格は持っていないくてね。だが、本当に君が、生徒が無事な事に対して安堵していると言うのなら、残りの人生は真つ当に生きるべきだろうな」

「そう、ですね……」

裏にどんな事情があるとはいえ、事件を起こした黒幕であるのなら、その罪は償うべきだ。

エミヤは投影したロープをその体に巻き付ける。

「僕は真つ当に生きることが出来るのでしょうか……？」

「出来るさ。君がそれを望むのなら」

その答えを聞いたヒューイは、安心したように意識を手放す。

エミヤに許された数少ない魔術の一つ、白魔【スリープ・サウンド】を三節の詠唱と共に起動した。

「——では、戻ろうかルミア」

「あの……先生。本当に、私に何も聞かないんですか？」

促す声音を制止するルミアの不安。

「ああ。確かに君には何かあるのかもしれないが、それを聞く必要は無い」

「どうしてですか……っ？ 今回の事件は、私が原因で起きたのに……」

彼女は優しい人間だ。

故に、自分が原因でクラスの仲間を巻き込んだこと、エミヤを巻き込んだこと、ヒューイが本来の仕事に戻らなければならなくなったこと。

その全てを己が原因としているのだろう。

「別に、ルミアが原因だろうがなからうが、私にとっては関係ないからな」

「関係ない、ですか……？」

「そうだ」

その優しきは美德だ。

ルミアはティンジェルという少女に芽吹く花であり、枯らしてはならないものだ。

だが、そのせいでルミアが背負うことになる重責も大きくなるだろう。

「今、私は君達の先生だからな。何があろうと、君が助けを求めるのなら、すぐにでも駆けつけよう」

「……そのせいで、私は先生に迷惑をかけてしまうかもしれないですよ？」

「構わない。そもそも君は私の生徒だ。ならば、最後まで見捨てるなんてことはしない。例え、世界中が敵になろうとも、私は君の味方だ。ああ、安心したまえ。私に先生としての立場が無くとも、それも約束する」

ならば、その花を支える存在となる。

いずれ一人で、その重責を処理できるようになるまで導くのが、エミヤの仕事だ。

この身に残された時間は知れないが、先生という役割を任されたのであれば、それは道理だ。

真実を語れば、この学院に居れる期間は一週間も無いのだが。

それでも、この言葉が彼女に何らかの影響を齎すと信じて。

「——ふふっ」

「む？ 待て、何か笑われるような事を言っただろうか？」

「いえ、やっぱり先生って——正義の味方みたいだなって思っって」

そう言っって笑うルミアは、一輪の花のようだった——。

「……正義の味方、か」

静かに微笑む。

その理想に少しでも近づけたのであれば、この道程は間違っってはいないのだろう。

「帰ろうか、ルミア」

「はいっ！」

立ち去る。

螺旋階段へ向かい、この一幕は終焉を迎える。

一人の異分子によって攪拌されたこの序章から紡がれる物語は、果てに大きな影響を与えることになることを、今はまだ誰も知らない。

アルザーノ帝国魔術学院自爆テロ未遂事件。

とある非常勤講師によって、奇跡的に、眼に見える形での被害が無いという結果で終結した一幕。

関わった組織の影響もあり、社会的不安を考慮して内密に処理された。

一つの教室にのみ不自然な痕が残されていたが、それも帝国宮廷魔導士団が総力を挙げて事後処理を行った。

それが功を奏して、事の顛末を知っている人間はごく限られた者のみとなった。

その後、精神的に不安定な状態へ陥った生徒へのメンタルケアも、とある非常勤講師が全力を尽くして為したという。

元々魔術の醜悪さを語るといふ、不可思議な授業内容を行っていたという事もあり、それを聞いていた生徒達も多少の耐性があったことが一抹の救いか。

今では誰も欠けることなく、全員が日常を謳歌していた。

そして、その裏側では、例の非常勤講師であるエミヤと、ルミアⅡティンジェルの関係者という事でシステイナーナが帝国政府の上層部に呼ばれていた。

「——と、言う事だ。突然の話で申し訳ないが、これから君達にはルミアⅡティンジェルに隠された秘密を守るために協力して頂きたい」

見知った顔である人間から、ルミアⅡティンジェルの正体に聞かされた。

曰く、彼女が異能者であること。

三年前に病死されたと思われていたエルミアナ王女が、本当の素性だということ——
—これについては、既に知っていたりするのだが。

「なるほどな。それで私達に協力を要請したという事か」

「そう言う訳だ、シロウⅡエミヤ。停職処分のはずの貴様が何故講師としてアルザーノ

帝国魔術学院に務めているのかについては色々質問したいところだが、今は控えよう」

「ああ、そこに関しては安心してくれて構わない。私は契約期間は三週間なのでね。今日でその契約は終了する」

訝しげに睨む帝国幹部を尻目に、エミヤは己の立場を明白にする。

「それは看過できんな。貴様には協力者として、この話を告げたのだ。今更逃げるなど通じる訳が無い」

「逃げはしないさ。ルミア＝ティンジェルからの要請があれば、私は彼女を守ると約束しよう。では、これで終わりで良いかな？」

「……シロウ＝エミヤ。此度の話は、貴様だからこそ頼める内容なのだぞ？ それを分かっているのか？」

「評価は有難く頂戴する。だが、契約は契約なのでね」

帝国幹部の睨みを柳に風、エミヤはシステイーナを連れて外へ出る。

「エミヤ。貴様が、アルザーノ帝国魔術学院に残ることを期待しよう」

その言葉を最後に、両者の関係を断つように扉が閉じた。

「せ、先生。さっきの話はどういうことなんですか?」

未だ帝国の内部にて、システイーナはエミヤに問う。

「話通りの展開だ。私は正式な教師ではないのでね。故に、ヒューイの後任を務める者が現れるまでの三週間、臨時の繋ぎとして招集されたんだ」

「そんな話、聞いてません!」

「聞かす必要は無かったからな。君達にも嬉しい話だろう? これからは本物の魔術師が君達の為に教鞭をとることになる。私のような三流以下ではない、本物だ」

「エミヤ先生だつて、本物の魔術師です! それに、魔術師の評価は行使できる魔術には縛られないつて、先生が教えてくれたじゃないですか……!」

俯くシステイーナ。

彼女には色々怖い思いをさせてしまった。

故に良い感情を抱かれているとは思っていなかったのだが、別れに涙を流してくれる位には信頼してくれていたらしい。

「ありがとう。それが伝わっているのなら、私は満足だ」

「そんな、満足だなんて言わないでくださいよ……。まだ、教えてもらってない事が沢山あるのに……」

「それは、すまないな」

廊下に反響する声音。

システイーナの嘆願を聞くが、それでもこの契約は覆らない。

「——全く。私もまだまだだな」

未来は誰にも分からない。

その真実を、今ばかりは恨みたくなつた。

「これで、全部か」

エミヤは己の荷物をリュックにしまう。

それほどの物量で無いのが残念だが、三週間なのだ。こればかりは仕方ない。

願わくば彼ら彼女らの成長を見届けたいところだが、この運命に従うだけ。

「短かったが、得難い時間だった」

その歩みは止まらない。

常人と同じスピードで景色が変わっていくのに、既に校門の前に至ってしまった。後は此処を通り抜けければ、全てが終わる。

「——待ってください、エミヤ先生!!」

不意にかけられた言葉に、思わず後ろを向く。

「な……っ!? どうして、君達がここに……う?」

見れば、エミヤが担当していた二年次生二組の生徒が全員校門の前で待っていた。

その表情が明るくないことは、一目見て分かった。

「待ってください……本当に、行っちゃうんですか?」

「システイナー……君達との時間は、本当に楽しいものだった。残酷な光景を見せてしまった事もあったが、それでも君達に為になると信じて授業をするのは、楽しかったよ」

「じゃあ——っ」

その声を片手で制止する。

「だが、私は三週間のみ在籍を許された教師だ。その先に居る資格はない。君達の将来を見届ける者は、私の後任が為すだろう」

「エミヤ先生は、見てくれないんですか?」

沈黙で返答する。

ここでエミヤの本心を伝えることは出来ない。

両者の関係は、ここで完全に途切れることになるだろう。

故に、別れを長引かせる訳にはいかない。その分、感情が蓄積されてしまう。

「——全く。お前、真面目な部分は良いけどさ。もう少し周囲の事を考えた方が良くんじゃないのか？」

「セリカ」

ため息と苦笑いで登場したセリカ。

その後ろには学院長のリックと、短い期間だったが何度かお世話になったハーレイが居た。

「そうじゃよ。見てみなさい、ここには君との別れを悲しむ者がこんなにも居るんじや。それを無視してしまうのは、悲しい話じゃよ」

「……貴様には色々と言いたい事があるが、ここで逃げることは許さないからな」
「学院長に、ハーレイ……。すまないが、それでも私は契約の身だ。後任が決まっている現状で、それを払拭することは出来ないだろう」

思わぬ人物からの声もあったが、それでも駄目だ。

自分一人の都合で他人の人生を振り回すわけにはいかない。

その光景を見ていたセリカは突然微笑んでエミヤに問う。

「つまりは、後任が居なければお前は辞めないってことで良いのか？」

「——待て、セリカ。まさか」

「そのまさかだよ、エミヤ。最初は後任をしつかりと用意しようとは思っただけだな。お前が思いの外真剣に生徒達と向き合っているのを見て改めたんだ。とはいえ、お前にも色々事情があるからな。辞めたきや、すぐに辞めても良いっていう特別な内容をお前に提示したいんだが、どうだ？」

「そんな、都合の良い事出来る訳が無いだろう？」

「大丈夫じゃよ、エミヤ君。その契約内容は保証する」

後任を用意していないというセリカの発言に乗っかるように、リックが笑みを浮かべて親指を立てる。

見れば生徒達の表情にも少しの安堵が見えている。

これは、セリカの策略に嵌ってしまったということか。

「……そうか。なら、私も本音で話すとしようか」

ここまでお膳立てされたのであれば、それを壊す訳にも行かない。

エミヤは生徒達に向き直ると、頭を下げる。

「すまない。こんな形ではあるが、もう一度君達の先生をやっても大丈夫だろうか——
—?。」

「勿論です、先生。これからもう一度、よろしくお願いします!。」

その声を皮切りに、喜びを爆発させる生徒達。

ここは外だというのに、それを忘れさせてしまう程の効力だったのか。

「嬉しいもんだろ、こうやって慕われるのはさ?。」

「ああ。そうだな——」

セリカの問いに、エミヤは静かに、されど眩しいものを見つめるかのような表情で首肯した。

夕焼けの空が天上から見守る中、満面の笑みを浮かべる生徒達をもう二度と裏切らないように、ここに誓う。

第2巻

魔術競技祭

放課後のアルザーノ帝国魔術学院、二年次生二組の教室。

日差しが傾きかけ、射光が室内に侵入する。

眩い輝きに目を照らされ、折角一日が終わった時間だというのに、その教室に漂う雰
囲気は最悪だった。

「はい、『飛行競争』の種目に出たい人はいませんか？」

壇上に立ったシステイーナの問いに、他のクラスメイトは俯き、視線を合わせようと
しない。

雰囲気に色があるのなら、さぞ最悪な色をしているであろう。

文字通り葬式の如く空気に、後ろで見ていたエミヤもため息をつくしかない。

現在システイーナとルミアが前に立って決めているのは、来週に開催される魔術競技
祭の競技に出席する代表決めだ。

学院生徒同士の魔術の技の競い合い、という謳い文句のもと行われる一種の学校行事
である。

「君達、どうしてそこまで嫌がる必要がある？ 技の競い合い、とは言うが学校行事なのだから、楽しめば良いだろう？」

「そう言う訳にもいかないんですよ、エミヤ先生。皆、気後れしているんです」

「気後れ？ たかが学校行事に参加する代表決めで、何を気後れする必要があるんだ？」
「たかが、では無いんです。魔術競技祭とは、祭りの名はついていますが、全クラスが勝利の為に邁進する大会です。無論、そこに参加する生徒もまた優秀な生徒ばかりで固められており、実力の無い生徒にとつてはそもそも参加する気力も湧かないという訳です」

「ふむ。完全な実力主義という訳か……」

ギイブルの説明に、顎を触り考える仕草をするエミヤ。

話によると、どうやら想像しているような行事では無かったようだ。

全クラスが勝利の為に全力を尽くす。故に、出場する生徒も成績優秀者で固められる、か。

「それに今回の魔術競技祭には、あの女王陛下が賓客としてご尊来になりますから」

「余計に気後れしてしまう、という訳だな。なるほど、ここまで代表決めが停滞する理由が分かった」

後ろで座っていたエミヤは立ち上がると、前へ行きシステイナから競技一覧の紙を

貰う。

「……ほうほう。内容は多岐に渡るが、全て授業内容である基礎が理解していれば出来るような内容だな」

「先生。誰でも出来るとは言いましたが、そんな理由で選考しないですよね？　僕達クラスもまた、勝利を目指して戦うんですよね？」

「無論、その通りだ。行事とは言うが、やはり勝った方が思い出にもなるからな」

ギイブルの苦言を受け入れつつ、エミヤは脳裏に浮かぶ演算を叩いていく。

彼の自爆テロ未遂事件から幾ばくか時間があり、その間に入手した生徒の魔術適性を考慮して結果を導き出す。

「システイーナ。君に一任するとは言ったが、取り消して良いだろうか？　この流れでは本当に、悪い方向へと流れていきそうだからな」

「え、ええ……構いませんけど……？　悪い方向、ですか？」

「ああ。今ギイブルが教えてくれた、成績優秀な生徒のみで出場選手を固めるという方法だ」

その言葉に、システイーナとギイブルは対照的な反応をした。

前者は驚きながらも、信じるように目を向ける。

後者は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「ルミア、今から私が競技と出場選手を読み上げるから、それを余すことなく板書してくれ」

「分かりました」

そうして、エミヤは脳裏に叩き出された結果を口を通して現実と為した。

「——これで全員だな。どうだろう、何か質問はあるか？」

魔術講師のコートの懐にしまっていたペンを手中で回転させると、全競技の隣にチエツクが付けられた紙を再び確認する。

大丈夫だ、取りこぼしは無い。

「ちよ、ちよつと待っててください！ どうして私が『決闘戦』の選抜から漏れて、『暗号早解き』の代表になっているんですか!？」

そう言いながら立ち上がったのは、ツインテールの少女、ウエンディルナーブレス。

このクラスではシステイナーナとギイブルに次いで優秀な成績を残している生徒であ

る。

そんな彼女が抗議を申し立てたのは、『決闘戦』の代表メンバーについてだ。

そも、『決闘戦』とは、魔術競技祭の最後を飾る花形の競技だ。その得点も高い。

各クラス優秀な三人の代表を決め、一対一の魔術戦で雌雄を決するというシンプルなルールである。

かつての世界で言うところの『リレー』のような立ち位置だろう。

「何か不満かな？」

「当たり前ですわ！ システイナさんとギイブルさんは良いとして、私より成績の悪いカツシユさんがどうして選ばれているんですか!？」

「それについては何度も言っている通りの事だ、ウエンディ。魔術師としての技量は成績や行使できる魔術に当てはまらない。今回はまさしくそれだ」

エミヤは諭すようにして言葉を紡いだ。

「確かに君の素質は素晴らしい。呪文の知識、会得魔術量、魔力容量キャパシテイも確かに一流に位置するだろう。だがな、突発的な事故への対処が悪いという弱点も内包してしまっている。焦ってしまうと呪文を噛むのも見逃せないファクターだ」

所謂、うっかりというやつである。

普段は毅然と振舞っているのに、たまに考えられないような失敗をしでかすのだ。特

に彼女はそれを引き当てる割合が大きい。

微笑ましい弱点だが、何が起こるか分からない魔術戦では大きな枷となるだろう。

「その点、確かにカツシユは会得した魔術量も、魔力容量キヤパンテイも君には及ばないが、身体能力が突出し、状況判断能力が長けているからな。今回は君よりカツシユの方が適正と判断した。とはいえ、君の魔術師としての才能を卑下して判断したのではないから勘違いしないように」

的確な分析をするエミヤに硬直していたウエンデイを見て、フオローを入れておく。

「君の強みは、安定的な条件下での魔術行使だ。それに加え、『リード・ランゲージ』の実力はシステイーナやギイブルも上回る。そんな君にとつて『暗号早解き』は自分のテリトリー内で戦う事の出来る競技だ。だから、自分には別の適性があったのだと理解してくれ。その分、一位を期待しているぞ?」

「……分かりました。そこまで言うのであれば、私もこれ以上は言いませんわ」
「ありがとう。では、他に質問は?」

その後、恐る恐るという感じで手を挙げる生徒へ分析結果を伝えていく。

自分が気づいていない魔術の適性を、道筋を示して明確にしていく姿に、最初は懐疑心が見えていた生徒達も少しずつ納得していく。

自分の事は自分が一番よくわかる、とは言うが、案外自分が気づいていない自分の利

点というものはあるものだ。

掌が消えた光景を見てエミヤは頷き、最後の確認をする。

「——では、私達はこの編成で挑むとしよう。もう質問は無いな？」

「待つてください、エミヤ先生。最後に一つだけ聞かせて下さい」

「陣容に不満がある、というわけではないそうだな？」

「はい。ですが、成績優秀者だけで出場選手を固めるのは悪い流れと言いましたよね？」

それについての理由を教えてください」

最初の疑問に回帰する。

ギイブルの真剣な表情に、追従するような生徒達の表情。

皆、成績が優秀ではない自分を卑下し、選ばれた者のみが出場できるのが常だと思っ

ていたのだろう。

「簡単な話だ。決められた者のみが出場できる？ 馬鹿馬鹿しい。そんな魔術競技祭

が、楽しいはずが無いだろう？」

「……え？ 楽しくないって、そんなのが理由なんですか……!?!」

「当たり前だ。人間とは、モチベーションによって能力が左右される生き物だ。中には自分を押し殺し、常に最高を叩き出せるような人間もいるだろうが、君達はそうではない」

「それは、まあ……」

澁々頷くギイブル。

だが、その瞳には納得しきれていない部分も散見される。

「君達は仲間だ。その意識が統一されていないのであれば、全員が限界以上の力を出せる訳が無い。それに、私は捨てる競技を作り出すつもりはないからな。全競技で三位以内の好成績を狙う」

「……それは、少々欲張り過ぎでは……？」

「欲張りなどではないさ。君達には十分、それを成し遂げるだけの力があると思ってる」

二年次生二組の生徒に捨て駒は無い。全員が優秀な成績を残せる戦力だ。

それに、全クラスが成績優秀者で固めるのであれば、必ず休ませるためのターンオーバー制を採用するに違いない。

どこでそれを利用するかは、これからの情報収集に託そう。

不安げな生徒だったが、エミヤの言葉を聞いて少しずつ笑顔が見えてくる。

ギイブルもため息をつき、やれやれと肩を竦ませながらも、その表情にはこれからへの期待も見える。

「——では、これで決定といこう。目指すは勿論——優勝だ」

その宣言を、誰もが現実として受け入れた。クラスは未だかつてない程の一体感に包まれる。

全員が同じ方向を向き、誰もが勝利を目指して走り抜ける。その陣容が、今成された。前方でそれを見つめていたエミヤは、そこに眩しいものを感じ、それを助長させる為に動き始めることを決意した。

アルザーノ帝国魔術学院では、魔術競技祭前の一週間は競技祭に向けての練習期間となっている。

具体的にはその期間全ての授業が午前の一・二時限目と、午後の三時限目で切り上げられ、放課後は練習時間として使っても良いというものだ。

「順調みたいだな？」

エミヤに声をかけてきたのは、艶やかな金髪を揺らすセリカだった。

現在放課後、エミヤ達クラスも練習の為に中庭に集まり、各々競技への練習・対策の

時間として使っていた。

そんな様子をエミヤは遠くから見つめていた。

「当たり前だ。私の受け持つクラスなのだから」

「その、認めた他者に対する無駄に高い自信はいつまで経っても変わらないな。そういえば、グレンにも『私の弟子が弱いわけが無い』って、言ってたよな？」

「ああ。そして文字通り、立派な男になっただろう？」

「そうだな。まあ、一つだけ欠点があるとすれば、お前に倣って皮肉な言葉を真似し始めた事だな」

木漏れ日を一身に受け、二人は笑いながら会話を続ける。

「……お前、優勝を目指すんだって？　なのにも拘らず、前代未聞の代表メンバーで挑むって風の噂で聞いたぞ？」

「別に、前代未聞と言われるような陣容にした覚えはないな。そも、成績優秀者だけで固めるというカタログスペックに縛られた考え方が普遍的になつている方が頭痛がする。そもそも祭りを楽しむことも出来ないで、どうして優勝するだなんて言えるのかが不思議なくらいだ」

「お前らしい考え方だな。まあ、私のその意見には賛成だ……じゃあ、そろそろ行くよ。私も学院長も、台風の日が開花することを願っている」

「ああ。期待通りの結果を届けることを約束しよう」

セリカと別れ、エミヤも立ち上がる。

そして、まずは誰の指導から始めようかと考えていて——その時。

「シロウエミヤはここに居るか!？」

「む? 何用かな、ハーレイ」

ハーレイに呼ばれ、エミヤは歩み寄りながら返答する。

見ればハーレイに続くように彼のクラスである一組の生徒がそこに居た。

場所の要求だろうか。ならば、半分程度渡せば良いだろう。

「聞いたぞ、貴様。どうやらクラス全員で魔術競技祭に参加するのだとな」

「何か疑問が?」

間違ったことはしていないと言うエミヤを、ハーレイは侮蔑を込めた視線で睨む。

「見下げ果てたぞ、シロウエミヤ。成績優秀者だけで固めるのではなく、全員出場だと? 笑わせるな。その陣容で、優勝など出来るはずが無い」

「……私の方こそ落胆したさ。魔術教育の第一線を謳っているにも拘らず、こんな体たらくだとはね。君達が優秀な魔術師であることは認めるが、形而下の情報に縛られ過ぎだ。そんなんだから、こんな風になる。だが、一つ感謝しよう。今の言葉で私達の優勝が確信できたよ。優勝の最有力候補である一組もつまらない通説に拘泥している現状

で、私達の行く手を遮る障害は無い」

「……言うではないか、シロウエエミヤ。だがな、みすぼらしい陣容を誇らしげに語ったところで、貴様の願う奇跡など起こるはずが無い。綺麗事を見てくれる神など、この世に存在しないのだ」

「奇跡などではない。私達の勝利が、現実だ」

二人共自分達の生徒の前に立ち、至近距離で言葉の弾丸を放ち続ける。

後ろにいる生徒も最初は戸惑っていたが、矢面に立ち自分達の勝利を信じる先生の背中を押す。

「そうだ、お前らには絶対負けなからなっ！」

「何を言うかと思えば。魔術競技祭で奇異的な采配をして、勝てる訳が無いだろうっ！」

そーだそーだ、とヒートアップする生徒達。

怒涛の波に押されるようにして、ハーレイが不敵な笑みを浮かべてエミヤに問う。

「そこまでの自信があるのなら、一つ勝負と行こうじゃないか？」

「勝負だと？」

「そうだ、シロウエエミヤ。私が勝ったら、貴様の給料を三ヶ月頂こう」

「……何を言うかと思えば。賭博行為なんて下らない真似をする訳ないだろう？」

「逃げるのか？ ああ、それでも良い。どうせ、貴様らが私達に勝てる道理などあるわけ

がないのだからなっ！」

勝ち誇るハーレイ。

その言葉を真に受けてしまったのだろう二組の生徒達は、不安げにエミヤを見上げる。

「ここは退けない一線か。」

「……良いだろう。なら、私が勝てば今の侮辱を全員の前で撤回する事を要求しよう」
「なんだ？ 同じような要求はしないのだな」

「ああ。生憎と金銭には興味が無くてね。君の屈辱の方が余程興味がある」

売り言葉に買い言葉。

到底教師とは思えない皮肉を連ねながら、エミヤとハーレイはその契約にサインする。

「逃げるなよ、シロウエミヤ？」

「君の方こそ、有り得ない光景を前に逃げ出さない事だ」

フンつと、鼻を鳴らしながら帰っていくハーレイ。

これで彼の用件は終わったのだろう。その後ろ姿を暫く見つめていると、一つだけ気付いた事があつた。

その背中を追う者が誰もいなかったのだ。

不思議に思ったハーレイは振り返った。

「何をしている？」

「いや……えっと。中庭の場所取りに来たんじゃなかったんですか？」

物腰柔らかな少年がハーレイに聞いた。

その後、エミヤのご厚意（本人としてはそのつもりはないのだが）によって一組に中庭の半分を渡すことになった。

二組は半分の領域で練習を重ねながら、エミヤは一組の情報を視覚情報で収集していた。

開幕

魔術競技祭、練習の日々は過ぎていく。

エミヤ達二組はクラス全員が出場するという異例な形でその陣容を為した。

その効果は抜群で、一体感という他クラスにはない武器を纏って突き進んでいく。

熱意だけは絶対に負けないと言う生徒達をまた、エミヤも全霊をかけて導いていった。

「良いか、カツシユ。君は厳しい戦いを強いられることになるだろう。故に、難しい事は言わない。君にしかない武器を使って勝利するぞ」

「俺にしかない、武器ですか……？」

「そうだ。君は突発的な状況判断と、身体能力が優れている。それを最大限利用し自分のテリトリー内で戦えば、勝利はそこまで遠くないはずだ」

不安そうなカツシユだが、エミヤにはそうは見えない。

これからの戦闘、十分に勝ちが見えている。

「結論から言ってしまうえば堅守速攻だ。相手の魔術を耐え抜き、一瞬の隙を穿つ」

「……なんか難しそうですね。俺に出来るかな……」

その不安は分かる。

カツシユという生徒は跳び抜けた成績を残してはいない。

だが、彼がこれから戦うのは各クラスが誇る成績優秀者。圧倒的格上である。

「今は不安だろうと、これから出来るようになるさ。幸運な事に、君に適した戦闘スタイルは私に似通っている部分があるのでね。それを体に叩き込む。まあ、多少辛い特訓にはなると思うが——ついてこれるな？」

その覚悟を問う。

真剣な表情でありながら、何処か優しく問いかけるエミヤに、カツシユは覚悟を決める。

「——はい！」

『決闘戦』という大舞台を任されたカツシユの修行に付き合い——。

「カイ、ロッド。君達に『飛行競争』で意識してほしい事はペース配分だ」

「ペース配分？ 速度じゃないんですか？」

「『飛行競争』は一周五キロのコースを計二十周するというものだ。単純計算しても百キロもの距離を二人で交代しながら駆け抜けなければならぬ。故に速度を極めるのも

大切とは思いますが、時間が無い現状ではペースを意識した練習に傾注した方が高い順位を狙えるだろう」

それに加え、他クラスの代表者はこれ一つではなく様々な競技を受け持っているのだ。

練習も片手間で行い、後の体力も考慮しなければならないというハンデがある。

それに対し、こちらは地力には差があるかもしれないが、一つの競技に全力を尽くすことができ、練習もこれに特化したものをひたすら行うことが出来る。

「まずはスムーズな交代から練習しよう。それが出来るようになったら、実戦練習を重ねていく」

「まあ、実践あるのみってことですよ。でも、俺達二人だけで練習するってのもな……なんか、緊張感が無いっていうか、心配っていうか」

「それについては心配いらぬ。私が相手を務めよう。君達が空を駆けている間、私は地面から走っている」

飄々と言うエミヤにカイとロッドは瞠目した。

「それって……先生が一人で百キロ走るってことですか？」

「いくら何でも……いや、先生の凄さは知ってますけど……」

最初は どうして心配そうだったのかが分からなかったが、その不安に合点がいった工

ミヤは笑みを浮かべる。

「ああ、心配はいらない。しっかりと地上から君達の邪魔をするさ。むしろ、下からの邪魔なので本番よりも対応力が求められるかもしれないな？」

「……そういうことじゃ、いや何でもないです」

『飛行競争』で大人げなく飛翔するカイとロッドの邪魔をして――。

『『グランツィア』は、分かりやすく言えば陣取り合戦だ。君達三人の役割分担がカギとなるだろう」

エミヤは教室で代表選手であるアルフ、ビックス、シーサーの三人と共に作戦会議をしていた。

「普通は二人がオフエンスの一人がディフェンスというのが定石ですよね」

「ああ。だが、戦力差を考えても、圧倒的に我々に不利だ。同じ土俵では勝負にならないだろう」

「……悔しいですけど、そうですね」

苦悶に歪む三人。

プライドは無く、全員が己の不利を認識しているという点は有難かった。

「故に、こちらは三人ディフェンスで戦う」

「全員ディフェンスで、良いんですか？」

「一種の賭けだがな。他クラスの結界構築速度を考えても、三人で防衛に回らなければ敵しいだろう」

「でもそれって……絶対に勝てないじゃないですか？」

「勝てはしなくても負けはしないだろう——失礼、冗談だ。だが、この現実を君達に再認識してもらおう事は大切な工程だったのでね」

落ち込んだ表情をした三人だが、冗談と聞いて安堵していた。

良かった、自分達でも戦える方法があるのだと。

「もう一度おさらいしよう。『グランツィア』は陣取り合戦、故に自軍の結界をどこまで大きく出来るのが勝敗の決定となる。だが、その基礎の部分で我々は負けているからな。故に、条件起動式を使う」

「……条件起動式って、あの術式ですよね？ 過去に悪逆の限りを尽くしてきたという、あの」

「そうだ」

魔術が齎した歴史を、エミヤの授業を通じて知っていた三人は途端に嫌な顔をする。

苦笑いをしながら、大丈夫だと声をかける。

使い方を間違えなければ強い武器なのだ、その本質を語る。

エミヤは後ろにある黒板に条件起動式の利点と欠点を書き連ねた。

利点は、いったん術式を組んでしまえば、その後の起動は自動になる。

欠点は、条件が満たされなければ起動できないということ。

「この内容を見てもらえば分かる通り、完全にカウンター狙いの一手だな。これを全員デیفエンスで耐えている間に敷設するのが私達の作戦だ」

「……なるほど。俺達全員がデیفエンスをしていれば、相手は引き分け狙いと思うから、それを利用するという訳ですか」

「その通りだ。この『グランツィア』は競技時間が長いということから、当日くじで当たった一チームとの一発勝負。その得失点差が全体の順位にそのまま利用されるからな。相手も引き分け狙いと分かれば多少強引にでも領域を広げようとするだろう」

「そして、そこを突く——」

「———どうだろう、完璧だとは思わないか？」

『グランツィア』に挑む三人に、エミヤお得意の心理戦を叩き込み———。

そんなこんなで、エミヤは全員の様子を見ていた。

常人であれば絶対に体を壊すであろう酷使も、毅然と乗り越えていく。それも全て、この戦いに勝利するためだった。

もしかしたら守護者時代よりも働いたのかもしれないが、久しぶりに労働の果てに達成感という感情を思い出した。

——そうして、一週間は紙芝居の如く簡単に過ぎ去っていった。

当日。

開会式前の大事な行事として、エミヤを含めた学院関係者は魔術学院正門前に集まっていた。

これから来賓である女王陛下を歓待するのだ。

先行隊として到着している王室親衛隊の指示でこつた返していたこの場にも規律が整い、誰もが女王陛下への到着を今か今かと待ち望んでいた。

「流石は、女王陛下。これほどまでに慕われているとはな。簡単に出来る事じゃない」

「そりゃあそうよ。何たってこの帝国を支えている御方ですから」

隣にいるシステイーナの言葉に首肯する。

帝国を支える。その言葉に込められた奇跡の意味を、かつては近くで見えていた者の一人として良く知っていた。

そのまま厳肅な空気に包まれながら、待っていると——その時。

「女王陛下の御成りいゝつ！　女王陛下の御成りいゝつ！」

「お、どうやら来たようだな」

人垣の道の中央を、衛士が馬車に騎乗しながら駆けていく。

その声に呼応するように楽奏隊の演奏が響き渡り、拍手が人波に伝播する。

やがて道の中央に、護衛の親衛隊に囲まれた華奢な馬車がゆつくりと現れた。

拍手と歓声と共に出迎える生徒達に、窓から身を乗り出して手を振る女王陛下アリシア。

その行動が、彼女が信頼される所以だろう。

「——」

エミヤは拍手をしながらも、何処か遠い目でその光景を見ていた。

すると一瞬だけ、アリシアと目が合い——軽く会釈し、彼女も薄く微笑んだ。

「凄い人気だな、ルミア」

「——はい、そうですね」

エミヤと同じように遠い目をしていたルミアに声をかける。

するとルミアは首にかけられていたロケットに手を伸ばした。

「どうしたの、ルミア？」

「あ、ううん。何でもない」

中身の消え去っていたロケットをシステイーナに悟られないようにしようと、ルミアは笑顔を見せる。

「やっぱり、女王陛下下って凄い人気だよ。それに……凄く綺麗な人だし……憧れちゃうなあ」

「ルミア……」

苦しそうな笑みに、エミヤとシステイーナは苦い顔をする。

その言葉には、一種の拒絶が含まれていた。

憧憬は相手へ与える最大の賛美だが、同時に近寄りがたい、自分と住んでいる世界が違う、という深層的な拒みがある。

その例に当てはまらない場合もあるだろうが、ルミアが抱いていた憧憬は正しく、身の丈が上の人間に対する声音だった。

システイーナとルミアは話を紡いでいく。

それを小耳に挟みながら、エミヤは特に介入はしなかった。こういう問題は、親しい間柄の方が話しやすいものだろう。

二人に目を向けず、手を振るアリシアを見て——ふと、以前大事そうに持っていたネックレスとは別のネックレスをつけていたことを見逃さなかった。

魔術競技祭、開催の鐘が鳴る。

開幕式が粛々と始まり、決闘礼装——細剣を佩刀した生徒達が厳粛な空気と共にこれからの緊張感で身を震わせる。

最後に女王陛下からの激励の言葉を聞き、魔術競技祭、最初の種目が開始した——。

競技場の外周に等間隔でポールが立っており、その外側を飛行魔術を起動した選手たちが駆けてゆく。

盛り上がりを見せる観客を尻目に、エミヤは観客席で『飛行競争』に出場している二

人の雄姿を見ていた。

『これは、どういふことなんだ——ッ!?』 先ほどまで中間層に留まっていた二組が飛び出してきたぞ——ッ!?』

実況の怒号もまた、観客の心を驚挿む。

なにせ、この魔術競技祭で奇異の眼を向けられている二組だ。

全員参加という異例の采配を下したクラスに期待をする者は少なく、面白半分で応援をしていた観客を、最終コーナーで瞠目へと一変させた。

『これはまさか、今まで力を温存していたという事なのか——ッ!?』

「違うな。カイとロツドが早くなつたのではない。他のクラスが落ちたんだ」

拡声音響術式で響き渡る実況に対し、エミヤは独りでに解説を入れる。

それを聞いたルミアは首をかしげていた。

「どういふことですか?」

「簡単な話だ。ただ単に、他のクラスの代表選手がペース配分を誤つたんだ」

この競技にだけ集中した二組と、集中出来なかつた他クラス。

経験の差が、実力の差をいとも簡単に埋めてしまった。

「じゃ、じゃあ……この結果も、分かつてたんですか?」

「流石にそこまでは分からなかつたさ。良い所までは行くと思つていたが、まさかこゝ」

までとはな」

エミヤの計算では、三位が御の字という判断だった。

だが、カイとロツドが繋いだ襷は、独走集団に割り込んだ。

『早い！ 早い！ 早いッ！ 二組、遂に二位に割り込んだ——ッ!!』

二人の猛追に焦った一つのクラスが独走集団から脱落した。

残りは数メートル。優勝候補筆頭とダークホースがゴールテープを前に一騎打ちを為す。

そして——、

『ああと！ ギアを上げた二組だったが、あと少しの差で一組には勝てなかった——ッ!!』

結果、二位。

一位が競争相手である一組であることを考慮すれば不味い結果と思うかもしれないが、エミヤには想定以上の内容だった。

宣言通り、全ての種目で二組は三位以内の上位を狙っている。

優秀な生徒のみをローテーションで使うことになる一組は、どうしても捨てる競技が出て来るだろう。

それが無いエミヤ達にとって、最初からその背中を射程圏内に捉えたことは大成功

だった。

最後の最後で迫る二組の前に、一組の体力を削ることも出来た。

「やったあ、凄い！ 先生、二位ですよ！ 二位！」

「ああ。見事に二人は、上位でゴールしたというわけだな」

「はいっ！ うん。私も頑張らないといけないな……！」

隣で決意を固めるルミア。

この様子であれば、彼女は心配いらないだろう。

エミヤは、自身を見る周囲の視線に目を向けた。

「おい……嘘だろ」

「なあ、これって……」

「まさかのまさかで、二組有り得るんじゃないか……」

奇異の視線は一変し、希望へと変化していた。

そんな視線を向けるのは他のクラスで代表落ちを経験した生徒達だった。

決して成績優秀ではない同級生が、果てに降臨する優秀を打倒する姿。

そんな光景に、彼らは何かを感じていたのだろう。

エミヤは目を外した。

「先生、やりました——ッ！」

「お前らー！ 絶対に勝てよー！」

視線の先で、こちらに手を振るカイとロッド。

その笑顔は幸福に満ち溢れていて、とても眩しかった――。

精神防御

それから二組の快進撃は続いていった。

『魔術狙撃』に参加したセシル等の平凡な成績であった生徒も順調に三位以内という上位を守り続け。

『暗号早解き』に参加したウエンディ等の優秀な生徒は首位に君臨した。

エミヤの指導もあるのだが、それ以上にクラス全員が一体となって勝利を目指すという構造が引き起こした心理的な応援がこの結果を齎したのだろう。

一時的に独走が期待された一組を抜かしてしまい、それが原因で焦り、らしくない失敗をしてしまうというアクシデントをしてしまう生徒もいたが、そこはしっかりとフォローをする。

予期しなかった結果に対応が遅れたエミヤの責任だろう。

とはいえ、午前最後の種目が残された時点で、順位は二位。

ハーレイの一組に抜かされてしまったが、まだまだこれからである。

そして、これから『精神防御』が始まるうとしていた。

「あの、先生……少し、大丈夫ですか？」

「む？ どうした、システイーナ」

始まる前の空き時間にて、エミヤはシステイーナに声をかけられていた。

「その……今からでも、ルミアを他の子に変えませんか？」

「……なるほど。確かにルミアには少々過酷な競技かもしれないな」

はい、と不安と後悔が織り交ざった表情で頷くシステイーナ。

親友である彼女は、辞退という結末は見たくなくても、危険な競技へ対する心配があるのだろう。

『精神防御』。

端的に言えば精神汚染攻撃への対抗だ。

精神汚染攻撃への対処法はアルザーノ帝国魔術学院で必須技能の一つであり、それを競うというもの。

精神作用魔術である白魔〔マインド・アップ〕を己へ施し、攻撃者であるツエスト男爵を前に精神の安定を維持するという耐久戦がこの競技の内容だ。

肉体的な負担は少ないが、精神へ直接攻撃が下るといふ過酷さは、周知の事実である。

「ですから……！」

「とはいえ、このレベルで勝利するのは彼女にとって造作も無いだろう」

「……ええ？」

自信気に勝利を予期したエミヤ。

予想外の反応にシステイーナが忘我していると、その声を聴いたギイブルが鼻を鳴らす。

「確かに先生は今まで適切な采配を行ってきました。ですが、ここに来て重大なミスを犯しましたね」

「重大なミス？ 一体、何の事だろうか」

「……良いでしょう。先生は去年居なかつたから知らないんですよ、この競技の過酷さを」

ギイブルは壁に体重を乗せ、腕を組みながらその説明をする。

「去年は軽度の精神崩壊を起こし、三日間ぐらい寝込んだ生徒もいるんですよ？ 流石に知ってますよね？」

「勿論。確かにこれは危険な競技と思う」

「……随分と、反応が軽いんですね？」

「ああ。私はルミアを信じているからな。彼女なら確実に、勝てる」

真剣な表情のエミヤに、ギイブルは口を閉ざす。

彼もこんな反応をしているが、勝利を目指している一人である。

それはエミヤが一番よく分かっている。

そんな彼がこんなことを言ったのには理由があるのだろう。

「君は恐らく、私がルミアを捨て石にでもしたのかと思っただろうが、それは間違いだ。はつきりと言うが、二組の中でルミア以上に精神が整っている生徒は居ない。むしろ私が驚いているくらいだ。どうしてそこまで、彼女は強いのかと」

「じゃあ……本当にルミアは、大丈夫なんですか……？」

「大丈夫だ。私も勝利を望んで送り出した。その決断は今でも間違っていないと確信しているよ」

それでも不安げなシステイーナ。

希望を崩壊させることは簡単だが、不安を払拭させるのは難しい。

相手が親友ともなれば当然だろう。

「大丈夫だ、システイーナ。必ず彼女は勝てる。だから——君も、ルミアを信じてあげて欲しい」

「……分かりました。ルミアを、信じます」

ああ、と頷くエミヤ。

ギイブルもその会話に何も言ってこなかったことから、一応は信用してくれたという事で良いのだろう。

いよいよ始まる『精神防衛』。

会場に登場したルミアを、システイーナは両手を合わせて祈るようにして信じる。エミヤは、その背中に絶対の自信を感じていた。

「不味いな……」

どんだん進んでいく『精神防御』。

他クラスの代表選手が次々と落ちていくのを尻目に、最後まで残り続けたルミア。合計二十以上の魔術が彼女の精神を攻撃していたが、毅然と心を保ち続ける。

その光景に、なんら不満点などあるはずが無い。

エミヤの言葉に疑問を持ったシステイーナは問う。

「不味いんですか？ 私としては、あの子がここまで強かったのが驚きなくらいなんですけど……」

「不味いさ。私もルミアの強さを信じてはいるが、隣のジャイルという少年を甘く見積もり過ぎていたらしい」

己の失態を恥じるようにしてエミヤは顔を曇らせる。

現時点で残っているのは、二組の代表であるルミアと、五組のジャイル。

両者共に冷や汗を流しながら、次々とツエスト男爵の精神攻撃を凌駕していくが、それにも限界が見えてきた。

その差は寸毫。だが、一歩ばかりルミアの方が早いか……？

「最悪の場合を考慮しなければならぬかもしれないな。ルミアは耐えられて、残り数回だろう。それまでにジャイルが折れてくれれば良いのだが……」

全く、ここまで苦戦するとは思わなかったと苦笑いを浮かべるエミヤ。

だが、その笑みが真剣に通ずる代物であることを、隣で静謐にその双眸を見上げていたシステイーナには理解できていた。

「……お願い、無理だけはしないで……！」

精々自分が出るのはこれくらい。

神ではなく、正面で毅然と戦っている親友に向かって祈りを奉げるシステイーナを尻目に、エミヤもその戦況を精悍に睨む。

ルミアの不調を真っ先に察せるように。

最悪の場合であろうとも突き進んでしまおう彼女を助ける為に――。

回数は熱狂と共に増えていく。

一騎打ち。絶対的勝者であるジャイルへ食らいつく、ルミアIIティンジェル。

彼女の雄姿に、一つ、また一つ、魔術を乗り越えるたびに起こる拍手。

ジャイアントキリング
格上殺しは、何時の時代、如何なる状況だろうと第三者を興奮させる結末だ。

そこへ至らずとも、過程は称賛されるべきものだ。

——そして、ルミアもまた、それを為せるのではないかという期待が会場を渦巻き始めた。

「ねえ、先生……本当に大丈夫なんですよね……？」

一つ、また一つと魔術を乗り越えるたびに劣化するルミアの精神。

そのダメージが肉体にも顕現し、覚束ない両足と、歪む表情のまま、それでも彼女は前を向く。

勝利という道を見続ける為に、その道を見失わないように。

——ラウンド、第三十一。

均衡を察したツエスト男爵は、より強力な一手を放つ。

怒涛の勢いで放たれる精神汚染攻撃は、まるで濁流の如く防衛者二人を呑み込んだ。

「——っ」

ぐらり、とルミアの体が傾いた。

均衡を打ち破る為に放たれた一撃は、門を凌駕し、その門を踏破した——。

その結末を見届けたエミヤはスツと立ち上がり、隣のシステイーナに向かって告げる。

「……なるほど。これで、競技終了だな」

「先生……それって……」

悲痛な表情をするシステイーナ。

彼女はエミヤの言葉に、親友の敗北を悟ったのだろう。

「彼女は良くやったよ」

危険状態でありながら、実況の問いに続行を選択してしまうルミア。

残念ながら、その願いは叶えられない。

当たり前だ——既に、勝者は決したのだから。

「——少し待て！」

エミヤの声に、会場の空気が入れ替わる。競技という泡沫の夢が覚める。

『ええっと、エミヤ先生？ どうしたんでしようか？』

「続行する必要は無い」

観客席から降りて、ルミアの元へと向かうエミヤ。

その後ろからシステイーナもついてくる。

『続行する必要がない、というのはつまり棄権ですか？』

その実況を聞いた観客からブーイングが鳴り響く。

それを気にせずエミヤはルミアに声をかける。

「良く頑張ったな、ルミア」

「ま、待つてくださいい!! 私は、まだ……」

「……? どうして待つ必要があるんだ?」

抗議を続けるルミア。

エミヤはその頭に疑問符を浮かべた。

「私はまだ、大丈夫です! 皆が頑張ってるのに、私だけこんな中途半端じゃ……」

「だから、何が大丈夫なのか分からないな。勝者は君だというのに、どうしてこれ以上競技を続けなければならないんだ?」

「——え？」

本当に分からない、という風に首をかしげるエミヤ。

だが、その言葉の意味を瞬時に理解できたのは誰も居なかった。

その空気を察したエミヤは苦笑いと共にツエストへ話しかける。

「ジャイルは既に気絶しているだろう？ よって、ふらついたとはいえ耐え凌いだルミ

アの勝利と思つたのだが、違うのかね？」

「——な。何を言つて……待て。本当に、気絶している……？」

ツエストの驚きが、会場全体に伝播する。

ジャイルの気絶。その事実が周知のものとなる。

『と、言う事は……？』

「……この勝負は、ルミア君の勝利。よって、一位は二組!!」

ツエストが宣言する。

その声音を拾つた実況が響き渡り、観客の興奮は最高潮へと引き上げられる。

前代未聞の格上殺し。

誰も予期していなかった未来が現実と成り、拍手の波が会場全体を凌駕する。

「「「うおおおおお——ッ!!」」」

二組の生徒達も、その喜びを分かち合おうと観客席を飛び降りた。

そのままルミアの元へと直行し、彼女を一目散に取り囲む。

ルミアは困ったような顔をしていたが、エミヤが一つ背中を押す。

「良く頑張ったな、ルミア」

先ほどの言葉をもう一度繰り返す。

その言葉を聞き、現実を知ったルミアは満面の笑みで、先ほど言うはずだった言葉を紡ぐ。

「——はいっ!!」

頷いて、ルミアはクラスの皆に向き直る。

「ありがとう、みんな!」

途端に見えなくなるルミアの姿。

クラスの皆に囲まれて、その中心で花のように微笑む彼女がそこに居た。

「——」

それを離れた場所から見ていたエミヤ。

薄幸を命じられた少女が、陽の光が当たる所で日常を謳歌している奇跡。

その道を守るためならば、この身は障害を悉く排除することを約束しよう。

——らしくない、な。

フツと儂い笑みを零したエミヤは、こんな事を思ってしまった張本人へ視線を送る。

「——さて。まさか、君達が居るとはな」

エミヤは視線を観客席の方向へと投げる。

そこには誰も居なかった。その事実が視覚を通じて脳裏へと送られる。

だが間違いなく、見渡す限りに広がる観客の姿ではなく、見知った視線を感知した。その事実が覆ることはない。

それは——嘗て、共に仕事をしていた同僚が、近くにいるという事実だった。

休憩時間

午前最後の競技である『精神防御』が幕を閉じ、休憩時間となる。

各々午後の競技に向けて英気を養っている最中だ。

昼食に心躍らす生徒を尻目に、エミヤは一人で歩いていった。

「まあ、私には食事は必要ないからな」

金銭に無頓着な理由が、これだ。

食事や睡眠といった人間であれば本来渴望すべき欲求がこの体には必要ない。

故に、この昼休みを有効活用するために他クラスの偵察にでも行こうかと思案していた。

一人で歩く並木道。その背中に、近づく足音があつた。

「——突然、申し訳ございません。シロウ君エミヤ様、で宜しいでしょうか？」

「む？ 君は——エレノアか？」

名前を呼ばれて振り返る。

そこには、メイド服を着た女性が丁寧にお辞儀をしていた。

「はい、お久しぶりでございます。以前は色々とお世話になりました」

「止してくれ。私は、当然のことをしたただけだ。君にお礼を言われる筋合いは無い」

その女は、エレノア嬢シャーレット。

女王陛下付きの侍女長でありながら、秘書官も務めている女性だ。

陛下の右腕と言っても過言ではない程の仕事をごなしており、その辣腕には何度も驚かされてきた。

「それで、君はどうして私に話しかけてきたんだ？」

「ええ。実は、エミヤ様の實力を見越して、一つだけお話したいことが——」

エミヤとエレノアの間、こうして休み時間に話をするような関係は無い。

会えば世間話程度はするが、わざわざ時間を作る程でもない。

何かあるのではないかと問うエミヤに、エレノアは心痛な表情をしながら答えを言う。

「——天の智慧研究会が動いております」

「何？ どういうことだ？」

衝撃の情報に、エミヤは表情を一変させる。

「詳しい事は私にも……。ですが、その事は本当でございます」

「奴らが動いた……？ もしや、先の戦い、その延長線という事か……？」

エミヤは真剣に思考を張り巡らせる。

天の智慧研究会が動いている、というのは最悪だ。

今は魔術競技祭が行われている最中、そんな所で奴らが動き出せば、犠牲者をゼロに抑えるのは難しい。

この会場にいる全てが人質と成る可能性も十分に考えられるだろう。

「エミヤ様、どうかお気をつけください。秘密裏に手に入れた情報によると、奴らが狙っているのはエルミアナ女王殿下——いえ、ルミアⅡティンジェル様でございます」

「——やはり、か」

先の戦いも、ルミアを狙ったものであった。

転移法陣に囚われた彼女は、エミヤが駆けつけなければ今頃天の智慧研究会に捕まっていただろう。

「ルミア様を殺害しようと目論む勢力もあると聞きます」

「……なるほど。どうやら、天の智慧研究会も二つに分かれていますということか」

以前の戦いは突然、ルミアの殺害を禁じられた結果、エミヤというイレギュラーを真正面から抑えなくてはならなくなり敗北を喫した。

最初から殺害目的で動かされていれば、どうなっていたかは分からない。

エレノアの話が正しければ、ルミアの生殺をめぐって天の智慧研究会が二つに分かれている、ということになるが。

さて、異能者であるという特徴はあるが、そこまでして天の智慧研究会が狙うような人材なのかと問われれば、疑問が残る。

——ルミア・ティンジェル。彼女には、まだ何かあるのか？

「ですので、どうか——」

「承知した。出来るだけ傍に居ろ、ということだろう？」

「はい」

とはいえ、今はその疑問に対する答えを出す時間は無い。

原因を探るのではなく、護りに尽力するのみ。

無論ルミアだけではない。この場に居る全員の命だ。

それを言うとしてレノアは頭を下げた。

「全てエミヤ様に押し付けるようなことになってしまい、申し訳ございません」

「構わないさ。誰かを守るために、私は強くなったのだから」

その答えを聞いたレノアは安堵したように息を吐くと、再び一礼して下がっていった。

姿が見えなくなると、エミヤは再び思考の海へ潜る。

天の智慧研究会が動いている、というエレノアからの情報。

信憑性は問題ないだろう。彼女は女王陛下の付き人であり、そこからの情報という事

は信頼に値する。

あとは、ルミアの安全を守るにはどうするか。

幸い彼女が出場する競技は既に終わった。

観客席での時間が多くなると思われるので、自分もそこに居れば問題は無いか。

「——あの、エミヤ先生！」

「むっ！」

突然、隣から声をかけられた。

犯人はシステイーナだ。

「どうした、システイーナ？」

「先生の方こそどうしたんですか？ 道の真ん中で立ったままでしたけど……何か考え

事とか？」

「もし、疲れているんですしたらしっかりと休んでくださいね？」

「いや、大丈夫だ二人共。考え事と言ってもそこまで大したことではない」

心配そうな二人を安心させる。

この二人に天の智慧研究会の事を言うのは余計な心配事を増やすだけだ。

特にこの後競技を控えているシステイーナには絶対に言えない。

「それで、どうしたんだ？」

「あ、えっと。先生って既にお昼は食べましたか？」

「食べて無いな」

そもそも食べる必要もないからな。

「だったら、丁度良かったわねルミア」

「うん」

するとルミアは手に持っていた籠を目の前で開ける。

その中にはサンドイッチが丁寧に並べられていた。

「一緒にどうですか、お昼？ あ。もし、何か他に用があるんでしたら大丈夫ですけど……」

恥ずかしそうに話すルミア。

断られた時の保険をしておくのは、後のダメージへの緩衝材だろう。

弱気に誘うルミアを見て、システイーナはため息をつく。

「何言ってるの。せっかくルミアが朝早くに起きて作ったんだから、食べてもらわなきゃ意味無いでしょ？」

「し、システイ!!? 何言ってる……!」

「何って、事実でしょ?」

「事実だけど……!」

エミヤを置いて盛り上がる二人。

その光景に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

嘗ての職場でも、こんな光景を何度も見ていたな、と。

英霊という存在である以上、食事という行為は必要では無いのだが、別に食事が出来ないという訳では無い。

最初は断ろうとしていたが、手作りを無下にするほどエミヤは逼迫した状況ではない。

それに、ルミアの付近に居るのが現状最善手か。

「では、頂こうかな。丁度私も何か食べようと思っていたんだ」

その声にルミアの表情が花開いた。

「わ、分かりました。じゃあ、一緒に」

恥ずかしそうに、それでも嬉しそうに微笑むルミア。

そうして、エミヤは二人と談笑しながらサンドイッチを頂いた。

その後、『決闘戦』に集中したいと言ったシステイーナとは別れる。魔術競技祭の最後を飾る一戦だ。それに対する緊張や戦略の構築などがあるのだから。

エミヤはルミアと二人で歩いていた。

「早いですね、先生。もう半分が終わっちゃったなんて」

「そうだな。だが、このまま終わらせるつもりはない」

「まだ一位じゃない、からですか？」

「当然だ。やるからには勝たなければいけないだろう」

するとルミアはクスクスと笑いながら、何か子供を見るような目でエミヤを見る。

「む。何だ、その視線は？」

「いえいえ。何でもありませんよ？」

——そんな、他愛ない話を続ける。

教師と生徒という枠組みを逸脱しない、至って普通の会話である。

裏に潜む真実を今は隠して、この日常を謳歌する。

すると、弛緩した空気が切り裂くような、一陣の突風が巻き起こる。

他に誰も居ない街道。

肩を並べて話すエミヤに、突然声がかけられた。

「その貴方は、エミヤですよ？ 少し……お話をしてもいいですか？」

「ん？ 私に何か用だろうか——」

それが、自然な声音だったから。

まるで友人に話しかけるような、そんな緊張感の無い切欠だったから。

勘違いしてしまった——。

「——女王陛下……？」

「はい。お久しぶりです、エミヤ」

瞳目するエミヤに、悪戯が成功したかのような笑みを浮かべる。

アルザーノ帝国女王アリシア七世。

その姿が、風と共に舞い降りた。

「……陛下。今日は、如何なる理由で私の元へ？」

「いえいえ。世間話でも、と思ひまして」

警戒心を露わにするエミヤ。

その姿に悲しそうな表情をしたのはアリシアだった。

「友人に話しかけたつもりだったんですが——いえ、私なんか貴方の友人を名乗る資格はありませんね」

するとエミヤに対して頭を下げるアリシア。

その姿を急いで制止する。

「待つてください、女王陛下。私は貴女に謝られるようなことはされていません。ですのうどうか、顔を上げて下さい」

「……また貴方の優しさに甘えてしまいましたね」

「そんなことはありません。私も、貴女に何度も心配をおかけしてしまいました」

慣れない敬語で話しかけるエミヤ。

これを彼の生徒が見ていたら、何と言っただろうか。

状況が状況でなければ、きつと笑われていたに違いない。

「ですが、やはり私は貴方に謝らなければなりません。これまで帝国の為に尽力してくださった貴方を、無期限の停職処分などという烙印で特務分室を退室してしまうことになったのは私の責任です」

「それに関しては私の責任でもありません。下賤な位である私が、上層部へ盾を突いたのがそもそもの原因」

「かもしれない。ですが、貴方の言葉は帝国の不安定な部分を明確にしたものでした。私達はそれを克服し、今の帝国が成り立っていると言っても過言ではありません。特務分室での功績と合わせても、本当に感謝してもしきれません」

これがアリシアという女王だ。

決して下々の人間を見捨てる事は無く、貴賤関係なしに感謝を述べられる。

己が悪いと思えば謝るし、退けないのであれば絶対に退かない。

女王としても、人間としても、人格者であることは間違いない。

「では、こういうのはどうでしょう？ 私達は友人なんですから、互いに感謝しつつ、頭を下げるのは止めましょう。互いに支え合い助け合うのは友人というものですから」
無礼なのは承知だが、こう言わなければ彼女はこちらが納得するまで頭を下げるだろう。

人払いの結界が周囲に敷かれているのは分かっているが、誰かが見ている可能性もゼロではない。

それに、嘗ての部下として彼女に頭を下げられて良い気がするはずが無い。

「分かりました。では、貴方も敬語は止めてください。以前のような口調でお願いしますま

すね?」

「……了解した」

それを聞いたアリシヤは微笑む。

「懐かしいですね。貴方の声を聴いたのも、随分久しぶりな気がします」

「懐かしむものではないだろう。私の方が身分は下なんだぞ? そんな人間からふてぶ

てしい振る舞いをされて、何も思わないのかね?」

「思いませんよ? だって私達は友人じゃないですか。さつき貴方が言ったことですよ?」

アリシヤは人差し指を向ける。

そんなお茶目な行為に苦笑いを浮かべた。

そのまま、エミヤは両手を上げて降参のポーズをとる。

「それで、陛下は如何なる理由でここに? 私と世間話をしにきた、という訳では無いの
だろう?」

「それも面白そうですが、そうですね」

するとアリシヤの視線が横にずれる。

そこには未だ呆然としているルミアの姿があつた。

「……お久しぶりです、エルミアナ。大きくなりましたね?」

「……………」
それを聞いたエミヤは一步後ろに下がる。

この二人には容易ではない関係の糸が繋がっている。

部外者が口を出すのは野暮というものだろう。

ルミアに向かつて、懐かしむように微笑みながら会話を続けるアリシア。

だが、その投球が返球される事は無かった。

「……………お言葉ですが、陛下。陛下は人違いをされています」

地面に片膝をついて平伏するルミア。

その行動に嬉しそうに話しかけていたアリシアの表情は硬直した。

「私はルミア。ルミアアーンティンジェルと申します。恐れ多くも陛下は私を、三年前の御崩御なされたエルミアアナィエルケルアルザーノ王女殿下と混同されております。日頃の政務でお疲れと存じます。どうかご自愛くださいなされますよう……………」

「……………」
その言葉は、明確な拒絶だった。

両者の関係を知っているエミヤとしては、その言葉に悲痛な表情をする事しか出来ない。
い。

アリシアもまた、崩れたような表情をして……………。

「……そうですね。あの子は三年前に流行病にかかって亡くなったんでしたね……どうして、こんな勘違いをしてしまったんでしょうか……」

ルミアは何も話さない。

アリシアは何かを話そうと口を開くも——そこから声が聞こえる事は無かった。

重たく押し掛かる空気が周囲に流れる。

しばらくの間静寂が包み込んだが、未練を振り切るようにアリシアがエミヤを見る。

「……そろそろ時間ですね。エミヤ……ルミアをどうか、よろしくお願いします」

「……承知しました、陛下」

そのままアリシアは去っていく。

終ぞ見えなくなったその背中。

ルミアは最後まで平伏した頭を上げる事は無かった。

「……ルミア、本当に良かったのか？」

「はい。これで、良かったんです」

平伏していた体を元に戻す。

ルミアは一瞬、アリシアが消えた方向へと視線を向けたがすぐに切ってしまった。

「私はルミア、エルミアナではありません……」

「とはいえ、陛下は君の母親だろう？ 如何なる過去があるとはいえ、その関係は切れな

いものと思うがな」

「――」

視線は合わせない。

ルミアは深い海に逃げるように俯いた。

その行動に、彼女の本心が見えた。

ならば、深い海に逃げたルミアを引き上げなければならない。

「これは私の推察だが、陛下は今も君を愛している。以前の姿は、歴史に縛られてあのような対応しか出来なかつただけだ」

あの瞳は、本当に娘を愛している親の瞳だった。

アリシアがルミアに拒絶され、痛痒に震えたのもその愛が残っているからだ。

「……はい。ですが――もう互いに関わらない方が、互いの為になると思うんです

……歴史なんて背景があるのなら、尚更」

「そうだな。陛下は軽くない身分だ。そこに疑問を感じていたとしても、歴史が相手では何も出来ない。上の立場であればあるほどそれを重視しなければならない。上が勝手にやって、被害を被るのは下というのは避けねばならない事態だからな」

歴史を蔑ろにする行為は、内外に敵を作りやすい。

その椅子を狙っている存在が付け入る隙にもなるだろう。

「まあ、私は歴史に勝ることが出来ると思うがね、親子の関係というものは——」

「え——？　ちょ、エミヤ先生!？」

エミヤはその場に片膝をつくと、ルミアのポケットからネックレスを取り出す。

見た事があるネックレスだ。

それはルミアがアリシアを迎える時に一瞬だけ開いたロケットペンダントだ。

また、嘗ての職場で矢面に立つ女性の首に、離されることなく繋がれていたのも何度も見た。

この輝きは、闇夜に置くには惜しい。

「忘れるな。このネックレスは、君達にしか似合わない」

そのネックレスを首にかける。

そうだ。ポケットなんかには仕舞うものではない。

煌びやかな輝きは、日光と共に輝くもの。

その輝きが首にぶら下がり、ルミアの瞳に光が戻る。

「——先生。私、どうしたら良いんでしょうか……？」

「君がしたいことをすればいい。私はそれを手助けるだけだ」

すると、ルミアがエミヤの胸に倒れた。

その体を抱き留める。

「じゃあ……こうして、甘えても良いんでしょうか……？」

「良いに決まっている。親子の關係に、貴賤なんてものはないんだからな」

すすり泣く声がある。

華奢な体を抱きしめ、その頭を撫でる。

「まだ機会はある。近ければ、授与式にでも会えるだろう」

「じゃあ……優勝しなきゃいけませんね」

「勿論。理由が増えたが、目的地は最初から同じだ」

エミヤはその道を繋げる。

その為に動いてきたんだ。この布石は、最初から今まで不動だ。

その果ては、ルミアが解決すべき問題だ。

当人同士が話し合うことで発展する状況であり、部外者であるエミヤにはどうするこ

ともできない。

ただ——こうして、その関係に挑もうとするルミアを、励ますくらいは出来るだろう。

王室親衛隊

その後、午後の競技が始まった。

安定的な成績を残す一組と、快進撃を続ける二組との戦いは他クラスの生徒も巻き込んでヒートアップしていった。

そんな中で、エミヤは観客席ではなく会場から離れていた。

「少しケアが不足していたか……？　立ち向かう切欠を与えられたと思っていたのは、私の思い上がりだったか」

競技が開始され、生徒の応援をしていたエミヤに、システイーナが告げた言葉。

曰く、ルミアの姿が見えない、と。

継ぎ接ぎだらけだった心に火を灯すことが出来たのかと思つたが、まだ思い詰めていることがあつたのだろうか。

とにかく、天の智慧研究会が動いている現状でルミアの単独行動は許されない。

合流してから話を聞くことにしよう。

エミヤは尖塔に登ると、卓越した瞳に映る視界を凝らす。

「——そこか」

エミヤは飛び上がると、屋根を駆けてその場所へ移動する。

学院敷地の南西端。学院を取り囲む鉄柵にもたれかかるようにして、ルミアがそこに居た。

周囲への警戒を怠らず、エミヤはその場所へ降り立った。

「——わっ!!? え、エミヤ先生……?」

「……ロケットを見ていたんだな」

エミヤは物憂げな表情で手に持っていたロケットを見ていたルミアに話しかけた。

彼女は突然の出現に驚いた様子だったが、その言葉に首肯した。

「……はい。先生にもう一度話せば良いってアドバイスを貰ったんですけど……やっぱ

り、怖くて」

搾り出すようにしてルミアは言葉が続ける。

「あの人と、話したいっていう気持ちは本物です。でも、また突き放されるんじゃないかって不安にもなるんです。この、空虚なロケットみたいに、私の事を無かったように、扱うんじゃないかって……」

「あくまで私は第三者としての立場だが、少なくとも陛下は君の事を想っているように

感じたが?」

「ええ……はい。私もそう感じました。でも、それがいつまで続くか分からない」

「いつまで続くか分からない……?」

こくり、静かに頷いたルミア。

その様子には何処か怯えているようにも感じられた。

「あの人は……とても優しくかったです。私の事をとても大切にしてくれて、私もあの人の事が好きだった……でも、ある日、突然豹変したんです」

「――」

「昨日までの優しい表情が嘘なんじゃないかって……そう思ってしまう程、冷たい視線をあの人は私に向けたんです……」

——そのことは、良く知っている。

ルミアIIティンジェル、彼女の運命を逆転させた黎明。その日の事を、エミヤは決して忘れない。

未だ幼き王女をとある一室に呼び、そこで全ての篡奪を命じる。

大人であっても受け入れることが出来ないような出来事なのに、未熟な子供にとっては何れ程悲痛な出来事だったか。

「……私も、ダメですね。もう忘れよう、つて何度も思ったんですけど……忘れられない。夢に見る程麗されるんです。でもそれは、私が過去を捨てる事が出来ない証拠。結局私は、考えないふりをして、あの人に対して怒っているんだと思います」

「気持ちには分かる。そこに如何なる理由があろうとも、親が子を棄てた事実には無
いからな。とはいえ、陛下にも退くに退けない事情があつたんだと理解してほしい」

「……はい。あの人にも、立場があつたんだということは分かります。王国の為、未来の
為、私という異分子は切り捨てなければならなかつた……それは、分かるんです」

アリシアにも退けない理由があつた。

全を導くため一を切り捨てる。その選択に、エミヤが異議を唱えることは出来ない。

その選択の重さは知っている。それが当事者であり、ましては親であるアリシアから
すれば、どれほど重く押し掛かつた選択だつたのかを。

ルミアも理由や理屈は理解しているのだ。それでも——、彼女にも抱えている思
いがある。

それを蔑ろにすることも出来ない。

「——人生とは、やはり難しいものだな」

「え……？」

「一つ昔話をしよう。まあ、下らない男が居たんだなど笑つてくれて構わない」

そう言つてエミヤは話をする。

愚かにも壮大な理想を追いかけ、その理想に溺死した一人の人生を。

「……まあ、何だ。結局人生なんて選択の連続なんだ。一方を救いたければ、もう一方は

見捨てなければならぬ。陛下の選択もそうだろう。決して簡単に決められたものではない。それは、私が一番よく知っている」

「あの……先生って、もしかして」

「元軍人として、陛下に仕えた過去があつてね。君は知らないとは思うが、私は君のことを知っていたりする」

上層部との軋轢が生じた原因の一つでもあるのだが、エミヤはその行動に後悔はしていない。

お陰で、アリシアの本心を知ることも出来たしな。

「ほ、本当ですか……!?!」

「ああ。まあ、その辺りは直接陛下に聞いた方が分かるだろう」

一応話のネタになりそうなものを残しておく。

歴史に翻弄され、訣別を運命づけられた親子にとって、再開は簡単に受け入れることが出来るものではないだろう。

短くとも整理の時間が必要だ。その先で、困ったのならこのネタを使ってもらいたい。

とはいえ、まずはそこへ至る障壁が存在する訳だが――。

「――そこ、姿を見せろ」

エミヤは鋭い一声と共に振り返る。

その視線に先に居たのは、本来であればこんなところに居てはならない部隊、王室親衛隊だった。

体の要所を軽甲冑で固め、象徴である陣羽織を靡かせ、細剣を佩く。

総勢十一騎の精銳がエミヤとルミアを囲むようにして陣容を為していた。

その中の一人、中央に鎮座する男が話しかけてきた。

「久しいな、『死神』」

「……何用だ、『双紫電』。貴様らは陛下を守護するのが任務のはずだろう？」

とても安泰な状況では無いことは確かだ。

まずは情報を得る為、王室親衛隊、その存在意義をもう一度問いかける。

「そうだ。だが、時として陛下の元を離れ、自ら帝国に仇為す罪人を誅殺することもある」

「守護だけが取り柄の貴様らがか？ 冗談は止してくれ。慣れない事に手を出すものではないぞ？」

「貴様のような半端者に言われたくないな。上層部へ楯突いた勇氣は認めてやらんことも無いが、結局の所後先考えずに突貫する馬鹿であった貴様には」

「反発を忘れ、唯々諾々と状況に流されるだけの人間に言われるとはね。どうやら己が

歩いてきた惨劇を見返すことも出来ないらしい」

エミヤはその手に投影した双剣を握りながら、ルミアを守るようにして立つ。

相手は王室親衛隊。陛下の警護を第一とし、それを長年にわたり成し遂げてきた少数精鋭部隊。

その中央で、エミヤと対峙するのが『双紫電』と呼ばれし初老の男だ。

名をゼーロスⅡドラグハート。親衛隊の総隊長を務める程の実力者である。

「……相変わらず気に入らない男だな。まあ良い、貴様の戯言に付き合う時間は無いのでな」

怨敵を睨むような視線をした後、ゼーロスはルミアに向き直った。

「貴様がルミアⅡティンジェル……で、間違いないな？」

「……え？ あ、はい……そうですけど……」

そうか、と静かに呟いたゼーロス。

本当はルミアの事を知っているのに、名を問いかける行動にエミヤは不気味な何かを感じていた。

そして、その憶測は的中する。

風を斬る一閃。

ゼーロスは一糸乱れぬ音速で佩いた細剣を抜くと、ルミアを穿つ――。

「——させると思ったか？」

「思う訳なからう。貴様の異常さは熟知しているからな」

割り込んだエミヤの双剣によって止められる細剣。

だが、ゼーロスはその行動に瞳目は無かった。

「ゼーロス、その行動の意図は何だ？ 貴様の剣は陛下を守るための剣であつて、人を殺す為の剣では無いだろう？」

「いや、私の剣は一貫して陛下を守るために振るわれる。その理由を今示そう」

至近距離で向き合う両者。

ゼーロスがエミヤから距離をとる。

「ルミア―ティンジェル。恐れ多くもアリシア七世女王陛下を密かに亡き者にせんと画策し、国家転覆を企てたその大罪、命を以て償つてもらう。なお、この命令は女王陛下の勅命である」

「国家転覆だと……？ 何を馬鹿な事を言っている。彼女が、そんなことをするわけが無いだろう？ そもそも、彼女の真実を知っている貴様ならその疑惑が欺瞞であることは理解できるだろう？」

「ルミア―ティンジェルの真実だと？ 貴様の方こそ何を馬鹿な事を言っている。私だが、そのような大罪人と面識があるはずがない」

「貴様、冗談にしては質が悪いな」

「冗談なわけが無い。そもそも、貴様の言う真実とは何だ？ まさかとは思いますが、陛下とその娘に何かしらの関係がある、などという戯言を言うのか？」

侮蔑の笑みを浮かべ、己の言葉を一蹴するゼーロス。

「私は確認した。陛下にとつて、ルミア＝ティンジェルという娘は己の命を狙った罪人であり、面識はないとな」

静謐に言葉を述べるゼーロス。

その一つ一つがルミアを穿つ言弾と成り、絶望に濡れる。

「その証拠は？」

「陛下の勅命がその証拠だ。元軍人として、貴様にもこの一言の重さは十分理解できるだろう？」

皮肉に歪ませるゼーロス。その行動の余裕さには、どうも不気味なものを感じる。

では、本当にアリシアが命じたのか——？

それは有り得ない。

少なくとも、あの人の下で仕えその人柄を知っているエミヤにとつてその揺らぎは微々たるものだ。

でも、ルミアはそうではない。

「厄介なことになったな……」

天の智慧研究会と、王室親衛隊。

その両者が、ルミア―ティンジェルを命を狙う為に立ちはだかるといふのか。

生半可な心持では、厳しい戦いになることは予想できるだろう。

「わ、私が……陛下の暗殺を、企んだ……？」

「動揺する演技をしても無駄だ。同情を誘うつもりなのかもしれんが、その程度で揺らぐ我々ではない」

「これが演技に見える、だと？」

「ああ。事実を塗り覆そうとする行為だ」

瞳を痙攣させるルミア。

ゼーロスは淡々と物事を進め、その刃をルミアの首元へあてがおうとする。

「貴様、それほどまでに墜ちたか」

「何とでも言え、シロウエミヤ。なお、これ以上の抵抗を続けるのであれば、いくら既知の間柄と言えどもその命脈を断つことになる。言動は慎むが良い」

視線を交差させる両者。

共に握る武具へ握力を加え、両足はいつでも動けるようにと準備されている。

緊迫感が向上し、一触即発の雰囲気その場に居る誰もが気づき始めた、その時。

「——分かりました。仰せの通りに致します」

「……ほう？」

一歩前に出るルミア。

逼迫感で押しつぶされそうになる胸を両手で押さえ、ルミアはその欺瞞を認めた。

「ごめんなさい、エミヤ先生。私——」

「……感心しないな。それは、己の命を簡単に投げ出す行為だぞ？」

「はい。でも、これ以上先生に迷惑をかけるわけにもいけないので……」

やはり、か。

以前も見られた、彼女の美德であり異常なまでの精神力。

他者に迷惑をかけるのであれば、命を捨てるのも厭わない、という行動原理から為される幼き修羅場が齎した異常性。

だが、その行為を看過する訳にはいかない。

少なくとも、その瞳に人間としての雫が見られる限りは。

「何を言うかと思えば。私に迷惑をかける訳にも行かない？ 笑わせないでくれ、君は

何を言っている」

「え……？ だ、だって……」

「私は先生だ。故に、君達生徒に迷惑をかけられるのは当たり前だ。その分、君達が成長

してくれれば教師としてこれ以上の幸福は無い」

エミヤは前に出たルミアを、再び背負うようにして前に立つ。

「それに、私は君を陛下の元へと連れていかねばならないのでね。それが果たされるまでは、何があっても私は君の味方だ」

「陛下の元へその大罪人を連れていく、か。だが、その結果を為すには我々王室親衛隊を突破しなければ為し得ない奇跡だ。貴様程度に為せるはずが無い」

「本当にそう思うのであれば、是非手を抜いてもらいたい。言葉を汲み取るのなら、私人など雑兵と同義なのだろうか？」

双剣を握った両手を構えることなく、泰然と相對する。

その構えとも言えない事前準備に、されどエミヤの戦い方を知っているゼーロスは万全の態勢で腰を落とす。

「だ、ダメです先生……！ 先生が強いのは知っていますが、相手は王室親衛隊ですつ！ それに、一番前に居るのは——」

『双紫電』ゼーロスⅡドラグハート。約四十年前の戦争で活躍した英雄、と言いたいのだろうか？」

不安げに見上げるルミアへニヒルに笑う。

「安心して見ておくと良い。そして、悟るんだ。君の味方は、簡単な障害には負けないの

だとな」

「先生……!」

「随分と舐められたものだな、若造。確かに全盛期と比べれば身体能力の劣化を感じるが、その分修羅場を乗り越えた技術がこの身に宿ることを忘れるな」

「フツ。若造、そして技術か……」

守護者としての裏側を知らないゼーロスにとつて、その言葉は必然か。

「では、来ると良い『双紫電』ゼーロスⅡドラグハート。是非とも未熟な私に、君が誇るという技術を叩き込んで頂きたい」

「ハ——ツ! その言葉、寸毫先の未来にて後悔させてやろう——ツ!!」

駆けるゼーロス。

泰然と待ち受けるエミヤに、防衛体制を整える様子は見えない。

当然だ。劣化が見えるゼーロスと云えど、その身体能力は常人のそれを大きく凌駕している。

両者の間に繋がる距離など、数歩で吹き飛ばすことが可能だ。

「覚悟——ツ!!」

細剣を振り上げた、その瞬間。

口元を歪ませたエミヤはいつの間にか空虚になっていた片手に、とあるナイフを握つ

た。

投擲か。その行動の先読みを為したゼーロスは、防衛に立ちまわる。

エミヤの手を離れ、飛来するナイフ。

ゼーロスの全神経をつぎ込んで、ようやく視認できる速度で駆け抜ける剣先を細剣で逸らそうとして――、

瞬間、辺り一帯を包み込む爆発が忽然と出現した――。

嘗ての同僚

「チツ——逃げられたか」

黒煙が去った後。

見渡す限りに広がる視界に、魔術講師姿の男と金髪の少女の姿は見えなかった。

その事実を確認してゼーロスは細剣を鞘に収める。

「……小癩な男め。だが、思い出したぞ。心理戦と情報戦を魔術戦に組み込んでくるのが、貴様の手管であつたな……全く、一筋縄ではいかぬ男よ」

「ゼーロス殿」

呼ばれたゼーロスは後ろを振り返る。

「何だ？」

「追わなくても宜しいのでしようか？」

「無駄だ。奴を真正面から追いかける必要は無い」

「え……？」

疑問符を浮かべる部下に、ゼーロスは事実を述べる。

「そも、奴と身体能力で勝負するのが間違っている。こちらから奴の土俵に上がる事は

無い。ここからはプラン通り各地に散らばり、両者の搜索並びに大通りを封鎖せよ」

それだけ言い終えたゼーロスは翻して部下の前から立ち去ろうとする。

彼の話した作戦に疑問を感じる者もいるが、それを言葉にする事は無い。

シロウエエミヤ。ゼーロスと真正面から対峙しても尚、その精神を泰然と保った男。

驚異的な不意打ちを凌駕し、その剣先を止めるといふ実力の片鱗も見せられた。

精鋭部隊として鍛錬を積んできた彼らには、その男の異常さは身を以て理解していた。

その名を聞いた事がある者であれば、尚更。

「——了解しました。それで、最後に一つだけお聞きしたいことが」

「何だ？」

「彼の男——『死神』の言葉です。あの、金髪の少女の真実とは一体……？」

当然の疑問か。

いや、奴は王室親衛隊が瓦解することを狙ってこの事を話したのかもしれない。

故に、この状態へ至るのは必然。

とはいえ奴の掌で踊らされる訳にも行かない。

「奴の戯言に過ぎない。耳を傾けるに値しない情報だ」

客観的視点の正義はこちら。

それを信じている彼らもまた、元は名を馳せた軍人だろうとも、その心情を断ち命脈を狙うことが出来るだろう。

「失礼しました」

「うむ。では、何かあればすぐに知らせよ。私は陛下の元へ行く」

ゼーロスの命令を聞き届ける。

そうして、帝国各地に王室親衛隊が解き放たれた。

「——厄介な状況に陥ったものだな」

エミヤが懐に仕込んでおり、投擲したナイフ——名を封爆ナイフという——によつて逃げ出した二人は現在路地裏に隠れていた。

爆晶石を加工して作られたそのナイフは、衝撃が刀身に迸れば内包する爆炎を外界へ解放するという代物だ。

この世界にある黒魔「クイック・イグニッション」からヒントを得て造り上げたエミ

ヤオリジナルであつたりするのだが、その話は今するものではないだろう。

路地裏から見れば、周囲は王室親衛隊によつて警邏されており、退路を全て塞がれてしまった。

「……何が起きている？　王室親衛隊の暴走と、天の智慧研究会。この両者が無関係であるとは到底思えないが……」

情報が足りなさすぎる。

エミヤの手元にあるものではこの事態へ陥つた原因すら見えてこない。

ルミアがカギなのは分かるが、それ以上の仮定を見出せない。

「先生……」

「大丈夫だ。君は私が守り抜く。それに、この状況には必ず裏がある。陛下が裁判も無しに独断で君を誅殺せよ、だなんて命令を下すはずが無い」

そう考えると、やはり王室親衛隊の暴走が気がかりだ。

陛下の指揮系統を離れ、独断で行動していると見た方が説明がつく。

だが、そこへ至る経路が見つからない。

忠誠の塊である彼らが、絶対主である陛下を裏切るに足る、明確な情報が足りない。

「ともかく、まずは陛下の元へ向かうのが先決だ。現在の王室親衛隊は暴走していると見た方が良さそうだからな」

最悪王室親衛隊を真正面から一蹴する、という行動を選択することも可能だが。

ここでもう一つの障壁である天の智慧研究会が出てくれば、王室親衛隊諸共ルミアの殺害を企てるという非人道的行為をされる可能性が高い。

此度はルミアを殺害することも厭わない派閥かもしれないのだから。

「派手な行動は出来ないな。せめて、陛下の近くに在るセリカとの連絡網が確保されていれば良かったのだが……」

残念ながらそんなヒントはエミヤの手には無い。

現状持ち得る手管のみでこの包囲網を打破しなければならぬ。

と――、

「――随分と困つてゐてえだな、『死神』」

路地裏の奥から、少年の声が響き渡る。

一瞬警戒態勢を整えたエミヤだったが、その声音を解析し終えた時にはその警戒は解いていた。

「グレン、なのか……?」

薄暗い最奥から見せる影。

黒髪黒目という平凡な特徴で、髪を後ろで一つに結んでいる、未だ少年の気配が抜け切れていない彼は、口元を歪ませながらエミヤを嗤う。

「嘗ては特務分室最強とも言われたアンタなのに、軍を抜ければその体たらくかよ。全く、笑えねえ冗談だぜ」

「……グレン、その口調は何だ？ 君らしくない」

「何を言っている。これはエミヤ、お前の教育の賜物だろう？」

困惑を隠しきれていないエミヤに苦言を呈したのは、グレンより後に見えた影。

長い青髪を靡かせて、その鋭い視線がエミヤを穿つ。

「アルベルト……少し待て。君はこれが、私の教育の賜物と言ったか？ 冗談は止してくれ。こんな背伸びした口調を私が教える理由が無い」

「お前にその気が無くとも、師匠に憧れた弟子は全てを盗もうとするものだ。それが、如何に無駄なものであってもな」

「つてオイ、アルベルトっ!? それじゃお前、俺がエミヤに憧れているみたいに聞こえるじゃねえか!」

「事実だろう？ 慣れもしない剣や弓に手を出し、俺達に迷惑をかけた身でよくバレていないと思えたな」

「あ、あれは……」

視線を泳がすグレン。

何か思い当たる点があるのだろうか。

というか、彼が剣だけに収まらず、弓にも手を出していたのは初めて知った。

グレンが剣を指しているのは、現在彼が腰に剣を佩いていることから理解できるが。

半年の間に色々な意味で変わっていた同僚達に追いつけないまま、エミヤは困惑している、二人を制す言葉がした。

「ん。二人共私みたいに落ち着くべき。エミヤの前ではしたない」

「つて、どさくさに紛れて平然を装ってんじゃねえよ!? お前が一番落ち着いてなかっただろうが!? リィエル、さっきまでの狼狽えはどうしたんだよ!? 柄にもなく外見を気にしてたお前はどこ行っただよ!」

「グレンが何言ってるか分からない。わたしが狼狽える? 外見を気にする? 多分グレンは久しぶりに会ったエミヤの前で緊張してる。しんこきゆうするべき」

「がー!! ……つたく、その切り替えスピードもエミヤ譲りの技術だったな。こうも数分前と切り替えられちゃ俺達の方が困るつての」

ガシガシと乱暴に頭を搔くグレン。

そして大きく息を吐くと、一人呆然としていたエミヤに視線を向ける。

「エミヤ。お前、どうして俺達の前から何も言わずに居なくなっただよ?」

グレンもエミヤから教わった切り替えで先ほどまでの弛緩した空気を一変させた。

「ん。エミヤが居なくなつてグレンやアルベルトは寂しがつた。何も言わずに単独行動するのはダメだつてエミヤが言つたのに、それをエミヤが破つた」

「俺を巻き込むな、リイエル。エミヤが居なくなつて寂しがつたのはお前達二人だ」

「そう言うお前も何だかんだ寂しそうにしてたじゃねーか。遠距離攻撃を一から叩き込んでもらつた師匠が居なくなつたのはお前だろ？」

いつの間にか喧嘩を始めた三人。

エミヤはそれを制止させる。

「待て待て。私が居なくなつた事については今は良いだろう。とにかく、今は暴走している王室親衛隊を警邏をどうするかを考えるのが先決だ。その話は後でも出来る」

冷静に告げるエミヤ。

他の三人もそれを聞いて考えを改め——るはずがなく、エミヤが蔑ろにした部分へ追求してきた。

「何が『私が居なくなつた事については今は良い』だよ？ 俺達に無断で軍を抜けたこと

は、そんなに重要じゃねえつて言うのかよ？」

「そんなことは言つていない。ただ、王室親衛隊が暴走している現状で、それ以外を考える暇は無いという意味だ」

「……わたしは少し怒つた。それは今もそう。仲間を信じろつて言つたエミヤが、

一番わたし達を信用してなかった。そんな状態のまま話し合っても、多分意味が無いと思う……」

「……リイエル」

感情の起伏が乏しいリイエルだが、それでも今は怒っているというのは分かる。

……流石に軽薄過ぎたか。

そして彼女の話と思う事がある部分が多々ある。

一番仲間を信用していなかったのは——自分だという言葉に。

「……君達を信用していない訳では無いさ。ただ、私が無期限の停職処分を下されたのは、全て私の自己責任であり、君達には何の関係も無いものだった」

「だからと言って、話さないのは間違ってると思う。わたしは、難しい事は分からないけど。……でも、エミヤの行動が間違ってたのは分かる」

「それは……すまなかった」

素直に謝罪した。

確かに自己責任であったからと言って、嘗て仲間の存在を信じると口を酸っぱくして言っていた身としては有り得ない行動だった。

頭を下げたエミヤを見て、アルベルトはため息をついた。

「全くだ。お前が抜けて、俺達がどれ程苦労したと思ってる？ 当然お前に停職処分

を下した上層部への不信感は募るし、お前が受け持つはずであった仕事も全てこちらに回された」

それに、とアルベルトは続ける。

「特にグレン、リエル、イヴの混乱は酷かった。処分緩和に携わっていたイヴはまだしも、二人はお前の背中を追っていたんだ。そんな人間が自分達に何も話さずに居なくなれば困惑するのも当然だ」

「そう……だな。すまなかつた、私の配慮が足りなかつた」

「そうだ。——お前はもう少し自己評価を改善した方が良い。恐らく、お前が思っている以上に、お前を慕っている人間は多いのだからな」

「それは……善処しよう」

アルベルトの苦言を受けて、エミヤも己の軽率な行動が齎した影響を知った。

右も左も分からない、特務分室に入室したての頃から面倒を見ていた、師匠的な存在が突然消えることへの恐怖。

己の責任ばかりを見て、巻き込まないようにとわざと話さず退室したのは、空回りだったようだ。

するとアルベルトは後ろにいたグレンとリエルに問いかける。

「これで良いだろうか？」

「……何だよ、アルベルト。お前、俺達が言いたいこと全部言いやがって」

「言いたい事があるのならお前の口から言えば良い、グレン。本質が似ていようと、俺の言葉とお前の言葉ではまた違うものになるからな」

「いや、止めとく。流石にこれ以上時間を無駄にする行為は無しだな」

グレンはそう言うともう一度エミヤを見る。

「ま、これで互いに仲直りって感じで良いか？俺もまだまだ言いてえことはあるが、一

先ずはこれで終わりにしたい」

「そう言ってもらえると助かる。全く私も、まだまだだな」

仮初の形ではあるが、許しを得た。

リイエルは二人の会話を聞いてうんうん、と頷いた。

「ん。じゃあ、これからどうする？突っ込む？」

「独断で突っ込まなくなつたのは有難いが、いい加減その思考回路から離れるよ、お前。流石に王室親衛隊相手に問題を起こすのは色々と面倒だろ？」

「そうだな。聞くに、この場には天の智慧研究会が介入している可能性も浮上した。下手に動くのは私達の首を絞めることに繋がるだろう」

そう話すと、エミヤは再び思考を張り巡らせる。

一人なら出来なかつたが、三人が加わってくれば戦略の幅が広がる。

と、ふと三人の反応が鈍い事を悟った。

「……………どうした？」

「お前、今なんて言った……………？ 天の智慧研究会がここに居るって言ったのか!」

「そうだ。故にルミアの元を離れるなど、エレノアⅡシャーレットに言われてね。それがどうかしたか？」

「……………それは俺達が知らない情報だ。いや、語弊があるな。知らないというより、あくまで可能性の話として聞いてはいたが、確信するような話では無かった。が——」

アルベルトは鋭い眼光のまま逡巡する。

「エレノアⅡシャーレット、か。思いがけない人間が登場したな……………」

「何かあったのか？」

「いや、可能性の話が確信へと移行しただけだ。だが、そうするとお前をルミア嬢の元から離れさせない方が良いな」

今まで空気を読んで黙っていたルミアだったが、突然名前を呼ばれ顔を上げた。

「私、ですか……………？」

「ああ。二勢力が狙っているルミア嬢の周囲は強固でなければならぬ。故に、一番の適任はお前だろう」

「そうか？ 私でなくとも大丈夫とは思うか？」

「新参者な俺達より、お前の方が良いだろ。少なくともこの中じゃ一番お前が強いし、それにきな臭い話も聞くからな……」

「きな臭い話？」

「……なんか、裏切者が居る？　かもしれないっていう話」

「何だと……？　もしや、その中の候補に、エレノアⅡシャーレットが居るのか」

「そうだ。お前は知らないだろうが、このところこちらの動きがおかしい具合に読まれていてな。あちらに卓越した軍師が居るといふ可能性もゼロではないが、内通者が居ると考えた方が合点がいくレベルでの情報漏洩だ」

それは知らなかった。

確かに特務分室の活躍を聞かないとは思っていたが、そんな事があったのか。

「えっと……突然すみません。皆さんって、どちら様でしょうか……？　先生の友人、と
いうのは分かるのですが……」

一人、会話の中心に据えられたのに状況が理解できないルミアが問う。

「そう言えばそうだったな。紹介しよう。彼らは——嘗ての、私の同僚だ」

簡単にはあるが、名前を紹介した。

「先生の、お仲間さんなんですか？」

「そうだ。全員が卓越した個を確立している実力者だ。君を陛下の元へ連れていくのに

心強い仲間となってくれる」

困惑していたルミアへ微笑む。

大丈夫だ。これで必ず君を陛下の元へ連れていける、と。

「む。何かエミヤが違う。わたしにはあんな笑顔は見せてくれなかった」

「それはお前が問題行動しかしてなかったからじゃねえのか？」

「そんなことは……無いと思う……」

「そこまでだ。手短かに、俺が考えた作戦を伝えたいと思う」

四人の弛緩した空気を断ち切るようにアルベルトは現実へ連れ戻す。

戻ってきた四人は、アルベルトの立案した作戦の耳を傾けた。

死神と双紫電

「すまない、少々事情があり遅れた。今はどんな状況になっている？」

「あ、先生………！ 実は——」

午後の競技が始まって幾ばくか。

遅れて戻ってきたエミヤとルミアは近くにいたシステイーナに状況を聞く。

「なるほど。失速してしまったという事か」

「……はい。一応先生の掲げた上位三位以内を死守、という目標は維持できてますが、それもいつ崩れるか分からない状況で……」

見れば午後の競技も最初こそ優勝・二位を獲得できていたが、今ではギリギリ三位に滑り込む、という形になってしまっている。

全体的な順位も三位に転落しており、二位との差こそ微々たるものだが、優勝を狙うには少し厳しい現実となっていた。

「……ごめんなさい。本当は先生に任せきりじゃなく、私達だけでも勝ちきれないようにならないといけないはずなのに……こんな結果になってしまつて」

悔しそうに拳を握って頭を下げるシステイーナ。

ルミアはその姿に手を伸ばす。

「大丈夫だよ、システイ。まだ、負けたわけじゃないから」

「ルミア……」

「ルミアの言う通りだ。確かに午前の勢いと比較すれば衰退しているかもしれないが、元来君達は三位以内の上位を狙うという目標を達成すること自体困難と思われていた過去がある。それが、今は私が居なくとも上位を死守できているじゃないか。ならば、君達に落ち度はない」

そうだ。これまで全競技で優勝争いを繰り広げていたから、何時の間にか全員が勘違いしていた。

エミヤの姿を見たクラス全員が近くに戻ってくる。

その表情には優勝が遠のいた事への悔しさと、エミヤが帰還したことへの少々の希望が見えている。

「ここから、君達を優勝に導くのは私の役目だ。なに、心配はいらない。まだ優勝の希望は失われていないのだから」

まずは現状の泥沼を払拭し、心火を灯す。

モチベーションというのは人間に思いがけない能力を齎すものだ。

それがポジティブなものか、ネガティブなものか。両者共に齎すのがモチベーション

ン、感情というものであり、それが逆ベクトルなままでは優勝なんて夢の果て。

「——良いか。君達は優勝できる実力がある。ならば、こんな所で諦めるなんて真似は出来ないだろう？」

その問いかけに、クラス全員が呼応を以て返答を為した。

取り戻された優勝への活気。

これがあれば、後は優勝を目指して猛追するのみ。

後は——裏側で躍動する三人の、その健闘を祈る。

現状最高戦力を敢えて囷として使う作戦を提示したアルベルトと、それに賛同したグレンとリエルを信じる。

そうしてエミヤは一度、卓越した瞳で観客席全体を映した——。

時は少し遡る。

弛緩した空気を拭うようにしてアルベルトが真剣な表情で作戦を伝える。

『俺が考えた作戦はこうだ。まず、エミヤとルミア嬢にはこのまま普通に表舞台へと戻ってもらおう』

『あ？ 変装とかしなくて良いのかよ？ そうなれば二人を狙って親衛隊は兎も角、天の智慧研究会は動くんじゃないかねえのか？ つーか、こういう逆境こそエミヤの出番だと思うんだが？』

グレンの疑問は当然だ。

想定通りの言葉にアルベルトはその返答と共に作戦を続ける。

『現状こちら側最高戦力はエミヤ、お前だ。それは俺も理解している。だがそれはこちら側だけでなく相手も重々承知している情報だ。聞くに、お前は王室親衛隊の前で『双紫電』と一度ぶつかっただらしない？』

『ああ。最も、私が見せたのはゼーロスの不意打ちを制止し、真正面で封爆ナイフを投擲しただけだがな』

『十分だ。奴らも防衛に関しては第一線で活躍出来ている実力がある。一目見ただけで、エミヤの相手は一对一では対応できないと悟るだろう』

『なるほどな。つまり、わざとエミヤが表舞台に出る事で親衛隊の奴らも下手に突っかえって訳か』

シロウⅡエミヤの相手は一筋縄ではいかない。

相手が表舞台に戻ってしまえば、それを狙う親衛隊もまた表立った行動をしなければならぬ。

現状警邏と見せかけて表参道を封鎖しているが、それがいきなり魔術競技祭に突入する訳にはいかないだろう。

当然、王室が誇る部隊が突入すれば競技祭に与える影響は計り知れない。

『精鋭を数体送られる可能性があるが、逆に親衛隊全てを相手にするよりかは楽になるだろう。後は、天の智慧研究会だが——』

『そちらの方が問題だろうな。奴らは表裏関係なく目的の為なら人命ですら軽視する。競技祭も、逆に行動を起こすことで中止に持つていければ自分たちに動きやすい状況になることを狙う可能性もある』

『故に三重の構えでこちらも対応をする』

エミヤの情報は周知の事実だ。

それを口に出すことで奴らの特徴をもう一度脳裏に浮かばせる。

『まずグレンとリエルが共に行動し、会場内部の搜索だ。主に密かに侵入した親衛隊の無力化を行いつつ、天の智慧研究会へ特務分室二人が動いているということを思い知らせる』

特務分室はその手の道のプロフェッショナルだ。

それが二人も相手となれば、天の智慧研究会も簡単には動けない。存在を以て行動の邪魔を為せる。

『エミヤはルミア嬢と共に表舞台へ帰還。そして囷としての役割を全うしつつ、観客席全体を監視してもらおう。不審な動きがあればすぐに知らせろ』

『了解した。連絡はアルベルトにすれば良いのだろうか？』

『ああ。俺はグレンとエミヤとの間を繋ぐ連絡係をしつつ、遠距離で両勢力の無力化を図る』

これがアルベルトの作戦。

防衛をエミヤ一人に任せ、攻撃を三人で行うという編成だ。

アルベルトは最後に全員を見渡す。

『何か異論は？』

『私からは特にない。理に適った作戦だろう。それに、何かあれば各々臨機応変に対応することも可能だろうしな』

エミヤの言葉にグレンとリエルは首肯した。

『あの……本当にごめんなさい。私のせいで皆さんに迷惑をかけてしまって……』

『なに、心配はいらない。逆に君を守るといふ命令は、私達にとってはやりがいのある仕事だからな』

それは本当だ。

今回はルミアを守るのであり、暴走した親衛隊や計り知れない天の智慧研究会の殺害が目的ではない。

誰かを守るために力を振るう、それが如何に得難いものなのか。

『……ありがとうございます。でも、無理だけはなさらないでください……！』

その言葉に四人は頷き、各地へ分散。

行動を為すためにこちらも動き始めていた。

そうして、エミヤは耳に仕込んだ通信機でアルベルトと情報交換をしつつ、大本命である優勝を目指して戦った。

アリシアと話すには授与式で、優勝者という称号を持って出会わなければならない。

強行突破は最後の手段。現状、ゼーロスと何故か動かず傍観者に徹し敵味方分からないセリカが居る以上容易な手段ではない。

「次は『決闘戦』か。ここを落としたり優勝は無いな」

エミヤは静かに己のスコアボードを見る。

一時三位まで転落していた順位を二位へ戻し、独走状態だった一組との差も縮めた。

『変身』ではリンが時の天使へ変身し、『グランツイア』は仕込んでおいたカウンターを成功等、様々な形で競技優勝をもち取ってきた。

この『決闘戦』で勝利すれば逆転できるスコア差だが、逆に一組に敗北すればその時点で二組の優勝は無い。

生徒達との約束、裏で蠢動する勢力打破、そして鍵を握るであろう陛下との相対を為さねばならない状況。

故に、優勝は確実にこの手にしなければならぬ。

「とはいえ、既に教える事は教えた。情報も仕込み済みだ」

ここからエミヤが為す事は無い。

後はただ、生徒を信じる。

次々と勝ち星を挙げ、勝ち進んでいくカツシユ、ギイブル、システイーナの三人。そして、ついに決勝まで駒を進めた。

相手は当然一組。優勝第一候補であり、最大の障壁だ。

特に一組対策は抜きになり、こなしてきたが、それを凌駕するのが学年主席を争う者達だ。

「……駄目だったか。いや、最初と比較すれば良くやったと言うべき内容なのかもな……」

先鋒戦。

エミヤが鍛えたカツシユは一組のエナ相手に死力を尽くして戦ったが、あと一歩及ばず。

初戦から蓄積されていたダメージを完全に回復させることが叶わず、カツシユは戦場を後にした。

エミヤはその雄姿に良くやった、と言ったが、少し考えてその言葉は撤回する。

最初から最後まで勝利を目指した彼に、敗北への労いは不要だろう。

続く中堅戦はギイブルと一組のクライス。

後が無い二組だったが、地力の差で戦況を逆転しギイブルが勝利を掴む。

単純な魔術戦を展開しながら、各地に魔術罫を敷設するという戦い方にまんまと翻弄された形となった。

そして、大将戦。

二組が誇る最高戦力システイーナと、一組が誇る最高戦力であるハインケルの一戦。互いに学年主席を争う好敵手であり、それがこの場でぶつかるのは必然だろう。

先ほどのカツシユのような耐久戦では無く、ギイブルのような仕掛けも無い、真正面からぶつかり合う魔術戦。

一進一退の攻防が繰り返され、一時は無限に続くのではないかとも思われた。だが、そこでホームアドバンテージが作動する。

二組の健闘を見守ってきた他クラスの生徒もシステイーナを応援、その波に吞まれるようにハインケルはらしくないミスを連発してしまう。

それでも必死にしがみついていたが——そんな状態で勝ち星を拾えるほど、うちのシステイーナは弱くない。

後手に回った対応のまま何とか耐え凌いでいたが、最後の一撃がハインケルの体を場外へ追いやった。

『き、決まったああああ——ッ!! ハインケル選手、場外です!!』

流麗に磨いてきた風の魔術が決まり、システイーナの勝利。

これで、二組の優勝が決まった。

「いいよっしゃあ——ツ!!」

まずは男子生徒達が観客席を飛び出し、続くように喜びを噛み締める女子生徒達。

会場の中心で一人、見事な戦いを演出し、二組に優勝を齎したシステイーナを囲むようにして二組全員が集まっていく。

興奮冷めやらぬ中、ふとエミヤの耳に仕込んでおいた通信機が起動する。

『流石、というべきか』

「どういうことかね?」

『とぼけるのは止せ。あれはお前が育てた生徒達だろうか? 防衛を軸としながら、攻撃

の一手を模索する、という戦闘方法が一貫されていたからな』

「……なに、私はその才能を開花する手伝いをしたに過ぎない。彼らが勝利を収めたのは、間違いなく各々の努力の結晶だ」

『ではそういうことにしておこう。とはいえ、『翁』以外の特務分室メンバーの成長に携わった者としての実力、見させてもらった。——では、ここからはお前の出番だ』

「無論承知しているさ。周囲の警戒はそちらに一任する。閉幕式は必然的に全生徒が何か所に集まる場面故に、テロ活動にうってつけの時間だからな」

ああ、と返事を貰って通話を切る。

視線の先には会場の中心で喜びを体現する生徒達。

その光景は、やはり夢の如く美しいものだ。

「先生——ッ!! 俺達、やりました——ッ!!」

カツシユの言葉が世界に響き渡る。

夢ならば、せめて美しいままで終わらせよう。

エミヤは観客席を下り、生徒達が集まるその場所へ向かう道中で、そんな事を考えていた。

二組の優勝で魔術競技祭は終幕する。

現在開幕式が恙なくその工程を一つずつ完了させていく。

そして、全ての舞台が整った。

アリシアが表彰台に立つ、後方には腕を組むセリカⅡアルフォネアと、寡黙に威圧感を放っているゼーロスⅡドラグハートが居る。

『それでは、今大会の優勝者である二組の代表者は前へ出てきてください』

「――準備は良いな、ルミア」

こくり、と静かに頷くルミアを連れてエミヤは前へ。

アナウンスが終わると同時に会場中から拍手喝采が鳴り響く。

羨望や嫉妬の視線を一身に受けながら、前へ。

階段を一段一段丁寧に上りながら、道中でセリカと視線が交差する。

その意図が掴み取れないまま、エミヤとルミアは舞台に登った。

――瞬間。

「――ッ!?!」

突然無数の光の線が地面に迸る。

表彰台を中央にした、遮断結界が高速で構築され、エミヤ達を取り囲んだ。

「どういうことだ、セリカ。この行動に何の意味がある?」

「……悪いが、私から言う事は特にない。お前がどれだけの情報を集めてここに来たのかは知らんが、その顛末見届けさせてもらおう」

セリカは終始腕を組んだままエミヤと視線を合わせようとしない。

彼女が展開したのは音すらも遮断する結界術式。外界では異変を察知した親衛隊が結界を叩くが特に反応は無い。

「親衛隊すらも弾きだすとはな。セリカ、君の立ち位置はどちら側だ？」

「どちら側でも無いさ、今の所はな」

意味深な言葉を残すセリカ。

これ以上は答えるつもりは無いのか再び傍観者へと徹した。

「まあ良い。ではこちらも為すべきことを為すとしてしよう。陛下、授与式の前に少々時間を頂く」

エミヤはセリカとアリシアから視線を外すと、ゼーロスを見る。

「一体どういうことだ、ゼーロスⅡドラグハート。貴様がルミアを殺そうとした事実は、如何なる手管を駆使しても覆らない叛逆だ」

「……………」

「まあ良い。では陛下、この事実に対しての処分は如何様に？ 社会から抹殺されていようとも、その男は貴女の名前を不当に利用し娘を殺そうとしたのだからな。とはいえ、こちらも極刑を望んでいる訳では無い。二度と危害を加えなければ、話し合いの余地はあると思っっている」

寡黙を貫くゼーロスを棄て、女王陛下アリシアへ上申する。

「それに、協力者から聞いた話によれば親衛隊は忠誠を誓うはずの陛下に対して拘束行為を為したとな」

「貴様、何処まで知っている……!」

「さあな。そちら側に話す義理は無い」

焦りを見せたゼーロス。

それは競技の最中にグレン・リエルのコンビが掴んだ情報をアルベルトを通じて手に入れたものだった。

暴走行為も彼が主犯と考えることが出来るだろう。

何が目的なのかは知らないが、裏側で力に屈服していようとも表側の権力はアリシアの方が遥かに上。

それに、この場で敵はゼーロス一人。セリカは中立と見れば敵ではない。逆転不可能のチェックメイトだ。

あとはアリシアがゼーロスに対して勅命を下せばよい、それで全てが終わる――。

「――ゼーロス」

「……はっ」

「……その娘を、ルミアアテインジエルを討ち果たしなさい」

空気が逆転する。

ゼーロスに対しての罰則を下すはずの勅命は、ルミアの殺害命令へと切り替わった。

「……馬鹿な。陛下、貴女は自分が何を言っているのか理解しているのか?」

「ええ、理解していません。その娘は私にとつてはあつてはならない存在。一時の幸運で助かり、その存在が再び私と相對したのであれば、殺害を命じるのは当然では無いですか？ エミヤ、貴方は何時も危険因子は早急に取り除くべきと言っていたでしょう？」

「じゃ、じゃあ……あなたの、あの言葉も、あの温もりも、全てが嘘だったと言うんですか……!!？」

ルミアの悲鳴にも似た問いかけがアリシアに向けられる。

「ええ。ただの戯れですよ」

その瞬間ルミアが崩れ落ちる。

「正義は決したな」

「——」

ゼーロスが声高々に宣言する。

そうして彼は唯一、この場で諦めの視線を持っていない反逆者を睨みつける。

「残念だったな、シロウエミヤ。強力な協力者を得たようだがその行動は全て水の泡と化した。何かを掴むためにここまで来たのだろうか？ 救うために良かれと思つた行動が全て裏目に出た心境はどうだ？」

「——陛下、それが貴女の、本心で良いのだろうか？」

「はい。これが嘘偽りない私の本心です」

「フツ……なるほど。すまないな、セリカ。どうやら私はこの土壇場を突破する情報を未だに掴み切れてはいないようだ」

ゆつくりを細剣を抜くゼーロスに合わせるように、エミヤも双剣を投影する。

セリカへと言葉は空気と共に消え去ったが、それが答え。現状打破が叶わない答えだ。

まるで痛痒に歪む表情をしながら嘘偽りない、と話したアリシアの行動から見ると何かあるには違いない。

「——果てるが良い、『死神』。その英雄譚も最期は叛逆を以て終焉と為そう。貴様の功績を讃え、一瞬で終わらせてやる」

「随分と勝ち誇った宣言をしているが、何か勘違いしていないかね？ 全盛期の貴様であればいざ知らず、老獪のみを磨いた貴様程度に敗れる程この身は朽ちていないさ」

「言うではないか、貴様……！」

途端、両者の姿が消える。

そこは壇上の中央、少々後方寄り。

『死神』と『双紫電』の衝突が、数刻遅れた音と共に周知へ知れ渡った。

禁忌教典

実力者、ゼーロスⅡドラグハートとの互角の斬り合いを演出しながら、エミヤの思考は外界へと向けられていた。

視界に映る全てを疑い、簡易的な解析を施すが、何も掴む事は無かった。

つまりは、このフィールドに小細工は無い。

「——何が理由だ。貴様とて、ルミアⅡティンジェルの正体を知らないはずが無かるう」

「知っているとも。知っているうえで、その命脈を断つのが私に下された勅命」

一度両者は距離をとる。

鏢競り合いの競合は一旦閉幕。

「シロウⅡエミヤ。貴様こそ、既に部外者の身でありながらこちらの事情に首を突っ込むのは止め。軍人時代から、貴様の自由な行動に振り回された人間がどれ程の数居ると思っている？」

「私は私の為すべき事象を為しただけだ。差別が蔓延る不文律を許容出来るほど、私は出来た人間では無くてね」

言い合いを続けながら、その端々に隠されている答えを模索する。

ゼーロスはルミアの正体を知っている。その上で彼女の命を絶つ理由がある。

これが今の会話で得られた情報だ。

「ハッ、貴様が出来た人間では無いなど、既に認知しているわ——ッ!!」

突貫するゼーロス。

その行動の裏にはエミヤに余裕を与えないという戦闘倫理が刻まれている。

紫電の如く進む二刀細剣を、錬鉄の如き強度を誇る双剣で受け止める。

「それは、随分と呆れられてしまったらしいな」

「貴様と言う人間の實力を認めているからこそその評価だ。救うことばかりが正義ではな

い。時として、見捨てることも正義となる」

見捨てること、か。

では、こちらもルミアの命が狙われている理由を推察しようか。

現状、王室親衛隊の暴走はゼーロスが主犯と見て間違いない。

アリシアはルミア殺害の勅命を改めて命じただけであり、暴走を認知している様子で

は無かった。

なので、やはり彼女は暴走に巻き込まれただけなのだろう。

ここで一つの疑問が生じる。主に絶対の忠誠を誓う親衛隊が、どうして独断でルミア

「テインジェル、より詳しく言えばエルミアナを狙う行動を選択したのか。

一つだけ考えられるとすれば、優先順位の差——。」

「……余裕そうだな。私との戦いは、それほどまでに退屈か」

「退屈では無いさ。私としても、貴様……いや、君との戦いは何の縛りなしで戦いたい」
「その舐めた口調は一貫して変化することないな。そこまでくれば、いつそ称賛したいものだ」

二刀細剣という特殊な戦闘スタイルだが、何度も視認している以上簡単な癖は理解している。

常人では考えられないスピードから繰り出される連撃は、なるほど確かに『双紫電』という渾名に相応しい。

とはいえ、速度勝負でエミヤが負ける道理は無い。

右下からの一撃を往なし、腹部に蹴りを入れる。

「グッ……！ 足癖の悪い男め……！」

手を抜いたとはいえ隙を穿った一撃は歴戦の騎士だろうとそれなりのダメージを与える。

吹き飛ばされたゼーロスは靴底で引き起こされる摩擦を利用し、直立を維持しながらも肺の空気を全て吐き出した。

「生憎と、褒められた戦いを好めるほどの余裕は無い人生でね」

「戯言を……!」

それ以上喋る余裕は無いのか、ゼーロスには追撃しないと見るや一度呼吸を落ち着ける。

エミヤはその状況下の中で、ゼーロスが喜々としてルミアの殺害を実行する理由を逡巡する。

ルミアの素性を知っているであれば、嫌々なら理解できるが喜々として実行する理由が見当たらない。

彼はそこまで非道な人間では無いはずだ。そんな人間が、かつて英雄として国を守るために命を懸けたとは思えない。

ここで、天の智慧研究会という存在を思い出す。

——まさか、奴らがアリシアの命を狙っているのか。

そんな予想が脳裏に過った。

「え、エミヤ先生……その、大丈夫なんですか……?」

「ん? ああ。心配はいらない」

ルミアの声で現実に戻される。

元は王室の人間として、ゼーロスⅡドラグハートの実力は知っているのだろう。

それを軽くあしらうエミヤに何を思ったのか。

一方アリシアの方は淡々と、現状を俯瞰していた。

いや、時折こちらに向けられる視線は嘆願か。

「ルミア、少しだけ待っていてほしい。もう少しで、君のお母さんが陥っている状況を理解できるかもしれん」

「え……？　でも、私は……」

「大丈夫だ。君は愛されている。今は何らかの状況に囚われて、そう言わざるを得ない状況に陥っているだけにすぎない」

ルミアは心配そうな顔をしていたが、エミヤの言葉に強く頷く。

先ほどまで崩れ落ちていた姿だったのに、今は少しずつ普段の気丈な雰囲気を取り戻しつつある。

「……理解できないな。ルミア―ティンジェル、貴様は根拠のない言葉を真に受けるのか？」

「いいえ、根拠はあります」

「何――？」

二刀細剣を構えるゼーロスヘルミアは告げる。

「――私は、先生を信じてますから」

それが全て。

この逆境を乗り越える根拠は、それだけで十分だった。

それを見たゼーロスは一度、極限に目を見開き、そしてため息をつく。

「……やはり理解できん。この男に、その一言を告げるだけの信頼があるというのか……」

「ゼーロス。一つだけ聞きたい。私の推察が間違っていないかどうか、その確認をしたくてね」

「……良いだろう。貴様の稚拙な推察を告げるが良い」

「君達が恐れているのは、陛下の命が奪われる事だろうか？」

その一言を聞いたゼーロス、アリシア、ルミアは瞠目する。

セリカは感心したように息を漏らしていた。

その光景を見てエミヤは悟る。

「やはり、か」

王室親衛隊の暴走が引き起こされる原因として一番考えられるのが、主であるアリシアの危機。

それを狙っているのが天の智慧研究会だとすれば、いくら千秋の修羅場を乗り越えてきた彼らとて最悪の一手を選択する。

そこに優先順位の差が関係する。

第一優先であるアリシアの命を貴び、嘗ての娘だろうとその命が必要であれば容赦なく切り捨てるだろう。

エミヤに情報提供をしたエレノア・シャーレットの言葉にもあつたように、天の智慧研究会はルミアの命を狙う勢力も存在する。

彼女を狙う為にアリシアを人質にされたというのが、妥当なラインか。

「……つくづく奇妙な男よ。魔術師としての階位では最下層に甘んじているというのに、その真価は私の老いた体程度であれば容易に突破するか」

観念したかのように呟くゼーロス。

過去には英雄として名を馳せた存在だが、現在ではエミヤ相手に何も為せない己が不出来を呪っているのだろうか。

とはいえ、英霊として昇華された存在であるエミヤからすれば、ゼーロスの太刀筋は常人のそれを幾重にも凌駕している。

老獪さを剣に込め、全盛期の輝きを技術を以て追い越す。

若造と言われたが、こと戦闘経験ではゼーロスを大きく引き離しているエミヤに人間の身で肉薄する事実は誇つても良いのだろうか。

最も、彼はエミヤを人間として見ているのでその賞賛は叶わないが。

「そこへ至ったのは褒めてやる。だが、それを打破する術を貴様は持っていない。結局のところ、貴様もわしも袋小路なのだ」

「はたしてそうだろうか？」

「何——？」

胡乱な瞳を向けるゼーロスをそのままに、エミヤはアリシアを見る。

この事象と関係があるかどうかは分からないが、一つだけ気になることがあったのだ。

それを問いただす時間ぐらいいは残されているだろう。

「陛下。一つだけ聞きたい事があるのだが、構わないかね？」

「はい。何でしょうか、エミヤ？」

一見冷徹な無表情をしているかに見えるアリシア。

だが、それが仮面であることをエミヤは知っている。

「君が今つけているネックレス——普段のモノとは違うようだが、その理由を聞いてもっ。」

空気が変わる音がした。

不穏に包まれた雰囲気は一変し、曇天に光が突き刺さる。

この場に居るエミヤ以外の人物はその表情を大小あれど変化させた。

その中でアリシアは、まるで願いが叶った娘のような表情を一瞬だけ覗かせる。

「私が君に仕えていた時は、もっと別のものをつけていた気がしたのだがね」

「ふふ……そうですね。ですが、時間とは変化を齎すものです。貴方が私の部下から魔術講師になったように、私にも気持ちの変化が起こったのかもしれないよ?」

「ほう、断言はしないのだな。とはいえ、嘗ての部下からの具申として一つ。貴女には、その呪いに拘泥された翠緑の輝きより、思い出が詰まった質素なロケットペンダントこそ相応しい」

するとエミヤは一步を踏み出す。

その行く手にはアリシアが泰然と待っていた。

「待て、シロウ＝エミヤツ！ 貴様は一体、何を為そうとしている……!?!」

「言っただろう？ そのネックレスを外し、相応しいペンダントをつけてもらおうとおもってね」

「な……!?! ま、待てっ!」

エミヤとアリシアの間に、ゼーロスが割り込んだ。

「貴様、全てが分かっているのだろう！ ならば、余計な事をするな……!」

「余計な事ではないさ。文字通り、その呪いを祓おうと思っただけ」

「その言葉を、わしが信じると思っただけか!?!」

「信じないのであれば、それはそれで構わない。君の全てを包括し、私を止めると言うのなら止めはしない」

エミヤの試すような笑みに、ゼーロスは冷や汗を流す。

呪いを解呪するには間違いなく魔術が必須となる。

だが、周知の通りエミヤは解呪術式を行使出来ない。

嘗ては共に部下として帝国に尽力をしてきた関係だが、彼が齎した功績のみで判断できるとゼーロスは軟ではない。

その答えを為すかのように、ゼーロスは握っている二刀細剣を再び構える。

シロウエミヤに全てを託すと言うのは、間違いなく『死神』との契約。

それに絶対的主の命を託すわけにはいかない。

「なるほど。流石は、王室親衛隊総隊長というわけか。とはいえ、時間を費やすつもりは無い」

「ああ。貴様に言われなくとも、そんなことは分かっている——ツ！」

瞬間、二人の姿が世界から消え失せる。

寸毫の果て。一瞬の攻防。

数刻遅れた音と共に告げられた決着の鐘。

両者の立ち位置は逆転し、その歩みは止められた。

「——グフツ！」

咯血を吐きだすゼーロス。

鎧ごと切り裂かれた一撃は、空中に舞う鮮血と共に崩れ去る。

「——見事。その一撃が一瞬早ければ、この決着は逆転していた」

そう告げたエミヤの服装には、微かに刃が迸った痕がある。

糸は解れ、その部分は霧散する。

文字通り双紫電と呼ばれし男の、乾坤一擲。

己が限界すらも凌駕して、ただ主の為に立ち塞がった男は、人間の枠組みから一瞬のみ解き放たれ、錬鉄の英雄に一時の所まで肉薄したのだった——。

「すまない。浅くとはいえ、結果的に君の部下を傷つける結果となってしまった」

「いえ、貴方が謝ることではありません……」

アリシアに近づくエミヤ。

その手には、何時の間にか刀身がギザギザに歪んでいるナイフが握られていた。

「これは私の失態。彼らに付け入る隙を与えてしまった、私の責任です」

「君だけの責任ではないと思うが……君は、退かないのだろうか」

二人は手を伸ばせば届く距離にまで近づいた。

するとエミヤは、手に持ったナイフを振りかぶる。

「——待て、シロウ!! エミヤツ!!」

立ち直ったゼーロスの制止。

だが、時すでに遅し。

振りかぶったナイフ。

その剣先で翠緑のネックレスを貫いた——。

エミヤが投影した武器、破戒^ルす^ルべき^レ全^イての符の剣先が突き刺さったネックレスは内包していた呪的効果が霧散し、アリシアの首元から離れる結果となった。

その剣が担う能力は対魔術、対象に剣先を突き立てるだけで魔力を霧散させるというものだ。

『愚者』が行使する愚者の世界と並んでこの世界においては反則じみた能力として存在を確立させ、『死神』の名を知る者であれば真つ先に警戒する一手。

周囲に魔術封殺の結界を展開する前者は、同時に担い手も魔力を封殺されるというデ

メリツトを被る。

だがエミヤが担うそれは、効果範囲が剣先と限られたものである代わりに、上記のデメリットが無い。

——と、簡単にこの魔術が蔓延る世界にて文字通りジョーカーという切り札を持つ二例を挙げたが、詳しくは後の話。

今は現実へ戻る時間だろう。

その後、負傷したゼーロス等どう考えても取り繕う隙が見えない現状であったが、アリシアの言葉巧みな誘導により無事に『魔術競技祭』を閉幕させた。

この辺りは流石と言うべき技術だった。

「悪かったな。何の説明も無しに、お前に全て任せる結果になって」

「なに、君の立場は理解している。親衛隊が君を一番に警戒するのも当たり前の話だ」

式典の終わり、エミヤとセリカは互いに正面を向きながら会話を交わしていた。

談笑しているような雰囲気には見えないが、それでも二人にとっては日常の会話である。

「まあ正直な話、然程心配はしていなかったのが本音だな」

「ほう？ それはまた、随分と高い評価を頂いているものだ」

「当たり前前だろ？ なにせ、お前とは絶対に正面から戦いたくないからな。それ相應の

評価を下しているつもりだ」

苦笑いをしながらセリカは告げる。

「自己評価は低くないつもりだ。それでも、お前に勝つビジョンはどう考えても見つからない。もし私が勝つたとしても、それはお前が何らかの原因で全力を出せていない場合に限られるだろうな」

「何を言うかと思えば。君ほどの高尚な魔術師に認められるのは光栄な事だが、私が全力であれば勝てないと断言するのはどうかと思うがな。君は、この世界で最強の魔術師だろうか？」

「最強なんてただの飾りさ——それは、真実を取り返せない現状とお前を見てれば痛感する」

エミヤの言葉に陰鬱そうに微笑むと、セリカは話題を切り替えた。

「陛下がお前とルミアアテインジェルをお呼びだ。すぐに参上しろときさ」

それがエミヤに話しかけた要件だったのか、セリカは背中越しに手を振って去っていく。

彼女を引き留めることも無く、エミヤは式典の片付けで働いているルミアの元へ向かっていった。

その最中、

「——セリカⅡアルフォネア。君が、何を求めているかを私は知らない。とはいえ、力になれる事があれば力になろう」

少しずつ去っていく背中に、同じく背中越しに伝える。

「ああ——もし、そんなときが来れば、容赦なくお前をこき使つてやるよ」
「ではその時が来るのを、楽しみに待っているとしよう」

その約束が果たされるのは、きっとそう遠くない未来——。

その後、アリシアに呼ばれたエミヤとルミアは様々な事情聴取を受けた。

当然だろう。なにせ、魔術競技祭という大規模イベントの裏側で、陛下の命が狙われていたのだ。

今後はイベントを控える、なんて最悪の事態に陥る可能性も十分見えているだろう。事情聴取一つ一つを克明に答え、出来るだけルミアへの負担を軽減させたエミヤ。

二人は最後にアリシアと共に話し合う時間を作ることが出来た。

だが、その場からは離れた。今は親子水入らずの時間が必要だろう。

「——その辺りの気は利くのだな」

アリシアとルミアを部屋に残し廊下に出たエミヤは、同じく廊下の壁に寄りかかっていたゼーロスと出会う。

「君は私を空気が読めない何かと勘違いしていないだろうか？」

「事実だろうか？ 貴様の人助けの精神は立派なものと理解しているが、それが理由で一々上層部と争っていたんじゃないかと思われても仕方が無からう」

「人の命を同調圧力で軽視することは、どうも出来なくてね。とはいえ、そこまで迷惑をかけていたのなら謝ろう。もう遅いのかもかもしれないがね」

「遅すぎるわ。全く、貴様とイグナイト卿の衝突で、わしや陛下がどれほど振り回されたか」

頭を抱えてエミヤに苦言を呈するゼーロス。

その言葉の中にあつた一つのキーワードに、エミヤは食らいつく。

「イグナイト卿……一つだけ確認したいのだが、彼は今健在か？」

「己が意見全てに反対する部下が居なくなり、卿の影響力は今や陛下を覆いつくそうとしている程にまで広がっている」

「……それは少々、不味い展開だな」

「そうだ。貴様に抑止されていたが故に、その縛りから解き放たれて自由勝手にやっていると言った方が正しいのかもしれない。現状表向きは陛下に敵対する行為を見せてはいいないが、奴と陛下の理想は相容れない。いずれ衝突するはずだ」

するとゼーロスは壁から背中を離し、エミヤを直視する。

「貴様に問う。——もう一度、こちらへ戻ってくるつもりは無いのか？」

「それは、私をイグナイト卿へのカウンターとするためだろうか？」

「そうだ」

「ここまで言いきられたら清々しい。」

イグナイト卿——アゼル＝ル＝イグナイトという存在があるために、それを排除するためだけにエミヤへの救助要請を為した。

とはいえ、それを受け入れることは出来ない。

「有難い申し出だが、それは実現できない」

「理由は？」

「私が戻ったところで、アゼル＝ル＝イグナイトに対抗できるとは思えない。むしろ私
が逆に排除される結果となるかもしれん。そして、今は魔術講師という仕事もあるので
ね」

「そうか、そうだな。すまなかった。だが、無期限の停職処分が下っているだけというこ

とは忘れるなよ」

「無論忘れはしないさ」

今のエミヤは魔術講師だが、軍人の肩書きも忘却していない。

それを確認したゼーロスは何び壁に背をつけ黙り込む。

そして、これ以上二人がしゃべることは無かった。

「ようやく解放されたな。とはいえ、出来事の重大さを考慮すれば当然の結果か」

「そうですね……今回は私達も中心人物ですから」

「ああ。それにしてもルミア、君は疲れている様子では無いな」

夜分遅く。

既に太陽の煌めきを失った夜天が覆いつくす中。

二人は街灯が照らす道を歩いていた。

「はい。あの人——いいえ、お母さんと話せて、少し気が楽になったからかもしれないませ

ん」

「そうか。その様子では、有意義な時間になったようだなによりだ」

数年にもわたって繰り広げられてきた親子の確執は、少しずつではあるが溶かされつつあるらしい。

それだけでも今回、修羅場を潜り抜けた甲斐はあつたというものだ。

残る懸念は後日再び召喚されることだ。

エミヤの立ち位置は軍内でも特殊、有体に言えば結構ネガティブな場所に居る。

なにせ上官に幾度となく異論をぶつけてきた結果、無期限の停職処分を下されたのがシロウⅡエミヤという存在だからだ。

よって今回勲章級の活躍をしたにもかかわらず、眼に見える形での労いが無いのはこの為。

アリシア本人はそれを悲しそうに伝えてくれたが、過去の結末を振り返れば妥当だ。

「さて、皆が打ち上げをしている店はここだな」

ルミアと会話を交わしているうちに、二人は一つの店の前で立ち止まる。

「そういえば、今日は先生の奢りでしたね」

「まあ、ここまで頑張ってくれたからな。それに対するささやかな労いだ。ルミアも、遠慮する必要は無い」

「ふふつ。では、私も先生のご相伴にあずかりますね」

そうしてエミヤは店の扉を開ける。

瞬間、鼻を劈くアルコール飲料の匂い。

外界との変貌に、思わずエミヤは顔を顰める。

「あー、先生にルミア、遅いですよー」

入ってきたエミヤとルミアを見て声をかけてきたのはカツシユ。

頬を上気させながら近づいてきた彼に、エミヤは苦言を呈する。

「すまない。とはいえ、この惨劇は何だ？ 私の目が曇っていなければ、そこらのテーブルに積み上げられているのはアルコール飲料に見えるが？ それも悉く高級な代物にな」

「え？ ……あはは、すみません。皆先生が奢ってくれるから、どうせなら色々頼んじやおうぜって感じで。酒は、成り行きって感じで……」

「……まあ、特別に今日だけは咎めはしない。とはいえ、限度は守るように」
はーいっ！ と元気な声を聴く。

その後カツシユに続いて皆、酒で上気させながらもエミヤに対してお礼の言葉を述べてきた。

お礼を言われる事に対しては有難いのだが、皆酒が入っているのを見ると心配になっ

てくる。

羽目を外す事に対してとやかく言うつもりは無いのだが、やはり咎めた方が良いでしょうか。

逡巡していた所に、一人の女生徒が近づいてきた。

「……すみません、エミヤ先生」

システイーナは惨劇に対して苦笑いを浮かべていたエミヤとルミアの前に来ると、謝罪をしてきた。

「私が居ながら、こんな感じになってしまつて」

「まあ、今まで緊張していたからな。それが一気に解き放たれて、こうなつてしまったのだらう」

「えつと……怒らないんですか？」

「言いたいことはあるがね。皆の頑張りを見ていた手前、厳しい事は言えなくてね」
するとシステイーナは驚いたように瞠目し、笑みを浮かべた。

「どうした？」

「いえ、最初は先生つて厳しい人なのかなつて思つてたんですけど。こうして関わりを持つていくと、印象と全然違うなつて」

「そこまで堅物ではないぞ、私は。君も疲れただらう？ 皆と共に楽しんできなさい。」

今回は私の奢りだ。ルミアも、遠慮せずに行くといい」

「ありがとうございます。じゃあ、システイこっか?」

「そうね……あ、ごめん。ちよつと、先に行つててもらつても良い? 少し先生と話したい事があるから」

その言葉の意図を理解したのか、ルミアは微笑んで先に行つてるね、と告げた。

そしてシステイナがエミヤに向き直つた。

「ありがとうございます。先生のご指導が無ければ、私達は優勝できなかったかもしれません」

「そんな事は無い。この優勝は君達の努力の賜物だ。私の指導を受けたところで、本人にやる気がなければ実力は伸びないからな」

最後まで謙遜を続けるシステイナに対してエミヤは言う。

優勝は君達の成果であり、私個人の影響は少ない、と。

「それでも、ありがとうございます。私達を優勝まで導いてくれて」
頭を下げ、顔を上げたシステイナは笑っていた。

その表情を見ることが出来ただけでも、エミヤの努力は報われた。

そのままシステイナは先に行つたルミアの背中を追っていく。

「———こういう日常も、悪くないな」

その中で一人、エミヤもこの陽だまりの日常を羨ましそうに見つめる。

全てを取りこぼしてしまった人生で、

理想を追い続けた果てには何も無くて、

悟った時には遅すぎて、

絶好の機会で答えを得て、

今はこうして忘却の彼方へと置き忘れてしまった日常に触れることが出来ている。

その輝きが、如何に尊いものなのか。

——それを、オレは知っている。

しばらくして、打ち上げは時間の経過と共に静けさを迎えていた。

エミヤはそれを察し、極力一人で帰らないように数人組を作つてその背中を見送つ

た。

「すみません……あの後、システイお酒を飲んじゃつて」

「君が気にする必要は無いさ」

現在再びルミアと肩を並べて歩いている。

打ち上げ以前と違う点があるとすれば、それはエミヤの背中で寝息を立てているシステイナーナの存在だろう。

「今日は本当にありがとうございました」

「何度も言っているだろう？ 今回の優勝は君達の成果であつて、私個人としては特に何もしていないとな」

「いえ……今のは、お母さんに出合わせてくれたことへの言葉です」

するとルミアは慎重な声音で言葉を続けた。

「私は先生に、何度も助けられてばかりですね」

「そうだろうか？ 私は君達の先生として当然のことをしているに過ぎないが」

「では、昔私を助けてくれたことは、どうなんでしょうか？」

「昔——それは、彼の森での出来事だろうか」

「はい」

以前は誤魔化していたが、既に誤魔化せはしないだろう。

真剣な瞳を向けたルミアに、エミヤはその出来事を知っていることを認めた。

「——あれは、君のお母さんに頼まれたことだね。私が助けたという事にはならない

だろう」

「でも、お母さん言っていましたよ？ そのことを伝えたら、真剣な表情で場所を伝えろつて先生が言つたつて。その決断は先生がしたものですよね」

どこまでアリシアに聞いたのだろうか、とエミヤは苦笑いを浮かべた。

確かに自分の話を使つても構わないと言つたのはエミヤなのだが。

いや、丁度良いか。彼女の浮かべる幻想も、ただの馬鹿な男が行つたことだと知つてもらうには都合が良い。

「——君が言う程、私は素晴らしい人間では無いさ。……とある理想を追つていてね。それが叶わぬと既に知りながら、未だに諦めずにいるような中途半端な男が私だ」

「その理想つて……？」

「誰にも泣いてほしくない。そんな、荒唐無稽な理想だよ。どうだ？ 馬鹿馬鹿しいだろう？」

「——いえ、私はそんなことないと思いますよ？」

自嘲気に述べたエミヤを、ルミアは反対する。

「確かに実現は難しいかもしれませんが。とはいえ、それに救われた人も居たはずですよ、私も、その一人ですから」

「ルミア……」

肩を並べて歩いていてルミアは、エミヤの前に立つ。

「あの時言えなかつたことを今言います。———ありがとうございます。何も分らない、未熟だった私を助けてくれて」

そう言つて頭を下げる彼女は、以前の森で見た泣きじやくつていた少女とは見違えていた。

この成長を見ることが出来たのも、エミヤが助けたからだ。

夜天の中に、煌めく無数の星々。

太陽には及ばない輝きでも、力強く煌めく星々に照らされる。

ああ、思えば助けた時も斯様に星がきれいだったか———。

「———なに、私は当然のことをしたまでだ」

「それは正義の味方として、でしようか？」

「ああ。そうだな」

時間は流れていく。

変わるものもあれば、変わらないものもある。

君を守ると言つた約束は———きつと、変わらないものなのだろう。

そのままシステイーナとルミアの家に到着した。

一瞬だけだが家に上がったエミヤはベッドにシステイーナを寝かせ、そのまま別れた。

今日は大変な一日だった。ルミアもこの後はゆつくりとしたいだろう。

「——お疲れ様でした、エミヤ様。流星というべき活躍でございました」

「エレノア〓シャーレット。夜分遅くに何の用だ？」

一人で歩いていった帰り道。

その背中に接触してきたのは、エミヤに天の智慧研究会の存在を示唆したエレノアだった。

「警戒されているご様子ですね」

「当たり前だ。こちらは貴様の正体を知っているのですね」

エミヤはルミアと共に受けた事情聴取の最中、エレノアについての真実を知らされた。

彼女が陛下を奸計に陥らせた諸悪の根源であり、その正体は天の智慧研究会所属の外

道魔術師。

故に、過去の関係がどうであれ接触してきたのなら排除するのがエミヤが為すべき未来だ。

「トレス、オン
投影、開始」

「な——ッ!？」

姿が消える。

ゼーロスと互角の戦いを演出していた時とは訳が違う。

今回が正真正銘、英霊エミヤの真骨頂。

流麗に紡がれた一太刀は、寸毫の狭間にて掻き消えた距離と共に肉薄され、その体に傷を負う。

防衛無しに袈裟斬りを受けたエレノアは対処の間も無く命脈を途切れさせる結果となる。

「私としては君個人に恨みはないが、許せ」

投影した普遍的な剣を霧散させ、道端に転がる先ほどまで人間だった残骸を見る。

その視線は、酷く冷徹な瞳であるだろう。

すると、エレノアは口元を歪ませた。

「なるほど、これが彼の御方を殺した『死神』の力と言う訳でございますか」

「——貴様」

まるで映像を逆再生しているようなモーションで立ち上がったエレノア。

エミヤによって与えられた傷はみるうちに回復していった。

「流石でございませう、エミヤ様。その実力の片鱗、しかと目に焼き付けさせて頂きました。これは今宵の内に排除するのは不可能でございませう。それでは、これにて」

「少し待て。一つだけ問いたい事がある」

「——はて、何でございませうか？」

立ち去ろうとするエレノアに声をかける。

彼女の行動に一つだけ、理解できないものがあるのだ。

「貴様は何故、私に天の智慧研究会が動いているという発言をした？ それが必要ならば王室親衛隊への対応に追われていただろうに」

「それは、エミヤ様の行動を制限するためでございませう。貴方に好き勝手動かされてしまえば、こちらには不都合でしたので」

「なるほどな。とはいえ、結果的に私の動きを天の智慧研究会にのみ集中させることになってしまったということか」

そのことを告げるとエレノアは少々自嘲気味に話す。

「貴方様を完全に封じ込める事は不可能でございませうから。致し方無い結果でございま

しよう」

するとエレノアは一度だけエミヤを見る。

「——『アカシックレコード禁忌教典』。これが我々の目的でございます」

「それを私に告げる意味は？」

「意味等ございませぬ。ただ、今回の勝者へのささやかなご褒美程度に思っただけ
れば」

「——ほう。それを伝えたところで、貴様を逃がす理由にはならんがな」

今度は使い慣れた双剣を投影するエミヤ。

だが、その狭間で。

「——これは、一体」

エレノアの周囲から浮かび上がってくる死屍累々。

腐敗した肉体を行使し、その悉くがエレノアを守るようにして立ち塞がる。

「エミヤ様相手には時間稼ぎ程度にしかならないでしょうが、私にとってはそれで十分。
再び相まみえることを楽しみにしています」

そのまま姿を晦ませるエレノア。

浮かび上がった死体を対処しながら、エミヤは逡巡する。

「アカシックレコード禁忌教典。久方振りに聞く単語だな」

少しずつ、少しずつではあるが、エミヤは悟る。

この世界に自らのようなイレギュラーが召喚された理由に、近づいているという事を。

第3卷

突然の編入生

「さて、私に何の用だろうか、学院長。再び面倒事に巻き込もうとしているのであれば、すぐさまここを立ち去る用意は出来ている」

「ふおふおふお。そう警戒しなくても大丈夫じゃよ。今回は本当に重大な話じゃ」

先の魔術競技祭からしばらくして。

突然学院長室に呼ばれたエミヤ。

室内には誰も居なく、エミヤとリックの二人だけだ。

「はたしてそうだろうか。以前も重大な任務と言われて来てみれば、幽霊退治を任せられる結果になったことがあったのでね」

「とはいえ容易に他の人間に任せることも出来んのじゃよ。本当はセリカ君辺りが実力的には適任じやろうが、何せ魔術の規模が激しくての。容易に動かせば一日で学院が崩壊する結末へまっしぐらじゃ。そこで君がそういう面倒事には精通しているとセリカ君に聞いたんじゃよ」

セリカには少々言いたい事があるが、一先ずはリックの話を書くべきだろう。

エミヤは警戒を解くと、話を聞く姿勢に入る。

「それで、改めて問うが私に話とは？」

「それがな、エミヤ君。明日からこの学院に編入される生徒を君達のクラスで受け持つてほしいのだよ」

「随分と急な話だな。とはいえ、その程度ならばわざわざこうして私を学院長室へ呼ぶ理由にはならないだろう？」

「話が早くて助かるよ。君には先にこれに目を通してもらいたい」

そう言つてリックが取り出したのは筒形の封筒だった。

その形状や、外面を覆う高級な皮にエミヤは見覚えがあつた。

一応その疑問を表に出さず渡された封筒を開けると、一枚の羊皮紙が姿を見せる。

「やはり、帝国政府の公文書か……！」

鷹の紋章が示す書類の高尚さは言うまでもない。

エミヤは内容に目を通すと、そこには確かにエミヤのクラスへ編入生を迎え入れるように書かれた帝国政府直々の指令書だった。

「エミヤ君。その編入生と言うのはルミア君の周辺警護として派遣されることになった帝国宮廷魔導士団の魔導士じゃよ」

「なるほど——確かに、この指令は合理的と言えるだろう」

ルミアⅡティンジェル周辺の事情は喫緊の課題だ。

天の智慧研究会が本気を出して彼女を殺害にくるのであれば、エミヤ一人ではカバーしきれない部分はどうしても存在する。

エミヤはその存在も知られており、何より教員と言う目立つ役割を担っている。

それが学友としてもう一人帝国宮廷魔導士団の魔導士が派遣されるのであれば、より盤石な陣容となるだろう。

とはいえ、奴らがルミアを狙う理由については理解できない部分が多々あるのだが、それは護る過程で見つけていけば良い。

「ほう？　では――」

「喜んで私のクラスに迎え入れよう。この申し入れは、私としても有難いものだ」

「そうかそうか。それは良かった。では、その書類に編入生の詳細が記載されているから参考にしてくれ」

そう言われエミヤは再び書類に目を落とす。

しかしエミヤにはある程度編入生の詳細は予想できていた。

今回のルミアⅡティンジェルの警護だが、当然普遍的な魔導士に務まる任務ではない。
い。

エミヤと連携をとりつつ、ルミアに信頼され周辺を警護する。

予想通りであれば、今回の任務はエミヤの嘗ての職場である『特務分室』から選出されると思っていた。

魔術絡みの案件や事件を専門に処理する秘匿性の高い特殊部隊、それが彼らなのだから。

「——リリエル＝レイフオード」

書かれた名前を読み上げた瞬間、エミヤは思わず感嘆の息を漏らしてしまった。

「む？ どうしたのかね？」

「ああ、すまない。何でもない」

確かにその名前はこの任務に合致するだろう。

エミヤとの交流もあり、ルミアと違和感なく接することが出来る外見だ。

だが、そのこと以上にリリエルがこの学院へ来るという事実にはエミヤは喜びを感じていた。

家族の温かみを知らず、内包された戦いへの才能のみで人生を歩んできた少女が、ついに日常に触れることが出来るという奇跡を喜んでいた。

「これは——少々為すべきことが多くなつたな」

任務も大事だが、日常に触れることが彼女の成長にもつながるだろう。

「——遅くなってごめんなさいっ！」

翌日の早朝。

エミヤはフェジテのそこらにある自然公園の一つで、ベンチに座りながらその声を聞き届けた。

こちらへ向かって銀髪を揺らし、息を切らしながら走ってくるのはシステイーナ。そう。今回は彼女にエミヤが呼ばれたのだった。

「いや、指定された時間の十分前だ。君が謝るような事は一つもない」

「それでも、先生を待たせてしまいました……！」

「なに、私もつい先ほど来たばかりだ。気にする必要は無い」
本当は数時間前に来ていたのだが、それを言う必要は無い。

睡眠が不要なエミヤは直近に被った襲撃を警戒し、フェジテを毎晩駆けている。英霊という存在から睡眠が必要ないエミヤに対してシステイーナは人間だ。

むしろ早朝でありながら約束の十分前に来たことへ賛辞を贈るべきだろう。

「それで、魔術戦を教えて欲しいという要件だったな」

その言葉に頷くシステイーナ。

「お願いします……！ 私一人でも、あの子を守れるようになりたいんです……！」
頭を下げて頼み込んでくる。

あの子——ルミアの事情を知る数少ない人物として、その一助になればと思つて
いるのだろう。

ルミアを助けたい。その漠然とした理由は、確かに真面目で魔術の素養があるシス
テイーナを突き動かすには十分なものだ。

とはいえ、その一言の重みを知る人間として、エミヤは簡単には頷けない。

「システイーナ、君の言いたいことは理解できる。とはいえ、ルミアを守るといふ事は、
奴ら——天の智慧研究会とも衝突する可能性が浮上する。確かに君の才能は素晴ら
しいが、半端に力をつけたところで奴らへの対抗策には成り得ない。もしかしたら、そ
のせいで逃げ出す事も出来ず目の前でルミアを殺される可能性もある」

「——っ！」

少々意外な反応だったのだろう。

目を見開くシステイーナだったが、その言葉の意味はしっかりと理解しているよう
だった。

「確かに、先生の授業で魔術が齎してきた凄惨な過去は知っています。それを引き起こしてきたのが天の智慧研究会だっていう事も……。でも、私はあの子が危険にさらされている中で、一人だけ安全な場所で待っているなんて事はしたくない……！」

その願いは、確かにきれいな物だろう。

正義の味方などという普遍的に理解されない理想を我武者羅に追いかけてきた人生を背景にするエミヤは、システイーナの気持ちは痛い程理解できる。

自分だけ待っている、自分は何も出来ない。その時ほど、己の無力さを呪った事はない。

少し空を仰ぐ。

広大に広がる青空を前に、空高く浮遊する『メルガリウスの天空城』は泰然とこちらを見下ろしている。

空に手を伸ばす程の馬鹿げた理想を走り抜けたエミヤに対し、システイーナの願いは友人を救いたいというもの。

善良な人間が抱える、ごく当たり前な願いだろう。

「君の気持ちは理解できる。だが、君が自分の為に傷付くことをルミアは優しく微笑まないだろう」

「それは……」

「守られる側が齒痒い思いをするのはいつだって同じだ。君もそんな思いから私に特訓をして欲しいと申し出たのだろうか？　しかし、それはルミアとて同じ事だ。良いか？

守る側に立つという事は、己の生死に対する責任は当然の事、守られる側に対しても何かを背負わせてしまっているということを理解しなければならぬ」

まあ、それを終ぞ理解できなかったのが目の前に居る男なのだがな、と。呟くことなく虚空へ。

システイーナはエミヤの言葉を受け、視線を下に向ける。

「……先生の言葉は、ごもつともです。でも、私は……！」

そう言つて拳を握る姿に、懐かしいものを見る。

「どうしても、君はルミアを助けたいと言うのだな？」

静かに頷くシステイーナ。

彼女を死地へ送り込む事は無いのに、こう言つてしまうのはその願いが美しいものだからだろうか。

他人へと向けられたベクトルの願い。それが尊いものならば、魔術の道を踏み外す事は無いだろう。

その過程で踏み外したとしても、それは教師としてエミヤが導いてやればよい。

それに、彼女が強くなるのは悪い事じゃない。

自衛する程度の力があれば、最近動きが読めなくなってきた天の智慧研究会の襲撃も凌ぐことが出来るだろう。

その間にエミヤが駆けつければ、二人共助かるといふ訳だ。

「そうか——では、早速始めようか。時間は有限だからな」

「え……？　良いんですか？」

「両手を広げて歓迎するとは言えないがね。君には血に濡れた魔術戦を経験してほしくないという気持ちは一貫して変わっていない。だが、君が力をつけることに異論はない。その結果救われる命もあるだろう」

そう言つて少し歩き出したエミヤ。

「えつと、じゃあまずは何からやるんですか？」

「無論、体力作りからだ。手札が揃つていようと、担い手が息切れでは意味が無いからな」

瞬間、システイーナの表情はネガティブなものへと変わった。

魔術戦を教えて欲しいと頼み込むほどだ。何か魔術を会得することが出来ると思つていたのであるが、生憎エミヤは魔術以前の基礎から磨き上げる。

なお、黒魔術が使えなくとも、他人に魔術を教えることは出来るのでそこは勘違いしないよう。

「う……頑張ります」

「それで良い。さて始めようか」

脳裏に構築したメニューは特別厳しいものだ。

過去に特務分室へ入室が叶った程の逸材を育て上げたメニューと同等以上のものを組む。

その過程で彼女が折れるか、それとも生涯見失わない光沢の道を見つけ出してくれることを願う。

システイナとの早朝特訓が終わり、疲れていた彼女を家へ送り届けてからエミヤは学院に向かっていった。

伽藍堂な家へ戻る理由も無い為、職員室で何か作業、授業の準備でもしようと画策していた。

道中でシステイナのトレーニングメニューを構築しながら歩いていると、泰然とこ

ちらを待ち構える人影があった。

「——あれは」

常人では視認できない距離だろうと、エミヤであれば容易である。

人影の正体を視認した。

青い髪を後ろで一つに結び、アルザーノ帝国魔術学院の制服を身に纏うその姿。

華奢な体からは想像もつかない戦闘経験が蓄積された少女の瞳を、エミヤが知っていないはずがない。

とはいえ、一応確認の為そのまま隣を素通りする。

「——待って、エミヤ。挨拶もしないで通り過ぎようとするのは酷いと思う」

「ああ、すまない。君の素性を知っている人間として、一応何かの任務中であつたら迷惑をかけてしまう可能性があつたのでね」

「ん。確かに任務中だけど、今は平気。たぶん、エミヤもわたしの任務を知ってるはず」
「そうだな。すまない、少し君を試すような真似をしてしまった」

彼女はエミヤの嘗ての同僚の一人だ。

エミヤは軽く謝罪をすると、青髪の少女——レイエル＝レイフォードは満足そうに頬を緩ませた。

特務分室、そこの一席を戴くりイエルとはいえ、最近は物騒な世の中だ。

任務を任せる人間として、一応変装ではない事を看破しておく。まあ、視認しただけで十中八九本物と理解してはいたが。

「ん。エミヤが何を試していたのかは分からないけど、謝るのは大事」

「大事だな。さて、では君はこれからどうする?」

「どうするって?」

「私はこれから学院へ向かう途中だ。とはいえ、まだ早い時間帯なのでね。ここで簡単に挨拶することが目的であれば、このまま一時帰還しても構わんが?」

「いや、わたしもエミヤと一緒に学院に行きたい」

これは少々驚きの返答だった。

感情の起伏をあまり見せない彼女は、常に睡魔と戦つていそうな表情をしている。

緊急時であればその変貌を刮目出来るのだが、それを知らない者からすれば物静かな少女と勘違いするだろう。

エミヤはその正体を知つてはいるが、今のリエルは本当に眠そうな表情だったのでその提案をしたのだが。

「えつと……一緒に登校? つていうのをしてみたいと思つて」

「——ほう? ちなみにそれは誰から聞いた?」

「セラから。確か……学院に行くんだから、やっぱ一緒に登校しないとねって」

「……なるほど。彼女らしい提案だな」

リエルの言葉から出たのは、セラシルヴァースというこれまた嘗ての同僚。

特務分室という扱っている内容が重い組織の中で、誰よりも日常を愛したのが彼女だ。

とはいえ、特務分室に入室が許される程の実力は持つており、風の魔術に対する適性は室内でも最上位に君臨するものだ。

これがセラという少女。誰よりも日常を、目の前に広がる平和を好んだ風の巫女。

余談だが、彼女はシステイーナにそっくりだったりする。エミヤもシステイーナを初めて見たときは驚いた。

と、少々忘我し過ぎたか。

遅れるようにして、エミヤはリエルの言葉に首肯をした。

「では、一緒に登校するでしょう」

「良いの？」

「断る理由はなからう。それに、まずは日常への一歩だ。ここから特務分室との違いに少しずつ慣れていけば良いさ」

「分かった。じゃあ、何の話をする？」

「そこまで刷り込み済みか。では、簡単に私から学院で学ぶ内容について話しておこう」

た。こうしてエミヤとリエルは日常の話をしながら、和気藹々と学院へ向かっていっ

日常の一步

そこからエミヤとリエルは会話をしながら学院へと向かった。

時間の流れとは残酷なもので、楽しいものほど流れを早く感じるものだ。

学院に到着した二人は時間までエミヤの案内で学院内を紹介する。

興味深そうに見ていたリエル。そうしてすぐに朝の時間になる。

教室へと去っていった登校した生徒達の居ない廊下を二人で歩き、二年次生二組の教室へと向かった。

扉の前にリエルを待たせると、まずはエミヤが扉に手をかける。

「——おはよう。突然だが、今日は驚きのニュースがある」

扉を開け、中へと入ったエミヤは開口一番にニュースがあると伝えた。

「ニュースですか？」

「そうだ。リエル、入ってきて良いぞ」

未だにエミヤが発した言葉の意味を理解していない生徒達。

だが、その疑問は独りでに開いた扉と、その先に待っていたリエルによって掻き消された。

沈黙が支配する空間の中で、リイエルはちよこんとエミヤの隣に立つ。

「という訳で、突然だがこのクラスに新しい仲間が加わった。リイエル、自己紹介を」
「ん。わたしは、リイエルⅡレイフォード。えっと……よろしく?」

何故か疑問符を浮かべるも、名前と挨拶を済ませたリイエル。

とはいえ、自己紹介と言うには少々情報が足りないのではないか。

「待て。本当にそれだけなのか、リイエル? 他にも何か言う事は無いのか?」

「他に……?」

フォローを入れるエミヤだったが、その質問の意図を理解していない模様。

確かに自己紹介の練習とかはしていなかったが、そこはセラの仕込み済みを期待した場面だったのだが。

まるで小動物の如く首をかしげるリイエルにさしてどうしたものかと逡巡している中、耳を澄ますと観客からの反応が聞こえた。

「リイエルちゃんっていうのか……?」

「可憐だ……」

「なんだか……お人形さんみたいなお子ね」

戸惑っている様子では無いらしい。

生徒達は現在リイエルの外見に魅了されている様子。

確かに同世代に見えるとはいえ、同級生の中ではどう見ても前から数えた方が早い程の身長だ。

そこに魅力を感じるのも分かるが、と少し考えて今はこの武器を使用することに決めた。

「では、何か質問がある者は居ないだろうか？」

「じゃあっ！ はいはい！」

「積極的だな。ではカツシユ」

こういう時、いの一歩に手をあげてくれる生徒というものは素直に有難い。

よっしやー！とカツシユは喜びながら立ち上がった。

「じゃあ、リイエルちゃんの好物って何かな？」

「好物……？ それって、何でも良いの？」

「私に問う必要は無かるう。君の好きなものを答えれば良い。果物とか、野菜とか、そういう漠然としたものでも構わない」

リイエルは一瞬悩む素振りを見せた後、カツシユに向かって答えた。

「わたしの好物は、エミヤの作ったご飯」

ほんの少し、場の雰囲気が一変する。

聞いた張本人であるカツシユは何故か恐る恐る問いかける。

「……それって、先生の手作りってことだよな？　リエルちゃんって、先生の手作りご飯を食べた事があるのか……？」

「ん。最近エミヤが忙しくなって食べれてないけど、少し前は毎日食べてた」

——瞬間、女子の歓喜の悲鳴と、男子の屈辱の咆哮が鳴り響く。

突然投下された爆弾発言に、エミヤは珍しく瞠目する。

「……待て。少し落ち着こう、リエル」

「？　わたしは常に落ち着いてるけど？」

「いや、確かに君は落ち着いているだろうが、今の発言では語弊が生じるというか……」
「ちよつと待て、先生っ！　先生ってリエルちゃんかどうか!?」

ほら、こういう事になる。

確かにリエルの言葉に間違いはない。

エミヤは特務分室の面々に日頃の癒しにでもなればと手料理を振舞っていた過去がある。

まあ、リエルには基本任務で外に出かけていなければ毎日振舞っていたので、間違いではないのだが。

とにかく訂正しなくては。

「別にやましい関係は無いし、君達の期待するような展開も無い。ただ私とリエルは

旧知の仲というだけだ」

「ん。エミヤとは昔からの縁」

「え……？ あ、なあんだ良かった。危うく先生を殺しちゃうところだったぜ」

ふう、と安堵の息を漏らすカツシユ。

……恋する男子生徒というのは、時に悪鬼羅刹すら凌駕するのだろうか。

始まりの襲撃者事件からエミヤの実力は見ているはずなのだが、一目見てリエル派なる組織を設立・所属する生徒からの殺気が途端に消え失せた。

というかカツシユはリエル派では無かった気がするのだが。

あれか。それとこれとは話が違うというやつか。

不穏で穏便な空気が流れ始めたので、エミヤは空気を取り戻すために咳払いをする。

「少々不穏な言葉が聞こえた気がするが、ここでは流そう。さて、他に質問はないだろうか？」

「では、私からリエルさんについて一つ疑問が御座います。質問よろしくて？」

「ん。大丈夫」

「リエルさんは何処のご出身でしょうか？」

お淑やかに手を挙げたのはウエンディだった。

お、これは良い質問だ。

確かに何処から来たのか、というのには気になるものである。

転校生相手に前に所属していた学校を問うのと同じような感覚だろう。

「わたしは、イテリア地方が出身」

「まあっ！ 随分と遠くのご出身ですね。ですが、そうなるのご家族の方はどうなされているんですの？」

「家族……わたしの、家族は……」

今まで人形の如く表情を大きく動かさなかつたリイエルだったが、その疑問を聞くと同時に酷く瞳を震わせる。

その変化に気付かないエミヤではない。

確かにリイエルはレイフォードに『家族』の疑問は禁句だ。それは彼女の根底に関わる問題であり、他人が土足で踏み入って良い領域ではない。

——故に、ここがターニングポイントだ。

彼女が既にその領域を踏破できているのであれば、大きく狼狽える必要は無い。

静かに震えていたリイエルだったが、一度エミヤを見る。

その瞳には確かに怯えがあるが、同時に踏み越える為の勇氣も宿っている。

心火を信じ、エミヤは大きく頷いた。

するとリイエルは安心したように深呼吸をすると、質問をしたウエンデイに向き直つ

た。

「わたしには、兄がいた」

「兄がいたって……もしかして」

「ん。もう何年も会ってないけど、わたしには兄がいた」

その言葉で察したのだろう。

質問をしたウエンディはすぐに頭を下げる。

「も、申し訳ございません……！ 私、リエルさんになんて質問を……！」

「大丈夫」

するとリエルは儂げに微笑む。

「確かに兄とはもう会えないけど、すぐ近くにいますから——」

そう言つて胸を優しく押さえる。

目に見える存在ではなくなつたとしても、リエル＝レイフオードという人間の中で確かに彼女の『兄』は生きている。

儂くとも、何処か崇高なリエルの祈りに、エミヤも思わず目を奪われてしまった。

「それに、わたしにはエミヤが居たから」

太陽のような周囲を巻き込む輝きではなく、黄昏の如く涵養な煌めき。

間違いなく薄幸な運命を辿ってきたはずなのに、そんな煌めきをリエルは持っていた。

る。

「——あ、俺駄目かもしれない」

そうだろう、と。

誰が発したか分からない心からの呟きに、エミヤも心の中で静かに首肯した。

休み時間。

リイエルを連れ、ルミアとシステイーナを呼び出す。

「改めてリイエルの事を紹介したい。彼女はリイエル・レイフォード。現役の軍人であり、今回ルミアの警護の為に政府から派遣された私の元同僚だ」

誰も居ない事を確認した空き教室で、エミヤはリイエルの本当の紹介をした。

しかし帝国宮廷魔導士団とか、特務分室とかは話さない。

休み時間という限られた時間の中で扱えるような内容ではないからだ。

「元同僚、ですか……？」

「ああ。ルミアには既に話したが、少し前まで私は軍人でね。驚いたか？」
「いえ。確かに少し驚きましたけど、でもなんか納得です」

特に大きな反応をすることなく納得したシステイナーナ。

流石は優等生。突然の情報にも冷静に対応することが出来る。

「今までの先生の行動を見てれば納得というか、普通の人間があんな無茶出来る訳ないわよね」

どうやら彼女が簡単に納得するのは道理だったようだ。

「リエルの実力は本物だ。必ずや心強い存在になるだろう。その為、君達にはこれから共に行動をして貰いたい」

とにかく、まずはこの二人との関係を凝固なものへと結んでおきたい。

最近システイナーナも自分から強くなりたいと言っていることだし、ルミアも緊急時における冷静さは一級品。

リエルはそもそも存在がチートである。

そんな三人が深い関係を結べば、エミヤも加えて陣容はより盤石と成る。

「分かりました。じゃあよろしくね、リエル」

「ん。よろしく、ルミア。あと……」

「システイナーナ＝フィーベルよ」

そうやってリエルに名前を教えるルミアとシステイーナ。

良かった。システイーナは警戒しているようだが、ルミアは普通の友人みたいに接してくれている。

このまま本物の友人になれば良いのだが、そこはエミヤが介入する場面ではないだろう。

心の中でリエルを応援する。

「そういえば、先生って料理作れるのよね?」

突然システイーナが思い出したかのように問う。

「ん。エミヤの料理はとてもおいしい」

「へえ……じゃあ、私達も是非食べてみたいわね。そうよね、ルミア?」

「え……? あ、うん。そうだね。でも、迷惑じゃ……?」

「そんなことはない。君達が望むのなら、振舞う用意を整えよう」

これは恐らくシステイーナの助け舟なのだろう。

リエルとルミア・システイーナを繋ぐ関係を構築する一助に、自分の料理が意味を為すのならそれを振舞う事に異存はない。

「本当に、良いんですか?」

「勿論だ」

ルミアは最後まで遠慮がちであったが、その言葉を聞いて微笑む。本心は別なのに、彼女は他人の迷惑を考えて行動を控える癖がある。

それを理解しているエミヤは、最後までその問いかけに真摯に向き合った。

「じゃあ、エミヤの家に行ってみたい」

「別に構わんが、ここから近くないぞ?」

「平気。体を動かすのは慣れてる」

リエルが言えば確かに信憑性がある。

エミヤは残る二人に確認する。

「君達はどうだろう? 遠いのが嫌であれば、別の場所でも良いのだが」

流石に基準をリエルにするはずがない。

問いかけに応じた二人だったが、何故かルミアの顔が少しずつ赤く染まっていった。

苦笑いを浮かべたシステイーナは、ルミアに声をかける。

「ルミア?」

「へあつ!! ど、どうしたのシステイ?」

「いや、ルミアも先生の家で良いのかっていう確認をしようと思ったんだけど」

「だ、大丈夫だよ? うん。大丈夫、大丈夫……」

「という感じなので、私達も大丈夫よ先生」

最後は念を押すような強い気迫でシステイーナが答えた。

ルミアの様子がおかしいので心配だが、とりあえず反対ではないようだ。

「了解した。君達の舌に合うかは分からんが、私の全力を以て振舞うとしよう」

このくらいの手助けはしよう。

だが、この先はリエルの頑張りに次第である。

休み時間終了まで残り数分の所で、エミヤ達は教室へと戻っていった。

リエル・レイフォードの真価

突然の編入生を迎えた二年次生二組は、そのまま授業へと突入した。

エミヤによる教科書に縛られない授業をリエルも受けていた。

本日の授業は魔術の構造を取り扱った代物であり、それなりの難易度を誇る授業内容でありながらも難無く内容を理解していく生徒達。

だが、リエルはその内容を覚えるのに苦労している様子だ。

当然だ。リエルは求められる水準を大きく下げた位置に存在するのだから。

だが、それを見かねた生徒達は、男女問わず全員が分かりやすい説明をしようと試行錯誤を繰り返す。

周囲の生徒達に手助けしてもらいながら、半信半疑・理解半分で内容を脳に刷り込んでいった。

完全暗記のみならず、理解にしようと努力する姿。

それを見ていたエミヤは、あえて分かりやすい説明をせずに協力を促す。こういう過程が、彼女を受け入れる準備を整えていく。

時間通りに授業を終えたエミヤは、次の時間は魔術競技場での実践型授業と告げる。

そして休み時間を挟み、魔術競技場へ。

「では、これから遠距離魔術を行使しての実践だ。なお、遠距離であれば何の魔術を使っても構わない」

「いやいや先生。何の魔術を使っても構わないって言いますが、俺達遠距離型じゃ「シヨック・ボルト」しか使えませんよ」

カツシユの軽口にほんのりと温かくなる周囲の雰囲気。

リリエルはルミアやシステイーナと共にこの、魔術競技場へ来たようだ。

道中でも二人や、それ以外の生徒から話しかけられていた様子なので、今の所順調だ。「カツシユ、そう決めつけるのは感心しないな。提示された自由を偏見のみで自ら縛る行為は、いずれ己の首を絞めることに繋がりがかねないぞ」

「な、なるほど……。今のは先生のネタじゃなくて、結構大事な情報だったなんて。でも、俺達に適応される情報なんすか？」

「無論だ。まあ、屁理屈と呼ばれるかもしれないがね。だが、私はそれを許容しよう」「分つかりましたっ！俺、屁理屈も重要な手段としてこれから活用していきたいと思えますっ！」

「良い心がけだ。是非とも、課題を忘れた際にでも使いたまえ。私相手に通じるようになれば、それは立派な武器と成ろう」

「……ねえ、これツツコミ待ちかしら？」

もはや日常茶飯事となったカツシユとエミヤの会話。

最初こそシステイーナも口を挟んでいたのだが、今では呆れるばかりになっていた。ため息を聞いたエミヤは潮時を悟った。

「さて、システイーナに怒られる前に始めるとしよう。ここから数メートル先にあるゴーレムに遠距離魔術を中てるのが今回のテストだ。ただし体の各部に的を設置しているので、そこを狙うように。ゴーレムに当ろうとも着地点が的でなければポイントに換算しないので注意を。回数は六回だ」

エミヤの説明を聞いた生徒達は次々にゴーレムと向き合った。

生徒達の命中回数を記録しながら、エミヤは生徒達の動きや癖を細部まで見ていた。

完璧なのは、やはりシステイーナだ。

六回中六回命中という突出した記録は勿論、動きは学生と考えれば合格点を容易に凌駕している。

癖が目立ったのはウエンディだ。

先の魔術競技祭で上位陣に位置しながら、決闘戦に起用しなかった理由を見事体現している。

重要な場面でケアレスミスをするのは勿体ない。

そのせいで、今回も六回中五回という記録であった。時が来れば鍛錬を施す必要があるかもしれない。

その中でも一番エミヤの目を引いたのが何時もカツシユと共に行動している、小柄な少年セシルだった。

今でもカツシユとギイブルとの間に板挟み状態となっている彼だが、その遠距離に関する才能は嘗ての同僚であるアルベルトⅡフレイザーに通じるものがある。

魔術競技祭以来その才能を開花させているのは嬉しい誤算だ。

そのまま一人、また一人と結果を出し、遂に最後の生徒のみとなった。

「ん。わたしの番」

「そうだ。ルール確認は不要だろうか？」

「勿論理解してる」

するとリィエルはそのまま前へ。

ゴーレムと向き合う姿は、人形の如く可愛らしい姿からは想像できない清廉な空気が纏っている。

先ほどまではしゃいでいた生徒達もリィエルの番と分かると、静かにその姿を見守っている。

「・雷精よ・紫電の衝撃以て・撃ち倒せ」

三節の詠唱を唱え、指先から紫電が迸る。

飛翔する微少の雷撃はそのままゴーレムに設置された的へと——ぶつかることなく、当たり前のように逸れると彼方へと着弾した。

そのまま続けて四発。一発だけ右足に着弾したものの、それ以外は的に掠る訳でもなくゴーレムを置き去ってしまった。

リイエルの反応を見ると中つた一発も目標は別の的だった様子だ。

「リイエルちゃん頑張れ！」

「そうそうっ！ ああつ、惜しい！」

「大丈夫。焦らないで！」

「お、一発中つたぞ！」

「残念ながら、カツシユ。全て外した君が最下位みたいだね」

「ギイブル……そこまで俺が嫌いかよ……」

最初は緊張の面持ちで見えていた生徒達も最後には応援をしていた。

先の座学でこの結果は予想できたのか、特に驚いている様子も無い。

「どうだ、リイエル？」

「やっぱり難しい。エミヤに教わって少しは上手くなったけど、でもまだ駄目……」

感情表現の起伏が乏しいので分かりにくいのが、リイエルは落ち込んでいるようだ。

それを見たエミヤは一つ提案をする。

「リィエル、私は最初にこう言ったはずだ。遠距離であればどんな魔術を使っても構わないとな」

「……………」

「分からないか？ 以前、君が私に教えてくれたじゃないか。錬金術で錬成したのも立派な攻性呪文アサルト・スベルとね」

「……………良いの？ あれを使っても」

「君の素性を知っている者として止めるべきなのかもしれないが、根底が違うものであろうと私も似たような物を既に彼らの前で披露してしまっているのね。耐性は出来ているだろう」

「ん、分かった。じゃあ、全力で行く——」

すると静かに瞳を閉じるリィエル。

実は隠密に徹し、護衛任務を任されているはずの彼女に技を使わせる理由はしつかりとある。

それは緊急事態時に、リィエルが魔術を行使しても両者共に驚くことがないという事だ。

以前の襲撃者事件の如く何時如何なる時に魔の手が生徒達に忍び寄るかはエミヤも

予測不可能。

仮にエミヤが居なく、リイエルのみがその場にいたとして魔の手と対等に戦えるのは現時点ではリイエルのみだ。

だが、自衛できる程度の精神は保つてもらわないとリイエルも防衛一辺倒で、力を出し切れない。

そんな時リイエルに驚くという事が無いように、リスクは減らしておくべきだ。

「――トレース、オン・錬成、開始。」

……一つ、この詠唱には言いたい事がある。

確かにエミヤとリイエルの行使する魔術は表面上のみは似ている。

その構造は全くの別物だが、一見するのみではその違いを理解することは叶わないだろう。

リイエルもそれを理解しているはずだが、何故かこうして己の魔術を結び付ける詠唱にそれを選んだらしい。

過去にエミヤの詠唱を聞いている生徒達はリイエルの言葉にざわつき始めたが、それを気にする様子の無い本人は身を屈めて手を地面に触れさせる。

そこを中心的に紫電が一体に迸り、地面に大剣のくぼみを残しながら両手にクロス・クレイモア十字架型の大剣が出現する。

彼女お得意の高速錬成である。

「今のつて、先生の詠唱だよな……?」

「それに出現する剣こそ違うけど、同じく剣が出現したぞ……!」

「ああ。リィエルと先生が旧知の関係というのも本当の意味で理解出来た。恐らく過去に師弟関係でもあつたんだらうね」

推察を進める生徒達。

やはりエミヤの魔術で耐性が出来ていたらしい。

その両手に大剣を握ったリィエルは、その異様な空気に触れて心配そうにエミヤを見る。

そして頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。もし怖がらせてしまったのなら謝る」

「そんなことないぜ、リィエルちゃん。俺達は高速で何かを作るのは見慣れてるからな」
グツと親指を立てるカツシユ。

その他の生徒も頷いて同意を示す。

「このことだ。心配する必要は無い、リィエル。それと私達の関係は先ほどギイブルの言葉の通りだ。彼女は私と同じように魔術への普遍的な素養が欠けていてね。錬金術への適性は人並み以上なのだが、それ以外は黒魔術を行使できない私ほどではないにし

ろ、苦手分野らしくてね。良かったら君達が支えてやって欲しい」
簡単にフオローを施す。

それを聞いた生徒達はエミヤという前例を知っているため、驚くことなくその申し出に応じる。

すぐさま生徒達がリイエルに声をかける。

静かにその光景を見てみると、隣でルミアが小声に話しかけてきた。

「先生。もしかして、ここまで計画通りですか？」

「そんな事は無い。全て偶然だよ、ルミア」

「ふふっ。じゃあ、そういうことにはしておきますね」

何か察した様子のルミアと共に、エミヤはリイエルを中心としたクラスを遠目に見ていた。

これで彼女が腫物扱いされる事は無いだろう。

順調にこのクラスへの適応を為した。

後は、このまま友人としてこのクラスの一員として卒業してほしいというのがエミヤの願いだった。

すると隣から視線を感じた。

「む？ 何かなルミア」

「なんか先生って、今みたいに私達を何か眩しいものを見るかのように見るなと思って。何か理由があるんですか？」

「……そうかもしれないな。私は今まで、あまり日常を謳歌することが出来なかつたのでね。せめて君達には今ある日常を楽しんでもらいたいと思ったというのが理由かもしれない」

するとルミアは目の前に立って朗らかに微笑む。

「私達だけじゃありませんよ？ 先生も、一緒に楽しみましょう」

「——ああ、そうだな」

日常から手を伸ばしてくれた少女の手を、血で濡らさないように掴み取る。

彼女らと共に、このまま日常を謳歌するという過ごし方も悪くはないのかもしれない。

「では行こうか。リリエルの雄姿を見るとしよう」

「はいっ」

ルミアと共に歩き出す。

血に濡れた背中を照らす、一条の光。

彼女もまた、薄幸の人生を歩みながら己だけの光を心に灯している。

それが先へ進むことを恐れず、成長を続ける人間の強さなのだろう。

エミヤが隣で支える必要は無い。彼女は自分で歩いて行ける。

その後、大剣を投擲したリエルは案の定ゴーレムを真つ二つに切断し、ポイントを稼いだのだった。

昼休み、リエルの歓迎会を行う事になった二組。

場所は中庭で行うらしく、学食を購入しそこへ向かう事になっていた。

ギイブル等不参加の生徒も居るのかと思ったが、結局全員参加に落ち着いたらしい。

それは良かった。

エミヤが心配することなく彼女はクラスの輪に溶け込んだようだ。

自分の出る幕は無いな、と思っっていると――、

「そう言えば、エミヤは一緒に来ないの？」

クラス全員が持参した弁当やら、学食へ購入に向かい誰も居ない教室内で。

一人残っていたエミヤに声をかけたのは主役であるリイエルだ。

「私は不要だろう。君達だけで行くと良い」

「……わたしは、エミヤも一緒に来て欲しい」

「リイエル……」

彼女はそう言うが、やはり生徒のみで行う方が色々と気を遣わずに済むだろう。

すると扉の向こうからシステイーナが声をかけてきた。

「どうしたの、リイエル？ もう皆行ってるわよ？ って、何かあったみたいね」

「丁度良かったシステイーナ。エミヤと一緒に来てくれない」

「私がいる必要は無い。私がいる事によつて気を遣つてしまう者もいるだろうしな」

「ふうーん。ねえリイエル、どうやら先生は貴女の歓迎パーティーには興味無いみたいよ？」

小悪魔的な笑みを浮かべるシステイーナ。

途端に嫌な予感が過つたエミヤ。

「待て。そんな事は言っていないだろう？ 私は君達の事を思つて——」

「エミヤ……そうだったの……？」

「そんな顔をするなリイエル。……分かった、私も同伴しよう」

結局はエミヤが折れる結末となった。

それを聞いたリエルは親しい人間にしか分からない程の微小な変化だったが、パッと笑みを見せた。

「そうそう。最初からそうしていれば良いのよ。というか、先生に気を遣う生徒はもう居ないと思うわよ?」

「それはそれで、喜んで良いのかわからない事実だな……」

教師の沽券に関わる事実なのかと思つたが、こうして生徒との距離が少ないのも一つの道なのだろうか。

在り方に揺れるエミヤは二人と共に中庭へと向かつた。

道中で昼食を購入し、中庭に到着したエミヤ。

普通に歓迎され驚いたが、そのまま歓迎会は進んでいく。

リエルへの質問を中心に据えられ、そのまま各々の詳しい自己紹介へ発展する。

完全暗記を得意とする彼女だ、本人にやる気があればクラス全員の名前を覚えること

など造作も無いだろう。

質問の一つにリリエルの好物を掘り下げる者がおり、挙句の果てにエミヤが全員に料理を振舞う事になったが、まあ異論は無い。

無論システイーナ、ルミア、リリエルの三人との約束は守る。彼女ら三人とは別の日に約束を交わした。

歓迎会は終幕を迎え、クラスの絆がより一層強まることになった。

そして数日後。

先の歓迎会を経てだろう、リリエルもクラスの一員として日々周囲の協力を得ながら勉強に励むようになった。

成績優秀ではなく、むしろレッドラインに足を踏み入れているが、今はそこまでは求めない。

そして放課後、一部の生徒はリリエルの机の周辺に集まっていた。

「で、^{オリジン}ここがこうなって……この場面でこの元素配列式をマルキオス演算展開して……こんな感じで根源素を再配列して……物質を再構成して……」

何とも、以前見せたリリエルの高速錬成のやり方を教えて欲しいという事になり、教えることになったという。

偶然エミヤもその場に居合わせたので、机を囲む生徒達の一步後ろで羽根ペンによって刻まれる術式を睨んでいた。

物凄く簡単に言えば元素配列変換の錬成式と、それを制御する魔術式がびつしりと紙を埋め尽くしているのだ。

そしてこの世界に順応する過程にて、魔術理論を理解したエミヤはリエルの書き連ねる術式を見て苦虫を噛み潰したような表情をする。

いつ見ても外道な術式に、吐き気を表に出さない事で精一杯だ。

その間に書き終えたリエルはペンを机に置くと、周囲に生徒達に問いかけた。

「……わかった？」

「いや、全く分からん」

カツシユは爽やかに白旗を掲げた。

その他の生徒も理解できない者が過半数だ。

しかし、それでも優秀な成績を有している者は目の前に展開された机上の空論に冷や汗をかくしかない。

これは、当然のことながらエミヤの言葉が必要だ。

「どうだろう？ 必要であれば、解説を付け加えるが？」

エミヤの言葉に大多数の生徒が頷いた。

一部の理解した生徒もその話を聞くらしい。

それを確認したエミヤは口を開く。

「まず、この術式は学院の授業で扱われているような普遍的な代物ではない。ではカッシユ。この学院で扱っている、魔術式の構築方法は何だったかな？」

「うお、いきなりですね……。ちよつと待ってください。確か魔術公式と魔術関数の組み合わせ……だった気が……。？」

「正解だ。しかし、今リィエルが見せたこの術式はその魔術公式と魔術関数を一からルーンで組み立てている。その常識からこの術式は逸脱しているのだ。大多数が理解できないのも無理はない」

途端に事の難解さを理解した生徒達が驚愕する。

「当たり前だ。定められた公式を使用せず、公式や関数すら一から自分で構築すること
でこの術式は行使することが可能となる。」

数学の公式を暗記し、定められた位置に数字を配置するのが一般的な方法とすれば、リィエルの術式はまず公式から自分で組み立てる必要がある。

「そして、セシル。理解している君に問うが、リィエルは如何にしてウーツ鋼という希少鋼材を高速錬成することを可能とした？」

「……魔術言語ルーンの仕様に存在するバグを利用している、と言うのが正解でしょう」

か？」

セシルの答えに首肯した。

これはゲームの方が理解できるだろうか。

数多に存在するゲームがどうしても内包してしまうのがバグというものだ。

その都度修正をし、一つ一つ潰していくのが普通だが、今回の術式はそのバグを利用しなければクリアできないというものだ。

「とまあ、これが普遍的な魔術式で無い事は理解出来ただろう。確かに強力な代物ではあるのだが、これを使用することは君達に勧めない。配列変換を一つ一つ説明していたら日が暮れてしまい、とても実戦用ではないというのもあるが、それ以外の絶対的な理由がある。それはなんだろう、システイーナ？」

「これが、術者の事を何も考えていない術式だからです。深層意識野のデタラメな使い方からも分かるように、安全性が何一つ保障されていません」

「そうとも。例えば「シヨック・ボルト」なんかもそうだが、指先から発せられる紫電が担い手に降りかかる事は無い。それは魔術における不文律の一つである、担い手の安全性が保障されているからだ」

リエルの術式を通じて授業みたいな事が始まった。

とはいえ、これは絶対に知っておいて欲しい事なのでこのまま伝える。

「以前に行った固有魔術オリジナルの構築実践授業にて、私は君達に絶対的な安全性を保障するものでなければならぬと言ったはずだ。覚えているかな？」

「……確かに、言っていました。あの時はあんまり気にしてなかったけど……」

「魔術の暴走事故なんていう事件は普通発生しないのでね。気にする方が変なのかもしれない。だが、この世には教科書に載っているような安全な魔術しかない、なんて事は無い」

唾を飲み込む音がする。

静寂が支配する教室で、魔術世界の常識を告げる。

「術者の事を考えなければ、強大な魔術を構築するのは容易だ。無論、誰でも出来るとは言わないが、安全性を考慮した場合と比べればその差は歴然となるだろう。これは危険が伴うので実践はしないが、知識として知っておいて欲しい」

放課後に話す内容としては少し重すぎただろうか。

最後にフオローを入れてこの場での話を切り上げよう。

「という訳で、間違ってもリリエルの術式を真似しようとは思わない事だ。これは彼女オリジナルの固有魔術のようなものだからな」

「……ま、急がば回れって訳ね。私達は普遍的なやり方で錬金術を極めましょう」

「だな。あ、そうだ。最後に聞きたかったんですけど、リリエルちゃんの術式と先生の使

う術式って同じ代物なんですか？」

「違うものだな。いや、似て非なるものと言った方が良いかもしれない。先ほども言った通り、リエルの術式は彼女の固有魔術だ。そして私の術式もまた、捻じれた魔術特性から齎された固有魔術だよ」

簡単にリエルのと、自分の違う代物と伝える。

先に黒魔術が使用できるリエルと、使用できないエミヤでは魔術特性が違うと話しているのもその一言で理解できるだろう。

すると問いかけたカツシユが驚いた様子を見せる。

「先生って、固有魔術使いだったんすか……？」

「そうとも。故にその分野に多少精通していると云っても良い。他の先生に、固有魔術を主軸に据えた授業を行う者は居ないだろう？」

まあ、これを伝える段階には至っているだろう。

有り体に言えば、彼らの知識が蓄えられてきており、誤魔化すのもそろそろ限界を感じていたのである。

「さて。そろそろ下校時間だ。日が暮れる前に帰路に就きたまえ。私の話は、後日授業を通じて話すさ」

はい、と返事を聞いて己の荷物を整え始める生徒達。

リイエルはルミアとシステイーナと共に帰るらしい。もう普通に接することが出来る関係になったと見て良いだろう。

ぐるりとエミヤは教室内を一瞥し、一人この場には似つかわしくない人物に声をかける。

「ギイブル。君もリイエルの話には興味があつたのかね？」

「別に興味はありませんよ。ただ、耳に入ったから聞いていただけです」

「そうか。現実的な君も、こと錬金術分野の話に関しては夢物語も耳に通す価値があると判断した訳だな」

「特に反論はしませんよ。先生相手に真正面からの口喧嘩では、まだ経験が足りないの
で」

「私は君と口喧嘩をした覚えはないのだがね？ ただの一方的なものだったと記憶しているが」

一瞬こちらを睨んできたかと思つたが、一度深く深呼吸をすると心を落ち着ける。

「失敬、冗談だ。しかし、精神安定の術を使えるようになったとはな。それは私への対策かね？」

「ええ。そしていずれは先生を凌駕してみせますよ」

「それは是非楽しみにしておこう。ところで話は変わるが、君はリイエルの術式を見て

嫉妬に駆られないのだな」

「……駆られない、と断言することは出来ません。ですが、夢物語を現実と思い込むほど僕も馬鹿ではありませんから」

静謐に、されど克明に。

力強く述べた静寂な一言は、ギイブル^{II}ウイズダンの成長を感じられた。

「それに、摩訶不思議な現象は先生で見慣れてるので。それが固有魔術^{オリジナル}だと分かっただけでも今日残った収穫がありましたよ」

そう言い残すと彼は荷物を持って教室を後にした。

既に残っている生徒は居なく、今はエミヤだけが教室の斜陽に照らされている。

「ギイブルも、リイエルも、人間誰しも成長するものだな——」

そうしてエミヤも教室の扉を後ろ手に閉める。

廊下を叩く足跡が静寂を切り裂く黄昏の校舎。

人影は見えず、まるで世界にただ一人残されたのではないかと錯覚してしまいそう
だ。

その中でエミヤは未だ独り、永久に続く道を歩む。

動き出す非日常

「……なるほど、確かにそれであれば実現可能かもしれん……」

常闇が支配する暗澹にて。

三人の外道魔術師が集っていた。

「貴女が言う、その特異な『感応増幅者』の担い手であるルミア^{ルミア}ティンジェルが居れば、『Project:Revive Life』^{プロジェクト：リバイブライフ}は完成する……！」

その中の一人、白金魔導研究所の所長バークス^{バークス}IIブラウモンは歓喜の声をあげていた。

「ええ、はい。この件に関しまして、上層部はバークス様に絶大な期待を寄せられています。実現不可能と思われる天才錬金術師シオンの実質固有魔術^{オリジナル魔術}と言っても良い術式が、再びバークス様の手によって再現されることを事実として願っております」

「これは良い……！ では、『遠征学修』なる下らん催しが開かれるのも、天恵という訳か。では、この術式が再現された暁には——」

「勿論、バークス様に天の智慧研究会の席が開かれます。それも、高い位であるのは間違いないかと」

陰鬱な笑みを浮かべてバークスを囁し立てるのは、エレノアⅡシャーレット。

以前の使用人衣装を身に纏っているにも拘らず、背反するはずの背景とも融合してしまっているのは彼女が外道魔術師であることを示唆しているのだろう。

そんな彼女は途端に、表情を暗くした。

「ですが、少々面倒な事態が」

「面倒な事態？ それは、一体……？」

「バークス様が迎えるのは、彼のアルザーノ帝国魔術学院二年次生二組でございます。ということとは、ルミアⅡティンジェルと共に『死神』がこの研究所に訪れる事になります。バークス様とて、シロウⅡエミヤの名はご存じかと思えますが？」

その名を聞いた瞬間、バークスの額に冷や汗が浮かび上がる。

まるで悪魔でも見たかのように狼狽え、先ほどまでの意気揚々としていた気概は霧散する。

「『死神』シロウⅡエミヤが、再び私の前に姿を現すというのか……!？」

「はい。彼は現在ルミアⅡティンジェルの教師という役割を担っています。つまり術式を完成させるには、彼の者を出し抜くことが必要となる可能性が少なくありません」

「ふ、不可能だ……！ ああの男が……あの化物が相手では……っ！」

「あらあら、どうされましたかバークス様。まさか貴方ともあろう御方が、ただの魔術講

師一人に怯えるなどと」

「貴女は、私の過去を理解したうえで知らないふりをしているのか……!?!」

返答は笑みだった。

対照的にバークスは膝を崩してしまふ。

実は研究の為に非人道的行為を為していた際、エミヤに追い詰められた過去がある。

あの時は命からがら生き延びたが――、

「この右腕が、偽りの代物になってるのは奴に殺されかけたからだ……! 実際、私の

研究は全て奴によつて灰燼に帰す結果となつた……!」

「であれば、これは逆にチャンスなのではありませんか?」

「チャンス……?」

「シロウⅡエミヤに地獄を見せられたままでは後味の悪い結果と存じます。ですが、現

在彼は魔術講師という器に収まり、とても全盛期ほどの力を発揮できるとは思えませ

ん。ですのでチャンスでしょう。無論我々も力を貸します」

するとエレノアの後ろから人影が闇夜から浮かび上がってくる。

「彼は……?」

「錬金術師シオンの助手だった男でございます。これで、より盤石の布陣となりましよ

う」

「し、しかし……『死神』への対抗策は無いのか……!?!」

「それはバークス様であれば大丈夫かと。貴方様の内包する全てをぶつければ、必ずや凌駕することが可能です。殺害に成功した暁には、バークス様の株は絶対的なものとなつていきましょう」

エレノアの暗澹たる笑みに魅了される。

絶望に震えていたバークスは、その瞳に闇の心火を灯す。

全ては、己が全てを奪ったシロウⅡエミヤを殺す為に――。

「では、これから『遠征学修』についてのガイドダンスを始める」

二年次生二組の教室で、教壇に立ったエミヤはこれから待ち受ける行事の説明を開始する。

見れば生徒達もその響きに胸を躍らせているようで、数えるほどに迫った行事に思考を巡らせていた。

遠征学修。それは、二年次生の必修講座の一つである。

普段引きこもり気味の生徒達に、外での経験を通じて見聞を深めてもらいたいというのが行いう意図となっている。

しかし、実際には講座と研究所見学以外はほとんど自由時間であり、旅行と言っても言い返せないのが実情である。

「行き場所は白金魔導研究所か……」

「どうかしましたか、先生？」

「いや、失敬。何でもない」

こちらを見守るルミアからの問いを誤魔化す。

エミヤが経験した過去の経験から連想される不穏な響きに視線が鋭くなるが、杞憂であることを願うばかりだ。

とはいえ、こちらにはリイエルが新たな戦力として加わったので、万が一の事態が起こらない限り崩れる事の無い陣容となっている。

万が一が無ければ、の話だが。

「皆分かっていと思うが、私達が行くのは白金魔導研究所。自然溢れる場所に位置する、雄大な研究所だ。必ずや君達に良き物を齎してくれるだろう」

簡単に当日の計画と、研究所の特徴を説明する。

白魔術と錬金術を利用して生命神秘の研究をするのが白金術だ。その研究には上質な水が必要不可欠故に、立地が自然溢れる場所になつてゐる等の情報を話していく。

その最中で、エミヤは過去の経験から行動を制限することも脳裏をよぎつたが、それを忘却する。

何事も経験だ。目の前のリスクばかりを危惧し、満足に動けないのは生徒達の成長に繋がらない。

警戒はエミヤが強めれば良いし、リエルに伝える必要は無いだろう――。

そう考へて思考を切り替へる。少し前にもつと頼つてほしいと言われたばかりであつた。

放課後にでも情報共有を為そうか。

「では何か質問はあるかね?」

「ハイハイっ! 先生、俺質問がありますっ!!」

元氣よく手を挙げたのはカツシユだつた。

エミヤは続きを促す。

「自由時間つて、海を泳いでも良いんですよねっ!」

「勿論、自由時間だからな。私がとやかく言へる時間では無い」

「さつすが、先生!」

豪快にはしゃぐカッシユ。その瞳に映るのは果たして、雄大な海に揺られる自身の水着姿だろうか。

違うだろうな。

しかし、立地を話しただけでその思考に至れる素直さは率直に感心していた。確かに白金魔導研究所はリゾート地としても有名なサイネリア島にある。

「じゃ、じゃあ先生！ 水着を持って行っても構わないという事ですよね!」

「逆に問うが、水着無しで泳ぐというのかロッド?」

「ここまでお膳立てすれば残りの男子諸君もカッシユの意図を理解したようだ。

皆が女子の視線を気にせず感涙にむせいでいた。

「しかし、なるほど。『海』か……。これは、あれを投影する必要があるかもしれない……。!」

対してエミヤも何故か心を躍らせている。

前方で独り言を聞いていたシステイーナは思わず隣の友人に聞いてしまう。

「……もしかして先生って、他の男子と同じように水着で喜んでるのかしら?」

「あはは……多分、違うと思うよ? 単純に泳ぐのが楽しみとかそんな感じじゃないかな?」

「なるほどね。でも、あの笑みには何か企んでいるような意図があるように思えるのよ

ね……ほら、筋肉を見せびらかしたいとか？ 先生って意外な所ではしゃぐじやない？」

「うーん……先生がそんなことするかな……？」

そう言つて二人はエミヤが水着姿で筋肉を披露している所を想像する。

二の腕に力瘤を浮かべて、泰然とこちらを覗く姿——。

「……想像」

「できちゃうね……」

ニヒルに笑みを浮かべ、「どうだろうか？」と自慢げにする姿。

とてもじゃないが、想像できないとは言えなかつた。

数日後。

いよいよ待ちに待った『遠征学修』当日だ。

まだ日も昇りきらない、朝靄が立ち込める時間帯。

生徒達は制服に身を纏い、旅行鞆を手に就業場所であるアルザーノ帝国魔術学院中庭

に集合していた。

これからいよいよ行事の始まりだ。

その大事な一歩が始まるというのに、中庭に集まった生徒達には困惑の色が見える。

理由が分からないので問うことにした。

「何故そんな顔をする。何かあったか?」

「いや、先生の荷物を見て驚くなど言う方がおかしいですから!」

システイーナの声に生徒全員がうんうん、と頷いた。

そう言われてエミヤは己の荷物を隅々まで見渡すが何処にも変な物は無い。

「失礼な。私は至って正常だ。この荷物の何処に落ち度があるという?」

「そんな——釣りの道具を惜しげも無く広げて、驚くなどという方が無理な話よ!」

ビシツと指を差して告げるシステイーナに、エミヤはやれやれと肩を竦める。

「む? 何を言うかと思えば。君達とて自由時間に泳ぎに行くのだろうか? その間に私も私の方法で息抜きをしようと思つてね」

そう言いながら立ち上がると、エミヤは周囲を一望する。

「どうやら全員居るようだ。では、そろそろ出発だ。全員海を楽しむ準備は出来ているだろうか?」

「「勿論だぜ先生——ッ!!」」

カツシユら男子生徒がエミヤの問いかけに答える。

それを見ていた女子は冷徹の如き鋭い瞳で見ていたが、エミヤも締めるときと緩むときの切り替えは勿論しつかりと行うつもりだ。

時間を確認しながら脳裏に浮かぶ計面表を参照する。

このまま時間を潰す暇はない。

「ここら辺の切り替えは流石だよ、エミヤ先生」

「ホント、憎たらしい程清々しいわよね。ああ、何だかんだ言って先生が一番浮足立っているなんて……頭が痛くなってきた……」

そんな異性の様子を少し遠くから呆れたように見つめるシステイーナ。

ルミアのフォローも今は空しい。

二組の男子は全員欲望に素直なのだ。

異性の水着を見たい、泳ぎたい、釣りをしたい等。

しかし典型的な優等生であるシステイーナにとって、『遠征学修』といえどそこはしっかりとした学びの場。

とはいえエミヤもそれを理解したうえで息抜きを勧めている。

モチベーションという概念を魔術競技祭を通じて理解してしまったシステイーナも、意図ある緩和にまで何かを言う程頑固ではない。

どこから諦めの笑みを浮かべながら一つの結論を口にする。

「ま、息抜きも大切よね」

すると隣にいたルミアはまるで有り得ないものを見たかのように瞠目していた。

「どうしたの、ルミア？ 私の顔に何かついてる？」

「そんなことないよ。ただ、システイなら先生に対して何か言うのかなと思って」

「ああ……。だったら恐らく、私も汚染されてるのかもしれないわね……」

虚しく苦笑いをするシステイナを、静かに見つめるルミア。

親友の心変わり。

それに対して、嬉しいような警戒するような、ちよつと複雑な気持ちを中心にしまう。

そのまま二人はエミヤの誘導に従って馬車へと向かっていった。

数班に分かれて生徒達はスムーズに馬車に乗り込む。

そして最後にエミヤは引率教員用の馬車に一人で乗り込んだ。

これはエミヤ本人が直談判したものであり、移動中でも警戒を怠らず何時如何なる場合にも迅速に対応できるための対処であった。

馬車の中で各々の時間を過ごす生徒達。

エミヤもまた、馬車に揺られながら警戒と平和の狭間で時間を潰す。

払暁の空はいつの間にか黄昏へと変貌し、そのまま陽は姿を消した。

道中で休憩を挟みながら馬車は目的地へと進み、翌日の正午にフェジテ南西の港町シーホークに到着した。

各自食事休憩を入れた休憩時間の後、定期船に乗り込んだ二組は数時間潮の香りを堪能し目的地であるサイネリア島に降り立った。

「皆、ここまでの移動ご苦労だった」

まず全員を集めたエミヤは労いの言葉を告げた。

「こんなの、俺達の夢の為ならどうだってことはないっすよー！」

欲望の為なら疲労すら凌駕するか。それは素直に感心した。

言うは易く行うは難しとはこの事である。

「それは結構。では、これから観光街の一角に位置するホテルへ移動する。君達にとつ

てはこれも楽しみの一つと思う。とはいえ、浮かれるのは部屋に入ってからだ。エントランスで自分の部屋が分からない、なんてことの無いよう今から確認しておくように」そしてエミヤ達はサイネリア島の観光街へ移動した。

道中の見慣れない景色に目を輝かせる姿は、いくら魔術を学んでいようとも普遍的な学生であることの証左だろう。

中央部に複雑な渓谷を形成しているこの島の全貌は、一応夜間に調べておく必要があるだろう。

先に彼の研究所の下見をするのも忘れはしない。

生徒達の安全と、その内部を確認するために――。

「では到着だ。各々、今日までの疲れを癒すように。明日は自由時間なので、忘れ物は無いようにな。それでは解散」

ホテル前の広場で簡単に説明をしたエミヤは疲れが見える生徒を早めに解放する。

生徒達はその後一目散に部屋へと向かっていった。

やはり学校行事の宿泊場所には夢を見るものだな。

「ん。じゃあね、エミヤ。また明日。それとあの件、何か動きがあったら教えて」

「君にこれと言うのも久方振りだな。また明日、リエル。動きがあれば君へ報告する」ことを約束しよう」

律儀に挨拶をしたリイエルに昔の風景が映った。

特務分室も、普段は楽しい一時であったことを思い出す。

その後が続く言葉で現実に戻されるが、眠そうな表情の奥に秘める輝きを見て彼女に話して良かったと確信した。

「お疲れ様です、エミヤ先生」

そう言つて頭を下げたルミア、システイーナと共にホテル内部へと消えた。

生徒達の姿が見えなくなつたことで、エミヤの視界から日常の色彩が色褪せる。

——では、こちらはこちらの為すべき事を為すでしょう。

「いい加減出てきたらどうだ。君達がそこに居るのは分かっている」

「——まあ、当然だな」

木陰から姿を見せたのは魔術競技祭で連携した嘗ての同僚、アルベルトⅡフレイザーとグレンⅡレーダスだった。

二人を視界に入れた瞬間、先ほどまでとは纏う空気が一変した。

「君達が居るといふ事は、この『遠征学修』にも奴らの手が迫つているといふ事か？」

「そう言う訳ではない。だが、警戒するに越した事はないといふことだ。最近は奴らの動きが活発になつていふといふ事や、白金魔導研究所に対して不穏な噂があるといふ情報もあるがな」

確実に攻められる事は無いが、布石を打つのは定石か。

確かにリエルとエミヤに加え、この二人が参入するのは盤石な構えだ。

逆に盤石過ぎると言っても過言ではない程の戦力が、集まっている。

「まあ、大方は理解した。リエルには表側で動いてもらい、君達が本命という訳か」

「そう言う事だ。まあ、エミヤが居るんだったら俺達は必要ないと思うが、それでも一応って訳だな」

「そんな事は無い。有難い援軍だ。私が表立って動けない以上此度の護衛は君達が主軸となるだろう。頼りにさせてもらおう」

グレンの謙遜をエミヤは否定する。

その言葉にグレンは照れるように頭を掻いた。

「……何か、エミヤに言われるとむずがゆいな」

「尊敬する人間からの賛辞だ。素直に受け取っておけ、グレン」

「う、うるせえっ！　んなこと、無い……って訳じゃねえけども！」

アルベルトの茶化しに赤面するグレン。

こういう部分は素直に好感を持てる。

人間の薄汚れた場所を駆除する掃除屋になろうとも、人間味を残しているのは内包する強靱な精神が無ければ為し得ない芸当だ。

「では、この続きは私の部屋でしようか。誰が聞いているか分からん現状だからな」
エミヤの提案に二人は同意を示した。

エミヤは正面から。

グレンとアルベルトはそれぞれ二手に分かれて裏から侵入し、エミヤの部屋で合流した。

そこで簡単な情報交換を行い、それぞれの役割を把握する。

エミヤは当然教師という立場からルミアアインジェルを護る最後の砦。

グレンは単独で島を歩き回り、万が一に備えて罠を設置しに向かった。それが終わったら斥候として研究所へ突入。無理のない範囲で構造把握を為す。

アルベルトは遠距離攻撃が可能という事実から、お得意の変装で雑踏に紛れ込み警邏として周囲のカバー。

連絡役を変わずアルベルトに任した後、二人は闇夜の空へ消えていった。

「では、私も動くでしょう。グレンには罫を任せたから、私に出来るのはこの島の立地を把握する程度か……」

既に残された予定は無い。

生徒達の食事や入浴の後、そのまま就寝の時間となる。

先ほどシステイーナ、ルミア、リエルの三人が食事を届けに来てくれたことから、食事の時間が既に終了していることは理解している。

入浴も過ぎたとすれば、後は就寝のみだが。

エミヤが何かを言わずとも移動で疲れた生徒達は静かに眠るだろう。

「とすれば、簡単に地図を作成し二人に渡すでしょう。——む？」

窓から身を乗り出したエミヤだったが、思わぬ人影に視線を下に落とした。

そこには周囲を警戒しながら勇敢に前へ進む男子生徒諸君。

カツシュを先頭に向かう先に待ち受けるのは、女子が集う部屋であった。

「……なるほど、確かに彼らならやりかねないな。しかし入浴の覗きではないようだ」

大方、就寝時間を迎えた後で女子と遊びたいとも思ったのだろう。

不埒な理由ではないので、エミヤ本人としては見逃しても良かったのだが——、

「残念だったな、男子諸君。私も一教育者として、定められた規則を破る行為を目の前で見逃すわけにはいかないのですね」

ニヒルに口元を歪ませると、エミヤは窓から飛び降りた。
目標は勿論、船頭カツシユウインガーとその一行だ。

成長への道程

「———どうやら、俺達は最大の壁とぶつかっちまったみたいだぜ……！」

頬を伝う汗を指先で拭い、突如出現した目の前の存在を視界に捉える。

白髪をオールバックで整え、服装こそ魔術講師の衣装だが内面から浮き出る筋肉は彼が歴戦の戦士であることの証左だ。

普段は後ろから見守ってくれる存在が、今は我らとその立ち位置を逆にして相對している。

———握り拳が深くなる。

楽園を目の前にして、最大の存在。この計画を為すうえで一番危惧した存在が飄々と笑みを浮かべながらカツシユに声をかける。

「残念だったな、諸君。とはいえ、ここまで私に見つからず隠密行動を為した事は称賛に値しよう。下手な軍人のそれよりも君達の執念が勝っている」

「………だつたら見逃してくれても良いんじゃないですかね、エミヤ先生？　ここは先生として、俺達の成長を顧みて的な……？」

「それとこれとは話が別だ、カツシユ。君達の成長が見られたことへの喜びを胸にしま

い、私は教師として規則を破る君達を罰する選択を選ぼう」

船頭カツシユは彼我の戦力差を脳裏に叩き付ける。

後ろで冷や汗を流しながら控える陣容を整理しながら、十中八九失敗するであろう相対の選択を為す。

「ほう？ どうやら退くつもりはないみたいだな。明日を待つ、という選択肢は無いのかね？」

「当たり前だぜ先生……！ この日を数ヶ月前から楽しみにしていた俺達だ。例え先生が相手だろうと、それが退く理由にはならないですよ……！」

「それは、後ろに控える君達も同意見という事かな？」

エミヤはカツシユ以外の全員に問う。

振り絞るかのような首肯で、全員がその問いに答えた。

足を震わせ、神と相対するかのような絶望が広がることも、ひれ伏すことなく抗う道を選ぶか。

「了解した。では、君達の勇氣に免じて私に一撃でも与えることが出来れば見逃すことを約束しよう」

「え？ ほ、本当ですか……？」

「無論だとも。ああ、もしかしたら私も、内心では君達の事を応援しているのかもしれない

な。そこまでして行きたいという執念に屈服しているのだろう」

エミヤは両足を肩幅まで開き、その手に適当な剣を一本投影する。

その姿を見て生徒達も引つ張られるように戦闘態勢を整える。

弛緩した空気が切り替わる、音がした。

「とはいえこちらにも本気で応戦させてもらう。たかが一撃と思っているのなら、その意識は此処で捨てろ。私を徹底的に打ちのめすつもりで挑まなければ、何も為せずに終わることになるだろう。それで良いのなら、私は何も言わないがね？」

「——お前ら、準備は良いな？」

カツシユの声に圧倒されていた生徒達が立ち直る。

「元々簡単じゃないってのは皆理解してたんだ。それが、具現化したただけだろ？　けど、俺達は一撃を与えれば勝利だ。なら簡単に負けるわけにはいかねえ……！　そうだろ、皆!？」

「ああ、カツシユの言う通りだ。なにも倒すわけじゃないんだ。全員が連携すれば、拓けない道じゃない！」

「何たって、普段から俺達はあの人に鍛えられてんだ。その実力を披露するって意味でも都合だな！」

呼応するかのように準備を整える生徒達。

その姿にエミヤも笑みを浮かべる。

そうだ。いつだつて人間は、絶望を前にしても進む道を選択できる生命だ。

「——来い！」

「負けねえぜ、先生!!」

宵闇に浮き出る月光が地面を淡く照らす。

飛来する紫電と、それを叩き伏せる火花が地上から月を照らし返していた。

「わ、悪いカツシュ……。後は頼むぜ……」

一人一人、漸減的に倒れていく夢を追う者達。

連携は出来ていた。

選択は間違っていなかった。

指示は全員の士気を高める要因になっていた。

なのに、悉くを凌駕され目の前の存在に一撃も与えることは叶わず、夢の前に倒れ

去っていく。

「ついに君一人となったな、カツシユ」

「なあ先生。俺達……何が足りなかったんでしようか？」

「……答えを言うのであれば、全てだろうな。連携も、選択も、指示も間違つてはいなかった。ただ、それを完璧に熟す実力が伴っていないかった。だが悲観することは無い。全てが足りなくて、全てが揃っているのが、今の君達なのだからな」

「そう、ですか……。ああ、俺も限界かな——」

カツシユは答えを聞いて満足そうに意識を手放す。

彼を中心とした生徒達の攻撃は、彼らの齢を考えれば間違いなく卓越した代物であった。

格上殺しすら為し得る程のものだったのはエミヤ本人が保証する。

後は、年月が彼らの成長を促し、理想に手が届くようになれば、エミヤに一撃を与えるのも不可能ではなくなるだろう。

立った状態から倒れていくカツシユを、せめて楽に寝かせられるようにと手を伸ばした、その時。

「——隙ありだぜ、先生……！」

「何——？」

それを見越したかのようにカッシユの指先から紫電が迸る。

一瞬は驚いたエミヤだったが、惰性を凌駕し人間の稼働速度を卓越した彼ならば回避も容易だ。

手を退き、逆の手でカッシユの体を支える。

「……マジかよ。俺的には、結構手ごたえを感じてたんだけどな……」

「いや見事だ。捌め手は戦の常套手段だからな。私がそれに慣れていただけで、普通の人間であれば回避は不可能だろう」

「慣れてても、回避できるとは思えないんですが……?」

「かもしれんな」

エミヤに支えられながら地面に仰臥したカッシユ。

月光の淡い光を浴びて、その先に手を伸ばす。

「俺達が先生に勝つのは、この月に手を伸ばすぐらい夢物語なんですかね?」

「どうだろうな。それは、君のこれからの成長次第だろう」

それを聞いて苦笑いを浮かべるカッシユ。

「未来の俺、先生に勝てるかな……?」

「勝てるかもしれんし、勝てないかもしれん。ただ、君が成長を望むのであれば、私は全霊で手助けをしよう」

「それは……頼もしいっすね……」

臉が重くなり、ついにその力に抗えなくなったカツシユは眠りにつく。

勇敢に勝負を挑んだ彼らに称賛を。

エミヤはその場に倒れ込んだ全員を抱えると、その場を後にする。

「しかし、まさかこの短い期間でここまで成長するとはな」

自分も教師が板についてきたのだろうか。

生徒の成長に喜びを感じるようになってきた。

彼らを寝室に置いた後に、戦闘最中に見えたとある不審物の確認に向かうか。

「二応確認しておいて正解だったな。しかし、奴らがこんな手段を選択するとも思えんが」

ホテルの前で鋭い視線を見せるエミヤ。

その手に握られていたのは、古典的な爆弾であった。

「魔力感知に引つかかるのを恐れたか？ 確かに建物の構造把握は私の分野だが、魔術に絶対の崇高を見せる奴らが行使する手段とは思えん」

魔力感知を恐れて古典的な手段を選択する、というのはこの世界の普遍的な常識では考えられない事だ。

魔力感知を凌駕してこそ、本物のテロリスト集団というものだからだ。

だが常識に当てはまらない行動をして相手の裏をかくという行動自体にそこまでの疑問は無い。

それ以上に不可解な問題は、ただ一つ。

「相手は私の存在を警戒している——？」

ピンポイントでこのホテルに爆弾を設置する理由なんて、ルミアールティンジェルを扱う天の智慧研究会絡みの問題に違いない。

違いないのだが——。

「これは、アルベルトとグレンと作戦会議をする必要があるな。あとは、リエルも起こすでしょう」

何か、嫌な予感がする。

もしかしたら、天の智慧研究会以外にも動いている勢力が存在するのか。

それも含めた情報共有と今後の行動について一から話す必要がある。

あとは、念のため明日彼の研究所を調べてもらおうとしよう。

爆弾を見つけたエミヤは三人と共に会議を行い、天の智慧研究会の策略に対抗するための布陣を整えることにした。

周囲を警邏していたアルベルトには、グレンと共に白金魔導研究所へ情報収集や万が一の場合に備えた罫を張りに向かってもらった。

リエルは徹底的にルミアの周囲で護衛。

エミヤはアルベルトの周囲への警戒を引き継ぎつつ、ルミアの護衛をリエルと共に為す。

そうして各々為すべき事を脳裏に叩き込み、次の日。

絶好の日照りがエミヤ達を迎えていた。

「言っただろう、カッシュ。明日を待てないのかとね。それに、これは君が質問したことだろうか？」

「まさかこんな楽園が、何もせずとも俺達を歓迎してくれるなんて……!」

「君達もだ。目の前の宝に目が眩むのも理解できるが、もつと広い視野を持つことだな」
その日は予備日という事になっていたので、各々自由な時間を過ごすことが許される。

その為全員で海に向かったのだが、目の前に広がる女生徒達の水着姿に感涙するのは昨日雄姿を見せた男子諸君だった。

わざわざエミヤと戦わずとも待ち受ける楽園を捉えられなかった彼らは、少しは昨日の事を無駄な事とするのかと思つたが――。

「まあ、でも先生と戦えてよかったです。お陰で俺達もまだまだって理解できましたし。心のどこかで、あの魔術競技祭の経験から自己評価が高くなつた節もあつたので」

敗戦から学びを見つけようとする姿勢は、成長というのだろう。

「そう考えてくれるのであれば、私も君達の相手をした甲斐があつたものだ。では、昨日の分まで遊んでくると良い」

その言葉に元気に返事をした彼らは既に水着の格好になつていたという事もあり、全速力で蒼き楽園へ向かつていった。

常夏の熱気を吹き飛ばす元気にエミヤは苦笑いを浮かべながら、地べたに置いていた釣り道具を持ち上げる。

「君は水着に着替えないのだな、ギイブル」

「当然でしょう。本来、僕らは遊びに来たわけではないんですから」

さも当たり前のように魔術学院の制服姿で木陰で日光を遮蔽していたギイブルは、一人で幹に寄りかかりながら本に視線を落としていた。

「確かにその通りだが、時には息抜きも必要だろう。どうだ？ 釣りには興味無いかね？」

「興味無いですね」

「む。それは残念。君が付き合うと言うのなら、簡単な質問程度なら答えても良いと思っただがね」

そう言つて去ろうと背中を向けるエミヤを、ギイブルは苦虫を噛み潰したような表情をして呼び止めた。

対してニヒルな笑みを浮かべて振り返る。

「何かね？」

「さっきの言葉、僕の質問に答えるって本当ですか？」

「無論だ。簡単なものに限らせてもらうが、授業への質問や君の戦闘スタイルに対してのアドバイス程度なら付き合おう」

エミヤは釣り道具の一式をギイブルに差し出す。

最初は己が持つていた本と、エミヤの言葉の狭間で揺れていたが、最終的には釣り道具を受け取った。

「有意義な時間でなければ、すぐに釣りを切り上げますから」

「了解した。君を飽きさせることの無いように尽力しよう」

釣り道具を手を持った二人は近くの釣り場へ向かっていった。

「あんまり離れないんですね。お陰で釣りに全然集中できないんですけど」

「では、何時如何なる状況だろうと集中の手順を履行出来るようにならねばな。ほら、私には既に当たりを引いたぞ……!」

そのまま「フイー……ッシュツ!!」と声をあげて釣竿を引き上げる。

横からの呆れたような視線は無視だ。

少し遠くではしゃいでいた一部の生徒達からも驚いたように見られたが、犯人がエミヤと分かると苦笑いを浮かべて各々の遊びへ戻っていった。

「ふむ。あまり大物では無かったか」

エミヤはそのまま釣った小魚を海へ帰す。

ここには遊漁として来た為、キャッチ・アンド・リリースの精神で臨ませて頂く。

「僕だって……!」

「その調子だ。君とて、いつまでも私にやられたままでは癩だろう?」

「ええ、癩ですよ……!」

ギイブルは己の世界に閉じこもる。

淡々と、されど熱意に溢れた彼の心火を灯す事に成功したようだ。

あとはこれを自分で引き出せば言う事は無い。

「そう言えば、聞きたいことが一つだけ」

「何かな?」

「……僕の戦闘スタイルについて、アドバイスがあるって言っていましたよね?」

「言ったな。それが?」

「先生には、僕の最適な戦闘スタイルが見えているんですか?」

「見えているとも言えるし、見えていないとも言えるな」

それを聞いてガクツと肩を落とすギイブル。

「な、何ですかその漠然とした回答は……!?!」

「君が目指すべきスタイルをする魔術師を、以前育てた事があつてね。完全にそれを模倣すれば君も強くなれるという確証はないが、間違いなく今よりかは一歩前に進むことは出来るだろうなという憶測の状態だね」

「僕が目指すべき、スタイル……?」

「ああ。君の長所は全体を俯瞰し、彼我の戦力差を測り、最適の攻撃法を完璧なタイミングで放てる所だ。それ故想定外の場面では弱いという弱点があるが、それも今後改善していけば良い」

「それで、具体的に言えば?」

「君の最適なポジションは中距離だ。故にそこを確保できるスタイルが一番良いだろう。具体的に言えば、ゴーレムに相手の妨害してもらい、そこを安全なポジションから阻害・狙撃するというスタイルが、一番君の長所が輝くと私は思っている。または、近距離が得意な相棒でもいいのだがね。先ほど言った三つの長所を併せ持つ君は、カバリングに優れている」

最初は半信半疑で聞いていたギイブルも、真剣に語るエミヤの瞳に吸い込まれていた。

間違いなく、ここは手放してはいけない時間だと理解したようだ。

「残念ながら、僕にはそんな相棒は居ないので前者になりますね」

「そうだろうか？ 私的にはカツシユと組み合わせれば面白いコンビになると思っているのだがね」

「カツシユと、ですか……」

途端に嫌そうな顔をするギイブル。

だが、互いに逆ベクトルの在り方ながらそれが衝突することの無い二人は間違いなく良いコンビだろう。

なにせ、今エミヤはギイブルの姿にアルベルトの影を重ねている。

グレン・アルベルトコンビと似て非なる名コンビになるのではなからうか。

「生憎と私には魔術の素養が無くてね。だが、何時か君にはとある高等技術を覚えてもらいたいと思っている」

「それは一体？」

「ディレイ・ブート時間差起動だ。用意周到な君には、似合いの技術と思うのだがどうだろうか？」

「――」

ギイブルがその問いに返答することは無かった。

だが、それがネガティブなものではない事は理解している。

彼自身まだ整理がつかっていないのだろう。

故に、彼にディレイ・ブート時間差起動を習得してもらおうのは、もう少し先の未来となりそうだ。

「もし己で整理し、本当の答えを見つけることが出来たなら、私の元へ来ると良い。その時に、私は君にそれを仕込む前準備を施そう」

ギイブルは静かに頷く。

しばらく静寂が周囲を支配する時間が続く。

すると、後方から何やら声が聞こえてきた。

「あつ！ 先生、ここにいらつしやつたんですね！」

「どうした、三人共。もしかして、何かあったか？」

後ろを振り返ったエミヤの前には水着姿のルミア、リエル、そして少し後ろからシステイーナが居た。

駆け寄る姿から緊迫した状況でない事を悟り、自然と周囲に誰も居ない二人のみの場所へ来た意図を問う。

「突然ですが、先生。どうですか、この水着似合ってますか？」

そう言つて無邪気に目の前で一回転するルミア。

感想を述べろ、ということなのだろう。

エミヤは少し考えるようにしてルミアの姿を見る。

彼女は青と白のストライプ柄の水着を纏っているが、それは互いの魅力を相殺するごとく魅力を引き立たせている。

元来のスタイルの良さも相まって、その水着は彼女にしか似合わないのではないかと錯覚してしまう程だ。

これは、ギイブル達には目の毒なのではなからうか。

「とても可愛いよ、ルミア。君にはその明るい色が似合うな」

「ふふっ。ありがとうございます。じゃあ、リエルの水着はどうですか？」

ルミアが背中を押し、一步前に出るリエル。

彼女は世間一般的なスクール水着を着用していた。

スクール水着越しに映し出された引き締まった体のラインは、彼女の魅力として映るだろう。

「……もしかして、似合わない？」

返答が遅れたエミヤへ心配そうに首をかしげるリエル。

「そんなことは無いとも。とても似合っているさ、リエル」

エミヤの答えを聞いたリエルは静かに「そう」と質素に答えるも嬉しそうな表情をする。

「それで、君達がここへ来たのは単に私の感想を聞くためだろうか？」

「あ、実は皆でビーチバレーをやるうって話になったんですけど」

「なるほど。では、私も参加させてもらおうか。君はどうだろう、ギイブル？ 一人で釣

りをするのも趣があることとは思うがね。体を動かす事も大切だ」
「……分かりました。僕も参加しますよ」

渋々、という形で参加を承諾したギイブル。

それを聞いたエミヤはルミア、リエルと共に皆が集まる側へ移動する。
その道中で。

「システイーナ。君は何のために、私達の所へ？」

「特に理由は無いわ。まあ、保護者みたいなもんよ」
なるほど。一応納得した。

つと、そう言えば一つだけシステイーナに言っていない言葉があつたな。

「そう言えば、君の水着も良く似合っている。君を引き立たせるのはやはり、白が一番だな」

白を背景に、花柄のお淑やかな水着だった。

個人的に彼女のテーマカラーは白、なので実に似合っている水着であつた。
流麗なラインを描く体は、何にも染まっていない純白を思わせる。

突然エミヤがこんな事を言ったのはルミアとリエルにだけ言って、システイーナには言わないのは不公平感があるという理由からだ。

だが、唐突にそんなことを言われた本人は困惑気味に一歩二歩後退りをする。

「え……？ もしかして、新手のナンパ？」

「待て、そんな目で私を見ないでくれ。これは私の本心だ。決して疚しい気持ちで言ったわけではない」

「……ま、そんな感じだとは思ったわ。ですが、そう言う言葉は私じゃなくルミアに言っ
てあげて下さいね」

「？ どうしてそこでルミアが登場する？」

ごく当然の疑問だろう。

不平等感を感じたのでエミヤはシステイーナに本心からの感想を伝えたのに、そのベ
クトルをルミアに向ける理由が分からない。

「理屈じゃなくて感覚で理解してくれると助かります。私よりもあの子の方が、先生と
一緒に居たいでしょうし」

「そうか。とはいえ、システイーナとの時間を蔑ろにするつもりは無い。勿論ルミアと
の時間も大切にしているが、君も私の生徒なのだから、遠慮する必要は無いんだからな」

するとシステイーナは瞠目した。

そのあと赤面した顔を隠すように視線を背ける。

「……あ、ありがとうございます」

その後ビーチバレー会場である砂浜まで会話することは無かったが、心地悪い静寂で

は無かった。

ビーチバレー大会

そして、エミヤも含めた二組全員が参加するビーチバレー大会が開始する。

三人一組となる今大会で、エミヤはギイブル・カツシユの二人とコンビを組むことになった。

チームの決定方法はくじ引きなので、決まってしまうたチームにとやかく言うことは出来ないのだが、その三人に対して周囲から最警戒チームと認定されてしまったのは間違いない。

一つの懸念材料は、ギイブルとカツシユの連携だったが、案の定正確な連携をするこ
とが出来ないまま、それでも最終的には各々の身体能力のゴリ押しで並み居る敵をギリ
ギリで踏破していった。

ギリギリの戦いを続けながら、それでも勝ち進むエミヤチームは遂に決勝戦にまで辿
り着く。

「遂にここまで来てしまったな。私としては、予選で負けるのが関の山と思っていたの
だがね」

「だから言ったじゃないですか。僕とカツシユが良いコンビになれるはずがないと」

エミヤの言葉に不愉快そうに鼻を鳴らして答えたのはギイブルだ。

最初コンビを組んだ時、肯定的な結果を視野に入れていたカツシユにギイブルが真正面から反対するなど、スタートラインから躓いていたこのチーム。

確かにギイブルの言葉に異論は無い。

連携では無く、完全な個の力で勝ち上がったチームが、このエミヤチームなのだから。「まあまあ。そこまで先生に反抗する必要ないだろ、ギイブル。何だかんだ言って勝ってるんだからさ」

「何だかんだ、ね。だったら、僕達は次に相手に負けることになるだろうね」

次の決勝の相手は、ギリギリの勝利を掴み取ってきたエミヤチームとは正反対の戦績を残してきたチームだった。

陣容は、このクラスでエミヤという規格外を除けば容易で首位に立てる運動能力を担う大砲リイエル。

魔術の戦績は勿論、的確な指示やポジションニングでチームを勝利に導く司令塔システイーナ。

そして――、

「……テレサ||レイディ。彼女が最も厄介だろうな」

エミヤの言葉に首肯する二人。

今更ながら説明すると、このビーチバレーは普通の代物と少しルールが違う。

それは魔術を行使することが出来るというポイントだ。

遠隔物体操作の魔術である白魔【サイ・テレキネシス】によってボールを拾う事が出来る為、遠隔操作系の魔術に才能を見せるテレサは驚異の防衛率をこの大会で誇つていた。

「テレサがレシーバーを務めた時は、まだ失点してないんだよな……」

三人一チームのバレー。

その役割は、アタッカー・サポーター・レシーバーの三つに分けられ、一ゲームごとにローテーションする。

なお、エミヤはサポーター固定であり、残りの二人がアタッカーとレシーバーを交替しながら回している。

「彼女の防壁をどう攻略するかが鍵になるだろう。では、そろそろ試合開始だ。私達も準備をしないとな」

既に並んでいたリエル達のチームに遅れてエミヤ達もポジションに就いた。

「もう作戦会議は終わりで良いんですか?」

「良いとも。修正は、試合と共に施していくさ」

システイーナとエミヤの軽い言葉交わしが終わり、審判を務めるルミアが試合開始の

合図をする。

まずはカツシユがレシーバー、ギイブルがアタッカーの役割で相手の出方を見る。

合図と共に放物線を描いたシステイーナからのサーブをカツシユが拾う。

「先生！」

「了解した」

サポーター固定と云えど、エミヤの正確無比なトスはギイブルの前に落ちてくる。

完璧のタイミングで上げられたトスを、ギイブルもまた、己が身体能力を全て注ぎ込みスパイクを放つ。

だが――。

「そん――！」

鉄壁の防衛を誇るテレサを、拙い連携が根底にある個の力全振りのチームが凌駕出来る訳が無い。

難無く拾われ、システイーナがトスを上げる。

その先に待ち構えたのは、リエルだ。

「えい」

気が抜けるような音頭と共に周囲に巻き起こったのは、ひしゃげるボールが地面に着弾し間欠泉の如く天へ舞い上がる砂の雨。

対応を任されていたカツシユとて、リエルに次ぐ身体能力の持ち主だが、それでも掠ることすら叶わなかった。

「……俺、初めてビーチバレーで死ぬかと思ったぜ」

魂が抜けたかのようなカツシユの弱々しい声が惨劇の証左だ。

前に立っていたギイブルも砂を浴びながら瞠目する。

やはり、リエルが相手では分が悪いか。

「どうですか、私達のチームは？」

「最悪な相手だと実感させられたよ。質ではこちらにも負けて無いと自信を持って言えるが、連携が必須なチーム戦では差が顕著だな」

やれやれと肩を竦めるエミヤ。

だが、システイナーはそこに疑問を持つ。

「先生は、あまり現状を悲観しているわけではないんですね。どちらかというと、希望を保持しているみたいに見えます」

「無論だ。最初から諦められる程、彼我の差は無いと考えているのでね」

二人と対照的にポジティブな観測をしているエミヤ。

システイナーは疑問を持ちつつも、己がチームの為に動き続ける。

確かに彼我の差は無い、それを理解しつつも同意は出来ない状態のまま、漠然とした

不満を抱えたシステイーナ。

だが、彼女の予想に反してエミヤチームは次々と点を入れられていき、どんどん追い込まれる結果となった。

「これは不味い。これ以上差を広げられるわけにはいかないな」

「そんなの、言われなくても分かってますよ……!」

苛立ちが見えるギイブルと、ぜえぜえと息を切らすカツシユ。

満身創痍のエミヤチームに対して、システイーナチームは楽しむ余裕があるようだ。

スコア差は歴然。エミヤチームは残り三回ポイントを奪取されれば敗北に直結する。

そろそろ、動き出す必要があるか。

「何とかしてリイェルの剛速球を拾えれば、チャンスはあるのだがな」

「そのチャンスを作るのが難しいんだよな……。先生がレシーバーに回ることが出来れば、難無く突破できる障壁なんですよね」

「残念ながら私がそちらに回るのはフェアではないのでね」

何度目か分からないカツシユの提案を、エミヤは変わらず却下する。

ですよねー、と苦笑いを浮かべる彼だが、今の提案は結構本気であったのだろう。少し肩を落としている。

その横で静かに後ろへ下がったギイブルに声をかける。

「次はギイブルがレシーバーか。一つ問いたいのだが、そろそろリエルの球を拾えるのではないのかね？」

「そろそろ拾えるって……そう簡単に言いますが、あれを拾うなんて無理な話ですよ。僕は先生みたいな動体視力は持っていないので」

「それだ。誰が真正面からリエルの剛速球に対応しろなんて言った。普段の君であれば、あれを突破するのに力技ではなく規則性を見破る術を選ぶはずだが？」

「規則性……。まあ、確かに彼女のボール軌道を予測することは不可能では無いですけど——」

「ではやれ。死に物狂いで剛速球を空へ上げてみせろ。拙くても良い。微少でも構わない。それが君の任務だ。なに、ギイブルもウィズダンの本気を見せれば不可能な事ではないはずだ。そうだろう？」

「……無責任な」

やれやれと肩を竦めながらも、何処か笑みを浮かべるギイブル。

良くも悪くも身体能力が己よりも格上の二人とチームを組まされ、劣等感に拘泥していた彼は本質である負けず嫌いを展開できずにここまで来てしまった。

これが別の人間と組んだ時であれば、一人でそこへ踏み出すことが出来たのだろうが。

ギイブルⅡウイズダンという聡明な少年の自己完結で一番の適任者をエミヤ達は失う事になってしまった。

間違いない、このクラスでリエルⅡレイフォードの剛速球を拾えるのはギイブル唯一人。

だが、ボールを拾うだけのディフェンスでは勝利できない。最強の防壁を突破できる、一本槍が必要だ。

それを任せられるのもこの舞台に立っている。

呆然と二人の会話を見ていた役者を手招きで呼び作戦会議をする。

「良いか、カッシュ。君の任務はギイブルが拾い、私が上げたボールを相手のコートに叩き付ける事だ」

「一言で言うとう簡単そうに聞こえるけど、相手が強すぎるんですよね。……ギイブルがやる気を出してる手前で恥ずかしいですけど、テレサに拾われる未来しか見えないです

……」

「そうか？ 少なくとも、私にはテレサはそれほど大きな障害には見えないがね？」

「いやいやっ！ 先生だつて今まで俺達のボールが難無くテレサに拾われてたの見てましたよねっ!？」

「見ていたさ。とはいえ、それは彼女の卓越した魔術センスと驚異的な運が味方したことによる結果だ。それ以外では何一つこちらの汚点は無い」

鋭く相手コートを睨むエミヤの視線につられるように、カツシユもネットを隔てた相手コートを見る。

「我々は相手にリエルが居るが為に、剛速球を放つことに拘りすぎてしまった。だが、その結果テレサと真正面から勝負することになってしまい全戦全敗だ」

「う……じゃあ、どうすればいいんですかね？」

「簡単な話さ。テレサと真正面から勝負をしなければ良い。テレサは確かに魔術が使えるれば厄介な存在だろう。しかし、身体能力勝負にしてしまえば我々に分がある」

「……要するに、搦め手を使えつて訳ですか」

首肯したエミヤ。

汚いと言われるかもしれないが、相手が正々堂々正面から戦いを挑んでいる以上こちらにも本気でやらねばならない。

ただ、本気のベクトルが少々ずれるだけだ。

「作戦会議はもう良いんですか？」

「すまない。待たせてしまったな」

システイーナの挑発じみた言葉に冷静な声音で返答するエミヤ。

短いやり取りの後、エミヤチームの三人が耽々と構える姿を見てシステイーナも思考を切り替えた。

「どうやら、有意義な作戦会議になったみたいね」

ネットを飛び越えて返球されたボールをギイブルに託す。

サーブはこちらから。一撃目で仕留めなければ、リエルの剛速球が襲ってくるのは自明の理。

だが、既にその恐怖からは逸脱している――。

「テレサ！」

テレサがギイブルのサーブを拾い、システイーナへ。

「リエル――！」

「ん」

高く飛び上がったボールへ、追随するリエル。

そのまま、高く掲げた手を振り下げる。

「任せたぞ、ギイブル！」

「分かっているさ——ッ！」

ひしゃげるボール。

音速すら凌駕した飛来速度を、ギイブルは軌道予測を以て凌駕する。

「な——？」

悲痛に震え、両手を真つ赤にした状態で拾い上げたボール。

驚愕の声をあげたのは誰なのか、それすらも置き忘れてエミヤは駆ける。

その雄姿を途切れさせないように、空へ。

「君が決める、カツシユ！」

「了解です！」

まさかリエルのボールが拾われるとは思っていなかったのか、緊張が途切れた相手二人。

エミヤの的確なトスを捉えたカツシユは全身をバネのように撓らせると、筋力を総動員してスパイクを敵陣地に叩き込む。

未だ忘我から脱出できないテレサが、それを拾う事は叶わず、そして——。

「よっしやあああああ——っ！」

カツシユの歓声で観客が我に返る。

そこにはシステイーナチームの砂場にめり込んだボールの姿。背水の陣で、エミヤ達は一矢報いることに成功した。

「嘘でしょ……？　これが、先生達の本気だっという事……？」

システイーナが驚きのあまり独り言を漏らした後、近くにいたエミヤに駆け寄る。

「どうだ？　私達の本気は」

「正直驚きました。よりにもよって、今まで崩されたことの無いポジションでポイントを奪われたので」

「ああ。良いタイミングだっただろう？」

「……本当に、良いタイミングだったわ。でも、これで勝ったとは思ってないわよね？　まだまだ私達のリードは揺らいでいませんよ？」

「理解しているさ。だからこそ、ここからの逆転劇が最高に盛り上がると思わないかね？」

ニヒルな笑みを浮かべるエミヤに、同じように笑みを返すシステイーナ。

「……良いわ。絶対に、負けないから」

「そう来なくてはな」

ここから、ビーチバレー大会は大きな盛り上がりを見せることになる。

最後の最後で覚醒した優勝候補。搦め手と正攻法を織り交ぜながら繰り出される攻撃は、脅威以外の言葉が見つからない程強力だった。

だが、盤石を誇るチームから逆転するには遅すぎて。

結局強力な布陣を敷いたシステイーナチームに屈することになってしまった。

怒涛の勢いも遅すぎれば風前の灯火だ。とはいえ、思い出に残る一時となったのは間違いない。

ビーチバレー大会が終わった後もクラス全員で日が暮れるまで遊び惚けて、空が暗く染まった頃。

エミヤは一人で海に戻っていた。

「さてと、やはり研究所に隠しは無かったか……」

生徒達は既にホテルで夢の中だ。

エミヤは一人で釣り糸を水面に垂らしながら、先ほど合流したアルベルト、グレンの二人から得た情報を並べる。

「政府の公的機関であるが故に、盤石の守りを誇る研究所を使うという考えは相手を買い被りすぎたな。しかし、バークスIIブラウモンの正体は暴けた」

下ろした視線の先には、白銀魔導研究所所長バークスIIブラウモンが今まで犯してきた悪逆非道の限りが克明に刻まれた報告書。

それはエミヤも不愉快な気分になる文字列だった。

「私に追い込まれてもなお、外れた道を歩み続けるか。その探究心を別のベクトルに曲げてくれれば良かったのだがね。まあ、天の智慧研究会の思考など私には理解したくない代物だ。生徒に何の被害が無いよう、二人と連携せねばな」

白銀魔導研究所に流れる資金の齟齬を追えば自ずと理解できるが、奴はもう一つ別の研究所を秘密裏に構築している。グレンとアルベルトにはそこを捜すために動いてもらっている。

バークスIIブラウモンという男の研究分野は綺麗な水が必須となる等の条件から絞れば大体の場所は掴んでいるが、それでも相手を舐める慢心は不要だ。
万全の力を以て排除する。

「———ここで何をしているの、エミヤ？」

突然の声に驚くも、犯人が分かるとエミヤは平然と問いに答える。

「リィエルか。見て分からないかね？ 日中に出来なかつた釣りの続きだ。生徒達と遊

んでいたので、疎かになってしまったのでね」

「ん。それは分かる」

「分かる、か……。ではどうしてそんな質問をしたんだ、リエル？」

「えっと……」

背中からトコトコと駆け寄ってきたリエル。

だが、何か様子がおかしい。

質問の意図を問うても、答えをすぐに見つけられない所は彼女らしくない。

もしもじと視線を泳がせていたリエルだったが、一度覚悟を決めるように深呼吸を
するとエミヤに再び向き直る。

「一緒に……釣りをしちや、ダメ？」

「……そうであれば、最初からそう言えば良い。私に断る理由はないのだからな」

エミヤは苦笑いを浮かべながら投影した釣具をリエルに渡す。

彼女は嬉しそうに「ありがとう……」と礼を言う、エミヤの横にちよこんと座る。

そのまま二人して、暫く夜風に当たっていた。

「そういえば、君と共に釣りをするのは久しいな」

エミヤは懐かしそうに呟くと、リエルもそれに首肯する。

特務分室に在籍していた時代。暇な時にエミヤは釣りに向かっていたのだが、そこに

彼女がついてきていたのだ。

「あの時は朝が早くて大変だった。今日みたいに夜にやればいいのに」

「夜は寝る時間だ。君と夜の釣りに繰り出すのも楽しいとは思いますが、セラが許さないだろうしな」

むうと頬を膨らませるリエルだったが、セラの名前を出されれば従うしかない。

過去にエミヤがリエルを拾った時、特務分室の部屋にいない事が多かったエミヤの代わりに一番近くで彼女の成長を見守っていたのがセラⅡシルヴァースだった。

親代わり、といった関係で関わってきた二人だ。そこに生まれた絆は本物の親子に勝るとも劣らないだろう。

「それに、夜出かけるとイヴに色々な事を聞かれてね。最後には呆れられてしまうのが落ちなのだが、これ以上彼女からの印象を下げる訳にもいかなかっただろう？」

「それは大丈夫、だと思おう。イヴはエミヤの事を嫌ってない。むしろ、一番頼りにしてる」

「頼りにしている、か。本当にそうであれば良いのだがね」

こうして二人で釣りをしていると、色々な事を思い出す。

非日常も多かったが、仲間と過ごした日常はかけがえのない宝物だ。

そう、こうして二人で朝日が照らす水面を見ながら一日の始まりを体感していたん

だった。

「そういえば、どうしてリィエルは早朝に私と共に釣りに向かったんだ？ 君には有意義な時間では無かつただろう。逆に退屈させてしまったのではないか？」

エミヤの疑問に首を振るリィエル。

「退屈じゃない。エミヤと居れる時間全てが、わたしにとって楽しい時間。だから、眠くても頑張った！」

「眠かつたのは否定しないのだな……」

確かに舟を漕ぎながら釣り竿を持つていたな。

最後は彼女を背負いながら帰路に就いていた。

全然眠気には勝っていなかつたとは思うのだが、本人が頑張つたというのだから頑張つたのだろう。

結果でなく過程を重視する場面だな、これは。

色々と逡巡していると、リィエルは突然エミヤを見る。

「——だから、またエミヤと一緒に過ごすことが出来て良かった。エミヤは、わたしの事を迷惑に思っているかもしれないけど……」

「迷惑になんて思っていないさ。私も、君と共に日常生活を謳歌できて良かったと思つている」

「ほんとう……?」

「本当だとも。迷惑に思う? とんでもない。私は君の全てを愛おしいと思っているよ」

心からの言葉を伝える。

薄幸の定めを退け払い、他人を心配することが出来るようになったリイエル。レイフォードの優しさは、成長の過程を見てきたエミヤにとっては嬉しいものだ。

満足そうに頷くエミヤだったが、対照的にリイエルは瞠目して視線を逸らした。

「むう。エミヤはずるい……」

リイエルは赤面しながら頬を膨らませるが、エミヤには何故ずるいと言われたのか分からない。

こほん、と咳払いをすると話題を切り替える。

「リイエル、この学院はどうだ?」

先生として、何より仲間として。

彼女の心境を探りたいと思っただのだ。

今の今まで非日常に体と心を置いていた状態から、場面が切り替わるかのように日常へ放り込まれたリイエル。

遠目から大丈夫とは思っているが、念のため。

「ん。とっても楽しい」

「そうか」

それは、紛れもなくリエルの本心なのだろう。

彼女の口から出る言葉を、何一つ聞き逃さないようにエミヤは耳を傾けた。

友達

「わたしは、この学院に来て良かったと思ってる。それは、システイーナやルミア、クラスの皆と会えたことは勿論だけど、もう一度エミヤと再会できたことも、理由」

リエルは釣り糸を水面に垂らしながら、揺らぐ水鏡に映る己を見る。

「でも、わたしはシステイーナやルミア達とどう過ごしていけば良いのか分からない……。最近まで違う場所に居たわたしは、本当にここに居ても良いのかって思う時がある……。ねえエミヤ、わたしは本当にここに居ても良いの？」

非日常に慣れ過ぎて、逆にそれが日常となってしまうのだ。

故に途端に触れさせられた日常に戸惑ってしまったているのだ。

こちらを心配そうに覗くように見るリエル。痙攣したかのように震える彼女の瞳は、彼女の恐怖を具現化していた。

「大丈夫だ。君を受け入れていない者など私のクラスに居ない。とはいえ、君自身はどう思っているのかは別だがね」

「わたしが、どう思っているか……？」

「システイーナやルミアを筆頭に、多くのクラスメイトと共に過ごした日常は、君にはど

う映った？」

まるで別世界だろう。

血と硝煙が日常を彩る風景だったのに、今彼女を彩るのは談話と温和の温かい風景だ。

エミヤの問いを噛み締めるように熟考していたリイエルは、思考の為に下ろしていた視線を上げる。

「困っていない、と言えば嘘になる。でも、システイーナやルミア、そしてクラスの皆と居るのは、悪い気はしない」

「それは、心地良いということかね？」

その問いに温かく頷いたリイエル。

既に視線は下ろし、釣り糸を静謐に見つめる彼女だが、その横顔は仄かに微笑んでいた。

「そうか。ならば悩む必要は無い。君が体験した風景が日常であり、友達だ。それを心地良いと感じられたなら、君は立派なそちら側の人間だ」

思わず過去の話を思い出す。

この世界におけるイレギュラーが、決して邂逅し得ぬ奇跡を果たしてしまった日を。

雪原が舞台の、連綿と続く兄妹の絆を――。

少し感傷に浸り過ぎたか。静かに目を閉じていたエミヤが再び視界を取り戻すと、その先にはリエルの顔面があった。

「ねえ、エミヤ。わたしは、そちら側って場所に居るの?」

「形而上の話さ。物理的に距離が離れているとか、そう言う訳では無い」

「じゃあその、そちら側って所にエミヤは居るの?」

真剣な瞳に、嘘は許されない。

だからこそエミヤは伝える。

「……私は、そちら側に居てはいけない存在だ。だが、君はそちら側に居るべき人間だ。ならば、そこを離れない方が良い」

「じゃあ、わたし以外にそちら側って場所に居る人は居るの?」

「無論いるとも。君だけじゃない。システイナーナやルミアは勿論、グレンやアルベルト、イブやセラ、他の特務分室の面々も、皆そちら側の人間だろうな」

「なんでエミヤは居ないの?」

「――」

何で居ないのか。

その問いへの答えは、やはり位置する位相が違うという言葉が正しいのだろう。

彼らは未来ある人間で、この身は既に停滞を位置づけられた英霊だ。

先の戦いで歩んできた道程は間違っていないと思ひ出せたが、他人にそれを強要しようとは思わない。

——大きく二酸化炭素を吐きだし、思考を切り替える。

リエルに言うべき言葉は、きつと違う。

「君達は日常の風景で笑っている姿が似合っている。これが理由では駄目かね」

するとリエルは観念したのか触れ合いそうにまで近づいていた顔面を引つ込めた。

見渡す先は再び夜風が起こす漣の揺れる水面。

暫く釣りに戻った両者だったが、リエルが突然独り言のように口を開けた。

「……エミヤに昔、どうして強いのかって聞いた事があつたの覚えてる？」

「懐かしい話だな」

「その時にエミヤは、『皆を守る力』が欲しかったから強くなったって言つてた。だからわたしも、皆を守るように強くなった。今は、システイーナやルミア、クラスの皆……友達を守るようになったと思う」

リエルの強さは本物だ。

それに、友達を守ると自分から口に出ることが出来たという成長の事実には、エミヤは感慨深げに頷いた。

まあ、一つだけ訂正することがあるか。

「とはいえ、友達とは一方的に守る対象ではない。助け合うものだぞ。それは普段の生活からそうだ。君は何度も周囲の友達に助けられているだろう?」

「ん。そして、緊急事態の時はわたしが助ける」

それが分かっているのなら大丈夫だろう。

「さあ、既に夜も遅い。そろそろホテルに帰るとしようか」

そう呼びかけ、帰り支度を始める為立ち上がったエミヤを、リエルは手で引つ張った。

「どうした?」

「エミヤも皆に助けられてる。だから、友達?」

「友達、は少々語弊があると思うが……まあ似たような関係だな」

体幹で持ちこたえたが、リエルの引つ張る力はどう考えても普通の力ではない。

それだけエミヤを止めたかつたということだろうか。

内心困惑しているエミヤとは対照的に、リエルはその言葉を聞いてやつぱりと頷いて勝手に納得した雰囲気を出していた。

「それをエミヤは、心地良いと思ってるんだよね?」

「そうだな」

当たり前前の事に頷いたつもりだったが、リエルは突然悪戯をする弟を見守る姉のような、そんな温かい視線でエミヤを見る。

「——じゃあ、エミヤもこちら側の人間。わたしが友達と関わる日常を心地良いと思うように、エミヤもまた心地良いと思ってる」

ふふんつと満足そうに口にしたリエル。

それを聞いたエミヤは極限にまで目を見開いた。

普段から彼の表情を知っている人間であれば、間違いなく驚くような形相をしていることだろう。

「それに、エミヤも日常の風景で笑っている姿が似合ってる。さっきのビーチバレー大会も、楽しそうだった」

「ああ——とても楽しかったとも」

そう言つて苦笑いを浮かべる。

「参つたな。まさか、君に言い負かされる日が来ようとは——」

「わたし達と過ごす日常が心地良いと言つたエミヤは友達。なら、わたしはエミヤを守るし助ける」

リエルの為の言葉が、最後には全て己に降りかかってくるとは。

流石にエミヤも笑うしかない。

最後にせめて、こちらを仲間と改めて話してくれた彼女に自分も恩返しせねばならぬか。

「ああ。それは、とても心強いな」

エミヤは愛おし気にリエルの青い髪の毛を撫でる。

最初は撥つたそうにしていたが、特に反発することなくされるがままにされていた。

その光景を見て、エミヤは思う。

——こういう日常が許されたのなら、どれほど楽だったのだろうか。

翌日。楽しかった自由な一日が過ぎ、エミヤ達は見学場所である白金魔導研究所へ向かっていった。

島の中心部にある研究所は、開発が進んでいる北部沿岸部とは異なり鬱蒼とした森が立ちほだかる場所に位置している。

早朝から宿舎を出発したエミヤ達は、自然の起伏を感じながらも一応舗装されている石畳の上を歩いていった。

人の手が加えられていない自然に囲まれる感覚は、エミヤからすれば楽しみながら視界を回転させることも可能だが、都会暮らしの長い生徒達には違うように映ったようだ。

「大丈夫か？ 辛いようであれば、無理する必要は無いからな」

「あ、ありがとうございます……先生。ですが、これぐらい……」

最後尾から声をかけるが、返ってくるのはどう考えても無理をしているとしか思えない返事ばかり。

道中で無理をして、本番である見学の時間に集中できないという事態は避けたい。

だが、彼らの努力を反故にしたくはない。

どうしたものかと思考を張り巡らせていると、前の方から興味深い会話が聞こえてきた。

「あんまり無理すんなよ？ ほら、フラフラじゃないか。荷物ぐらいなら持つぞ？」

そこには仲間にも声をかけるカッシュが辛そうな生徒の荷物を受け取っている場面であつた。

以前から思っていたが、彼は周囲を気に掛けることが出来る生徒だ。

規則を破るというデメリットを被る可能性を認知しながら、女子部屋に突入を計画・実行した嘗ての男子達を率いていたのもカツシュだった。

そのカリスマ性や、積極性は彼の長所だろう。

するとその姿に感化されたのか、リエルも動き始めていた。

「大丈夫、ルミア？ 辛いなら、荷物持つ？」

「ありがとう、リエル……じゃあ頼もうかな？」

「ん。任せて」

リエルは近くで大変そうにしていたルミアの荷物を持っていった。

昔は独りよがりな行動が目立った彼女だが、日常に触れて友達を大切に作る姿勢を会得したようだ。

昨日の言葉もそうだが、本当に成長したな。

その光景を見て、エミヤは敢えて何も動かないことにした。困難を共に乗り越えるのもまた、大切な授業だ。

既に歩き始めて数時間。カツシュとリエルが荷物を積極的に持つていたという功績もあり、誰一人ダウンすることなく歩き続けることが出来た。

「さて、研究所まで峠は越した。残り少しだ、もうひと踏ん張りだぞー！」

エミヤの声に終わりを認識した生徒達が振り絞るように最後の気力を足に込める。

希望はすぐそこだ。もう、手を伸ばせば届くところにまで近づいてきているぞ。

先の声掛けから十数分後。

一行はとうとう白金魔導研究所に到着したのだった。

倒れ込むようにして休憩する生徒を全員いるか確認してからエミヤは思考を切り替える。

「……さて、警戒せねばな」

一瞬、リィエルと視線を交わす。

互いに為すべき事を理解し、それが表沙汰にならないよう尽力する。

そして視線を外すと、エミヤは改めて視界に収めるようにして白金魔導研究所を見る。

周囲の自然から切り拓かれるようにして広がるその場所は、まるで神殿と錯覚してしまふような偉容だった。

前後左右敷石の合間を潜り抜けるようにして水が浅く流れる光景は、研究内容故に必然なのだが、意図せずとも目の前の神殿じみた研究所の神秘さを引き立たせていた。

滝壺から常にかかる水煙が研究所の足元を曇らせているというのもまた、研究所という単語と背反するような光景だ。

何も知らずに連れてこられたら、観光地と勘違いしても不思議では無かった。

「何も知らずに、か」

その言葉に闇側面の内容も内包してしまっているのは、非常に残念だ。

偉容へ疲れを忘れて好奇心の視線を向ける生徒を尻目に、エミヤは精悍な瞳で周囲を一望する。

そこに、一人の初老の男が背後に手を組みながら近づいてきた。

「お久しぶりです、エミヤさん。以前相對したのは、さて何年前の出来事でしたかな？」

「さあな。あれは互いに忘れた方が良い過去だろうか？ 無理に掘り返す必要は無い」

「ええ、そうですね。私もあれ以降はすっかり足を洗いました。そう言う意味では、大事な分岐点であります。先生として今を生きているエミヤさんは既に忘却の彼方へと置いた記憶でしょう。気分を害されたようであれば謝罪を」

「不要だ。これ以上は生徒に怪しまれる」

エミヤの突き放すような言葉に、初老の男——白金魔導研究所所長バークス＝ブラ

ウモンは朗らかに笑いながら首肯した。

その姿に彼は本当に心まで溜いだのかと勘違いするかもしれないが、それは違う。

エミヤとの会話。その全てで彼は、エミヤの瞳を通過して後方にいるルミアアティンジェルに下種な視線を向けていた。

間違いない。この男は——クロだ。

偽りの仮面を被りながら生徒達に挨拶や、今後の流れ、普段は見せないような立ち入り禁止区域への見学を許可するボックスは、最後にエミヤに向き直った。

「よろしくお願い致します、エミヤさん」

「こちらこそ。有意義な時間となることを願っています」

握手をする二人。

仮面の笑顔をするボックスと、獣の如く刃を瞳に込めたエミヤ。

一見温厚な握手をしているだけだが、内包された意味は決して日常の二文字ではない。
い。

非日常。これは、ボックスIIブラウモンからの挑戦状にも似た宣戦布告であった。

Project: Revive Life

ボックスに引率され、エミヤ達は研究所内部に足を踏み入れた。

そこは至る所に水路が張り巡らされており、建物内部にも拘らず植物が生い茂っている。

人工物と自然の恵みが融合している、というのが率直な研究所の意見だ。

偉容に感心するはするが、今エミヤが置かれている状況を考慮すればそんなものに忘我はしない。

最後尾から生徒達全員を視野に入れつつ、先頭で説明を入れながら案内するボックスを警戒の糸で拘束する。

「……それにしても、研究の為とはいえ足を踏み入れたくないものだな、これは」
視野の端に映る合成魔獣^{キメラ}。

それは嘗て兵器として運用が出来ないかと研究されていた残滓であった。

命を弄ぶ背徳感を、本物の研究者は感じはしないのだろうか。

とはいえ、その研究の成果が今の魔術学に齎した功績は少なくない。

他者の命を削り、発展の道を歩む。これはどの世界でも変わらない事実なのだろう

な。

「ねえエミヤ、少し良い？」

「む？ 何かあったかりイエル、それに君達も」

声のする方を見れば、リイエルがちよこちよこと魔術講師の外套を引つ張っていた。

後方にはルミア、システイーナが居る。

一瞬だけ全身に緊張が迸ったが、続くリイエルの言葉で別のベクトルの緊張が脳裏に突き刺さった。

「さつきシステイーナとルミアが話してた内容がよく分からないから、教えて欲しい」

「ほう、それは感心した。それで二人は何の話をしていたんだ？」

「話していた、というには漠然としすぎているんだけど……あの、死者の蘇生・復活に関する帝国の一大プロジェクトだった研究があったじゃないですか？ その名前が何だったかなって話をしていたんですけど……どうにもあと少しの所で名前が出てこないのよね……」

「ああ……それは、『Project: Revive Life』のことだろうか？」

「そう、それよっ！ でも、漠然と理解してはいるんですけど、本質までは良く理解できなかったのよね……」

「……ふむ。では簡単に説明をしようか」

一瞬だけ、目の前で困惑しているレイエルに視線が移ってしまったのは己の鍛錬不足だろう。

ここは敵の術中と言つても過言ではない場所で、刹那の不覚。

エミヤはその単語が出た瞬間にこちらへ泥漿の如く視線を向けたボックスを尻目に、説明を開始する。

『Project: Revive Life』とは、簡単に言えば生物の三要素を別の物で置き換えて、死者を復活させるというものだ。結局はルーンの機能限界の問題もあり失敗に終わった研究だがね」

生物の三要素。

それは、肉体たる『マテリアル体』、精神たる『アストラル体』、靈魂たる『エーテル体』のことだ。

死を迎えた生物はこの三要素が分離し、円環へ帰るとされている。

これがこの世界における死の絶対不可逆性を理論で説明したものだ。

故に死者を復活させるのは、感情的にも、魔術理論的にも不可能とされてきたのだが。

「別の物で置き換える……？」

「復活させた人間の遺伝情報から摂取した『ジーン・コード』を基に代替肉体を錬成し、他者の靈魂に初期化処理を施した『アルター・エーテル』を代替靈魂とし、復活させた

い人間の精神情報を『アストラル・コード』に変換して代替精神とする。最終的にこれら三つの代替物を複合させて、本人を復活させるといふものだ。とはいえ、それで完成した存在が望んだ本人と全てが合致する訳では無い。倫理的に言えば、完璧にコピーした別人というのが結論とされている」

「むう。よく分からない……」

「すまない、専門用語を多用し過ぎてしまったな。そうだな……食堂に君の好物である苺のタルトが無かったから、私の手作りで我慢したというのが分かりやすいだろうか？

確かに同じ苺のタルトを食してはいるが、中身は別物だろうか？」

「ん。それならエミヤの手作りが食べたい……！」

「……別の意味で相応しくない例だったか」

期待に満ちた瞳を輝かせているリエルが、例を理解できたと仮定して話を進めよう。

「別に理論上では不可能ではないから、帝国はこのプロジェクトを進めた。死者を復活させることが出来るというのは、極論過去の英雄を復活させることも出来る。そういう意味では強力な武器となるわよね」

「そうだ。だが、先にも言った通りルーンの機能限界が夢物語を現実にすることを許さなかつた。前に授業で扱ったと思うが、ルーンとは杜撰な条件を基に成り立っている術

式と話したな？」

「はい。ルーンは『原初の音』に近い言語ではあるものの、所詮人が作ったものだから精緻な天使言語や竜言語に比べて杜撰と」

「今回はその杜撰という問題を抱えたが故に実現が不可能だったという訳だ。ルーンのポテンシャル・スペックでは、三要素を一つにする関数と式が構築できなかった」

魔術式を作るには、魔術関数を作成しそれらを組み合わせる必要がある。

だが、ルーンに高尚な三要素を任せるには力不足であった。

これがルーンの機能限界。道筋に出現した、攻略不可能の障害だった。

「まあ、それ以外にも問題はあったわけだがね。先にも話した完成した存在が厳密には本人ではないという倫理問題もそうだが、一番の問題は復活に必要な三要素の一つ、『アルター・エーテル』を作成するためには何の関係もない複数の人間から靈魂を抽出して加工・精錬する必要があるという点だ」

「それって……」

「二人を復活させるのに、複数の無関係な他人が生贄になる。だがそれを許容出来るほど、この国も馬鹿ではない。こうして机上の空論は幻想へと成り果てたという訳さ」

最後は自嘲気味に結んだ。

死者を復活させる術式は夢物語。原理は違うが、それに異を唱えることが出来る存在

がそれを夢物語と断じるのか。

エミヤの言葉に感化されたのかシステイーナとルミアも深く考えているようだ。

残る一人はというと――、

「？」

「あまり理解できなかつたようだな。とはいえ、君が私に説明を頼むとはどういう料簡だ？ 興味のある話ではないだろう」

「それは……ん」

リイエルが指さす先に居るのは朗らかな笑顔で生徒の質問に答えているバークスだった。

「なんか……二人と話してる最中に、ずっと見てきて心配だったから」

「なるほどな」

客観的監視をするエミヤを掻い潜るバークス。

これは、随分警戒されているという事だ。

リイエルと強固な協力関係を結んだのは正解だったと言っても良いだろう。

遂に研究所見学も終わりがやってきた。

パークスの丁寧な説明や、部外者立ち入り禁止区域に立ち入ることが出来た興奮。生徒達は得ることが出来た経験を零さないように魔術議論を繰り広げていた。

宿舎に到着する頃には空に黄昏の絵具がぶちまけられ、斜陽が体を照らす時間帯。想定内とはいえない思った以上に長居していたらしい。

「さて、ここからは自由時間だ。部屋に戻るも街へ向かうのも自由だが、時間を守って行動するように。では解散！」

散逸していく生徒を尻目に、エミヤはこれからもう一度研究所に向かおうと思つていった。

理由は簡単、パークスIIブラウモンへの接触だ。

耳に仕込んである通信機に手を伸ばし、アルベルトにこれからの行動を伝えようとすると、何やら走りながらこちらへ駆け寄る影が二つ。

手を引つ込め、システイーナとルミアの話聞く選択を為す。

「先生、大変ですっ！ リイエルが、リイエルが……！」

「少し落ち着け。リイエルが、どうした？」

息を切らしていたシステイーナとルミアの肩に手を置き、正確な情報を求める。

「リイエルが、見当たらないです!」

「見当たらない、だと?」

「はい……! さつきまで一緒に行動していたんですけど、気が付いたら近くにいません……!」

「あの子、何も言わずに何処かへ行くような子じゃないから……それで心配で」

「……分かった。とりあえずリイエルの件は私に任せてくれ。大丈夫、心配は不要だ。

リイエルは強いからな。そして……君達は先に宿舎に戻っていて欲しい」

現時点で二人だけの行動を許せるほどエミヤは楽観主義ではない。

エミヤの言葉の真剣さと意図を読み取れた二人は、その言葉を承諾してくれた。

「ごめんなさい、先生」

「謝る必要は無い。リイエルが居なくなっただけに、君達の落ち度はないのだから」

「いえ、違います……その、一緒に探しに行けなくて、ごめんなさい。そして、リイエルの事お願いします……!」

己の力不足を嘆いているシステイーナ。

彼女は最近共に鍛錬をしている事が故に、ここで肩を並べられない事を悔いている。

だが、エミヤからすればシステイーナにはルミアの元に居てもらいたい。

「任せてくれ。それとシステイーナ、君にルミアの事を任せる。私がリエルを探索する間、君が最後の砦だ」

「え……あつ、はい！」

その返事を聞いてエミヤは黄昏の空へ跳躍する。

如何なる意図かは読み取れないが、リエルの身が危険だ。

「——アルベルト、聞こえるな」

通信機でルミア警護の人員を増やすよう指示し、エミヤは島中を駆け抜けていく。この時点でエミヤ、アルベルト、グレンの三者が思ったことは偶然にも一致した。

——奴らに、先手を奪われた……！

「守りの比重を増やしていたのが間違いだったか……！ それとも、私が慢心していたか……？」

屋根を蹴り飛ばし、新たな家へ飛び移る。

卓越した瞳が映す視界を頼りに、リイエルレイフォードの姿を模索する。

「先にアルベルトとグレンにバークスIIブラウモンを確保を任せるべきだったか？ いや、森の中で襲われれば全員を守ることが不可能だ。それに敵の人数も計り知れない」
圧倒的に情報が足りなすぎる。

こちらが得ている情報は、精々バークスIIブラウモン一人のみ。

天の智慧研究会が関わっているのは想像できるが、人員が割れない以上生徒の周囲を警邏するのは当然だ。

故にこちらが後手に回ってしまっているのだが。

「グレンが敵の拠点を見つけた瞬間、計ったようにリイエルの行方が分からなくなった。我々は完全に、敵の奸計に陥ったという訳だ……！」

これでエミヤが離れる事も相手の掌の上だ。

アルベルトとグレンに宿舎へ戻ってもらったが、そこを妨害しない敵ではないだろう。

二人が共に居れば大丈夫とは思おうが。

「——ッ！——そこか！」

思考と視界が目まぐるしく回転する中、エミヤはリイエルを捕捉した。

観光街の更に北端、人目の無い旧開発区域にリエルの姿ともう一人、彼女に話しかけている男の姿が見える。

「全く、リエル探索に私が向かったのは正解だったな」

エミヤは英霊としての身体能力を遺憾なく発揮し、二人との距離を詰める。

徐々に大きくなる二人の影と共に、両手に干将・莫那を投影。

リエルに話しかけている男が纏っている外套は天の智慧研究会の証左だ。

ならば——ここで一人、潰しておく。

「——リエル、そこを離れろ！」

「エミヤ……!?!」

音速すら凌駕する速度で両者の間に舞い降りる。

突如出現したエミヤの姿に、目の前の男は瞠目する。

「クソツ、『死神』……!?! いくら何でも到着するのが早すぎるだろ……!」

「逃がすと思っっているのか？」

体を反転させ退却姿勢をとる男へエミヤが詰め寄る。

二歩、一歩——接敵。

瞬間的な速度で相手に肉薄し、神速にまで近づいたエミヤは何の容赦もなく双剣を振るおうと手を下ろそうとして——、

「エミヤ、待って——……」

リイエルの声に体が硬直した。

その間に男は距離を引き離し、エミヤの前から逃げていく。

「——どういう意図だ？ 何故私を止めた」

最悪の可能性、スパイを視野に入れて鋭い口調で問いかけたエミヤだったが、リイエルの姿を見て言葉に詰まってしまう。

「待て、リイエル……どうして君は、泣いているんだ？」

「え……？」

確かめるように指で瞳に触れると、真実を伝える雫が指先で弾けた。

「……どうして、わたし……？」

「——何があった。先ほどの、天の智慧研究会の外道魔術師に何を吹き込まれた？ 言うのは苦しいかもしれないが、話してみるのも手だ。力になれるかもしれない」

投影していた双剣を霧散させ、リイエルに近づく。

人心掌握でもされていた場合は彼女を一人にするのは危険だ。

人間としての心苦しさを叩き伏せ、掃除屋としての姿が顕現する。

選択は慎重に。最悪の場合、ここで拘束する可能性も十分に有り得るのだから。

「……実は、兄さんに会ったの」

「なに……？　では、先ほど逃げた外道魔術師が君の兄だったと、そう言うのか？」

リィエルから伝えられた言葉はエミヤですら驚愕する言葉であった。

彼女の兄が天の智慧研究会に居た、なんて生半可な理由ではない。

リィエルⅡレイフオードの兄が現世に出現した。これが、エミヤを驚かせた情報に他ならない。

「……そう。でも、わたしは兄さんの誘いを断った……」

「誘い？　それは、天の智慧研究会への誘いという意味で合っているな？」

首肯される。

……なるほど。それは確かに、盲点だった。

天の智慧研究会が自ら人員を揃えるのではなく、こちらの戦力を削ぎながら己の戦力を充実させる一手。

彼女が裏切れば、こちらが劣勢に立たされるのは想像に難くない。

未だ涙を垂れ流すリィエルは、見失った己を捜すように両手で自身を抱きしめる。

「最愛の兄に出会い、その誘いを断った。それが君の泣いている理由か？」

「……よく、分からない。兄さんとまた出会えたのは嬉しい……だから、本当に誘いを断った方が良かったのか、まだ揺れてる……」

普段は気丈な姿を見せる彼女の、弱った姿。

それは暗闇の中に独りで残されたか弱い人間の姿だ。

ここでエミヤは、過去の自分を恨む。

結論を先送りにすることで、彼女に真実を伝えていかなかった。故にレイエルは今もまだ、兄と仲間の狭間に揺れている。

「それに、兄さんはわたしに言った……お前は邪魔な存在だつて……っ」

「だから、どうすれば良いのか分からなくなった、と」

「わたしには……どつちかなんて選べない……っ！ 兄さんも大事、でも友達を裏切るなんてこと……出来ない」

二つとも大切か。

その願いは余りにも傲慢だ。

人生なんて取捨選択の毎日だ。それは戦場でも変わらない。

どちらか一方を救うのなら、もう一方は見捨てなければならぬ。

それが自然の理で、当然の帰結だ。

だが、目の前で迷子の子供の如く震える彼女にそれを伝えるのは酷だろう。

見た目は十数年の経験を積んできたかに見えるが、内面は——未だ子供だ。

数年の接点が無くとも、家族に会えた感動が日常に勝る可能性は十分に有り得る話だ。

ならば、その傲慢な願いを叶えてやるのも夢があるだろう。

子供は何時だつて夢を追うものだ。それを支えるのが、大人の使命。

「ならば二つとも選べば良い」

「え……？」

「君の兄が、何故天の智慧研究会に居るのかは分からないが、ならばこれから向かつて連れ戻せば良い。こうすれば誰も裏切らなくて、誰も捨てるような真似にはならない。違つかね？」

「良いの？」

「良いに決まっている。微睡に堕ちた兄を妹が救いに行く。そんな王道が現実にあつても、誰も文句は言うまい」

エミヤの言葉は、確かにリエルの心に染み渡つた。

瞳目は数秒。すぐに心身共に立ち上がると、エミヤの瞳を力強く見つめ返した。

「ん。じゃあすぐに行こう」

「待て待て。私と君の二人で行くのも一興だが、敵はそこまで甘くはないだろう。先にグレンとアルベルトと合流だ。そこから本拠地に乗り込む」

「？ グレンとアルベルトがここに居るの？」

「最初から居たがね」

「……気付かなかった」

まあ良い。

とにかくここからが反撃だ。

リエルという戦力の確保に失敗した奴らが、次に如何なる手を打ってくるかは分からない。

「すぐに宿舎に戻るぞ。二人はそこに居る」

「分かった……！」

駆けだす二人。

ベクトルは正しい方向を向き、敵との相対を可能とした。

常闇に外套を靡かせながら、エミヤは肩を並べるリエルの横顔を見る。

彼女は兄を取り戻すというモチベーションを確保し、普段以上の实力を見せてくれるだろう。

故に、兄を取り戻すなんて有り得ないシチュエーションを悪用するような真似を選択したことに對して謝罪を。理由はただ一つ。

既にリエルⅡレイフォードの兄は、この世に居ないのだから――。

動き出した歯車。

別々の方向へと回転していたそれらが、この一瞬を以て合致した。

これから反撃だ、そう思っているエミヤは知らない。

現在進行形で、アルベルトⅡフレイザーが森林で足止めを喰らっている事実を。

向かう宿舎に、災厄が降りかかっているという事態を――。

「てめえ……どうしてここに居る、バークスⅡブラウモン……!」

「残念ながら私が用があるのは貴方ではありません、『愚者』。今の私を止めたいのであれば、それこそ『死神』を呼んで頂かなければ」

「エミヤの出る幕はねえ!　ここで、俺がお前を逃がすと思ってるのか?」

「逃げられますとも。ついでに言えば、貴方達が守護していた魔術姫も連れ去りますがね?」

「抜かせ――ッ!」

銃撃と硝煙が宿舎を彩っていく。日常の透明は、生徒達に一番近い場所から血みどろの非日常へと塗り替わっていく――。

――撃鉄は既に起きている。

リエルⅡレイフオードの確保が、本命では無かつたら……？

その真実に至るには、少しばかり遅すぎた――。

第4卷

普遍的にして特異なコンビ

硝煙が、日常を汚していく。

立ち込める気迫が、ここは地獄と嗤っている。

頬を伝う汗は本物で、されど夢想を願いたい。

駆ける両足に力を込めて、青年は一人で地獄に潜り込む。

「——畜生。結局俺一人で食い止めなくちゃいけねえんだよな……！」

ここにエミヤの生徒が誰一人戻ってきていなくて安心した。

もし、彼らを己が力不足で傷つけてしまったとしたら……一生後悔する。

いやいや少し待て。その言葉は自分が誰も守れないという証左なのではないのか？

「少し落ち着けよ、俺……！ 確かに今は危機的状況だが、悲観する程じゃねえ。実際俺の目的は現在進行形で達成出来るだろ？」

ここで深く深呼吸をする。

普段からエミヤが言っていたことを思い出す。

敵の奸計に嵌った場合、思考すべきは逆転の一手のみ。ネガティブな思考・感情は忘

却の彼方へと投げ飛ばせ。

そうしてようやく銃把を握る力が存外鋭くなっていたことに気付いた。

「さて。じゃあ、こっからどうしたものかねえ……」

青年——グレン＝レーダスはただ一人残された宿舎において、敵対者との相対を為していた。

相手はボックス＝ブラウモン。先ほどまでエミヤ達が見学していた白金魔導研究所の所長であり、魔術の闇に呑み込まれた外道魔術師である。

グレンとて帝国宮廷魔導士団特務分室の一翼を担う存在だ。数値的に見れば下級の魔術師かもしれないが、立派な魔導士である。

そんな彼が現在、所長という役職を担っていることから考えるに戦い慣れていなさそうなボックスに追い詰められていた。

「つたく、敵が異能の使い手なんて聞いてねえぞ……!」

召喚〔コール・ファミリア〕で呼び寄せた小動物を使役し、周囲へ計画の糸を張り巡らせる。額に流れる汗は、ただの疲労のみが理由ではない。焦燥も幾ばくか紛れていった。

グレン＝レーダス。それはシロウ＝エミヤと並び、対魔術師に特化した魔導士として知られていた。

彼が担う固有魔術『愚者の世界』は周囲の魔術起動を封殺するという能力を内包する魔術だ。

それを起動すれば最後、魔術は自他共に起動不可能となり、魔術師はただの人間へと成り果てる。

斯様な反則じみた力を有しているというのに、グレンの心象は曇天に包まれていた。

「とにかく、時間稼ぎだッ！ アルベルトは接触したらしいが、リエルを搜索しているエミヤは見つけ次第来てくれるはずだ。あいつが妨害に手間取るなんてことは——」

「さて、それでどうだろうか？」

「——え？」

緊急回避を為せたのは、偏に普段の経験故だろう。

思考が危機を察知する前に反射で敵の位置、状態を一目で確認し、体を回転させて逃げる間隙に銃弾を三発放つ。

それらは寸毫のズレなく敵の双肩、右足を穿った。

「全く。その程度の攻撃でやられる訳が無いだろうに。それすら理解できないのか？」

「ンなのでめえのはったりかもしれねえだろうが！ それに、時間をかければ自分の方が不味い状況だっというのには理解してんのか？」

「ああ。無論理解しているとも。ここで待っていれば、我が怨敵シロウⅡエミヤが姿を

見せるとな。だが、奴を殺すのはこんな序盤じゃない。文字通り私が持ち得る全てを以て奴の命脈を穿つ。それでようやく、私のこれまでの研鑽が間違いでないと証明される……！」

「へッ……彼奴も、面倒な奴に執着されたもんだな」

するとバークスを穿った銃創がみるみるうちに回復されていく。

グレンは何度目か分からない異能『再生能力』の偉容を視界に収める。

同時並行で握っている銃に銃弾を装填していく。

「執着？ 何と言うかと思えば。私が奴に執着なんて感情を抱くはずがなからう？ 奴のような三流魔術師、私が高みを目指す一障害に過ぎん。そうとも……！ 私のような高尚な人間が、奴程度の溝鼠になど負けるはずが無いのだ……！」

「あーはいはい。そうだな」

混濁する瞳は既にグレンを映していない。

この身を通して遙か先に位置する『死神』を、盲目的に睨み続ける。

とはいえ、エミヤを魔術師という普遍的な窪みで測ろうとしている時点で、バークスに勝ち目は万に一つもないだろうが。

「まあ良い。まずは貴様を前菜にしてやろう。感謝し感涙に咽ぶが良いぞ、三流？」

瞬間、爆発するが如く噴出する火炎の螺旋。

バークスの体を中心に彼を護るようにして展開されるそれは、形容するならば焔の膜だった。

「異能……！」

「そうとも。貴様程度には役不足だろうが、奴を殺す前の準備運動と考えれば合理的だろう？」

グレンの返答を待たずにバークスは座標を動かす。

火を纏いながら肉薄する姿は、火達磨そのものだ。

本来であれば包み込む存在を焼夷し、人と背反の関係を続ける焔が敵の仲間になっていることが唯一にして致命的な違いであるのだが。

「ち、つくしょう！」

銃口から火を噴くが、成傷機転がバークスの体に刻まれる事は無い。

距離が近づくごとに周囲が熱せられ、グレンの皮膚を焦がすがそこに対する痛痒はあっても反応はしない。

佩いていた剣を軸にバークスの軌道を後方に逸らし、その運動エネルギーをそのままに吹き飛ばす。

「幾度と……猪口才な……！」

「生憎と、抜刀術だけはエミヤにも負けないぐらい使えんだよ！」

比較対象が魔術で剣を投影するが為に抜刀術自体を使わないというツツコミは無しだ。

なのにも拘らず、グレンに抜刀術を教えることが出来るエミヤ。

本当——理想の背中は遥か先に居る。

「魔術戦を生業としない私に対して逃げの一手を選び続ける事に、プライドは傷付かないのか！」

「へッ、傷付かねえよ！ それに、俺に口撃は通用しねえぜ？ なんせ今までエミヤに鍛えられてきたからな！」

格下に対して口を使った攻撃はしないでいただきたい。

そのお陰で免疫をつけることができたので、恨みばかりという訳では無いが。

「じゃあな、おっさん！ 俺はもう一度逃げさせてもらうわ！」

そう言って何の躊躇いも無しに去ってゆくグレン。

バークスは曲がり角の先に消えた青年を侮蔑し、思い通りに動く姿に嘲笑しながら、耳に込めた通信機を起動する。

「——グレン——レーダスはそちらへ消えた。不要な方を眠りから覚まさせてやれ。それと、人払いは順調だな？ ……ああ、それは結構」

こちらからの指示を了承し、確認した事項を滞りなく進めている事を確認した。

「ハッ。正義の味方だか、正義の魔法使いだか知らんが……救いあげる他者が足手纏いになる事を、無論貴様らとて理解しているのだろう？」

誰かに問いかけたわけではない。

パークスの心の底に拘泥する感情を、食道を通じて外界に吐きだしたただけだ。

「やっぱついてくるよな、そりゃー！」

グレンが後方を見れば距離はあるものこのちらを逃がす様子のないパークス。

不敵な笑みを浮かべる彼の姿は、気味が悪い。

グレンが放った小動物は既に身代わりとして焼夷され、氷結の檻に閉じ込められた。そんな事実も加味してより一層その笑みに恐怖を抱いてしまう。

「……何笑ってんだ、あいつ。それに……間違はなく、俺を逃がしてるよな？」

笑みを浮かべながらこちらを早歩き程度の速度で追いかけるパークス。

だが、その姿には何処か余裕が見える。

グレンとて過去に幾度も修羅場を潜り抜けてきた。故に、敵の思考を行動から読み取る程度は可能だ。

「まあ良い。取り敢えず……時間を稼ぎながら——」

グレンが今後の退避路を脳裏の地図に当てはめていた時、前方のドアが独りでに開かれた。

このホテルに、それも現在進行形で戦闘が起こっている階に人間がいる事に驚愕する——己にグレンは驚いた。

それもそうだ。グレンはこのホテルに人払いなどしていない。

故に、今の今まで誰とも会わずにパークスとの戦闘が続けられた事に、今更ながら気付いた己を呪う。

「んもう……何なのよ、一体……」

扉の先から現れたのは、銀髪の少女だった。

エミヤが教員として勤めているアルザーノ帝国魔術学院の制服に身を包み、艶やかな銀髪を纏めるカチューシャ。

半開きの瞳を眠たそうに擦る少女が、よりにもよって同僚に似た少女がこの場に現れたという事実を苦虫を噛み潰したような表情をして受け止める。

「え、パークスさん……?」

「おや、再び会いましたね」

駆けるグレンを無視して後方のバークスに声をかける少女。

——その姿が酷く同僚に似ていたから、自分を無視して他人に声をかけたという事実が少し心にきた。

とはいえ、はつきり言つて二人の関係は他人だ。少女はエミヤの生徒であつて、自身の知つている同僚と何の関係は無いのだ。

嬰鑠とした笑みを浮かべたバークスに近づこうとした少女を、されどグレンは腕を引つ張り強引に連れ戻す。

別に他意はない。今のバークスに、エミヤの生徒を近づかせる訳にはいかない、それだけの理由だ。

「え……？」

「説明は後だシステイナーナ||フィーベル、取り敢えず俺と来いっ！」

「あ、貴方は一体……？ それに、何を急いでいるんですか？ 廊下は走るものではない」

「だーッ！ うっさい！ 俺はお前達の担任であるエミヤの元同僚だ。これである程度察してくれ！」

流石に無茶が過ぎたか、とグレンは思ったが返答を聞かずにバークスとは逆方向に逃

走する。

すると少女——システイーナはこちらを真剣な瞳で見つめる。

「……何かあった、ということですか？」

「そうだ！ だから一刻も早く逃げるぞ！ そうすれば、エミヤがこっちに来てくれるはずだ！」

システイーナという少女が、理解の早い少女で助かった。

エミヤの元同僚という単語が通じたのも、エミヤ本人が既に伝えていたということだ。

そういえば、この少女はリエルとも仲良く過ごしていた姿を思い出す。グレン達の警護対象であるルミア・テインジエルとの三人でいつも一緒に居たので、そこでエミヤから聞かされたのだろうか。

いや、理由なんて何でもいい。一先ずここからの脱出を図ろうとするグレンだったが、突然システイーナが足を止めた。

「——少し待ってください。私はあの部屋から離れる訳にはいきません」

「何だ？ 忘れ物がある、みたいな馬鹿げた理由じゃ……ねえようだな」

システイーナの様子にグレンも足を止めた。

「あの部屋にはルミアが居るんです。先生の元同僚である貴方が、パークスさんから逃

げている理由は今の私には分かりませんが、ルミアを残して私だけ逃げるわけにはいきません」

「は——？」

真剣に伝えるシステイーナだったが、その大切過ぎる情報にグレンは——思考演算が停止する。

「……待て。ルミア＝ティンジェルの部屋は、あそこじゃねえはずだろ？」

「それは……先生の様子がおかしかったので、万が一を考慮しクラスメイトの部屋に隠れていました」

グレンの想定以上に、この少女は聡明らしい。

故に——グレンの計算が全て狂った。

「……ホント、情報戦で負けるところなるんだな」

まず言っておくが、システイーナの行動に間違いはない。逆に正解を凌駕した回答であった。

だからグレンにシステイーナを責める資格はないし、責めるつもりもない。

常日頃からエミヤの教育を受けている賜物だろう。既知の情報を偽りにするのは、非常に有効的な手だ。

最も、それを仲間が知らなければいけないという前提付きだが。

「ハハハ——ッ！ 残念だったな、グレン||レーダス？」
気付いた時にはもう遅い。

ボックスは何時の間にかシステイーナが出てきた扉の前に陣取っていた。
システイーナが去り際に扉を無意識のうちに閉めていたのが唯一の救いだ。
薄い障壁であるが、奴を遠ざける壁が出来た。

「——その扉に触れるな」

「おおっ！ 怖い怖い」

わざとらしく両手を上げるボックスだが、その表情に焦燥等のネガティブな感情は皆無だ。

銃口を向けるグレンだったが、その実有効な手な何一つ持ち得ていなかった。

いや——奥の手を除けば、という条件下の話になるが。

「えつと……貴方は——？」

「グレン。グレン||レーダスだ。一先ず俺はここでアイツをここで縛る。その間にお前は逃げる。とてもじゃないが、一学生が戦える相手じゃねえ」

背中で隠すようにしてグレンはシステイーナの前に立っている。

そのまま目を向けずに話しているが、聡明な彼女だ。きつと分かってくれるはず。

だが、聡明で勇敢な少女はここでもグレンの計算外に居た。

「いえ——私も戦います。戦えます」

「な!? 言つとくが、ここは学園でやつてるようなルール有りの柔な魔術戦とは訳が違
うんだぞ!」

「分かつてます。ですが——」

システイーナは一度、覚悟を決めるように深呼吸をした。

「——私は、エミヤ先生にルミアを託されましたから」

「——ッ!」

その一言は理由にはならない。

だがその一言の重みを、同じような境遇に置かれていたグレンは理解できてしま
うのだ。

理想の背中がこちらを見てくれたという喜び。

そんな者から、信頼されて託されるという喜び。

それは——グレンが幾度も感じていた、達成感だった。

「お願いします。確かに私はグレンさんと共に肩を並べて戦うことは出来ないと思
います。ですが、私だって普段から先生に鍛えられているんです。少なくとも、補助程
度であれば出来ますっ!」

頭を下げるシステイーナだが、この願いを聞き届けるのはグレンの選択すべき道では

ない。

正義の魔法使いを目指すのであれば、彼女が生き残る可能性の一番高い道を選ぶべきだ。

それに、グレンにはシステイーナをボックスから絶対に守り切れるという確証はない。

それでも——システイーナ⇨ファイバーの瞳が、どうしてか嘗ての、エミヤを追いかけ続けていた姿に重なってしまった。

「……分かった。とはいえ、前には出過ぎるなよ？ 俺だってお前を守り切れる保証はねえ。命が危険と思ったら、すぐに逃げろ」

「あ、ありがとうございますっ！」

まるで花が咲いたか如くの笑みを見せるシステイーナ。

とはいえ、完全に打算なしで彼女を引き入れたわけではない。

エミヤから貰った資料にも書いてあったが、彼女はエミヤが受け持つクラスの中で随一の成績優秀者だ。

学生レベルの補助魔術であれば難無く行使できる。

悲しい事に、魔術の適性が無い自分よりも多岐の魔術を効率的に行使することが出来るだろう。

完全に輝一つ許されない諸刃の剣だが、誰かとコンビを組むのは初めてじゃない。

エミヤにも鍛えられた事だ。カバリングとリスク管理を怠らず、時間稼ぎをすれば良いだけの話だ。

「……まあ。お陰で切り札の一つは使えなくなったんだけどな」

グレンは脳裏から『愚者の世界』を消滅させる。

即興で効果範囲を血文字で書き換える事も出来るが、その間にバークスに動かれたら意味が無い。

「ほう……まあ良い。先に貴様らを殺すまでの事。さすれば、奴の絶望も膨れ上がるだろうしな」

「んな簡単に負ける訳ねえだろうが——ッ！」

グレン⇨レーダスとシステイナー⇨フィーベルが二人だけで手を結ぶ。

それは、イレギュラーが降り立ったこの世界において奇跡に等しい事象なのだろう。突貫するバークスを迎え撃つようにグレンも疾駆する。

後方に控えるシステイナーはエミヤとの鍛錬、授業を思い出しながら、最適な補助道筋を完成させる。

そして——両者がぶつかった衝撃は、周囲の普遍的な音すら呑み込んで轟いた。

「何だ、この騒ぎは？」

エミヤとリエルがホテルに到着した時、宿舎の周りには人が集まっていた。

上を見上げる野次馬につられてエミヤも視線を上に向ければ、窓が割れ焦げ付いた臭いが周囲を支配する。

「戦闘があつたと見るべきだな……」

やはり狙われたか。

とにかくまずは情報収集が先決だ。この戦闘によつて齎された被害を確認せねばならない。

「ん。どうする？ やっぱり、倒す？」

リエルが指差したのは野次馬を外で留めている警備員であつた。

聞くに既に鎮火され、内部に人が突入しているようだ。

早急に突入せねばならないのは間違いないが――。

「いや、この場で騒ぎを起こすのは危険だ。今は爆発事件として片づけられているみた

いだからな。余計な火種を投げ込む必要は無い。とすれば——」

「裏口を使う？」

「それが一番だろうな。そこを警邏している警備員は……どうやら一人のようだ」

目立たないように行動し裏口へ移動する。

正面の騒ぎが大きい様で、そこに野次馬は誰一人いなかった。ほとんどの警備員が正面に連れ出されたか。とはいえ、一人で警邏するのは感心しない。

「——こうして、私のような存在も居るのだからな」

エミヤは一瞬で警備員に肉薄すると白魔【スリープ・サウンド】を行使し微睡に堕とす。

膝から崩れ落ちていく警邏を支えると、起こさないように隅に寝かす。

「さあ行くぞ。時間は無い」

「ん。分かった……！」

内部に侵入を成功させたエミヤとリエルは廊下を駆けていった。

狂人の執着心

「——さて、事の顛末を聞かせてくれないか？」

リエルと共に駆け上がったエミヤ。

目的地となるエミヤが使用していた部屋に到着すると、そこには既に手負いのグレンと変装姿のアルベルトが居た。

開口一番エミヤは問う。早急な情報交換が必要な場面だからだ。

ここへ至る道中にも魔術痕や刃物痕が散見されていたことから、戦闘があったというのは疑惑から確証へと昇華されている。

「……悪い、エミヤ。俺が至らねえばかりに……！」

話を聞くに、バークスⅡブラウモンが単騎にて襲撃に舞い降りた。

アルベルトは離れた森でエレノアに足止めを喰らい、一人戻っていたグレンがシステイナーと共に迎撃を為した。

だが、その間に侵入した第三者……正体は不明……にルミアが誘拐されてしまった。

彼女が隠れていた部屋には抵抗する痕跡が残されていたが、バークスがわざと広範囲に音が伝播する攻撃方法を選択し人為的に防音の役割も果たしていた。

というのが、エミヤがここに駆けつけるまでに起こった顛末という。

グレンがシステイーナを戦闘の駆り出すばかりでなく、ルミアを守り切れなかったことに責任を感じているようだが責めるつもりは無い。

部屋のベッドに寝かされているシステイーナを見るに、特に大きな外傷もなさそうな様子だ。それだけ彼が、彼女を気に掛けながら戦ってくれたという事だろう。

「気にする必要は無い。元はといえば、私が後手に回るような戦略ばかりを選んでいたツケが回ってきたということだ」

この身も随分と安全策ばかりを好むようになったものだ。

特務分室の在籍年数からこのメンバー間の実質的な指揮官的なポジションに据えられていたエミヤにも、ここまで敵の策略に弄されている責任はある。

むしろ陣容の質を見れば、柔な敵には後れを取らないはずなのだ。

「全員に責任はある。俺とて、エレノアの奸計に陥った」

「……わたしも、勝手に行動したから……」

グレンを慰める為、かは分からないが責任の所作は一人だけではないと二人は告げる。

「全員に責任があり、最後まで敵の流れに流されていたが故にこの状況に陥ってしまった。であれば、私達がすべき行動も決まっている」

エミヤはアルベルトとリエルの言葉を探い、グレンの瞳を見つめる。全員の視線と思惑が交錯することで初めて、エミヤ達はスタートラインから走り始められる。

「すぐさま行動を起こすぞ。時間は無い。ここで暢気に反省会をしては、再び流されていく結果となるからな」

エミヤの声に頷いた三人は、簡単に情報を交換する。

エミヤとリエルからは、『リエルの兄』を名乗る存在が居る事を。

グレンからは、パークスIIブラウモンが異能を担うことが出来る事を。

アルベルトからは、此度もエレノアが敵に回っているという事を。

各々の視界から手に入れた情報を共有した三人はエミヤの部屋を出ていった。

最後になったエミヤはふと、ベッドで眠りにについているシスティーナに目を向ける。

「……すまなかった。私の責任で、再びルミアを連れていかれてしまった」

友人として、一番の関係を築いている二人だ。

幾度も命の危機に陥っているルミアの姿に、心を痛めていないはずがない。

でなければ、力になりたいと自ら死場を求めるような真似はしないだろう。

「私が必ずルミアを連れ戻す。だから君は——」

「——待ってください、エミヤ先生」

独白にも似た謝罪文を述べていたエミヤだったが、言葉を食いちぎるようにして目の前のシステイーナが起き上がる。

下半身を布団の中に隠しながら上半身のみで起き上がったシステイーナは、戦火を乗り越えた直後というのに澄んだ瞳をしていた。

静謐に、されど堅剛な意志で、告げる。

「私も、私も——ルミアを助けに行かせてください」

そう、言われるとは思っていた。

彼女の正義心が、一人だけ安全地帯から待っているという選択を許さないのは、十分理解していた。

「君は、自分が何を言っているのか理解しているのか？」

「はい。確かに先生達と共に肩を並べて戦う、ということは出来ないと思います。ですが、援護ぐらいなら出来ますっ！」

グレンと共に戦った経験が、彼女を強くしたのだろう。

自分が全て出来ないし理解している聡明さ。

しかし、自分に出来る事を模索できる勇敢さ。

それらは確かに尊いものだが、そのせいで自分自身を正式に測れないのであれば足枷へと成り果てるのだから——。

システイーナの実力は確かに同世代の中では一線を画している。

だが、彼女には間違いなく足りないものがある。それを理解していたエミヤは、当然その願いを聞き届けることは出来ない。

「駄目だ。私達がこれから向かうのは、首魁が整えた舞台だ。それ故に、何が起こるか私とて分からない。万が一の場合、我々を分断し各個殲滅する罠が仕掛けられている可能性だつてある。その時、君は一人で自分自身を守ることが出来るのか？」

「そ、それは……」

現実を突きつけられ、酷く意気消沈するシステイーナに罪悪感を感じないわけではない。

今でも心が引き裂かれそうな痛痒に表情が歪みそうになるが、その甘さが人を殺すという現実をエミヤは知っている。

故に、手は抜かない。

「君は聡明だ。故に分かるだろう？ 今私が言った可能性の話を」

何も言わずこくり、と首を動かした。

「であれば、今はここで待っていてくれ。何れ、君の力が必要になる時が来るだろうからな」

そう言い残し、エミヤはドアノブに手をかける。

一捻りすればドアはその先の光景を見せ、両者の距離は物理的に切斷されることになる。

物理的に、心理的に、エミヤはシステイーナをそこに残す為に、ドアを開こうとする。その時、ドアノブに触れる右手とは逆の左手首に外界からの圧力が籠められた。

布団から勢いよく飛び出し、艶やかな銀髪を焦燥に揺らし、されど毅然とした瞳でシステイーナはエミヤを引き留めた。

「何れ。それは、何時の話でしょうか？」

問いかけるシステイーナの瞳は、煌々とされど静謐に澄んでいた。

そうして逃げの言葉が通じない事を、この時エミヤはようやく悟る。

「……確かに私が驕っていたのは事実です。先の魔術競技祭での実績も、何時の間にか自分の功績としてしまいました。ただ学園内での成績が高いだけなのが私。それが実践にそのまま反映されるわけではない事は、先生の授業や先ほどのグレンさんとの共闘……と呼べるのかは疑問がありますが、戦闘で理解しました」

それでも、とシステイーナは続けた。

「私は今みたいなの、ルミアの窮地に助けに向かえる、先生と共に行きたい……！　こうして一人で待つのは、もう我慢できないんです……！」

クラスメイト、親友、家族――。

ルミア・ティンジェルと強靱な絆で繋がっているシステイーナの願いは、ごく単純な大切な人を助けに行きたいというものだった。

その感情の発露は、？偽りの無いシステイーナ・フィーベルの情動だろう。

荒れ狂う奔流を舌に乗せるその姿は、理性を担う人間たる姿だった。

悔しそうに両腕を握りしめ、瞳に雫を浮かべて己が弱さを呪う。

その姿は——酷く過去の自分に似通っていた。

だからこそ、逃げることなく向き合う事が大切だと知っている。

告げる罪悪感を切り伏せ、雫に遮られながらもお真摯に向き直る彼女にエミヤもまた向き直った。

「——君の気持ちはよく分かる。自分に何も出来ないと理解していながら、なお突っ走ることが正解なのではないかと思ってしまう感情は、オレにはよく分かる」

「え……？」

有り得ないものを見たかのような表情をするシステイーナに、頬を崩しながらエミヤは告げていた。

そう告げた次の瞬間、エミヤは一転真剣な表情を向けた。

「だが、今の君を連れていくことは出来ない。戦力として数えることは、私には出来ない」

その一言を聞いたシステイーナは、悔し気に表情を落とす。

気丈な視界は、今は心象を表すように何も無い床を映していた。

「そう……ですよね。ごめんなさい、私……分かってはいるんだけど言いながら、本当は何にも分かっていかなかったんですね……」

痛痒を無理矢理に振り払うような笑みを浮かべたシステイーナ。

彼女は向けられた言葉をそのままに受け取り、解釈をして？み込んだ。

その姿を見て、エミヤは自分が不器用であることを再確認した。

彼女が呑み込んだ言葉は少しばかり濃すぎる。矢継ぎ早に言葉を重ねて希釈する必要がある。

「まあ待て。確かに今宵の戦いに連れていくことは出来ない。だが、君には私が納得した操が心象に突き刺さっている。それが折れない限り、君の成長を阻むものは無いだろう」

随分と遠回りな希釈に辟易とする。

結論を相手に告げたのであれば、それ相応の理由も必要というのに。

それを適切な言葉にするのは、どうにも不慣れだ。

含羞するようにエミヤは後ろ髪を撫でながら、それでも口を開く。

「……まあ、何だ。私も君の成長は著しいものと理解している。故にルミアの防衛も任

せた。その成長を蔑ろにだけはしないで欲しい。これからも君は強くなれるのだからな、必ず。だからその近い未来で私が困ったら、迷わず君を頼りにしたい」

随分と自分勝手な言葉じゃないか。

纏まらない理由を言の葉に乗せていれば、当然の帰結とは理解していたが。

だが、システイーナは一度目を見開くと、決意を固めてエミヤの言葉に頷いた。

「——分かりました。ではその近い未来が一日でも早く訪れるように、精進しますっ！」

「ああ——ありがとう」

——上手く希釈出来たのだろうか。

それを願いながら、エミヤは今度こそドアの先へ踏み出した。

「良いのかよ、騙すような真似して?」

「仕方あるまい。彼らは私達とは違う世界を生きるべき者達だ。下手にこちら側へ連れ

込む必要も無いだろう」

夜の天幕が空を覆いつくす中。

四つの影が鬱蒼と生い茂る森林を駆け抜けていた。

その中の一人、後ろを向きながらのグレンの言葉にエミヤは当然のように答えた。

システイーナと別れた後、宿舎の外で心配そうにしていた生徒達にエミヤは変装したアルベルトが真相を隠すために用いた嘘である爆破事件、その解決の一助となる為に今から動く必要がある、と偽りの理由を吐いた。

その事についてグレンは言っているのだと、言外の意図は理解していた。

しかし彼が求めた答えはそうではないのか、呆れたようにため息をついた。

「ホント、お前ってそう言う所は変わらねえよな。無関係な人間を巻き込まず、全て一人で抱え込む在り方はさ」

「では生徒達を巻き込めと言うのか？ それこそ論外だ。ただでさえ不安になっている彼らに余計な油を注ぐ必要は無い」

「別にその判断については俺も今回ばかりは同感だ。だがなあ……お前は言葉が少なすぎるんじゃないか？ さっきだって、あの……システイーナが代わりに説明してくれなきゃ纏まんなかっただろ？」

グレンの言葉を同意を示すようにエミヤの隣を駆けるリィエルも首肯した。

「ん。それはエミヤの悪い癖。わたし達には溜め込むのは良くないって言うのに、自分は一人で全部決めちゃう……わたしも、エミヤの助けになりたいのに……」

無機質な声音がデフォルトなりイエルだったが、この時ばかりは沈んだ声が耳に響いた。

「全くだ。先の一件で少しは他者にも重荷を背負わせる覚悟が出来たと思っていたが、その本質は簡単には変わらないらしいな」

先の一件、それはエミヤが無断で軍を抜けた事をグレン達に謝罪した時だろう。

先行しているアルベルトは顔は正面を向きながら、意識のベクトルは逆方向のエミヤへ曲がっていた。

「無論全てを話せとは言わない。ただ、もう少し状況を話す必要はあったんじゃないか？ お前を慕っている生徒達だ。全て自分に任せろ、だけで納得するには材料が少なすぎる。今は未熟かもしれないが、彼らとて立派な魔術師の卵だ。それに——」

他でもない、お前の背中を見て育っている生徒達が成長していないわけが無いのだから、とアルベルトは言葉を結んだ。

エミヤは思わず瞠目する。

生徒と教師という関係に縛られ過ぎて、エミヤは彼らを庇護対象として見ていたのかもしれない。

ただ、先ほどのシステイーナのように彼らとて成長しているのだ。

停滞せず醜くとも足掻くのが人間だ。それを理解し成長を促す役職を担っているエミヤがそれを忘れているなど論外すぎるだろう。

「——すまない。また、君達に教わられたな」

その言葉に対する返答は無かったが、周囲で肩を並べる仲間達は全員満足そうな表情をしていた。

そうだ。孤高の正義の味方など存外脆いものであることなど、この身は実感を以て理解させられているだろう——？

確かに生徒達を戦場へ送ることは直近では出来ない。当たり前だ。

だが、成長を続ける彼らは何れ守られているだけでは納得できなくなる事は想像に難くない。

それに守護者としてこの世界に顕現したエミヤだ。紛れもなくこの世界に危機が迫っているのは、我が身が証左となる。

その危機が現実となつて世界を覆いつくした時、生徒達は、仲間達は、この身に手を差し伸べるだろう。

であれば、その時に如何なる返答をすべきなのか。

答えは依然として分からないままだが、分かることはある。

それは——守る一択では、無いという事だ。

「どうして……どうしてこんなことをするんですか、パークスさん!」

それは、この場所には似つかない声音の問いだった。

暗澹たる漆黒が何処までも景色を塗りつぶし、瘴気が空中で可視化出来そうなどんやりとした空間。

開けたその空間の壁に四肢を拘束され吊るさられたルミアは、絶体絶命の状況でありながら気丈さと勇敢さを以て目の前で日中まで矍鑠として笑みを浮かべてくれていたパークスを見る。

何かの間違いなのではないかと、僅かな希望を握りしめて——。

だがそんな儂い希望を握りつぶすようにパークスは口元を歪ませた。

「どうしてこんなことをするか、だと? そこには無論高尚な理由があるとも」

「高尚な理由、ですか……?」

返答の意味が分からずオウム返しをしてしまう。

警戒心を心象に突き立てながら首を傾げるルミアに、バークスは大仰に両手を広げて答えた。

「そうだ！ 貴様の担う異能、これが単なる『感応増幅者』に連なる存在な訳なからう？

正真正銘の化け物が、貴様だツ！ ああ、そうだ貴様は化け——待て」

そこまで述べた瞬間、バークスが怪訝な表情をする。

眉を顰めながら先ほど己の口先から発せられた音に疑問符を浮かべていた。

化け物？ この娘が？

戯言も大概にしろ。往年の復讐が遂に為されるといふ高揚感を前に、理性を失つてどうする？

「いや……訂正しよう。貴様如きでは到底化け物とは程遠い。その異能には目を見張るものがあるが、彼の『死神』シロウⅡエミヤを凌駕できるほどの力ではない。奴こそが

——本物の化け物なのだからな」

シロウⅡエミヤが化け物だ、その言葉をバークスは口元を弦月の如く裂けさせながら言った。

憧憬とか、恍惚とか、そんな言葉で表すことが出来ないような表情だ。

ルミアは思わず頬を引きつらせる。

だが、自分達を優しい笑みで、そして過去に弱っていた己を救ってくれた正義の味方に対しての言葉としては看過できない。

深呼吸をして弱った酸素を吐きだして、ルミアは心火を灯した瞳でバークスを照らす。

「……先生は、化け物ではないと思います。先生は私達の事を一番に考えて、私達の事を見守ってくれています。そんな人に、化け物なんて渾名は似合いません」

「それは奴が日常の衣を羽織っているからそう言えるのだ。戦場での奴を一度でも見てみると良い、正真正銘『死神』の渾名を担う血みどろの殺戮者への変身するだろうかからな？」

言いたいことは言い終えたのか、バークスは興味を失うようにルミアから視線を外すと、近くで佇んでいる青年に声をかける。

「再び、貴公に頼みたい仕事がある」

再び。その言葉が指し示すように、青年は一つの大仕事を成し遂げていた。

それは、ルミアIIティンジェルの捕獲だ。

まず部屋に居たシステイナーナIIフィーベルとルミアの二人に睡眠の魔術を秘密裏に付与し、その場で待機。

グレンとバークスが衝突したのを部屋で確認した後、バークスの命令でシステイナー

を目覚めさせ、窓からルミアを連れて退散した。

無論何もせずに部屋で待機していたわけではない。彼の命令に従う人形を駆使し、人払いも行っていった。

生憎、その造形からその人形には変装をさせてはいたが。

斯様な大役を果たしたにも関わらず、再び仕事を任される。

普通であれば辟易とする場面だろうが、青年は真摯な表情でその命令を聞き届ける。

「何ででしょうか？」

「貴公に……からの術式の進行を一任しよう。私はこれから、やらねばならぬ事があるからな」

呆けた青年に追加の説明など不要と、バークスは歩みを止める事は無かった。

開けた空間から去ろうとするバークスだったが、壁に寄りかかりながら一連の流れを見ていたエレノアが瀟洒な笑みを浮かべて呼び止めた。

「宜しいのでしょうか？ その術式は、紛れもなく我々が完成を渴望している代物でございます。それを他人に譲るなど、正気の沙汰とは思えません？」

「構わん。私としては、シロウⅡエミヤとの決着がつけられればそれで良い。天の智慧研究会での階位など、奴への復讐の前では副産物に過ぎんのだよ。しかし、私が正気の沙汰ではない、か」

エレノアの言葉を、一度噛み締めるようにしてバークスは呑み込んだ。

「ああ——もしかしたら私はあの時から、正気を失っているのだらうな。何せ——」

——過去に死んだ私を突き動かしているのは、『死神』の首一つなのだからな？

口元をそう歪ませたバークスは万全の準備を整える為その場から離れる。

——それこそイレギュラー介入の変更点。

執着にも似た悪鬼の如く執着心を死神に向けさせられた彼は、既にその脳裏から天の智慧研究会への憧憬は失われていた。

「——奴を殺すのは、私だ。余計な仲間を引っ提げているようだが、何警戒は不要だとも」

思い返すは旅籠における戦闘だ。

そこでこの身は、シロウⅡエミヤの大切な仲間を追い詰めた。

痛痒と辛苦に歪む青年の表情を見ると、体全身が欲情した。

奴の大切な物を傷つけているという事実こそが、バークスⅡブラウモンの復讐心を点火させる。

そうだ。奴の仲間を、他でもないこの私が追い詰めたのだ——！

「精々過去の私を今の私に重ねるが良い、シロウⅡエミヤ。その慢心を穿ち、戦闘の果てに立っているのは、このバークスⅡブラウモン唯一人。その復讐が叶ったその時、過去

に縛られた私はようやく解放されるのだ……！」

そこには魔術の真理を追う魔術師としての姿は無い。

正真正銘、死神に人生を狂わされた狂人が醜悪に地べたを這いずりまわっているだけだった。

——その背中を見つめて、ルミアは願う。

「ごめんなさい、先生……！」

無力な自分では、嘗て助けてくれた正義の味方を待つしか出来なかった——。

巨大蟹の襲来

水中にあるパークスの研究所を目指すエミヤ達。

今は入口となる水面の前で準備を整えている最中だ。

アルベルトとグレンは黒魔〔エア・スクリーン〕を起動。圧迫空気の膜が二人の周囲を囲い、肺呼吸と背反の位置を取る水中での長時間浮遊が可能となる。

対して絶望的なまでに普遍的な魔術センスが皆無なりイエルと、根源的に黒魔術が行使不可能なエミヤはというと――？

「仕方あるまい。掴まれ、リイエル」

エミヤの英霊故の身体能力に頼る他に無い。

特務分室にてエース級の活躍をしているリイエルとて、水中という人体の構造的弱点は当然適用する。

「ん。分かった」

なので、この流れは当然といえば当然なのだが……。

「……待て、リイエル。どうして背中に飛び移った？ 手を握れば済む話だろう？」

「質問の意味がよく分からないけど……ん、エミヤの背中が一番安心するから？」

「疑問符で理由と言われてもだな……」

苦笑いを浮かべながらも、エミヤはリエルの行動を許容する。

傍から見れば親子みたいだな、などと柄でもない思考を脳裏に連ねながら、エミヤは月光を照らし返す水面に飛び込む。

薄暗い水内部の構造は既にエミヤの魔術から判明している。後ろで両手両足を駆使しガツチリとエミヤをホールドするリエルの負担を抑える為にも、早急な到着が望まれる。

しかし、唯一の侵入口に細工を仕掛けない程相手も馬鹿ではない。

(やはり、一筋縄ではいかないか)

一足先に飛び込んだエミヤだったが、途端体に叩き付けられるような衝撃に襲われる。

如何なる手管を利用したかは不明だが、水流が操作されているらしい。

感じる流れから推察するに、当たり前と言うべきか目的地から離された場所に流されるよう細工されている。

(隠蔽より妨害を選択したか。以前の奴では考えられない選択肢だな)

とはいえ感心している暇はない。

後方から追うアルベルトとグレンに原因追及と細工の破壊を手話で頼み、呼吸が確保

されていないエミヤとリエルは先にゴールを目指す。

まるで水中に見えない壁があるのではないかと思わせる体捌きで難無く水流を正面から突破する。

理不尽とは彼の事を言うのだろう。障害を無いように扱いながら順調に突き進んでいく。

脳裏に浮かぶ地図を頼りに、不自然に開けた場所へ到着した。

そこには明らかに人為的な石垣が並べてあり、周囲を淡い光が照らしている。

入口を一目で確認するとエミヤは早急に内部へ侵入を成功させた。

「——無事か、リエル？」

時間にして秒針が時計を一回転する前に到着したが、一目散にリエルに声をかける。

「……大丈夫。何ともない」

その一言で安心した。

安堵の息を吐くエミヤを尻目に、リエルは背中から降りると頬を緩ませていた。

「やっぱり、エミヤの背中では安心する」

「ご所望に預かり光栄だ。とはいえ、ただの背中だろうか？　そこまで良いものとは思えないがね」

「そんな事は無い。エミヤの背中は、いつもわたしを守ってくれた背中だから——」
——だから、安心する。

頬を僅かに紅潮させながら、はにかんだ笑みを見せるリイエル。
「ふむ、そうか。私としてはこの背中にそこまでの魅力は感じないが、君がそう言うのであれば存在意義はあるのだろう」

タオルを投影すると、わしゃわしゃとリイエルの頭を拭きながらこれからの行動を思案する。

ここでアルベルトとグレンを待つか、先に向かうか。

「……………ん。くすぐりたい……………」

その言葉に拭くのを止めると、リイエルは一瞬悲しそうな表情をする。

だが、その日常的な風景は突如出現した地面を揺らす衝撃によって吹き飛んだ。

「この揺れは、一体……………」

エミヤは暗澹とした空間に視界を飛ばす。

千里眼、鷹の瞳とも評されるエミヤの双眸であれば、遠距離における先手を握ることも可能だ。

そして、視界に映ったのは一つの影だった。人体を遙かに凌駕した、大きな影。それが一寸の迷いなくこちらに向かってきていた。

「あれは——蟹、か？」

「かに？ それって、あの食べ物の？」

「そうだ。しかし、あれは普遍的な蟹ではないな」

大きさもそうだが、左右の鋏が三対あることも理由の一つ。

白昼訪れた研究所内で合成魔獣^{キメラ}の存在は確認していたが、戦闘用に特化すればこころま
で凶悪になるのか。

「どうする？」

「無論迎撃だ。先制攻撃は私が担当しよう。それでも接近を許したのであれば、君との
連携が必須となる」

「ん。分かったっ……！」

少し嬉しそうなリエルの返答を聞きながら、エミヤは流れるように洋弓と矢を投影
する。

両者を番えて構えるまでに一秒。広がる視界には、屹立する赤き障害が一体。

隣のリエルも大剣を錬成し、両手に構えている。

「——さて、お手並み拝見といこう」

先制。エミヤの両手より放たれた一矢は、されど英霊として臂力を込められた砲撃の
如く一撃として飛来する。

蟹は咄嗟に三対の鋏で体を守った。耳を劈く金属の衝突音が周囲一帯を蹂躪する。

やはりと言うべきか、その鋏は敵対者を震え上がらせる暴力の具現としてだけでなく、堅牢な防衛としての役割も果たす。

「並の相手であれば、この一撃で終わっていたのだがね」

久方振りの頑丈な相手だ。矢継ぎ早に放たれる矢の雨に遍く膂力を加えながら、遠距離では崩しきれない事を悟る。

壊れた幻想を使用すれば崩せるかもしれないが、余計な魔力は使用しない方が良好ろう。

しかし、ただの一矢では堅牢な鋏を穿つ断片を見せることなくその役目を果たしてしまふ。

「すまない。どうやら、君の力が必要みたいだ」

「ううん、気にしなくていい。むしろ、エミヤと戦えるのを待ってた！」

「そうか。であれば遠慮はいらない。頼りにしてるぞ、リイエル」

激励の言葉としてエミヤは信頼を口にする。

故になんてことは無い一言のつもりだったのだが、リイエルは瞠目していた。

「む？ どうした、リイエル。私の顔に何かついてるだろうか？」

「そんな事はない……けど。さっきの言葉、もう一体言って」

「さっきの言葉？　遠慮はいらない、の事か？」

「……むう。もしかしてエミヤ、わざとやってる？」

頬を膨らませる彼女に、エミヤは真正銘意図が掴み切れなかったと両手を上げながら答える。

しかし、それではないとすると……。

「頼りにしているぞ、か？」

「ん、そう！　エミヤがわたしの事を、信頼してるって言ってくれた……」

瞳を輝かせて嬉しそうにしているリイエルだが、エミヤとしては疑問が付き纏う。

「別に可笑しな話では無かろう？　君は自他共に認める特務分室のエースだ。私も同じ仲間として、君の実力は昔から評価している」

「ううん。そういう事じゃなくて——エミヤが仲間と言ってくれたことが、嬉しかった」

——ドガンツ!!

周囲を制圧する巨大蟹。赫々の堡壘との距離が時間と共に消え去った。

衝撃音と共に登場した守護者に、されど焦りの感情は無い。

寧ろ好都合。エミヤは両手に携えていた黒い洋弓を通じて最後の一矢を放つと、洋弓を霧散させる。

幾度目かの金属音。

体格差故の無機質な上から目線が、エミヤの攻撃を嘲笑っているかに感じた。

「随分と舐められたものだ。いや、慢心してくれた方がこちらとしても好都合か」

寂寞の荒野から取り出すは白黒の双剣。

柄に握り跡が刻まれているのではないかと錯覚してしまう程の長い付き合いである

相棒を、今宵も具現化させる。

「リィエル。私が奴の鋏を弾く」

「ん。じゃあわたしは、真つ二つにする」

短くコンビネーションの確認を完了させた瞬間、エミヤの姿が消える。

次に現れた座標は巨大蟹の目の前。双剣を構えた死神が領域に侵入した。

生物の生存本能と言うべきか、一目で脅威を感じ取った蟹は鋏を駆使し跳躍するエミ

ヤを叩き落そうと重力を身に纏う。

地べたに両足をくつつけた存在と、その恩恵を失った存在。飛行の術を有しないので

あれば、優位なのは圧倒的前者だ。

天蓋を覆いつくす鋏の影。臂力と重力を以てエミヤをハエ叩きの要領で振り下ろさ

れる鋏。

「残念ながら、その攻撃は予見済みだ」

白黒の双剣——干将・莫那を軸にして流麗に受け流す。

対象を失った鍔は纏ったエネルギーをそのままに地面と衝突した。

地面に迸るひび割れと、亀裂が走る鍔。一瞬一目でその威力を再確認させられた。

だが痛痒に揺れる理性すら持たないのか、矢継ぎ早に今度はエミヤを左右からの挟み込むために一对の鍔を駆動させる。

「ほう、考えるだけの脳はあるようだな。だが——ッ！」

左右一对の巨大鍔による挟み込み攻撃。

それを正面から干将・莫那で受け止める。

「……流石に、本気を出さねばならないか。しかし一瞬でも貴様の動きを止めれば、私の仕事は完了なのでね」

額に冷や汗を流しながらニヒルな笑みを浮かべたエミヤ。

これが人間としての体であったのなら、左右から猛迫する重圧に臓器諸共命脈は霧散していただろう。

エミヤは耐えるだけ。本命は背中から、蒼き閃光が上空に向かって駆けあがる。

「いいいいいいいいいやあああああああ——ッ!!」

両手に担う大剣を体全体をバネの如く駆使し投擲。

高速回旋させながら重力と共に飛来する大剣は、雷光を凌駕する一撃として堅牢な鍔

を失った体へ直撃する。

柔な体では無いだろう。しかし、リイエルの一撃は蟹の体を一刀両断。

血潮を斬撃の如く振り撒きながら巨大蟹は糸を失った操り人形のように倒れていった。

「……流石だな。ただの投擲で、これほどの威力とは」

「！ エミヤが褒めてくれた……！」

素直に感心する。

確かに彼女も常人の体ではないが、英霊としての体を有するエミヤには及ばない。

なのにもかかわらず、投擲の威力は彼女の方が上なのではないだろうか。

小動物のようになってくると近寄ってきたリイエルを褒めるようにして頭を撫でる。

この小柄な体に内包される膂力は味方であれば頼もしい限りだ。

「……ん」

「さて、後は彼らを待つだけだが——」

「待つ必要は無い。今到着した」

エミヤの言葉に待ち人の一人、アルベルトが返答する。

振り返ればグレンも辟易とした表情でこちらに歩み寄っていた。

「……大丈夫か？ 随分と疲弊しているな、グレン」

「そりゃあ疲れもするつての。俺はお前らみたいな化け物じゃないんだよ……」

「そう言いながらもしつかりとついてきている辺り、君も凄いと思うがね」

へいへい、と軽く手を振るグレン。

見た目以上に疲れているようだ。確かに荒れ狂う水流の中、それを突破するだけでなく原因を突き止めるのは骨が折れるだろう。

呼吸するのも一苦労の様子に、エミヤは会話の対象をアルベルトに変更する。

「それで、君が付与したというマーキングは無事なのかね？」

「ああ。座標は依然として変化は無い」

「了解した。グレン、動けるか？」

「……まあ、大丈夫だ。ただでさえ俺の責任でルミアⅡティンジェルを誘拐されたんだ。こんな所まで足を引っ張る訳にはいかねえ……！」

「無理のないようにな。君が動けなければ、我々の戦力低下は甚大となる」

そうして四人、再び最果ての地を目指す。

「ふ、はははははは——ッ!!」

ああ、心底から湧き出る汚泥の笑みが隠せない。

何とも無様ではないか。最高傑作では無いものの、自信作の一つを踏破されて笑ってしまうとは。

「如何されましたか、バークス様？」

「何てこそは無い、エレノア殿。ただ、私の合成魔獣が侵入者の前に敗れただけの事。想定範囲内の出来事だ」

「侵入者……？ それは一体？」

「私の合成魔獣を倒したのはリエルレイフオードとシロウエミヤ。その後、アルベルトレイザーとグレンレーダスの合流も確認している。何、全ては予期したことであろう？」

バークスの笑みは、されどエレノアには理解されなかった。

何か汚物を見るかのような鋭利な視線に晒されるが、なんてことは無い。

全ては想定範囲内のだから、何を焦る必要がある？

寧ろ、あの程度の合成魔獣に敗れられる方が興醒めである。

「……！ 先生と、リエルが来てくれた……！」

「そうとも、貴様が渴望していた存在がここへ到達した。喜ぶが良い、ルミアアテインジェル。だが、次に奴の姿を見るときは首から上だけになっているだろうがな？」

何もシロウアテインの到着を歓迎しているのはルミアアテインジェルだけではない。

バークスはその身に暗澹たる心火を灯すと、地獄の釜から沸騰された高揚感にこの身を浸らせる。

「楽しみだな、その希望に満ちた表情が地獄に叩き落されるその瞬間が！」

「先生とリエルが、貴方に負けるとは思えません」

「当たり前だ。リエルアレイフオードには興味無いが、シロウアテインが私一人の前で倒れ伏すような男では無いことなど理解している。故に、我が最高傑作と共にその歩みを仲間諸共殺してやるさ」

「最高、傑作……?」

ルミアアの困惑に満ちた疑問に、バークスは答えを返さなかった。

「それでは引き続き術式防御を貴公に任せる。だが、あまり意識を奪いすぎるなよ？」

ルミアアアテインジェルの希望である『先生』が私の前で失墜した様を、その眼に見せつけたいからな」

「……了解しました。貴方もご武運を。身に染みて理解しているとは存じますが、彼の男は天の智慧研究会最高階位に通ずる力を有します。過去に一度、倒したことも考える

にそれ以上の可能性も——」

「理解している。余計な言葉は不要だ」

ボックスは出る。それは往年の復讐を果たす為。

過去の惨めな自分自身を踏破する為。

そして、死神に刈り取られなかつた魂は、時として復讐を糧にここまで成長するのだと、思い知らせてやろうではないか——。

広がるは魔獣の群れ

巨大蟹の襲来を退けたエミヤ達はその後、順調に内部探索を進めていた。

合成魔獣^{キメラ}の追撃を常に念頭に置いて意識を散布していたのだが、拍子抜けするほど無音と暗澹の空間が続くのみとなっていた。

「どういう事だ……？　ここままで何も無いもんなのか？」

「戦力を集結させているという線もあるが、こちらの慢心を穿つ可能性もあるな」

いずれにせよ、現在進行形で訪れている平和に浸ってはいけないということだ。

エミヤも鷹の瞳と謳われし超越の双眸を駆使し常闇を映しているが、何も見えない。

——敵は何が目的だ？

過信する訳では無いが、客観的に見てこの戦力を内部にまで引き寄せる余裕が相手にあると思えない。

そろそろ最奥部に到達する。そこで待ち受けているのであれば、それはそれで構わないが——。

エミヤはグレンに告げた二つの可能性と共に乱戦となった場合の救出優先の行動も思考に連ねていた中、唐突に思考の端が真実を以て警鐘を鳴らした。

「——ほう。如何なる思惑があるかは読み取れないが、来るぞ」

先行していたエミヤは隣で並んで警戒をしていたリエルの前に左手を出して動きを制止させる。

常闇から生まれ落ちたが如く、忽然と出現した敵影。

その背景には視界を埋め尽くす合成魔獣キセキマモの群れが、宛ら軍隊のように敵影——バークスを主としてこちらに殺気を飛ばしている。

「これは想像以上の数量だな」

「具体的には？」

「大小合わせて百は超えている。大規模な魔術を行使すれば掃討できるだろうが、立地が問題だな」

上を見上げるエミヤ。

ここは四方を常闇と人工的な壁に覆われている。

一対多の戦闘をするのであれば、立地を蹂躪する超火力を展開すれば早いのだが、ここは空気があるとはいえ水の中だ。

ここにいる三人は緊急事態でも各々潜り抜けられるだろうし、エミヤが何があつても救い出す。

だが、囚われの身となっているルミアは？

救い出せる絶対の確証は、無い。

「つまり、奴さんは時間稼ぎを目標としてるって訳か？」

「恐らくな。救出を急ぎ過ぎても自然が私達を？み込み、逆に慎重になり過ぎても我々の敗北だ。全く、面倒な状況を作り出されたものだ」

事態の解決には急がば回れ、というやつだ。

バークスⅡブラウモン、敵ながらこちらの弱点を正確に狙う戦力配置をしてくる。

後方にはルミアを誘拐した謎の人物と、卓越した外道魔術師であるエレノアが最低でも居ると考えると、ますます厄介だ。

「——残念ながら、私の目的は時間稼ぎなどという下等な策ではない。正真正銘貴様らの墓標を見届けに、ここへ来た」

「ほう、盗み聞きとは趣味が悪いのではないかね？」

「何とでも言うが良い。とはいえ、斯様な態度をとつても良いのかね？ 私の推察から導き出されるに、こちらの状況の方が貴様にとつても渴望しているものであろう？」

確かにこちらとしては有難い。

中途半端な策ではなく、明確な殺意を拵えているのは些か脅威となり得るだろうが、それでも守備に回られるよりかはやりやすい。

とはいえ、容易に踏破できる敵でもなさそうだが。

「さあ、刮目せよ！ 我が最終傑作の宝物庫を！」

大仰に両手を広げるバークス。

後方の常闇から現れたのは、四つん這いでなお人間の体格を凌駕する巨軀を有した大亀。それが己が権威を示すかのように二本足で立ち上がる。

大亀の大音声だいおんしやうに呼応し四方を埋め尽くす小型中型の合成魔獣、正面は大型の魔獣の群れが包囲する。

「……おいエミヤ、こいつは流石にやべえんじゃねえの？」

「厳しいだろうな。特にあの大亀は厄介だろう……一つ問いたいのだが、君のとつておきでアレを崩せるか？」

「んく正直な所、五分五分つて感じだろうな……。エミヤの一撃と連携できれば、結構確率は高まると思うが……」

「ほう？ では止めは君に一任しよう。そこへ至る過程は私が築く」

切り込み隊長のレイエル、狙撃手のアルベルト。

二人には別の役割を担ってもらいたかったので、大亀の止めにグレンが適任するのであれば有難い事は無い。

ちなみにエミヤの返答を聞いたグレンが焦ったように制止の声を上げるが無視だ。

元来こちらは出来ると思って問いかけているので、その卑下は戦場に必要ない。

エミヤの視線は常に頼れる後方ではなく、敵愾心剥き出しの前方に向けられた。彼我の戦力差を量で埋めるのは常套手段だが、これは流石に本気でやらねばこちらが喰われるか。

「——ここが分水嶺だ。逃げ道を塞ぐ魔獣は無視、前衛をグレンとリエルで受け持ち、後衛にアルベルト、双方のカバーを私が行う。我々の最優先事項はルミアアティンジェル救出だ、一点突破でこの状況を打破するぞ」

「了解」

途端にエミヤとグレンの位置が逆転、前衛を託した二人が臨戦態勢を刹那にて整える。

先ほどまで頼りない声を上げていたグレンも一度スイッチが点火すれば、泣き言は言っていられない。慣れた手つきで準備を整えながら、リエルとの情報共有を為していた。

その光景を見て、エミヤは呟く。

「久方振りだな、君と肩を並べて後衛を行うのは」

「それだけお前が二人を信頼するようになったという事だ。何もかも自分で受け持つ以前と比べれば、良い顔になったんじゃないのか？」

「かもしれないな」

後衛の二人も客観的に見れば談笑の様子だが、その脳裏には互いの戦闘倫理が脳裏に刻まれ起動前状態となっている。

アルベルトは魔術を、エミヤは黒い洋弓を投影する。客観的に見ればこの程度の準備でも、それ相応の準備は既に並行して整えられているのだ。

「流石だな、一連の流れに隙が無い」

「そう言うお前こそ、現役を退いて既に半年を経ているにも拘らず、その動きが堕ちた様子は無いな」

英霊故に、成長は無いが、退化も無い。

停滞を運命付けられた人生なので、そこまで喜べるものではないのだがね。

「それはそれは、彼のエース殿に言われるとは私もまだ捨てたものではないという事かな？」

「戯言だけは治らぬ癖だな」

生憎と、そう返答したエミヤはバークスに向き直る。

深淵を具現化したかのような笑みを浮かべる彼は、エミヤの視線に怖気づくことなく対照的な反応を見せる。

「——漸く私を見たな、『死神』。嘗ての私では貴様にとつて路肩の礫であつただろうが、此度は違う。既に雌雄を決するこの場所が、無機質に鎌を振るうだけでは到達し得

ない領域と知れ！」

「無論だとも。悉くの慢心を封殺し、全霊でお相手しよう」

——そして、興廃を決する緞帳が開かれた。

一方、生徒達はというと——。

現在爆破事件？事故？が発生した旅籠とは別の旅籠に移動していた。

無論各自部屋を与えられてはいるのだが、そこへ籠る者は誰一人いなかった。

理由は至極当然、終ぞ「大丈夫だ」としか話さずこの場から去っていったエミヤの事だ。システイナーナが追加の説明をし、状況は理解出来たのだが……それでも生徒達は心配だった。

「先生、大丈夫かな……」

「……大丈夫、だろ、多分……」

「そうだよ！ エミヤ先生なら、絶対顔色一つ変えずに解決するって、だからさ……でも

……

「俺達も行った方が良いんじゃないのか……？」

「でも……」

意気消沈する者、周囲に漂う暗澹たる空気を一変しようと試みる者、行動を起こそうとする者、何も喋らない者。

各々の反応を見せるが、その心象に漂う感情は一つのみ。

——先生は、大丈夫だろうか。

まるで不文律であるかのようにロビーに集まってしまった生徒達は全員、一人になる部屋を選ばず一番先生に近い場所で、闇夜に濡れる街並みを呆然を見ていた。

普段の彼らを知っている者がそこにいたのなら、間違いなく忘我するほどの変貌。口を出さずにはいられない、見ていられない姿であった——。

「——フンツ、下らない。君達、そんな意味のない事をくよくよ考えて、一体何になるんだい？」

「なっ……お前、ギイブル……」

その中で一人、静かに本を読んでいた眼鏡の青年カツシユが呆れたようにため息をついた。

全員の驚愕したような視線が一身に注がれる中、彼とビーチバレー大会でチームを組

んだカツシユが問いかける。

「先生が心配だつて言う感情は、そんなに可笑しいか？」

「ああ、可笑しいとも。先生が心配？ 君達、何時からそんなに強くなつたんだい？」

右手で支えていた本を閉じると、カツシユはクラス全員を見渡す。

普段の姿では考えられない程の落ち込みぶりだ。そんな雰囲気のクラスでは、無いだろう？

励ますなんて柄ではないけど、それを任せられる人間は全員この雰囲気を作り出すのに一助してしまっている。

忌々し気に口を開くと、そこから出てきたのは何時もみたいな憎まれ口だった。

「あの人が大丈夫だと言ったなら、僕達はそれを信じてここで待つておくべきだ。違つかい？」

「それはまあ、そうだけど……」

平常時はあんなに、五月蠅い程に元気なカツシユも返答に困っている様子だ。

何だそれは。憎まれ口を突きつけられても、飄々と潜り抜けるのが君の特性では無いのか？

行動を起こすのは素晴らしい。だが、その判断が正確ではないのなら、只の無謀者だ。それが分からない、君では無いだろうに——。

「——大丈夫さ、先生はきつと戻ってくる。何より一緒に居る時間の長い僕達だ、今まで何を見てきた？ 馬鹿馬鹿しいと思つたことを、本当に実現する姿じゃないのかい？

……一番近くに居る僕らが、先生を信じなくてどうするのさ——……」

それだけを言い残すとギイブルは再び本に視線を落とした。

確かに彼の口から出てきたのは変わらぬ憎まれ口だけど、それでも言葉以上にエミヤ先生を信用している心とその空間に涵養する。

一番初めに立ち上がったのはシステイーナだった。

「ええ、そうね。大丈夫つて先生が言ってくれたんだから、私達は信じて待とう？ それに、こんな雰囲気のまま待つてたらまた先生に笑われちゃうかもしれないしね？」

「そうだな！ よし、俺達は信じて待つぞー！」

「カツシュ、それギイブルとシステイーナの言葉をそのまま言っただけじゃない？」

「そ、そうか？」

雰囲気は一変した。

深海の底にまで沈んでいた意気は、今や空元気かもしれないが戻りつつある。

カツシュの言葉に全員が笑っているのも、空元気からくる無理矢理空気を入れ替えようとしている証左なのかもしれない。

それでも、空元気でも、一歩前に進もうと思えたのは大きな進展だ。

その輪から離れて、静謐に艶やかな銀髪を揺らすシステイーナは今も変わらず本を読んでいるギイブルに声をかけた。

「……まさか、ギイブルが一番先生を信用していたなんてね？」

「別に一番信用してたわけじゃない。ただ……この空気が、気に入らなかつただけだ」
「うん。じゃあ、そう言う事にしておくわね……」

変わる二組の中で、システイーナは思う。己が力不足を。

確かにエミヤに鍛え始めてもらって時間は全然経過していない。

一朝一夕の修行で強くなれるなんてシステイーナ自身思っていないし、それほど甘い世界ではない事は自分自身が一番よく分かっている。

それでも——多少の向上はあるのではないかと、思い上がっていた。

泣いてばかりでは終わらない、私も先生と一緒に、補助だけでも出来ると思っていた

「……でも、私は何も出来なかつた」

思い返すはエミヤの元同僚と名乗ったグレン||レーダスとの共闘。

システイーナはそこで、何も出来なかつた。先生にルミアを託されたのに、いざ戦場に降り立てば継ぎ接ぎだらけの決意は脆く崩れ去った。

今の自分では、ルミアを守り抜くなんて以ての外。先生の隣に立つことも、出来るは

ずが無い……。

「……今のままじゃ駄目。もつと……もつと強くならなきゃ、いけない……！」
そう胸の前に両手を握りしめて、誓ったのであった。

欠陥品と完成品

「……どうしたボックス、我々の墓標を見届けにきたのではなかったのかね？ その割には、随分と消極的な采配と見えるが？」

「消極的か、その言葉が本心からくるものであれば心底失望したものだ……生憎と、その程度の煽り、今の私には通じんぞ？ これは真正正銘、勝利を辿る一手だ。貴様ほどの男であれば、それを見破れないはずがないからな」

全くもって面倒な展開だ。

飛来する蝙蝠型の合成魔獣^{キメラ}を干将で切り落とし、即刻投影、黒い洋弓から放たれる三本の矢が寸毫の違い無く狼型の合成魔獣を射抜く。

エミヤの指定した陣形、リエルとグレンのツートップは盤石だ。容易に崩せる楼閣ではない。

ただ、如何なる盤石な布陣であろうとも無敵はない。

敵將ボックスは強く出るような事は無く、合成魔獣による突貫で二人の連携を乱れさせ、その須臾の隙を己が魔術やスピード特化の合成魔獣が狙うという策をとっていた。

とはいえ、侮るなかれこちらは一騎当千の魔導士だ。

趨勢は着々とこちらに傾き始めている。何れはこちらの勝利で決着がつくだろう。ただ、莫大な時間が必要というデメリットを考えなければの話だが。

「次の策が必要だ。奴は消耗戦を展開し、実際それが効いている。こちらはそれに唯々諾々と従う程余裕は無いからな。さて、ここでの指揮官はお前だ、エミヤ。次の一手はあるのか？」

アルベルトは双眸を正面に向けたまま、指先に魔術を灯したまま、エミヤと互いの背中をくつつけて全方面への対処を行いながら、一手を託す。

それを責任転嫁と言うのだろうか、そんな事は無い。

船頭多くして船山に上る。指示が錯綜してしまえば屈強な軍隊とて格上殺しの標的だ。

ツートップの援護、こちらを頻りに狙う合成魔獣を秒の単位にて十を超える数減らしながら、エミヤは逡巡する。

「さて、どうしたものか——」

既に戦闘を開始してから十数分は経過している。

暢気に、鉄砲玉の如く敵を何の考えも無しに穿つ時間帯は終了した。

当初の予定ではそこまで苦戦するとは考えていなかったが——一番の想定外は、やはりあの亀だ。

リエルの膂力ですらその甲羅に傷をつけることを許さないその圧倒的存在。時折アルベルトと共に急所を狙ってはいるのだが、二人の援護がなければ途端にツートップは数の暴力に押し潰されてしまう。

よって、微々たる火力を放出することしか叶わない。

ただ、一番の想定外に大亀を指定した理由はそこではない。それは――、
「チツ、全員散開！ 再びビームが来るぞ！」

エミヤの一声に攻撃を続けていたツートップとアルベルトが行動を中断し、大きく下がる。

次の瞬間、大きく膨れ上がった大亀の口腔が解き放たれ、仲間であるはずの小型合成魔獣を巻き込みながら、超火力の一条が周囲を蹂躪する。

バックステップで距離をとり、強化魔術を体に叩き込んで披露される跳躍の足下を通過する灰燼の具現。

バークスも壁には当てると己も不都合な事を理解しているのか、ビームはエミヤ達が歩んできた後方に広がる、暗澹たる空間に呑み込まれていった。

「仕切り直しの合図としてはこれ以上ないものだろうな、これは。お陰で崩した形勢を立て直される」

前方を見ればツートップが切り拓いていた合成魔獣の包囲陣が整っていく。

どれ程の数溜め込んでいたというのだ、この男は。

「残念ながら貴様らの攻撃は無意味な時間の経過に過ぎないのだよ。小型であれば無限とも思えるほどのストックがあるのだからな」

「……らしいが、どうする？ 正直な話、そろそろアレを使えないギリギリのラインに到達しちまいそうなんだが……？」

「ん。グレンは貧弱、わたしは問題ない！」

「俺はお前みたいなた体力馬鹿じゃねえんだよ！」

グレンのとおきおきは、大亀突破に必要な要素だ。

リエルは続行可能の意志を示してくれているが、彼女とて限界は来る。

熟すタスクの量こそ後衛の方が多いが、その質は間違いなく前衛二人の方が重たい。であれば、ここが引き返せぬ、間違えられぬ分水嶺、その決着を担う選択の瞬間か――。

「――一つ問いたい、ルミア＝ティンジェルは今どうなっている？」

今すべき質問で無い事は重々承知。

これはエミヤの失態が招いた道程、その逆転を為す為に奴からの行動が必要だ。

パークスはふむ、と思案するように顎に手を置くと、ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべながら返答した。

「さてな。私は今、あの少女には興味がないので如何なる状態なのかは推測でしか話せないが——恐らく、危険な状態であろうな？ ああそうだと、早急に向かわねばあの女の命は無い」

「——ッ！」

予測していた返答だったが、現実として敵の口から話されると自己嫌悪に陥りたくなる。

戦闘中には余計な思考と理解しているので切り捨てるが、その言葉の真偽がどうであれ、時間⇨命綱なルミアの現状に間違いは無いだろう。

全員での突破が一番最善の可能性であったが、その甘えは忘却の彼方へと放り去る。

エミヤがここで一人残り、固有結界を以てこの場に居座る障害を塵芥に帰す。その選択肢を、この瞬間に選び取る。

だからこそ——間断なく放たれたバークスの言葉は、エミヤであっても瞠目せざるにはいられなかった。

「——そこで一つ提案だ、シロウ⇨エミヤとレイエル⇨レイフォードが先へ向かう事を私は許容しよう。どうだ、互いに悪くない提案とは思わんか？」

「何——？」

戦力分断、その陣容を指定される。

漸減的に形勢が離されつつあることを読み取ったバークスにも、時間が無いエミヤ達にもメリツトがある提案。

その齎された情報に、振り上げた足を止めてしまふ。

「……どうする？ 確かに悪くはねえ、提案だが」

「——」

時間は無い、一刻一刻がルミアの命を左右する命綱。

提案を呑み込むか、エミヤ単騎の他三人の強行突破か。

その答えは——、

「——アルベルト、グレン。君達二人に、この包囲網を任せても良いだろうか？」

仲間を信じる、過去の自分であつたら絶対に掴み取らないであろうもう一つの選択肢を選んだのだった。

「フツ、良いだろう」

「ああ——任せろ」

エミヤの言葉にアルベルトは淡々と、グレンは決意と共に口元を緩ませながら返答した。

「感謝する、頼りにしているからな。では——私達は先を急ぐぞ、リエル！」

「ん。分かった！」

ここで四人の道は分かれた。

エミヤとリエルは妨害の無い包围網を突破し、グレンとアルベルトが残留する。

宣言通り、エミヤとリエルの道を指し示すかのように二分割される合成魔獣の群れ、その拓かれた中央を二人は全速で駆け抜けた。

白髪の男と、青髪の少女が先の見えぬ暗闇踏破へ姿を消した事実を確認し、グレンは口を開いた。

「おい、聞いたかアルベルト？ あのエミヤが俺達に頼りにしているって言ったぜ？

ったく、漸くあいつも俺達の実力を認めて、素直になつたってことか？」

「言葉の内容と表情を一致させる事も出来ないのか、お前は。エミヤの前では表情筋を駆使して耐え凌いでいたようだが、その頬の緩さは如何にかならないのか？」

「う、うっせえ！ つーか俺は嬉しそうな表情なんてしてねえぞ！」

「その表情で？ 戯言も大概にしろ」

アルベルトの怜悯な言葉に何も言えなくなるグレン。

そのまま数秒の時を経て、コホン、と雰囲気を一変させる為に咳払いをした。

途端、その姿に宿るは一級の魔導士としての姿、過去に多くの格上殺しを為してきた正真正銘、非日常での表情であつた。

鋭い双眸をパークスに向け、今さっきの流れについて問う。

「しかし解せねえな。エミヤを逃がすような真似をする理由が、今のお前にあるのか？」
「無論、あるに決まってるよ」とも

大仰に両手を広げ、まるで自分が神であるかと誇示するように口を開く。

「至極単純な理由だ——そんなの、仲間想いであるシロウエミヤの前に貴様ら仲間の雁首を揃えたらどんな反応を見せてくれるのか、そんな探求心が刺激されたのだよ」

それを聞いたグレンは、意地返しとばかりに笑みを浮かべる。

「随分と俺達も舐められたもんだな？ 仮にも、こちとら特務分室なんてデカイ看板背負ってるんだが？」

「知ってるいとも。だが——グレンレーダス、貴様との戦闘を経て、やはり私にとつての脅威はシロウエミヤ一人と確信した。故に、斯様な酔狂に溺れるのもまた、一興だろう？」

「良いぜ、吠えずらかかせてやるよ——!!」

その答えと共に戦闘は開始する。

撃鉄を打ち鳴らすグレン、魔術を起動するアルベルト、異能を起動するバークス。

ただ、次の瞬間戦場を揺らしたのはその誰でもない——遙か前方より飛来した一筋の螺旋の矢であった。

「——生憎と、騎士道精神には疎い身でね。勝利の為には、意地汚い手管とて喜んで掴み取つてきた」

構えていた黒い洋弓を下ろし、爆発音が轟く空間で一人、神妙な雰囲気醸し出すエミヤ。

正々堂々と、確かにそれはエミヤとて渴望していた生き方だ。

しかしそれだけでは正義の味方には届かない。夢想する英霊の星々は煌びやかな栄光を掴み取る一方、形而上の掃除屋として雇われた凡俗は器用貧乏になろうとも手数を増やしてきた。

究極の一には勝てない。その絶望なまでに広がっている彼我の差は、戦闘倫理をひねくれさせるには十分すぎる理由であった。

現在見逃されたエミヤが放つたのは螺旋剣、空間ごと捻じれさせるその剣を、エミヤは大亀の甲羅にぶつけたのだった。

これで倒しきれるとは思っていないが、致命傷を与えたのは確かだ。

であるなら、既に二人の勝利は確定した。

「エミヤ……?」

「すまない、余計な思考だ。先を急ごう、私達はこんな所では止まれないのだから」

心配そうな上目遣いをするリエルを安心させ、エミヤ達は先を急ぐ。

こんな所では止まらない。

馬鹿げた理想をもう一度掲げなおす、その道程が間違いでないと認めてしまったあの時から——この身は永劫に、荒野を再び目指すと決めたのだから。

——それは、唐突に訪れた、耳を劈く破壊音だった。

ドガンツ、と空間に一瞬で浸透した、外界とを隔てる扉が壊された音。

その先に待ち構えるのは、二つの影。

「——待たせてしまったかな?」

「先生!」

「良かった、ルミアは無事のようなな」

壁に磔にされているルミアだったが、また意識はある。まずはその姿に安堵した。

であれば逆転は可能。鎖に縛いましめられ、衣類を破かれている等看過できない点はあるが、まだ敵の思惑は完成に至っていない。

その空間で魔術の工程を進めている青年——旧開発区域でリエルを連れ去ろうとした張本人、リエル兄は、驚愕と共に声を漏らす。

「……驚きました、まさかここまで到着が早いとは。パークスさんが意気揚々と足止めに向かわれたと、思っただんですが？」

「早いのであれば好都合だ。それと、パークスⅡブラウモンは我らが先に向かう事を許してくれたよ。如何なる策謀があるかは、私とて理解できないがね」

煙幕のように埃が空中に舞う。客観的に見れば、その煙幕を潜り抜けてこちらへと向かう二つの影に、一人で待ち構えていたリエル兄は冷や汗を流しながら仮面の飄々とした雰囲気では話を続ける。

一方隣のリエルは覚悟の視線を彼に向ける。彼女が今まで普段以上の力を発揮できたモチベーションに彼の救出が入っているのだ、もう逃げる様子は無い。

「あの御方は……全く何を考えているのやら。しかし、まずは貴方に賛辞を。ここまですご苦勞様でした」

罅割れた仮面を、それでも手放せない為に強引に括り付ける。

賛辞をなんて余裕な雰囲気芳醇させているが、その意志と行動が吊り合っていないのは一目瞭然。

なので、まずはその仮面を剥がす。

「随分と強がつているじゃないか？ 怖いのであれば、敵前逃亡とて立派な戦略だろうに、それを為さなかった理由が君にあるのかね？」

「……強がつている、ですか？ 僕が、貴方に強がつている……？ はは、貴方も可笑しなことを言う」

「では今の君に、我らを打破する術すべがあるというのかね？ 見たところ君は、戦闘向きな格好ではないのでね」

「それは——僕を馬鹿にしていると、そう捉えても宜しいのでしょうか？」

次の瞬間、リエル兄の纏っている雰囲気雰囲気が精悍なものへと一変した。

思わずエミヤとリエルが構えてしまう程に、狂った奔流が彼の籠を破って外界に漏れ出す。

「待つて兄さん！ わたし達は兄さんと戦うつもりは無い！ 兄さんを連れ戻しに来た！」

「連れ戻しに……ねえ。リエル、そんな下らない理由でこの男を連れてきたというの

なら、やはり君は欠陥品だ」

「——その言葉を撤回しろ、彼女が欠陥品だと？ 嗤わせるな」

怒号を発するエミヤに、リイエル兄はビクリともせず、笑みを浮かべる。

「今の言葉の何処に、間違いがあると言うんだい？ 欠陥品は欠陥品だ。であるなら——

——代替品が必要だと、そう思うのが自然の摂理だろうか？」

「代替品だと……？」

大仰に手を広げるリイエル兄。

須臾の狭間を経て、彼の前に守護神として立ち塞がる三つの影。

それは——悉くが、リイエルⅡレイフオードと瓜二つな姿形をしていた。

「え……？」

リイエルは思わず後退る。

先ほど、リイエル兄に欠陥品と罵倒された精神状態だ、その上自分と瓜二つの存在が一気に三つも目の前に姿を見せた。

流星に、リイエルは混乱に捕らえられたままだ。そこから抜け出すことは出来ない。

エミヤはその三つの影を見た瞬間、苦虫を食い潰したような表情をする。

「馬鹿な、『Project: Revive Life』が成功している、だと……？」

「ハハハハハ——ッ！ 良いな、その顔！ 昔、俺の前に立ち塞がった時はあんな冷徹

な顔をしてたつてのに、お前も変わったな、《死神》！」

嘲笑を浮かべるリイエル兄。

「言つとくが、今度は完璧だ。その欠陥品とは訳が違う。なんたつて、余計な人格や感情は予め『アストラル・コード』から削除してあるからな！ 後から記憶調整するなんて真似は二度と御免だ！ 挙句の果てに欠陥品になるとか、とことん救えない欠陥品だったがな！」

「に、兄さん……？ これは一体……？」

親を求める子供のよう、瑠璃細工の如く光を失つたリイエルが青年に問う。

だが、彼から齎されたのはリイエルへの救いではない。更に地獄へと叩き伏せる一言であつた。

「——お前はもう不要だ、欠陥品。だが、まだ俺を助けたいと思ひあがつているのならそこで大人しくしている。そうすれば、シロウエミヤ一人片づけるだけで終わるからな」

途端に膝から崩れ去るリイエル。

兄を救う事を目標に、ここまで走つてきた彼女はその一言で心が折れる。

元来彼女にとって家族は、今まで会うことが出来なかつた架空の存在だ。

その代わりを誰かに求めたとしても、本物になる事なんて出来ない。

それでも代わりとなる存在を見つけ、立ち上がり前を向いてきた少女を拒絶したのは、本物の家族。

現実は容易に、少女の心を押し潰す。

「リイエル」

エミヤの声に、虚ろな瞳で反応を見せたリイエル。

だが、とてもじゃないが戦える状態ではない。

押し潰された心を即時修復するのは、常人では不可能だ。よって、その反応は想定内。一番不味いのはこのまま彼女を放り出す事、それだけはやってはいけない。

「これをルミアにかけてあげてはくれないか？」

そうやってエミヤが渡したのは今まで自分が羽織っていた魔術講師のローブだった。

「ほら、この部屋少し寒いだろう？ あのまま制服が破れたままであったら、風邪をひいてしまうかもしれないからな」

「で、でも……」

「——大丈夫だ、全ては上手くいく。私が上手くいかせる。だから君は、そこで見ていて欲しい」

最初は躊躇うようにしていた彼女も、エミヤの言葉に頷くと両手で抱えるようにエミヤのローブを持ってルミアの下に駆けだした。

「良いのか？ 確かに彼奴は欠陥品だが、貴様一人で俺の完成品三体を相手にするのは難しいだろう？」

「構わないさ。所詮はリエルの戦闘技能を引き継いだだけの操り人形だ。彼女には遠く及ばない」

「何を言っているのか。俺は言つたはずだ、この三体こそが完成品だ。あの欠陥品に戦闘技能一つとっても、劣る箇所なんて在りはしない」

「それこそ何を言っているのか、思わず笑みを浮かべてしまう。」

「貴様、何を笑っている？」

「いや失礼。今君は完成品こそが至高と言つたな？ であればそれは間違いだ。なにせ——欠陥品が完成品に敵わないなんて、道理は無いのだからな？」

「貴様——！」

「投影するは双剣、干将・莫那。」

「貧弱？ そう罵るのであれば異論は無い。」

「確かに敵は強大だ。完成品と謳われた三体のリエルは、感情の起伏を見せることなく、機械の如くこちらを見据える。」

「その手に握る大剣は、彼女らが内包する膂力と合わさればエミヤの防衛力を穿つことも可能だろう。」

それでも——リイエル・レイフォードの力は借りない。借りてはならない。理由？ そんなの単純だ。

「——ああ、そうさ。自分との対決なんて、ロクなものじゃないからな」
「そんなロクでもない所業、背負うのはオレ一人で十分だ。」

記憶の糸口

「……こりやすげえな。流石といふかなんというか」

場所は切り替わり、時間は巻き戻る。

エミヤ達と別れたグレンとアルベルトは文字通り総力戦、残され託された者としての責務を果たそうとしていた。

正対するバークスもまた奥の手である異能を起動していた所だった。

緊迫感と緊張感が支配していたその空間を、螺旋の一条が蹂躪するまでは。

「こ、これはッ!?! お、おおっ! 私最高傑作が、こんな無残な姿にッ!?!」
飛来した螺旋。

それはグレン達を苦しめていた大亀の甲羅と衝突し、その堅牢に輝を走らせていた。

頑丈故にその一撃で大亀が崩れる事は無かったが、今の状態ではとても先ほどのようなこちらの攻撃を無視してのビームなど撃てやしない。

「……彼奴、強い癖にこういう不意打ち得意だからな。つてか、元来そっちが本職だったよな?」

「そうだ。とはいえ、暗殺者に収まる器ではない気がするがな、奴は」

「全くだ。正直な話、強い奴が更に慢心しないとか鬼に金棒だろ？ 大体物語とかじゃ、ああいう規格外の強者ってそういう戦力以外の要素で決着がつくのが定石なのによ、なあ？」

「つくづく敵でない事の有難さを実感するな。さて、一つ疑問だが、お前は現状で正面から彼奴に勝てると思うか？」

その疑問に、グレンは変わらず気軽そうに答えた。

「無理無理、そういう化物はお前の領分だろ？ 俺に出来るの何て、精々小手先の技術とあの魔術だけだ。正面からの『試合』なんて俺のやり方じゃねえよ。元来それしか持ち合わせていねえんだ」

「そうか、であるならお前はお前にしか出来ない事のみをやれ。俺がそこに届ける橋と成ろう」

周囲一帯を蹂躪する一矢。

最高傑作たる大亀を狙った一撃は正鵠し、その上周辺の小型合成魔獣キメラも風圧に巻き込まれて血潮と共に消し飛んでいった。

確かに小型を減らしたところで相手には大きなダメージとはならないかもしれないが、代役無しの大亀が致命傷レベルの傷を負ったのが一番の損害だ。

だからだろう。グレンとアルベルトの行動は、敵であるパークスには慢心に映った。

「貴様ら、我が最高傑作を潰した時点で勝利したと思っていないだろうな——ッ!?
であれば、その慢心、容易にうが——」

「——ンな訳ねえだろ?」

瞬間、バークスの双肩を計六発の弾丸が穿つ。

銃口から溢れる煙がその証左、グレンⅡレーダスが普遍的に持ち合わせている
クイックドロウ
早撃ち、それが今、火を噴いた。

普遍的な人体であれば致命傷の傷も、異能を起動したバークスには通じない。
憤怒と余裕が見え隠れする表情で彼は告げる、最後通牒を。

「貴様の一撃など痛くも痒くもない。それしか出来ないのなら、貴様に私の突破口は見
いだせない」

グレンの一撃が通じないのは事実。それが以前の敗戦だ。

だが、今回は一人じゃない。

「ンなの知ってるよ。だから、お前の相手は俺じゃあない」

「ほう——?」

その言葉を皮きりに、二人が位置を変更する。

アルベルトは前、グレンは後ろ。先ほどまでとは真逆の布陣に、バークスは疑問符を
浮かべる。

とはいえそんな疑問は然したるものだ、二人纏めて沈めるのみ。

その果てに《死神》が待っているのなら、この程度の障害塵芥の如く消し炭と化そう。

「貴様が私の敵か、精々アツプ程度は持ち堪える事を期待する」

「——」

頬を蠢動させ暗澹たる笑みを浮かべるバークスに対し、アルベルトは精悍に前方を見据える。

その反応の無さにバークスは臆気に期待外れを感じていた。彼の男であれば何かしらの返答をするものなのに、と。いや、所詮その程度の男という訳か。

「まあ良い、貴様らには然程期待はしておらんからな——」

そして始まる、もう一つの戦い。

先に動いたのは、完成品と呼称されたリエル達だった。

矮小な両手に身体を凌駕する大剣を担うと、三者全員がエミヤへと突貫する。

流石に互いの邪魔だけはしないと立ち位置は離れているが、それでもエミヤに対するカードとしては物足りない。

「そっだ——」

一糸乱れぬ連携、そうとはお世辞にも呼べない。

単に出足が一番早かったというフェイントも無い順番で、まずは前方から大きく振りかぶる大剣。

それを両手で煌めく双剣で軽く往なす。

次、右からくる横薙ぎを跳躍して回避。空に流麗な一線が何の化粧も無しに浮かび上がる。

最後に左から投擲される大剣、これもまた回避は容易。何ならこの軌道上に居る右から来たリエルにぶつけ無効化を計るのも可能だ。

普通では有り得ぬ軌道。余計なものを削ぎ落したとは言っていたが、生物では普遍的な道徳心までかき消す必要は無かるうに。

「全く、嫌になるな」

確かに人類、空を戴く翼は無い。

故に我らは二足歩行の利点が生かされる地面にて王者となつてゐるのだ。

発想は果てに空へ人類の手を届かせたが、そこへ至る橋が必要だ。

そして橋が無い現在、跳躍をするエミヤはその肉体を支える地面が無い。

勝利を確信したように笑みを浮かべるリィエル兄の姿を尻目に、苦笑いを浮かべる。

——流石にこの程度でやられてやるほど、この身は甘くなどないのだがね。

エミヤは咄嗟に体から一つの銀光を取り出し、迫る大剣に投げつけた。

刹那の先、剣先同士をぶつけ合った両者はエミヤの放った封爆ナイフ——爆晶石を加工して削り上げたエミヤのオリジナルだ——によつて身に纏う勢いを殺されていった。

中空に舞う漆黒の煙幕、だがその腹部を切り裂き姿を見せるのは回転する大剣だ。

「当然か、模倣とはいえリィエルの戦闘倫理が刻まれている。それを熟すのに、あの膂力は必要不可欠」

視界の中で段々と存在感を増していく大剣だが、既に最初の勢いは無い。

空中でその柄を掴み取ると、エミヤは手持ち無沙汰になつてゐるリィエルへ返却した。

下手に飛ばして壁に亀裂でも刻んでみる、そこを起点に我らが死ぬ可能性が生じる。であれば余計な不安要素は残さないべきだろう。

地面に無傷で着地したエミヤ、その姿を忌々し気に見守るリイエル兄が遂にその憤怒に包まれた口を開く。

「貴様、今の行動は何だ？　どうして大剣を返却するなんて真似をしたっ!」

「理由なんて単純さ。君が完成品と謳うリイエル達と、壁から飛来するであろう危険。その二つを天秤にかけて、後者の方が危険と断じたまで」

飄々と告げるエミヤだったが、内心では千切れそうなほど脳裏を回転させていた。

流石にリイエルを三人相手にするのは骨が折れる。今の一瞬、連携の隙を穿って包囲網から脱出したがそれは彼女らが誕生したばかりで体が思考についていけないからだ。

時間をかける程彼女らは連携を見出し、エミヤに裂傷を刻むのも容易くなるだろう。

なので、エミヤは告げる。正面から彼女らと戦うのは、心情や戦況その他諸々の理由から避けたいが故に。

「どうだ？　君は意気揚々と彼女達の勝利を信じていたが、それは叶わぬ理想かもしれないと目の当たりにした心情は？」

「チツ——やっぱ、木偶の坊は何処までも木偶の坊か……!」

「それは酷いのではないか？　彼女達は君の為に全霊を尽くしてここに立っている。その土俵にも立てない君に、彼女達を侮蔑する権利は無いと思うのだが？」

「……事実は事実だ。まったく、何が足りなかった……？ 俺の完成品に足りない要素は何だ？ とどのつまり、このままじゃ駄目なのは確かだが……」

何とも戦場に慣れない研究者らしいじゃないか。敵を前にして、脳髄を曝け出しながら脳漿をひっ繰り返している。

完成品と述べる三人のリエルが何やかんやでエミヤを防戦一方に追い込んでいるのもまた、彼にその行動を為させる余裕となっているのか。

確かにその行動は大切だ。準備段階に用意したもので敵を倒せるほど、戦場と言うのは甘くない。

盤面を修正し、次善の策を打つのも大事だ。

炯々と逡巡するリエル兄を前に、そして思考を奪われたが故に次の命令を待つリエル達を前に。

エミヤもまた、言葉を操ることにする。

「——そう言えば、ふと思ったのだが」

まるで友人にでも話しかけるような気軽さで、この空間の盤面を引っ繰り返す情報が齎される。

「以前に君と会った時は、今のような一人称はしていなかったと思うのだが、違うか？」

「——ッ!？」

反射的に口元を抑えるが、既に遅い。

むしろ唯一対抗できる言葉の攻撃を止めてしまうのは、この場面では愚策だ。

そんな行動をするぐらいであれば、リエル達を嚇けた方が何十倍も有効だ。まあ、こちらは戦闘中であろうとも口を弄すことを止めはしないが。

「お前……！」

「どうした、いきなり怒るとは君らしくない。嘗て会った頃の君は、もう少し理性的であつたのだから」

「……もう良い、お前の戯言に付き合う時間なんて俺には無いッ！ お前ら、この俺の目の前で不遜な態度をとるこの男を、殺せ！」

その合図と共にリエル達は動き出す。

流石だな、一瞬で彼我の物理的差を消し飛ばし肉薄する。

袈裟斬りをしようとする一太刀を、再び往なす。双剣で受け止めるのも良いが、両手が塞がるのはそのまま致命傷に繋がる。

「酷いじゃないか。親しくなかったとはいえ、旧知の仲だろう？」

「知るかッ！俺とお前が旧知の仲だつて？ 戯言を弄するのもその辺にしとけよ、《

死神》!!」

次いで左右同時の一閃。

往なすタイミングを見計らつての一撃だ、流石に学習能力は余計なものとして取り払われてなかつたか。

連携も拙いながらも完成し始めている。

迫る両隣の脅威を、それぞれ双剣で受け止める。それで、エミヤの足が止まった。

「——ッ!!」

先ほどの往なしを受け後ろへと移動させられたリエルが、その須臾を狙つて大剣を振りかぶる。

体を覆う影、その存在が大きくなると共にエミヤの命脈は漸減的に縮まつていく。

「さて——困つたな」

避けるのは容易い。

双肩に込められる裂帛の気迫、それを逸らしさえすればエミヤと左右を覆うリエルの立ち位置は逆転する。

それは後方から迫るリエルに彼女らを傷つけさせることに繋がるだろう。いやなに、最高の結末じゃないか。

どうして躊躇う必要がある、こちらの手を汚さず彼女らの自滅を以てこの戦いは幕を閉じる——。

そんな最善を選ばない、理由は無いだろう——？

「——ッ!!」

逡巡する必要は無かった。

エミヤは左右から迫る力に迎撃する膂力を緩め——る事など出来ず、腰を拉げさせ後方の剣を足裏で押し返す。

「!?!」

「生憎と……教員なんて、身に余る職業に就いてしまったんだ。生徒の前で、格好の悪い真似は出来なくてね……!」

「ヘッ……流石は過去に祝福されるべき戦果を残した男だ。とはいえ終わったな、お前」
まあ、厳しいな。

現在軸となる足で三方向からの膂力に対抗しているが、流石に厳しい。

心底侮蔑した視線をするリエル兄。焦燥と余裕が混ざる表情と言うのは、正しく今の彼を言うのだろうか。

「ぐ——ッ!」

安定しない姿勢、三方向からの均等な膂力を頼りに何とか姿勢を保っている、が。

キリキリと筋肉が千切れていく。骨が軋みを上げ、関節が潰れていく。

一瞬で劣勢に立たされてしまったなこれは。

だがまあ、この展開も悪くは無い。何せ、こうすることで彼女らを抑えることが出来

る。

「随分と酷い事を言ってくれるじゃないか。昔の誼として、応援を送ってくれても良いと私は思うのだがね？」

「お前……まだ余裕があるんだな。だが、んな戯言ほざけるのもこれで最後だ」

「酷いな君は……と、そう言えば旧知の仲なのにも拘らず、君と呼ぶのは可笑しいか。とはいえ……すまない、君の名は何だっただろうか？」

途端、リエル兄、そう名乗る男の目の色が変わる。

慢心、余裕、焦燥。そう言うものが見えた瞳は、一瞬で切り替わる。

精悍な物へ。いや違う、あれは隠したいものを前に気丈に振る舞う、人間の性質だ。

「……別にそんなの今じゃなくても良いだろうが。あの世から現世を見上げる時にも、恨み恨み述べてろよ」

「そう言う訳にも行かないさ。自分を殺す者の名くらいは、思い出して逝きたいものだ」

嘘の演技は然程得意では無かったはずだが、何時から斯様に舌が偽りを吐く事が普遍になってしまったのだろうか。

諦観の念を仮面と共に顔に貼り付け、エミヤは目を細めて言葉を述べる。

その先にはリエル兄は居ない。壁に磔にされていたルミアを前にしてエミヤの

コートを渡す以上の事を出来ずにいる、彼女にだ。

「リエル、優しい君に頼みたい。旧知の仲であるにも関わらず彼の名前を忘れてしまった愚鈍な私に、もう一度彼の名前を教えてはくれないか——？」

「え——？」

瞬間、時が止まる音がした。

彩りに包まれていた日常が剥がれ落ち、曇天模様のモノクロが視界を覆いつくす。故障した人形の如く。エミヤの問いに、リエルはただ何も答えられずにいた。

「……どうした、リエル？」

「兄さん、兄さんの名前は……」

「————黙れ、口を開くな出来損ないッ！ お前が為すべき事はそこで大人しくしている事だ。あの男の言葉を耳に入れるな！」

「で、でも……っ！ 兄さんの名前は……！」

「別に良いだろ、そんな事。頼むからお前は大人しくしているよ……！」

亀裂は生じたか、とはいえそろそろ体が持たない。

左右背後、等しく強大な脅力を前にエミヤは遂にその身を維持させることが困難な事を認めた。

「ハ——ッ！」

全霊を込めて背後からの大剣を片足で圧倒、体勢を崩して後方のリィエルは後退する。

だが、当然拮抗していた勢力を崩してしまえばどうなるのか、そんなの火を見るよりも明らかだ。

蹴り飛ばした勢いのまま拓かれた背後、後ろ蹴りのような姿勢のまま今度は体を捻る。

双剣を軸に、次は大剣を逸らそうとするが——後ろ蹴りという不安定な姿勢をするエミヤと、万全の姿勢であるリィエル達。勝者は当然、後者だ。

「——やはり無傷とはいかないか」

巧く力を逸らさせるも、その時片足は空中。

腹部を裂く一閃を受け入れるが、最善の結果だろう。

折角の魔術講師の正装が、ほんの少しだけ紅く染まっっていく。

漸く両足を地面につけて、エミヤは一呼吸。

「それで、思い出したかりィエル？」

肩を揺らして息をする。

空間に広がる呼吸の音は、一体誰のものなのか。

頭を抱えるリィエルはその双眸に雫を浮かべ、まるで自分が何者か分からないかのよ

うな悄然さでエミヤを見つめた。

「分から……ない」

「では、私が思い出させよう」

「な——止めろ!!」

「君の兄の名は、『シオン』だ」

これは、過去のエミヤがリエル・レイフオードを信じられなかったが故の清算だ。

肉体的にも、精神的にも幼かった彼女に告げられなかった、一つの真実。彼女を形成する一欠片。

驚愕に揺れる眼前の雫と共にこちらを見つめるリエルを、エミヤもまた見つめ返す。

——さあ、過去に残した忘れ物記を取り返し憶にいかうか。

対極を往く者たち

——君の兄の名は、『シオン』だ。

その一言を聞いたリイエルは、突然頭を抱えてその場にしゃがんでしまった。

何か怖いものから逃れようとする子供のように。その姿は、普段の彼女からは想像出来ない、酷く矮小な存在に映る。

「り、リイエル、大丈夫!？」

心配そうに声をかけるルミア。

しゃがみ込んでしまった姿を見て大丈夫なのか、とこちらに視線で訴えかけてきた。

エミヤはその視線を首肯する。

「大丈夫だ。彼女は今、忘れてきてしまったものを取り戻しに行っている。過去の彼女であれば耐えられなかったかもしれないが、君達と出会った今の彼女なら大丈夫だ」

その言葉に一瞬目を見開いたルミアだったが、すぐに頷いた。

「分かりました。先生がそう言うのでしたら、信じます」

「すまないな、いつも君には心配をかけてしまう。本当であれば、今すぐにでも君を救い出したい所なのだが——」

今なお、磔となつてゐるルミアに謝罪をし、エミヤは眼前でこちらを怨敵の如く睨む青年と、後ろで命令を待つ少女達に視線を向ける。

「シロウエミヤア……！」

「背中を見せられるほど、柔な敵ではなくてね。申し訳ないがもう少しだけ待っていてほしい。必ず君を救い出す」

「ふふつ、そんなに念を押さなくても大丈夫ですよ？　だって私は、今も昔もずっと先生を信じてますから」

そう言つて仄かに微笑んだルミア。

言葉に何かニユアンス的な意味で違和感を感じたが、エミヤはその疑惑を忘却した。「君が持つ元來の精神的強さもあるのだろうが、そこまで辛そうでは無くて安心したよ。そのまま、君は氣樂に待つていてくれれば良いさ」

「氣樂、ですか……？　でも、空中で磔にされるつて意外と大変なんですよ？」

微笑みながら冗談交じりにエミヤとの会話を樂しむルミア。

彼女の表情にはこの状況を樂しんでいるのではないか、とも思わせられるような心地よさが見えているが、エミヤにとつては笑えない冗談である。

苦笑いをしながらエミヤは結構本氣の意図で返答した。

「それは失敬。ならば、全靈を尽くして早急な解決を目指そうか」

少しだけ流れた、日常の声音。

ルミアは安心するように目を細めて、返事をした。

「分かりました、待っていますね——？」

鈴の音のような、耳を撫でるルミアの声を聞き届けエミヤは青年へと向き直った。
為すべき事は定まっている。

一度目を閉じ、心地良い空間から逸脱する。

心象を切り替え、雰囲気のリセットする。

今の空間をそのまま戦場に持ち込むことは許されない。これは穢されるべきものではない。守るべきものだ。

一拍。大きく肺に溜まった二酸化炭素を吐きだし、戦場の空気を吸う。

次の瞬間、開かれた瞳は精悍に研ぎ澄まされていた。

彼は変わらず飄々としながら、ニヒルな笑みを浮かべて問いかける。

「それにしても、随分と良い顔をするようになったじゃないか、『ライネル』。飄々と堅苦しい格好は君には似合わない。その怨念こそ、君の本質だ」

確信と共にその名を発すると、青年は苦虫を噛み潰したような表情をした。

「貴様、いったい何時から俺の正体を見破っていた……!?」

「見破ったのはついさつき程の事さ。私は案外、一人称というのを大切にしているね。」

自分の事を『俺』と言う人間で、シオンの技術を行使出来る天才など、私は一人しか知らない」

忌々し気に舌打ちをする青年——ライネル。

傍らに彼が造り上げたリエル達を置き、彼は目を剥く。その大きく開かれた口腔からは、さぞこちらへの怨念が籠められているのだろう。

だが、それを耳に入れるのは今ではない。

しやがみ込んでいたリエルが、その酷く困惑した表情を浮かべながら思案の海から浮上する。

それを見たエミヤは彼女に声をかけた。

「起きたか、リエル？」

「ね、ねえエミヤ……『イルシア』って、誰……？ みんなが、わたしの事をイルシアって……」

数多の情動が渦巻く瞳、エミヤへと疑問を投げかけた彼女は現実を掴めずにいる。まるで自分が自分じゃないみたい、そう続けて述べたリエル。

それは間違いではない。

さあ、ここからはエミヤの仕事だ。

リエルは無事、自我を保ちながら過去の記憶を取り戻してきた。

あととはそこに、エミヤの説明が加われれば完成だ。

「……一つ、昔話をしよう。年月にして約二年前程度か」

最初はポカンとしていたライネルだったが、唐突に始まった物語に耳を傾ける程彼の怨念は甘くない。

右手を垂直に振り下げる。彼は、それを少女達の出撃合図にしていた。

今回もまた、それを為そうとして——右手が空中で固定した。

「な、何だ——？　これは、ワイヤー……？」

「君にも無関係な話ではないのでね。退屈かもしれないが、付き合ってもらおうぞ？」

本数は多くない。だが、明確に動作封じを意図とする包囲網を、突破できる術はライネルにない。

強引に引きちぎろうにも、その細い鉄線は壁の頑丈な部分を軸に固定されている。

「何時の間に……!?!」

ライネルは驚愕し、次善の策を逡巡するもパニック状態に陥っている脳裏では焦燥感が沸き立つただけだ。

臂力では突破不可能。残念ながら少女達の大剣では彼の腕ごと鉄線を引き裂くことになる。

それを理解しながらも、ライネルは我武者羅に動き続ける。

「クソ……ッ！ 何で、外れない……！」

「当たり前だ。それは私より遙か格上の外道魔術師との敵対時を想定した特別製だ。生憎と君のような研究者の膂力で突破できるような代物ではない。少し黙っていたらこちらもこれ以上何かするつもりは無い。大人しく君を解放しよう」

「……チツ。分かったよ、俺はお前の邪魔をしねえ。その代わり、お前も昔話とやらが終わったらしつかり俺を解放しろよ!？」

「無論だとも。最後にこちらも確認だが、それは君の後方の少女達も動かないと見て良いのだろうか？」

「ああ」

渋々頷いたライネルは、それきり黙ることに尽力しているようだ。

宣言通り少女達が動く様子は無い。

では始めるとしようか。

「始まりは天の智慧研究会が運営する研究所、などと言う我々には見逃せない情報を帝國軍は掴み取った事からだったな。当然無視する訳にも行かず、私が現場に駆り出された」

淡々と、口調は一系乱れぬ旋律のように滑らかに。

悠然と佇むその姿は、もはやだれにも邪魔することなど許さない。

彼の口から紡がれる物語に、タイトルをつけるのならこうだろう。

それは——雪原の大地で出会った兄妹きょうだいの物語。

「——と、言う訳だ。当時軍人として数々の任務を請け負ってきたが、これほど己が無力を恨んだ事はない。確かに軍としては研究所を破壊するというノルマを達成できて言う事なしだろう。だが、私としては兄妹を救えなかった、という事実が心に押し掛かった」

エミヤの口が閉ざされる。

静寂の空間に響き渡る、リエルレイフォードの過去。その半生が幕を閉じた。

イレツセの大雪原、そこで繰り広げられたシオンとイルシアが駆け抜けた最期は、終ぞ《死神》の手を掴めずにこの世を去った。

「……結論を言おう、リエル。つまり君の正体は、世界初の『Project:Rev

ive Life』の成功例。シオンの妹、イルシアの『ジーン・コード』から錬金術的に錬成された体を持ち、イルシアの記憶情報である『アストラル・コード』を引き継いだ魔造人間が、君だ」

「じゃ、じゃあ……兄さんは……？」

「……血のつながり、という側面で話せば全くの無関係の人間だ」

確かにリエルⅡレイフォードはこの短い期間、同じクラスの間と共に歩んだ時間の中で精神的に成長した。

それは常に誰かという止まり木に依存していた過去を乗り越え、一人で飛び立つことに成功した。

とはいえ、一人で飛び立った矢先にこの真実は重すぎる。

突然の情報を処理するように、リエルは一度顔を伏せる。

「……君からは、何か言う事は無いのか？ 最終的に殺害したとはいえ、過去の友の話だ。何か思う事があるのではないかね？」

そう言つてエミヤは視線を下ろしたライネルと、その後ろで剣を担ったまま動かずにいる三人の少女達に目を向けた。

既にワイヤーは断ち切った後だ。

「……何も思う事なんて無い。ただ、一つだけ言う事があるとすれば————リエルⅡ

レイフオード」

「その声に応じはしないが目を見るリエル。」

兄であるという欺瞞を貫き通し、そして挙句の果てに記憶上の親族の殺害を認めた男。

リエルはどんな顔をすれば良いのか分からない。

「お前は間違いなく、『Project: Revive Life』——通称、『Re||L計画』の偉大な産物だ。それでも、内面は俺の完成品に劣るらしいな。血の繋がりがない？ そんな下らない事でよくよくよすんじゃねえ。だからお前は木偶の坊なんだよ」

「そう言い放ちリエルの、何か弁解があるのではないかという希望の華を摘み取った。」

だが、エミヤにはどうもその言葉には彼なりに優しさがあるのではないかと思ってしまう。

「何だよ、その目は。言っとくが別に優しさなんかじゃない。事実を突きつけたただけだ。大方、アイツは今までお前とか、そういう他人に依存して生きてきたんだろうが——ンなみつともない真似を見せるな、っていう俺の暴言だ。それがあの天才シオンが残した存在だったら、尚更だ」

「それを優しさというのではないかね？」

「ハ——嗤わせるな。良いか？　これは証明に至る過程だ。オリジナルがあんな体たらくだったら、俺の完成品が最強である証明にならねえだろ？　天才シオンが残した完璧な存在を、俺の完成品が凌駕することで初めてその証明が立証されるんだからな」

ライネルは指を鳴らす。

その瞬間、後ろで待つていた少女たちがライネルを守るかのように立ち塞がる。

表情には何の感情も見えない。

一度吹き飛ばされた相手だと言うのに、命令を下されたロボットの如く無感情に無機質に大剣を構える。

「だから感情なんてものは余計なんだ。その証明を手伝ってくれたことには、アイツに感謝しないとな」

「ふむ。さて、本当にそうだろうか？　案外感情というのは研究者でも解明できない可能性だと私は思うのだがね？　時にはそれを糧に成り上がる人間が出て来ることも稀ではない。格上殺しの理由には、何時だつてその可能性が刻まれているのだからな。君とて、自他共に認める天才に成り上がった原点は感情ではないのかね？」

そう言つて見つめるは、今なおライネルの前で屹立する少女達だ。それこそ紛れもなく彼も天才であることの証左。

そしてそれは、成長の証左でもある。

そうだ。人間にはそれがある。赤子の時から全てが出来たなんて人間は一人もいない。

成長という未確認の可能性も、感情という潜在された可能性も。

とても英霊と成り果てたこの身には眩い可能性だ。

霊長の守護者なんてものは、とどのつまりただの掃除屋。

全てを零に帰す最終機構であり、未来の操縦桿を握っている人間には、もうなれやしないのだから。

この過程が間違いではないと確認できたとしても、その可能性は羨ましいものだ。

「……へえ。じゃあお前も、そんな感情に流されてここまで来たのかよ?」

「そう、かもな」

正義の味方になりたいという荒唐無稽な理想も、感情になるのならそうだろう。

成長なんて次元の話は、とうの昔に置き忘れてしまったが。

「そう言われれば、感情つてのも馬鹿には出来ないか。俺も、様々な感情を糧にここまで来たんだからな。始まりは、懐かしきあの日。お前が俺の全てを奪ったあの日、忽然と現れたお前を前に、俺の人生は悉く崩れ落ちた」

両手を開き、また閉じる。

その一連の動作を連綿と続け、己が両手の変わらぬ動作をライネルは見下していた。「あの日、確かに俺は無力だった。とはいえ、多少の成長を経た今の俺があの日に戻ったとしても、お前には勝てなかっただろうな」

視線の先には泰然としたエミヤが映る。

「お前はさつき、俺を天才と呼んだな？」

「事実だろう」

「事実な訳がない。俺があの日、シオンを殺した後どれだけ追い詰められたか知らないだろう？」

エミヤを映す瞳は、暗澹としたものへ。

そこには眼球が嵌っているはずなのに、無限に続く闇が宿り眼窩がその姿を見せているかに見えた。

「俺はさ、知らなかったんだよ、シオンという男の偉大さを。始まりは確かに俺だった。プロジェクトは俺が考案した。だが、その荒唐無稽なプロジェクトの道中でシオンという天才が手を加える事によって、幻想は現実へと昇華し、いつの間にかそのプロジェクトは事実上天才の固有魔術へと変質してしまっていたんだからな」

「まあ、当然といえれば当然か。死者の蘇生など、一言で表せるような事象ではない。とはいえ、それを己が成長してここまで再現して見せた君も紛れもない天才だろう？ 魔術

講師をやっているとはいえ、魔術師としては凡人以下の私から見れば、何れの人間も天才さ」

エミヤは素直にライネルの才能を認めるが、彼の行動を許容した訳では無い。

先日研究所でステイーナ達に返答したように、死者を蘇生するには多大な犠牲が必要だ。

そして、ここには三人のリエル——いや、イルシアをオリジナルとした新たな生命。

その過程で、何人の犠牲が生まれたのか。

「ああ、そういえばお前は魔術行使に関しては凡人以下か。知識はあるのに、それを再現することは叶わない。まるで昔の俺みたいだな」

「残念ながら最後の一言は違う。再現することに拘泥し奇跡を実現したのが君で、再現を諦め新たな道を模索するのが私だ。まあ、いずれにせよ成長を経てここに立っている。如何にも人間らしいじゃないか？」

「……そうか。俺達、実は似てる所が色々とあるかもしれないと思っただがな」

「それはないな。逆に、私達はそれぞれ対極を往く者ではないだろうか？」

奇跡に拘泥し、犠牲を許容するやり方は、今のエミヤには不可能だ。

答えを得た以前の彼であれば、別の返答があつたかもしれないが。

否定したエミヤをライネルは嘲笑うように口を開く。

「いや。案外そうでもないかもしれないぜ？ 俺達はその日に同じ無念を抱いてここまで来てるんだ、そこは同じだろう。まあ内容は、強いが為に弱者への無力をお前が抱き。弱者が為に強者への無力を俺が抱く、か……いやいや最高だなあ、おい。やつぱり——何処まで言つても、俺とお前が交わることは無さそうだ」

雰囲気が一変した。

ネガティブな感情を糧に、彼は障害を取り除く。それは今も昔も変わらない。

エミヤもまた、双剣を構える。

「無論だとも。君のような努力をすれば奇跡を実現してしまうような天才に、私の歩みは理解出来ない」

「お互い様だろ？ お前にも俺の歩みを理解出来る訳が無いんだからな！ 行け、俺の完成品——！！」

その言葉を嚙矢に、今までライネルを守るように立っていたリエル達が駆け抜けた。

蒼き稲妻は怒涛を突き、赤原の守護者は身構える。

——ガギンツ！

飛来する三人の稲妻を、エミヤもまた全経験を込めた往なしで受け止める。

互いの鉄が一度、二度と接合するたびに戦火の華が舞い散る。

「いい加減くたばれよ、もう死んでもいいんじゃないか——!?」

怒号の問いに、エミヤはニヒルな笑みを浮かべた。

死んでも良い。その一言は、エミヤの集中を独り占めするのに最適だ。

皮膚を焦がす火花も、猛追する少女達も、祈るように見つめる少女も、答えを見失っている少女も、今は視線に収まらない。

——なるほど、故に死神か。

エミヤの視線は一点にのみ注がれている。

それこそ、怨嗟を糧にここまで這い上がってきた青年の叫びだ。

「フツ……もう死んでも良い、か。随分と面白い事を言うじゃないかライネル」

「な、面白い事、だと……?」

一步、また一步。その足が止まる事は無い。

その姿は誰が言ったか死神の如く。

泰然と不滅で不屈の精神は、如何なる逆境だろうと折れる事は無い。

味方からすればこれ以上頼もしい背中は無く、敵からすればジリジリと迫ってくる死の具現に恐怖を抱く。

右からの薙ぎを往なし、左からの突きを弾く。

「——っ!!」

二人を突破した果てに裂帛の気迫で、一人が正面に立つ。

リイエルと同じ顔をする少女に、そんな顔はさせたくなかったが。

それでもこの足は止まらない。ニヒルに吊り上がった口角は、収まりそうにない。

「殺せ——ッ!!」

ライネルの言葉に呼応し、少女は十字剣を振り下ろす。

そこには決心も、悲痛の覚悟も、機械的無感情も存在しない。

彼女の表情は、紛れもなく恐怖に染まっていた。

ライネルは余計な感情は取り除いた、と言っていたがそれは間違いだったようだ。

彼の不手際か、もしくは奇跡が舞い降りたか。

「フ——ッ!!」

とはいえ、恐怖と共に振り下ろされる大剣に、殺される程この命は安くない。

「——っ!?!」

華奢な体と共に弾き飛ばされた少女は、地面に横たわったままエミヤの進行を許す。

既に両者を隔てる障害は無くなった。

エミヤの視線の先には、曇りなくライネルが映る——。

「ひッ!? な、何やってんだお前ら!! お前らはあの、リイエル||レイフオードと同じ能

力が備わっているんだぞ!? それが三体も居て、この体たらくかよ!?」

ライネルの叫びに応えられる音は無い。

静寂の空間に、悲痛の叫びが木霊する。

「立てよ!! お前らは、そんなに弱くないだろ!? お前らは俺の完成品なんだぞ!? それが、ただの死神一人に、無様に負けるなよ——!!」

「——残念だよ、ライネル」

エミヤの言葉に、空間が静寂に包まれる。

怒号にも似た懇願を述べていたライネルは、その一言で覇気を失った。

「君の敗因は、その勘違いだ」

「勘違い、だと……?」

「そうさ。確かに元は同じかもしれない。リイエル||レイフオードも、今君を守ろうと奮起する少女達も、元は同じ『アストラル・コード』から生まれた。だがな、リイエルには二年間という成長の歩みがある。対して彼女達にはそれが無い」

「は……? 成長、だって……?」

ライネルは、肩を落とす。

「成長、成長か……。んな人間らしい事、あの木偶リイエルの坊にも出来たんだな……」

「彼女は、君と同じように人間なのだから当たり前だ。無論、そこに居る彼女達にも可能

性は秘められている。まあ、二年の差を埋めるのにこの戦いは短すぎるがね」
足音は止んだ。

エミヤはライネルの前に立ち、その剣を振りかぶる。

「——さあ、過去の清算をしよう、外道魔術師ライネル。残す言葉は、もう無いか？」
ハツと上げた顔は、既に覇気など宿っていない。

皮膚が千切れんばかりに瞳は見開き、唇は悔しさのあまり歯を伴って鮮血に濡れている。

それを見降ろすエミヤの瞳に、一切の痛痒は無い。

あまりに慣れた光景だ。これもまた、作業の一つと考えてしまっているのだから、当然か。

「お、お前ら——!! こいつを殺せ——ッ!!」

「それが最期の言葉か？」

問いと共に、エミヤは中空を左手を薙ぐ。

瞬間、肉薄せんと立ち上がっていた少女達の周囲を囲うように、巨大な剣が空中から突き刺さった。

無論普通に使ったのであれば、この程度の拘束、彼女達には無力なのだろうが。

「——っ!？」

大剣でエミヤの剣を破壊しようとした少女達が驚愕する。

障害を突き破って肉薄する未来が見えたのだろうが、現実はその障害である剣を薙ぎ払うこと叶わず逆に剣が弾かれてしまった。

その剣の名は——絶世デュラの名剣ダ。

神話上に記される数多の剣の中で、不滅の刃を以てその銘を後世に残した名剣だ。

エミヤの投影物である以上必ず毀れないという訳では無いが、それでもその強度は本物だ。

その刀身にエミヤは強化魔術を付与し、リエルの臂力に耐え得る剣を一瞬で用意した。

当然無茶なシナリオであったし、少女達が偽りの名剣を突破する可能性も十分あった。

それでもこの瞬間の勝者は——エミヤだ。

「な、何だよ、その剣は……?」

「さあな、これから死に行く君には不要の知識だ。君の言葉を借りるのであれば——あの世から現世を見上げる時にでも、知れば良いさ」

救援が望めないと分かったライネルは、遂にその命脈が断ち切られるのを受け入れた。

「ま、待ってください、先生——！」

ルミアの叫びが脳髓に響き渡る。

それでもエミヤは、振りかぶった右手を振り下ろそうとして——。

——視界の端で、弧を描く閃光が迸る。

遠征学修、閉幕

「……っ！ いきなり何の真似だ、リエル！レイフォードッ！」

視界の端から弧を描いて迫ってきた剣筋を受け止める。

眼前でバチバチと迸る火花を収めながら、エミヤは犯人に問いかけた。

間違はなく致死の一撃、隙を狙った一閃には明確な死の文字が刻まれている。

あと数秒剣が振り下ろされるのが早かったら、恐らくエミヤはダメージを受けていただろう。

故に、精悍に問う。

未だに束縛から逃れられていないというのなら、頭を叩いても連れ戻さなくてはならないからだ。

「それは、……っこのセリフ……！」

だが、力強く見上げたリエルの瞳には雫が浮かんでいた。

表情も人殺しなどというネガティブな感情ではなく、どちらかというところ……。

「泣いているのか、リエル？」

「人殺しは、駄目……っ！ 確かに、にい……ライネルは悪いことしたと思う。それは許

されない事。でも、殺しちやダメ……！　それは、エミヤが教えてくれたこと」
なるほど、そういうことか。

肩を揺らしてそう答えるリィエルは、恐らく手加減をする暇もなく本気で止めに来たのだろう。

しばらく見ない間に、随分と頼もしく成長してくれたものだ。

「……？　エミヤ、どうして笑ってるの……？」

「いやなに、君の成長に感動してしまっただけ。少し感慨深くなってしまった」

「え？　成長？」

「君の言う通り、人殺しは駄目だ。それは私もそう思う」

「だったら……！」

何をしているんだ。

その問いをぶつけられる前に、答えを指さす。

エミヤが指したのはリィエルの後ろだった。

その指を見るようにして後ろを振り返ると、そこには白目を剥いているライネルが居た。

「まさか気絶するとは思わなかったが、逃げようという希望を抱かせないためにも怖がらせておく必要があると思っただけ」

「怖がらせる……? でも、さっきのエミヤは……」

「演技に関しては私も捨てたものではないらしいな」

そうニヒルにエミヤは告げた。

するとみるみるうちにリエルの顔が紅くなる。

「だ、騙された……!?!」

「私が騙していたのはライネル只一人だったのだがね。だが、君の救出とルミアの悲鳴で臨場感が高まったことは確かだ。感謝する」

そう言つて今度はルミアを見上げた。

本気で心配していた彼女の事だ、如何なる暴言も受け入れる気でいたが、彼女は安堵の表情を浮かべていた。

「——良かったです、先生。」

その言葉に目を見開いた。

普通はリエルのように怒られても可笑しくないといいのに、安堵の表情を浮かべるか。

つくづく、彼女の善性には目を引かれる。

それが歪むことの無い様見守る必要はあるだろうか。

「大人だな、君は」

「む。それって、わたしが子供っぽいつてこと?」

抗議するリエルに肩を竦める。

「別にそんなこと言っていないだろう? しかし、君に迷惑をかけたのは事実だ。後で母タルトでもご馳走しよう」

「ん。ゆるす」

「無論、すっかりとした食事の後にだがね」

「……エミヤのなら、大丈夫」

満足そうにリエルは笑顔を浮かべた。

その姿に苦笑いを浮かべているルミアにも迷惑をかけてしまった。

「ルミアも疲れただろう? 帰ったら、何か食べたいものはあるかね?」

「私も良いんですか?」

驚いたように彼女は目を見開く。

「勿論。とはいえ、この話の続きは君の状態を何とかしてからにするか」

普通に話していたが、ルミアⅡティンジェルの碟状態に変化は無かった。

「リエル、ルミアの碟を壊してくれ。私はライネルを背負う」

「ん。それは良いんだけど……彼女達は、どうするの?」

確かに、それも考えなくてはいけないな。

リイエルが彼女たちと言ったのは、ライネルが引き連れていたリイエルの完成品、と呼ばれていた三人だ。

今は生きる理由を失ったが為か、顔を項垂れて劍の檻の中で大人しくしている。

「後でアルベルトとグレンに確認しよう。流石に独断では決められないからな」

「……殺されたりとか、しないよね？」

心配そうなりイエルの髪を梳き、力強く答えた。

「最悪の場合は、イヴにでも直談判して何とかできないか聞いてみるさ」

「ん。分かった」

そう言つてリイエルはてくてくとルミアの元へ走つていった。

エミヤは投影した劍を消し、一応様子を見てみた。

反旗を翻す可能性もゼロではない。

しかし、彼女たちは微動だにせずその場に留まったままだ。

「研究材料としては申し分ない素体であることは確かか。最悪の場合も克明に考えておく必要もあるか」

しかし、現役時代には幾度も衝突した関係だ。

良い顔はされないだろう。最悪は、心底恨まれるかもしれないな。

エミヤは気絶したままのライネルを背負い、その場から動けない三人に声をかける。

「動けるか？ 君達の主もこうなってしまったのでね。出来れば自分自身の足で歩いてくれると助かるのだが」

そう手を差し伸べると、彼女達は一人で立ち上がった。

トリガーは何か分からないが、とにかく動いてくれて助かった。

「エミヤ、ルミアを解放した」

「すみません。また、助けていただいて……あと、これはお返しします」

申し訳なさそうに差し出したのはエミヤの魔術講師のコートだった。

とはいえ、制服をはだけてしまっている現状で外に出るのは看過できない。

エミヤは肩をすくめて背負っているライネルを見せる。

「残念ながら、私はコートを纏えない状況なんだ。よって、今は君が使ってくれ。今返さなくても邪魔になるだけだ」

「——分かりました。ありがとうございます」

ルミアは纏っているコートを更に深く着る。

両手を前でクロスさせ、ぶかぶかなコートの襟を握りしめる。

「それでは出発と行こうか」

エミヤの声にルミアとリィエルは首肯した。

そして、後ろから彼女達がついてきているのを確認して、エミヤは前を向いたのだつた。

その後、戦闘を終えたグレンとアルベルトと合流した。

道中で別れバークスの相手を託したのだが、歴戦の魔導士である彼らであつても苦戦したらしい。

周囲は焦土と化しており、彼らの服装は煤だらけ。

目立った外傷がないのは彼らの実力とコンビネーションの好相性が故だろう。

労いの言葉を互いに交わしながら、その際に背負っていたライネルと、後ろからついてきていた彼女達を引き渡した。

事情を聴いたグレンは元来の優しさから苦虫を噛み潰したような表情をしていたが、仕事だと割り切っていた。

互いに情報を交換した後、もう一度別れることに。

リエルやルミアには休息が必要であり、待たせてしまっている生徒達にも無事を報告しなければならぬからだ。

そして、山稜の向こうから陽の光が差し込みだした時間帯。

エミヤ達はようやく旅籠に到着した。

すると、旅籠の前で生徒達は居た。

エミヤ達の姿を確認すると同時にこちらに駆け出す。

「先生、リエル、ルミア!!」

「……随分と心配をかけてしまったようだな」

真つ先にこちらに駆け出していたのはシステイナだった。

「良かった、皆無事で!」

今にも溢れだしそうな雫を瞳に溜め、手を振って走っている。

エミヤは一步後ろに下がり、リエルとルミアの背中を押した。

「行ってきたまえ」

そして、二人も駆けだした。

三人の距離がゼロに達した時、抱き合って互いの無事を改めて確認した。

「ルミア、リエル……!」

「ごめんね、システイ」

「ん。別に大丈夫。怪我とかしてない」

「良かった、良かった……！ 私、一人で心配で……！」

抱き合いながら涙を流すシステイーナを、ルミアとリエルが慰める。

その光景を見ながら、エミヤは感慨深く感じていた。

遅れてやってくる他の生徒達。

ルミアとリエルを囲んで、全員が全員の無事を安堵していた。

そして、ギイブルとカツシュがこちらに近寄ってきた。

理由は大抵お見通しだ。

だが、二人はエミヤの隣に並んだだけで特に何も言いださなかった。

しばらく三人でクラス全員を見渡していた。

「……訳は問わないのか？」

たまらずエミヤは声をかける。

だが、二人はそれぞれの反応を返しながらも結局理由は問わなかった。

両手を頭に後ろに持ってきて、笑いながらカツシュは言う。

「確かに気にならないと言えば嘘になります。とはいえ、俺達はエミヤ先生を信じてますから。なので、俺達が事情を話すに値するようになったら、先生から教えてください。」

ま、今回は爆弾物調査としておきますけどね」

「私から、か。それは随分と遠い道のりだと理解しているのか？」

「勿論。でも、俺達も頼られたリエルみたいに強くなつて見せますから。な、ギイブル」

突然話を振られるも、眼鏡をクイツと上げながら彼は答えた。

「——当たり前だ」

そう力強く答えてくれた。

確かにその返答は心強い。

強くなりたいと思うのは普通だ。

その感情を抱いたのは自分自身だつてそうなのだから。

しかし、その強さが適切な道で振るわれるようにと、エミヤは願わざるを得ない。

戦争だなんて人殺しの道具ではなく、人々を照らす輝きとして在り続けてほしい。

そして一番は、彼らに真実を伝えてこちら側に引きずり込むだなんてことがないことを願うばかりであった。

空を仰げば憎たらしいほどに快晴だ。

これは海日和だな、と考えエミヤは一步前に入る。

「皆聞いてほしい。まず一つは、詳しい話もせずに飛び出した事を謝りたい。君達の心

配は当然だ。説明責任を放棄した私に全責任がある」

「別に良いですよ。先生達にも何かやらなければならぬことがあったんでしようし」
謝罪したエミヤにシステイーナがそう言った。

他の生徒もまた納得してない部分はあるけど、各々解決策を見出したようだ。
本当に自分には勿体ない生徒達だと改めて感じる。

彼らに感謝を述べながら、エミヤは声を上げた。

「感謝する。それでは、旅籠に戻ろうか——」

その言葉に呼応して、生徒達の緊張感も少しずつ解き放たれていった。

リエルやルミアを囲い、全員笑顔で戻っていく。

その後ろ姿を見て、エミヤもまた日常へと戻る——。

その後、白金魔導研究所での一件は不慮の事故として片づけられるも只事では済まな

かった。

研究所所長のバークスの『失踪』に、突如として下された稼働停止命令。

島に滞在している人間に対しても退去命令が出されるなど、現在エミヤ達の周囲では慌ただしく人間が動いていた。

そんな事態にまで発展すれば当然遠征学修なんてやっている場合ではない。

当然中止との運びになり、早急な本島への帰還が命じられた。

とはいえ、一気に人間を島から退去させることは出来ない。

よって優先順位が設けられ、エミヤ達は束の間の時間を過ごしていた。

特に何の予定も無い一日。それをどう過ごすかは各々の判断に任せていた。

だが、全員が海に行く運びとなり、そしてエミヤもまた、海へ向かっていた。

美麗な水面に囲まれて、埠頭を歩く。

「ふむ、この辺りかね」

ニヒルな笑みを浮かべ、サングラスを外す。

爛々と輝く日照りに煽られながらも、戦場に行くのは怖くない。

ラフな格好で場所を定めたエミヤは早速肩に担いでいたクーラーボックスを下す。

そして、後ろから迫る人影に声をかけた。

「——全て片付いたか」

「ああ」

エミヤが歩いてきた埠頭から近づいてくるのはグレンとアルベルト。互いに民間人のような格好で変装をしている。

だが、服装と違つて話す内容は深刻だ。

「事後報告は聞くか？」

「手短に頼む」

そしてアルベルトから報告を受ける。

「ライネルに関しては大変な情報は持つていなかった」

「当然と言えば当然だな」

据えられている地位を考えれば無理もない。

そもそも斯様な情報統制をしっかりと行っているからこそ、天の知恵研究会は今の今まで存続しているのだから。

「そして、ライエルのレプリカの事だが——」

一度話を止めてから、アルベルトは続けた。

「——俺が何よりも信頼する者の元へ送り届けた」

「おい」

グレンが呆れたように声を上げるが、アルベルトは無視を貫いている。

「ほう？ アルベルトが信頼する者、か。君がそう断言できる人間が軍に居たとはな」
「ああ、居たとも」

まあ、それを聞ければ安心だ。

少なくとも実験に利用されるなどと言った未来は待ち受けないだろう。

「因みに、イヴからの了承も得ている」

「イヴからの了承だと？ よく得られたな」

「少し苦労したがな」

「……苦労、ね」

肩を竦めるアルベルトと、ジト目のグレン。

その対照的な反応が気になった。

「グレン、先ほどから煮え切らない反応をしているがどうした？ 何かあったのか？」

「いや、別に何もねえよ。ただ、こいつの老獪さに恐れ戦いていただけだ」

老獪、だなんて言葉が出るほど年は取っていないだろうに。

ま、何時ものじやれあいだろう。

「それでは報告は終了だ。それと、イヴが偶には顔を見せに来いと怒っていた」

「承知した。時間があれば彼女の元を訪れよう。辿り着けるとは限らないがね」

易々と軍には入れる立場ではない。

招集されればまだしも、勝手な理由では民間人以上に侵入難易度は跳ね上がる。

そして、それを無理矢理突破する気も理由も無かった。

「その報告さえ聞ければ十分だ。イヴも喜ぶだろう」

「果たして、喜んでくれるかは疑問が残るがね」

「そこに関しては心配する必要ねえよ。後はエミヤが来てくれるかどうかだ」

グレンが断言してくれたが、厄介払いのような形で軍を一時的に抜けている人間に上司が良い顔をするだろうか。

まあ、実際に一度会ってみるのも悪くは無いか。

そしてアルベルトとグレンは背を向けた。

これで会話は終了だ。

今は互いに違う立場、長居すべき関係ではない。

だが、最後にアルベルトの足が止まった。

「それともう一つだけ——『アカシックレコード禁忌教典』について何か知っている事はあるか？」

一瞬身体が硬直する。

「過去から幾度も聞いたことはあるが、意味までは未だに把握できていない」

「そうか。軍としても最重要事項として追っている内容だ。何か掴めたら報告してほしい。無期限の停職処分を受けている人間に言うべき事では無いと理解しているが、頼み

たい」

「勿論、我々は仲間だ。情報の独占などという真似はしない。確証の持てた情報は必ず話す」

それだけを言うとアルベルトは帰っていった。

「ま、本当に遊びに来るんだったら、お茶ぐらいは出さず。俺のじゃねえけどな」

グレンも一言残してアルベルトの背中を追っていく。

しかし、禁忌教典……か。

「確か、元素からのすべての事象・想念・感情が記録されている宇宙概念とあちらの世界ではあったな。しかし、こちらの世界ではどうなのか……」

しかし、似たような概念がこの世界にもあったとすれば『天の知恵研究会』が血眼で探す理由に足るだろう。

無論違う理由も十分にあり得る。

エミヤが知っている知識はあくまで異世界の代物である。

故に、誰にもこの話を共有できないのであるが。

「しかし、時間を縫って模索する価値はあるか……」

そうやって思考の海から浮上した時だった。

埠頭の反対から来る、三人の足音に振り返った。

すると、システイーナ、ルミア、リエルの三人がこちらに向かって走っていた。何かあったのだろうか。そう思いエミヤは立ち上がる。

それと同時に三人もエミヤの元に辿り着いた。

「——ようやく見つけました、先生。ふふ、リエルの言ったとおりだね」

「ん。エミヤの事はよく知ってる」

そう言つてリエルは胸を張った。

「私を探していた、ということは何かあったか?」

「いえ、ただ一緒に遊びたいなと思ひまして。システイが先生も居た方が面白いと言つていて、それに私とリエルも賛同したんです」

本当なのか、とエミヤはシステイーナを見た。

すると彼女は顔を背けたまま話してくれた。

「……ただ、私は先生と決着をつけただけです。あの勝利は、完全な勝利とは言えないので」

それはビーチバレー大会の事だろう。

とはいえエミヤは逡巡する。

「私は構わないが、君達とて偶には教員の居ない時間が欲しいのではないかね?」

「そんなことないですよ。それに、先生が居ればもつと盛り上がると思うので」

「ん。わたしもエミヤと遊びたい」

余計な配慮であつたか。

エミヤは口元を歪ませ、三人に向き直つた。

「——承知した。それでは、私も全霊で臨むとしよう」

「良かったです、それでは早く行きましょう！ 皆待つてますから」

そして、エミヤは歩き出す。

空には赫々と輝く太陽が居て、動く影は躍動する。

未だに解決の糸口は見出せていない。

それでも、今はこの日常を謳歌しよう。

英霊エミヤがこの世界に召喚された、その事実だけで平穩は必ず破られるのだから——

「——さて、これはどういう事だろうか」

エミヤは現在、遠征学修から自宅に戻っていた。

そこは形式だけの家であり、そこまで愛着は抱いていない。

特別な物もないし、必要最低限の代物だけを揃えている。

そんな質素な空間に、突如あり得ないものが忍び込んだ。

エミヤであつても思わず声を出さざるを得なかつた状況、それがこれだ。

「なぜ、君達が居る……?」

それは、玄関前で静かに待っていたリイェルの完成品としてライネルに作られた彼女達であつた。

三人はエミヤの帰りを確認すると頭を下げ、その中の一人が紙を取り出して渡してきた。

「紙? メッセージか」

エミヤが見るとそこには、『言つた通り一番信頼できる人物の元へ向かわせた』とアルベルトの字で書かれていた。

事実を理解するとグレンが変な反応をしていた理由も分かつた。

思わず頭を抱えるも、紙には続きがあつた。

『すまないが、お前が預かつてほしい。そこが一番安全だ。あまりにも異質な存在が故に、軍に置いておくと危険だろう。流星に再び護る事は出来ない』……まあ、当たり前

か」

リエルが認められたのは特例だ。

しかし、三人もいれば一人くらいなどという考えを持つ人間も絶対に居るだろう。

最後には不可能であれば戻してくれて構わないと書いてあるが、その選択肢を選んだ結末ぐらいエミヤにも理解できる。

「……今日から三人分の食事を作らねばな」

故に、その決断をエミヤは下した。

玄関で待っていた三人に話しかける。

「君達、食事は出来るかね？　そもそも、会話ができるかも怪しいか」

彼女達の口から言葉が溢れる事は無かった。

しかし、聴覚は正常に稼働しているようでエミヤの言葉に首肯する。

「そうか。では待っていたまえ。今食材を買ってこよう」

そしてエミヤは家を後にした。

エミヤが彼女達を預かる。

後に『エミヤ部隊』と呼ばれ敵から恐れ戦かれる戦力となるのだが――。

それはまだ、少し先の未来の話。

そして彼は知らない。

現在進行形で、物語の舞台は着々と整えられていることを。

エレノアの確保失敗、それは彼が今回犯してしまった大きな失態なのだ。
未だに、気付かない。

第5卷

システイーナの婚約者

「——さあ、理解できたかな？」

「……っ！」

そこは、漆黒が永久に支配する空間だった。

ジメジメと、とてもじゃないが人間が心地良いと感じる場所ではないそこに、二人の影が蠟燭に照らされて揺蕩っていた。

その中の一人、フロックコートを纏った青年が山高帽を被り直す。

「君の婚約者は、既に君を想ってなどいない」

「そんなことはあり得ません!! 私の、私のシステイーナは……！」

影の口元が三日月に歪む彼を見ても、もう一人の青年は頭を抱えて現実から目を背けるばかりであった。

纏う服装は高尚な代物ばかり。なのに、纏っている本人の頬は青白く鈍い輝きを放っている。

とてもじゃないが、所有者とは言えない様相だった。

如何にも高級な旅装用コートを揺らして、青年はフロックコートの際を掴む。

「そんなことが、あるわけ——っ！」

「残念ながら、君の婚約者はとある男に恋焦がれている」

しかし、フロックコート青年は微動だにせず滔々と話を続けた。

「確かに幼少期に抱いた想いに誤りはなかったのかもしれない。ただ、年月は想いすらも置き忘れてしまうものさ」

「認めません、私は、そんなことは絶対に認めません——ッ!!」

その圧力に屈したのか、フロックコート青年は宥めるように両手を見せた。

そして、ニヤリと口を開く。

「その気持ちは僕にもよく分かるよ、レオス。だからこそ、復讐が必要だろうか？ 君の婚約者を横取りした、ロクでもない男にね」

双眸を血走らせながら、高級な衣類に身を包む男——レオスは悪魔の言葉に首肯する。

「それで良い。では、復讐を遂げる君に教えてあげようじゃないか。君の婚約者たるシスティーナ——フィーベルの恋慕を略奪した男の名を——」

するとフロックコートの青年は山高帽を脱ぐと、両手を広げて声高々に宣言する。

「奴の名は——シロウ——エミヤ。それこそ君が復讐を遂げるべき相手さ」

「シロウⅡエミヤ……!」

「そうとも。そして、幸運にも世界は君の味方をしてくれている。シロウⅡエミヤは現在、アルザーノ帝国魔術学院で魔術講師として働いている。これこそ、天からの福音とは思わないかい?」

そしてレオスはフロックコートの襟から手を放す。

解放された彼の目は、清々しく、そして同時に底なし沼の如く混沌としていた。

「——ええ、思います」

「結構。それでは君もアルザーノ帝国魔術学院へ向かうと良い。ただし、くれぐれもシロウⅡエミヤの対応には警戒が必要だ。なんせ、僕ですら彼の相手は手こずるからね」

そんな忠告も聞く耳を持たず、レオスはその場を去っていった。

そして、暗澹たる場所に残ったのはフロックコートの青年ただ一人。

彼は脱いでいた山高帽を被り直し、その下で笑みを浮かべる。

「さあ、久方振りに相對しようじゃないかエミヤ。幾度も僕の計算を裏切り、そしてセラすらも生還させて見せた君の活躍が今から楽しみだよ——」

青年は閉ざされた天井を仰いだ。

闇夜が連綿と続くその空間に、果たして彼は何を見たのか。

「奇跡の具現者、シロウⅡエミヤ。果たして君は、何者なんだい——?」

誰にも届かないその問いは、風と共に去つてゆく。
そして、青年もまた前を向いて動き出した。

以前エミヤ達を襲つた遠征学修の一件から幾ばくか。

現在は平穏な日々を過ごしていた。

「ふむ、早く来すぎてしまったか」

そう言つて時計を見てみれば授業開始まで幾らか時間がある。

普段であれば授業の準備や学院のメンテナンス作業、教室の清掃なんかを行つていたりしているのだが、既に全て済ませてしまつてゐる。

もう一度念入りにやっても構わないのだが、エミヤは教卓の後ろに座り込み瞑想する。

——さて、ここ最近入ってきた情報を纏めるか。

そう考えたエミヤは伝手を利用して収集できた情報を脳裏に書き上げた。

要注意人物は誰か、軍を取り巻く状況について、そして『禁忌經典』についても。だが、この日ばかりはゆつくりできなかつたようだ。

「先生、エミヤ先生!! あ、やつぱり居た!」

教室の扉から顔を見せたのはカツシユだった。

彼はエミヤを見つけると嬉しそうに駆け寄ってくる。

すると後ろから続々と男子生徒が続いてきた。居ないのは、ギイブル辺りか。

「君達、何かあつたのかね?」

エミヤがそう問うとカツシユは教卓に身を乗り出す。

「実はさ先生、今中庭にシステイーナの婚約者が現れたんだよ!」

「ほう、そうか」

短く答えたエミヤにカツシユ達は不満げな様子を見せる。

「む。もしかして先生は興味無い感じですか?」

カツシユの疑問にエミヤは肩を竦める。

「別に無いとまでは断言しないさ。しかし、突然婚約者が現れたという方が驚きだ。学院の人間ではないのだろうか?」

「ええ、確か来賓だとか」

「であれば、余計な詮索は両者にとって迷惑だろう。学院の人間であつてもだがね。シ

ステイーナにはシステイーナの恋路、将来がある。なのにも拘らず、我々第三者が茶々を入れるのは、果たしてどうなのだろうな？」

それを聞いて男子生徒達は静かになる。

「確かに、俺達間違つてたかも知れませんが……」

「システイーナの婚約者だからと言つて盛り上がつてたかも」

「性格はキツイけど、外見は美人だし、あんなイケメンが相手でも不思議じゃないか」

内容は多々あれど、全員が反省を見せた。

「結構。それでは、授業の準備を——」

「すみません。この教室に、エミヤ先生はいらつしやいますか？」

声を遮るように、突然の声が教室に響き渡つた。

音源を探る様に目を向ければ、廊下に居たのは見覚えのない青年。

彼は背景に大人数の野次馬と、傍らにシステイーナを連れて教室を一瞥した。

カツシユ達が驚きこちらを見ている光景を尻目に返答する。

「私がエミヤですが、何か用事でしようか？」

一目見て理解した。

彼こそ今の今まで盛り上がっていたシステイーナの婚約者だろう。

立ち上がり、エミヤは丁寧な口調で彼の元へと歩む。来賓なのは先ほどの会話で入手

済み。

すると相手は笑みを浮かべながら手を差し伸ばした。

「お会いできるのを楽しみにしておりました、エミヤ先生。貴方の卓越した手腕は、我がクライトス魔術学院でも噂となっておりますから」

「クライトス魔術学院……？　では、貴方が臨時講師の——」

「はい。クライトス魔術学院から参りましたレオスⅡクライトスです」

エミヤは差し出された手を掴む。

互いに握手をして自己紹介を終了させた。

一見すればなんてことの無い日常の一ページだろう。

しかし、エミヤはその瞳に疑念の色を彩らせる。

レオスⅡクライトス。

とある講師が倒れたことにより、提携を結んでいるクライトス魔術学院から彼が派遣されたというのはセリカから聞かされていた。

それでも脳裏に過ぎるのは彼に関する、子細に残された疑惑の情報だった。

そして、相手も笑顔の裏に何かを隠している。

笑顔を表情に張り付けて体裁だけは保っているようだが、双眸だけはこちらを精悍に睥睨する。

「ご丁寧に感謝します。して、今回は如何なる要件で？」

「ええ、それはですね——」

するとレオスはエミヤの手を離し後ろを見た。

そこには彼についてきていた野次馬のほかに、リエルとルミアに心配そうな目を向けられているシステイーナが居る。

「貴方は、私のシステイーナの担任の先生ですからね。やはり、紹介すべきかと思いましたが」

「れ、レオス……！ 私……！」

赤面したシステイーナの声を遮り、レオスは傍らに來たシステイーナの背中を押す。

「そしてこちらは、私の婚約者であるシステイーナです」
フィアンセ

その声音が全員の耳に届くと同時に、教室が沸き上がる。

廊下で伸びている野次馬は当然の事、同じ教室に居るカツシュ達も大盛り上がりだ。

誰もがそれを言祝ぐ中心で、システイーナは顔を上げられず耳を紅くして下を向いていた。

「え、ええつと、実はですね、先生……！」

それでも説明はすべきと考えたのか、真つ赤な顔でシステイーナはエミヤに言葉を紡ぐ。

ただエミヤはそれを遮った。

「説明は不要だシステイーナ」

行動の意図を理解したエミヤは首肯する。

「私は君達を祝福しよう。おめでとう、システイーナ」

目を細めて、輝かしいものを見るかのような目を向けるエミヤ。

これで説明責任は全うされた。

多くの生徒は突然訪れた祝福の非日常に歓喜し、一部の女子生徒はレオスの美貌を前にシステイーナへ怨嗟を向けるも、当人たちが纏う祝福の空間には全く意味を成さない。

そう、当人たちが、斯様な雰囲気を纏えば、意味を成さないはずなのだが――。

「む。どうした、システイーナ？」

エミヤの問いかけが届いたのは、システイーナだけだった。

それでも彼女は、思いが通じたかのように顔を上げる。

「実は……一つ、レオスに言いたいことがあって……」

彼女の声が届いたのか、周囲の喧騒は静寂を迎えた。

言葉を切ったシステイーナはレオスに向き直る。

レオスもまた、彼女を受け入れるようにシステイーナを正面から見る。

これから何が起こるのか、各々想像を膨らませていたのだが、次の瞬間思いもよらぬ光景に目を疑う。

「——ごめんなさい、レオス。私はまだ、誰とも結婚をするつもりはないの」

システイーナが頭を下げた。

その言葉を皮切りにどよめきが漂う。

ただ、レオスはため息をつき少し怒気を強めて彼女に詰め寄った。

「まだ、机上の空論に固執しているのですか、システイーナ……」

「私、お祖父様と約束したの。メルガリウスの天空城の謎を解くつて。お祖父様が憧れた天空の城に、必ず辿り着くつて。そのために、私はまだまだ魔術の勉強をしなければいけない……だから、まだ誰かと家庭を築く気にはなれないの……レオス、貴方の気持ちは嬉しいけど私は……」

その夢はエミヤも幾度とシステイーナの口から聞いていた。

荒唐無稽な夢と自虐する彼女を前に、世界の謎を解明するのが彼女の夢であれば応援すると、そう言ったのを覚えている。

しかし、レオスは一度エミヤは冷徹な瞳で一瞥した後、システイーナに笑みを浮かべる。

「——魔導考古学。貴女が志望するのは、究極的には古代文明の謎を解き明かし、古代

の魔術を現代に再現させることを狙いとする魔術分野、でしたね。確かに、それを成し遂げられれば魔術史に残る偉業となるでしょう。高尚な分野だとも理解してはいますが……システイーナ、貴女だつて知つてはいるはずだ。それを成し遂げられた者は、現代に至るまで誰一人として居なかつたんですよ？」

あくまで論ずように、レオスはその夢を一蹴する。

「聡明な貴女であれば理解できるはずです、その分野に未来は無いなんてこと。時代は既に軍用魔術研究の時代なのですから。昨今、隣国レザリアとの国際緊張が高まる中、次世代の軍用魔術研究・開発の重要性が高まっています。必要なのは過去の産物では、無いんですよ」

システイーナは拳を握りしめて静かに彼の言葉を聞いていた。

確かにレオスの言葉は事実だ。

彼女が志望する分野は、現代において重要視されているとは言えない。

それでも、志望する理由があるから彼女は胸を張つて鍛錬を続けるのだ。

しかし、冗談話を聞いているかのような笑みを浮かべると、レオスはエミヤに向き直る。

「——貴方もそう思うでしょう、エミヤ先生？」

エミヤに主導権が流れた時、システイーナは心配そうな目で見上げた。

——貴方も、と。

腕を組みながら、目を瞑って考える素振りを見せた後、エミヤは答える。

「確かに、昨今において軍用魔術以上に重要視されている分野は無いと私も考えています。それは、魔術講師の端くれとして魔術論文などを一見すれば至極当然の事実です」

「ええ、そうでしょう！」

システイーナの顔が沈むのが見えた。

ただしエミヤは、彼女を見ずにレオスを見る。

勝ち誇ったかのような顔を見せる、彼を。

「——ただし」

エミヤの言葉を聞いた瞬間、システイーナの顔が上がる。

「如何に重要視されている分野があつたとはいえ、他の分野を蔑ろにしても良いとは思えないな。確かに魔導考古学は荒唐無稽な、机上の空論かもしれない。しかし、人間とは——斯様な夢を現実にした時にこそ、成長するものではないのかね？」

丁寧な鍍金が剥がれ、ニヒルに口元を歪ませる。

「レオス先生、君はこう言つたな？ 過去の産物は求められていない、と」

「……その言葉に、誤りがあると考えですか、エミヤ先生？」

「無論。案外、過去の産物こそが未来を切り拓く鍵となり得るものという事例を幾度も

見てきているのでね。そして、過去の歴史を蔑ろにする者の結末も重々に理解している」

そこに来て初めて、レオスの慇懃な鍍金も剥がれた。

舐めた口調と表情をする彼を前に、レオスは怒気を呼吸と共に吐き出した。

「——私が彼女の未来を案じて何が悪い!？」

「悪いとは言っていない。ただ、未来の選択肢を潰す君の発言に苦言を呈している」

不? 戴天の敵を見るかのように、精悍な相貌をするレオス。

そしてそれを正面から受け止めるエミヤ。

その場に居る誰もが、この二人に割り込むことは出来なかった。

「君達の馴れ初めは知らないが、今の彼女を見ている私には断言出来る。彼女は自らの手で未来を選択できるとね」

「故に彼女の意思を尊重すると? 今しか見ていないからこそ貴方は言えるんです。私

は——!」

「——待ちたまえ!」

突然の声にエミヤとレオスの声が止まった。

その先に居たのはハーレイ。

エミヤの同僚にして、度々付き合いのある魔術講師だった。

「シロウエエミヤ、今は何時と考えている!？」

矛先はエミヤのみ。

彼は鋭い目つきでエミヤを指差した。

とはいえ、流石に来賓のレオスに口答えなどできないだろう。

レオスに口答えしていたエミヤの方が可笑しいのだ。

「……忠告、感謝する」

両手を上げるエミヤを見てハーレイは鼻を鳴す。

——助け舟を出してくれたのだ。

こちらはクライトス魔術学院へ補充教員を要請した側である。

それがこちらの教員と揉め事を起こしたとなれば、一大事。

アルザーノ帝国魔術学院の名譽を汚す行いに直結する。

エミヤは英霊であるが、同時にこの異世界の社会に溶け込み過ぎた。

勝手な行動を許される立場では、もうないのだ。

反省の意味を汲み取ったのか、ハーレイは廊下で佇んでいた生徒達に目を向ける。

「諸君らも教室に戻りたまえ。そして、レオス先生はこちらに」

野次馬を追い払うとハーレイはレオスと呼んだ。

彼は一言ハーレイに謝罪すると、最後にエミヤを睨む。

「——システイーナは私の婚約者です。エミヤ先生、貴方には負けませんから……！」
そう宣言して、彼は廊下の向こうへと消えてしまった。

「レオス＝クライトス、か……」

小さくその名前を反芻する。

色々と調べている過程で手に入れた、不穏な噂が漂うその名前。

優先順位は低いと思っていたのだが、少し調べる必要があるが、ありそうだ。

今後、システイーナとの関係がどうなるかは分からないが、アルザーノ帝国魔術学院に入っている以上警戒は必要だ。

エミヤがこの学院に赴任したばかりの時に引き起こされた襲撃者事件のような惨状を、再発させないために。

「あの……エミヤ先生」

突然の声にエミヤは目を動かす。

するとシステイーナがもじもじと指先をクルクルさせながらエミヤを見上げていた。
「ありがとうございます。私あの……嬉しかったです……！」

「なに、別に気にする必要は無い。私は君の教師だからな。いつだって君の味方だ」

エミヤの言葉に暫く瞠目していた。

そして、システイーナは少し残念そうにため息をつく。

「そ、そうですね……。先生は、先生だから、私の味方をしてくれたんですね……。ホント、何考えてるのよ私……。！」

頬をペチペチと叩く。

それは、赤面していた頬を誤魔化すように、念入りに。

感情で彩られた紅き頬を、物理的に塗りつぶすように。

それでもと顔を上げると、彼女は笑顔を見せた。

「それでも……。それだったとしても、私は嬉しかったです。ありがとうございます！」
一言お礼を述べるとシスティーナはそれだけです、と言ってルミアとリエルの元へ戻っていった。

時間を見れば時間開始数分前、エミヤは授業を始める準備を完了させようと荷物をあさる。

「先生。俺の勘違いかもしれないですけど、なんか今良い雰囲気じゃなかったですか？」
「む。誰と誰がだ？」

まだ近くに居たカツシユの言葉に疑問符を浮かべる。

本当に意味が解っていないんだな、と苦笑いを浮かべるとカツシユは話題を変えた。

「そういえば、先生さつき宣戦布告されてましたけど、システィーナの取り合いって意味ですかね？」

違う。カツシユは未だにその話題を引き摺っていた。

しかし、相手はエミヤだ。一筋縄ではいかない。

「残念ながら、その意味で私の宣戦布告してきたのであれば、彼の独り相撲になつてしま
うな」

そしてエミヤは話の続きをしようとするカツシユに戻るよう促し、授業を始める。

途中で切り上げられたことに不満げなカツシユ。

何故かシヨツクを受けているシステイーナと、苦笑いを浮かべるルミア、準備だけは完璧なリイエル。

我関せずを貫き通し淡々と授業の準備を整えていたギイブル。

他にも、各々が別の視点から非日常を経験したにも関わらず、授業開始を告げるエミヤの声を聞き、思考を切り替える。

まるでそれは、日常の一ページのように――。

誰一人として、この平穩が崩されるだなんて予期していなかったのである。

不穏な空気は対立から

——レオスⅡクライトス。

クライトス伯爵家の御曹司にして、クライトス魔術学院において卓越した手腕を見せている名講師。

そんな人物が到来するとなれば、否が応でも学院の噂を搔つ攫う。

どんな授業をするのだろう。

どんな人物なのだろう、と。

アルザーノ帝国魔術学院という名門校が擁する優秀な生徒達から羨望の眼差しが向けられた。

期待という名のプレッシャーは、背負う人間にとってはとても重いものだろう。

ただし、レオスⅡクライトスは完璧にその期待に応え続けた——。

所で話は変わるが、アルザーノ帝国魔術学院には二種類の授業がある。

一つは、必修授業。

文字通り必ず履修しなければならない科目であり、開講されている授業も魔術の基礎を広く学ぶ代物ばかりだ。

これは各クラスの担当講師が行う事となる。
もう一つは、専門講座。

これは、学院の各講師が独自に開講する授業の事だ。

その講師が専門とする事柄についての授業が行われることとなり、内容も必修授業と比べて高度な物となっている。

これは履修者の貴賤を問わず、如何なる学年だろうと構わない。

履修したいと望めば誰であろうと履修可能というものだった。

なお、エミヤは専門講座を開講していない。

そもそも、学術的に魔術を学んできた訳ではないので、生徒に教える事柄が無いというのが理由だ。

時折、専門講座を開講してほしいという要望を受けるのだが……必修授業で手一杯と受け流している。

そんなエミヤには関係が殆どない専門講座だが、レオスは病欠の講師の代わりに必修授業を受け持つ傍らに、早速専門講座を開講したという。

「——先生。一緒に、レオス先生の専門講座を受けませんか？」

そう、ルミアに提案されたのを切欠に、エミヤは現在彼の授業を受けていた。

親友の婚約者について、彼女も心配だったのだろう。

揺れる瞳を前に、エミヤもまたその誘いを了承したのだった。

システイーナ、ルミア、そして三人が行くのならとついてきたリエルの四人で向かったのは魔術学院校舎西館。

大講義室が生徒や講師に埋め尽くされているのを尻目に、壇上に現れたレオスは淡々と授業を始めた。

「——という訳ですが、ここまで理解できましたか？」

ここでレオスの授業が一段落する。

張り詰めていた雰囲気が少しずつ弛緩し、レオスは微笑みながら質疑応答の時間を設けている。

その最中でエミヤは感心するように息を吐く。

「なるほど。彼自身の専門が軍用魔術関連であることは推測していたが、まさかここま
でとはな。軍の人間ですら一定数理解していない物理作用力理論を、学生に理解させる
とはな」
マテリアル・フォース

「はい。本当に、凄い授業でしたね……」

隣で座っていたルミアもエミヤの言葉に共感する。

エミヤの膝枕で眠ってしまったっているリエルは置いといて、多くの生徒がこの授業に感銘を受けていた。

それに関してはお見事だ。

同じ講師という立場上、その手腕の素晴らしさはよく理解できる。

ただ――。

「幾ら何でも綺麗話で済ませ過ぎだ。この内容を教えるのであれば、事前に伝えるべきリスクの話が皆無なのは頂けない」

子供に包丁の使い方を教えるとき、まず怪我をするリスクを伝え回避する方法を教える。

柔道では、受け身の練習を入念に行う。

斯様な、リスク自身の話やそれ自体を回避する方法を何も教えなかった点には眉をひそめる。

包丁で物の切り方だけを教える。

柔道で投げ技だけを教える。

そんな、用途のみに精通した教えは、こと魔術においても危険である。

「やっぱり、先生はこういう授業には思う事がありますか？」

「思う事はある。ただしそれは、彼と私の考え方が違うからに他ならない。どちらが合っていて、どちらが間違えているという話ではないからな。事実として、私のやり方ではこれほど円滑に生徒達へこの理論を教授することは叶わなかっただろう」

肩を竦めるエミヤに、思う所があるような表情をするルミア。

何時もならこのまま何もなく二人の会話は終焉を迎える。

ルミアがエミヤの言葉に同調するからだ。

しかしこの日ばかりは、食い下がる。

「それでも、私は先生の考えの方が好きですよ？ 私達の事を考えてくれているんだな、つて温かい気持ちになりますし」

「……別に特別なことなどしていいない。ただ、教えるべき人間の責任を果たしているままで」

「はい。いつもありがとうございます、エミヤ先生」

目を瞑るエミヤにルミアは感謝を告げた。

授業は既に終了している。

帰路に就いた生徒も多く散見される中、一つの足音が明確にこちらに近付いてきている。だ。

「——おや、私は邪魔でしたか？」

レオスはエミヤとルミア、そして膝の上で寝ているリィエルを見ながらそう微笑んだ。

「何か用事でしょうか、レオス先生？」

「ええ。授業中にエミヤ先生の姿を確認しましたので、是非感想をお聞かせ願いたいと思います」

「私を気にする必要などないでしょうに。勿論、素晴らしい授業と記憶しています」

「それは良かったです。貴方ほどの実績を残されている方からお褒め頂けたとあれば、私も自信が付きます」

するとレオスは何か思いついたようにエミヤに問う。

「そうですね。今度は、エミヤ先生の専門講座を受講したいのですが、先生は何の分野を専門にされているのですか？」

「生憎と、私は必修授業で手一杯でしてね」

「それでは、何一つ専門講座を開講なさっていないのですか？ それは残念です。是非とも、貴方とは互いの専門魔術について論議を交わりたいと思っていたのですが」

しかしエミヤは見逃さない。

何一つ専門講座を開講していないと理解した瞬間に浮かべた、侮蔑の笑み。

とはいえ、彼と何か勝負をしているという訳でもない。

そう自分を納得させて、スルーすることに。

レオスはそれだけを聞きたかったのか、エミヤから興味を無くすように目を離すと後ろの席で考える素振りをしていたシステイーナに声をかけた。

「貴方はどう思いましたか、システイーナ」

「それは……正直、素晴らしい講義だったわ。文句のつけどころがないくらいに……」
「ありがとうございます。そういうえば、確かシステイーナは『教師泣かせ』と言われるくらいに優秀な実績を残していると聞きました。そんな貴女から認められれば、私としても嬉しい限りです。しかし、担任を受け持っているエミヤ先生は苦勞なさっているのでは？」

「ま、待つて！ 別に私、先生の迷惑になる事なんて……言つてない、わよね……？」

当然のようにこちらが苦勞していると思われているとは。

そこまで言い切られるといつそ清々しい。

システイーナは心配そうな目を向けるが、大丈夫だと告げる。

確かに自分の力不足で拙い説明になることはあれど、それを指摘してくれるというのはエミヤにとつても利益がある。

「別に苦勞などと考えていません。生徒から積極的な意見が出る授業というのは、それだけ生徒達が真剣に向き合っているという事ですから。私もそれに負けじとより質の高い内容にしようとする努力ができますので」

「そうですか」

興味無さげにレオスは返答する。

「それではシステイーナ。これから散歩などは如何でしょうか？ 久方振りに、二人だけの時間を作れるのですから。話したいこともありますし」

「……それは、今じゃなくちゃ駄目なの……？」

「ええ、重要なことを話したいとも思っていますので」

「そこまで言われれば流石に無視するわけにはいかないだろう。

渋々立ち上がった。

「……分かったわ。ごめんねルミア、行ってくる」

「あ、うん。行つてらっしゃい」

ルミアに見送られ、二人は扉の向こうへと姿を消した。

するとそのタイミングでリエルが起き上がる。

目を擦り、口元を拭きながら、眠そうな目でエミヤを見上げた。

「……？ 授業は？」

「君が気持ちよく眠っている間に終わってしまったよ」

「そう。それで、システイーナは？」

後ろを見ているリエルにルミアが今までの顛末を教えた。

すると眠そうに細めていた目が覚醒し、普段通りの彼女が戻ってきた。

「——それって……追いかけても大丈夫なの？」

「ほう。なぜ君は、追いかけるべきと考えた？」

「ん。よく分かんないけど……何か、レオスは危ない雰囲気がある。それに、システイーナの気持ちを無視するのは……好きじゃない」

「なるほど、実に君らしい意見だ。では、ルミアはどう思う？」

ルミアは数秒間悩んだ後、結論を導き出す。

「私も、追いかけた方が良くと思います」

「では追いかけるべきだろうな」

「ん。だったらルミア、すぐ行こう」

リエルが促し、ルミアは立ち上がった。

しかし、立ち上がらずその場に留まったままのエミヤを見てリエルは首を傾げる。

「どうしたのエミヤ？ 行かないの？」

「私は遠慮する」

「それって、エミヤはレオスの事、別に大丈夫だって思ってるってこと？ 朝は喧嘩してたのに」

「そう思っていたら喧嘩などしていい。私は私で、独自のルートで情報を探ろうと考えている」

流石に下手な行動は起こさないと推測したが故の判断だ。

それを聞くと、心配そうにしていたルミアは安堵したように緊張を解いた。

「分かりました。それでは、私はリエルと行きますね？」

「ああ、よろしく頼む」

そしてルミアとリエルも廊下へと消えていった。

一人残されたエミヤは、独りで立ち上がりながらこの場を後にする準備を整える。

「……この染みは、リエルの涎か……？」

ズボンを見ながら肩を竦める。

そうして、エミヤもまた、動き始めたのだった。

その日の放課後、ルミアからレオスのシステイーナの散歩で起こったことについて説明を受けた。

特になんてことはなかったのだが、やはりレオスは未だにシステイーナの事を諦めていないようだ。

最初は慎ましい雰囲気ですり合っていたものの、その話題が出た瞬間に雰囲気はあまりよくないものへと変わっていったようだ。

喧嘩が始まりそうになった瞬間、リエルが介入したという話を聞いたときは驚いた。

何はともあれ、互いに心境の変化は無さそうだ。

そして状況は平行線を辿り続けて——数日が経過した。

「すまないなあ、エミヤさん。いつも助けてもらっちゃって」

「好きでボランティアをしているだけだ。私に遠慮する必要は無い」

時は早朝。

生徒達が学院へ登校している姿を尻目に、エミヤは学院のメンテナンス作業の途中で仲良くなった用務員のひとと一緒に庭の整備をしていた。

「しっかし、手際が良いねえ。エミヤさんは、何処かの執事か何かでもしてたのかい？」

「以前に一度だけ。とはいえ、そこまで長くは続かなかったがね」

「それでも経験は経験さ。良いなあ、俺もそんな豊富な経験をしたかったもんだ」

「希望であれば幾らか働き口は見つかるが、どうする？」

エミヤの言葉に用務員は首を振る。

「今はもう良いな。この年で環境を変えるのは堪えそうだ」

「生徒の笑顔を見るのが生き甲斐という理由も、断る理由に入るのかね？」

「ハハハ、まあな。しつかし、そういうのは黙ってるのがカッコイイじゃろ？」

「確かにな」

二人で会話をしながら丁寧に作業をしていた時の事だった。

「——おはようございます、エミヤ先生」

朗らかに挨拶したのはレオス。

以前の一件から、両者の関係が良くないというのは生徒達にも知れ渡っていた。

それが原因か、周囲には生徒達が立ち止まり趨勢を見守っている。

エミヤは軍手についた土を振り落としながら立ち上がった。

「おはようございます、レオス先生。にしても、先生がこちらまで来るのは珍しい」

「ええ、私とて花は好きですから」

「なるほど。それで、要件とは？」

互いに長く話をしようとは考えていない。

レオスは微笑みながら、精悍な瞳で用件を伝える。

「実は、三日後にエミヤ先生のクラスと魔導戦術演習をしたいと思ひまして」

瞬間、周囲の生徒達から漏れ出したのは関係悪化の原因とされる数日前の口論だった。

あれが原因で、演習をするのではないかと。

「……如何なる理由を以てその決断をしたのかは存じませんが、私とシステイーナに何の関係も無い」

ルミアから報告を受けた時、一つだけ気になる情報が齎された。

それが、システイーナとエミヤに関係があるのではないかとレオスが深く追求したという事だった。

レオスが何かとエミヤを気に掛ける理由がそこに隠されていると推測する。

緊張が進る雰囲気、レオスは肩を竦めた。

「その件とは別に関係ありません。これは私の勝手な提案ですから。勿論、エミヤ先生が勝つ自信が無いとおっしゃるのであれば、引き受けて頂かなくても結構です」

「……自らの専門分野を持ち出して、煽るとは」

「残念ながらエミヤ先生の専門分野が分からなかったのです。強いて言えば、特定の分野に精通しないオールラウンダーな形でしたので。様々な分野を複合的に利用する演習がベストと判断したまでです」

まあ、一応の体裁は保っている。

それにこの話自体は悪いものではない。

講義だけでは理解できない事象も多々ある。

実際に身体を動かすことで見えてくる世界もあるだろう。

それに、システイーナやギイブルといった同学年の中でもトップクラスの生徒もエミヤのクラスには揃っている。

他にも、決してレオスのクラスには見劣らない陣容が整えられている。

以前の魔術競技祭で優勝したのがその証左。

「——あと、一つだけ縛りを設けても構わないでしょうか？」

そんなエミヤの考えを見透かしたかのように、レオスは先手を打つ。

「互いに参加するのは男子生徒だけとしましょう。私は、フィアンセ婚約者であるシステイーナと戦いたくないですからね」

「ほう？」

確かにこちらにもデメリットはあるが、受けるのは相手も同じ。

それでも一切の躊躇いなく提案できるのは、それだけ勝利に自信を持っているからか。

「さあ——どうします？」

答えは、一つだけだった。

「——勿論、お受けしましょう」

一瞬だけ、風の音色が二人の鼓膜を振動させる。

「それは良かったです。それではまた、三日後にお会いできるのを楽しみにしております」

答えだけを聞くとレオスはこちらに背中を向けて学院へと戻っていく。

その道中で、一度だけ振り返った。

「聞くに、貴方は普段丁寧な口調をしていないのだとか。であれば、私にのみ特別な扱いをしなくて結構ですよ？」

「了解した。であれば、君もそうすると良い。私に対して敬語を使うのはストレスなのではないのかね？」

その言葉を一度考える素振りするも、レオスはシニカルに笑った。

「私は貴方と深い関係を築きたい訳ではありませんから。こちらで結構です。寧ろ、貴方と親しげに話しているなどという誤解が広まった方がストレスですから」

「ふむ、それは残念だ。折角、君の心を深く探れるチャンスと思ったのだがね」

ニヒルな笑みと、シニカルな笑み。こうして、二人の道は完全に分断された。

シロウⅡエミヤとレオスⅡクライトス。

二人の決戦の舞台が、今整えられた。

そしてこの話は一気に学院中へ伝播されることになる。